
さやかは紫陽花の咲く坂で

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さやかは紫陽花の咲く坂で

【Nコード】

N4904V

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

「今もあの女の子に…新谷詩緒里に、視られているような気がするんです」

夕日が私たちの影を長く伸ばす頃。紫陽花坂にある小さな公園に居ました。

そこに現れた新谷詩緒里と名乗った女生徒。彼女は私が転校してきた旭ヶ丘高校に伝わる都市伝説「さやか」を教えてくださいました。

さやかはそれは綺麗な女の子だったそうです。

それは…綺麗な…。

早川さやか

あの日の……話ですか？

正直、思い出したいくないんですが……どうしても話さなくちゃ駄目ですか。

はい、目を閉じるだけで、いや、ただ目瞬きをまばたをするだけであの日の事が暗闇の隙間から這い出て来るように蘇ってきて私を苦しめるんです。

重力が無くなったように体がふわりと宙に浮いたかと思うと、そのままどこまでも落ちてゆく悪夢です。目を醒ましたまま見る悪夢なんです。そして冷たいコンクリートが目の前に迫ってきた所でいつも現実に戻るんですよ、私はあの瞬間を何度も繰り返しているんですね。

何度も……。何度も……。

何度も、何度も……。

そして、あの冷たい視線も。

ああ。そのテーブルの上に飾ってあるピンク色の花、綺麗でしょ。ガーベラって言うんだそうです、私の幼馴染おさなじみが、お見舞いに、って持って来てくれたんですよ。メッセージカードに「早く元気になってね☆」なんて書いてくれました。本当に嬉しかったなあ。

その花を見ている間は悪夢からも逃げられるんです。だから一人の時はずっとそのガーベラを眺めていますよ、どうか枯れないで下さいって祈りながら。

ところで何で私の名前が判ったんですか？

ああ、学校ではもう噂になってるんですね。転校してきたばかりの私は知らなかったんですけど、この町ではあの場所の話は本当に有名なんです、悪い意味で。私がこんなことになっちゃったのも、きっとみんな「さやか」の呪いだと言ってるんでしょ。

そうですね……態々（わざわざ）病院まで訪ねて来てくれたんです

から……。

少しだけ……。

少しだけなら話します、あの日起こった事を。

あっ、カーテンは開けないで下さい。

いや、別に眩しいのが嫌いとか、暗い所が好きという訳ではないんですよ。寧ろ私を悪夢に引き摺り込んでくる暗闇は凄く怖いんです。でもカーテンだけは絶対に開けたくないんです。

今もあの女の子に……

……新谷詩緒里に、視られているような気がするんです。

見ての通り私はこのベッドから起き上がる事も出来ません、お話は横になったままでも良いですか。

失礼ですよね、本当にごめんなさい。

ところで今日は何日でしたっけ？

十月四日ですか……。そうですか。あれから三日も経ってしまっていたんですね。そっか、そうなんですね。

……。

……。

やっぱり……あの日の事、全部話します。あの女の子、新谷詩緒里が私に話した「さやか」の事も、全部。あの子が話した通りに話します。

いいえ、良いんです。確かに嫌な事を思い出したりもしますが、それでも良いんです。ちょっと長くなるかもしれないけど聞いて下さい。

だって……もう誰にも話せなくなるかもしれないから。

十月一日、確か午後四時半頃。

それは私が旭ヶ丘高校に転校した日でした。夕陽で空が真っ赤に染まり、私達の影法師も気味が悪い程に長く伸びていました。場所は知ってるですよ、そうですね、通学路の紫陽花坂の途中にある見晴らしの良い小さな公園です。

そこで新谷詩緒里は、こう話しました。

※

ねえ、キミ「さやか」って知ってる？

え、知らないの。うちの高校の制服着てる子だったから知らない筈なと思ったけど……ああ、転校生なんだ。へえ、今日からうちに通ってるんだね。

私？

私は……新谷詩緒里、よろしくね。

こんな時間に紫陽花坂に居るのなんて本当に何も知らない子か、度胸試しの男の子ぐらいだもん、よりによって女の子が一人でおかしいと思ったよ。夕暮れの紫陽花坂なんてうちの学校の子は気味悪がつて誰も近付かないんだよ。夕暮れにここを通るぐらいだったら真夜中に一人で通った方がましだよ。

ちよっただけお話してあげるね。

さやかの事……。

十五年ぐらい前かな。

うちの高校に早川^{はやかわ}さやかって女の子がいたんだってさ。そりゃもうびっくりするぐらいの美人で男の子からも凄い人気だったらしいよ。絹のように柔らかな黒髪で雪のように白い肌。あまりに綺麗だから男の子だけじゃなくて女の子からも憧れの的だったそうなの。道を歩けば誰もが振り返る美少女、さやかってそんな女の子だったんだ。他校の生徒にも旭ヶ丘高のさやかって言えば誰でも知ってるぐらい有名だったんだよ。

でも、さやかはいつも一人だった。

きつとあまりに美人過ぎてみんな近寄り難かったんだらうね。その上、成績もいつもトップクラスのさやかは所謂^{いわゆる}、高嶺^{たかね}の花だったんだ。

だからさやかはみんなでわいわい騒いだりするよりも、一人で静かに本を読んでいる事が多かった。読むのも漫画やファッション誌なんかじゃなくて、シェークスピアとか外国の難しい文学作品を読んだたの。時々、全部英語で書かれた本も読んでたんだって。

昼休みに学校の図書室の窓際の席でそんなの読んでるんだよ、おまけに美人。そりゃみんな話し掛けにくいよね。

美人だけど暗い子、それが周りの下したさやかへの評価だった。

さやか本人は周りを避けてるわけじゃないんだよ、彼女は普通に振舞っているつもりだったんだけど結果的にそれが壁を作る事になったの。

それでもさやかには華があるからみんな遠くから彼女を見て、格好良いか可愛いか綺麗だとか噂するんだよ。

さやかの周りにはいつも沢山の人がいる、だけどさやかの近くには誰もいないの。さやかを中心に円が出来てたんだ、ドーナツみたいでしょ。

そう、さやかはいつも一人。

独りぼっちだったんだ。

でもね。ある日、変化が起きた。

それは夏休みが明けた新学期、まだまだ夏の暑さも残っている九月の初めの出来事だったんだ。

「何読んでるの？」

昼休み、いつもと同じようにさやかが図書室で本を読んでいると一人の女の子が声を掛けて来たの。

読んでいた本から目を離してさやかは声のした方を見た。するとそこには可愛い顔に似つかわしくない大きな弁当箱を持った、活発そうな女の子が立っていた。さやかとはまるで正反対の世界で生きているような子だった。いや、本当は同じ世界なんだろうけど、きっと今まで重ならなかっただけなんだろうね。

さやかは再び文字に向き直って無愛想に答えた。

「シェークスピアの『オセロ』よ」

本人は無愛想にするつもりなんてなかったんだろうけど、彼女はそんな付き合い方しか知らなかった。何より声を掛けられた事に戸惑ったんだと思う、普段から視られる事はあっても声を掛けられる事なんて滅多になかったんだから。

それでも女の子は気にせず言葉を続ける。

「へえ、難しそうな本だね。私には分かんないや」

「そう……」

さやかはそれで話を切ったつもりだったんだけどね、女の子はそれでも彼女に話し掛け続けた。

その女の子のは「りかこ」って名乗ったらしいの。

ここからはその子の事をりかこって呼ぶ事にするね。りかこは遠慮なくさやかに続ける、遠くから観察するようにさやかを視ている他の生徒とは違って、彼女を全く畏怖する事無く、子猫のように人懐っこい態度でね。

「きみは何て名前なの」

彼女は少し躊躇しながらも答えた。

「早川……さやか、よ」

すると、りかこは子猫のようになんか笑った。その顔は幼い子供のように本当に無邪気なものだったんだって。

「あなたは……私の事、知らないの？」

「あはは、何それ。きみ芸能人か何かなの？」

「いや、そんなんじゃないけど……」

何の飾り気もないりかこの返答。

顔には出さないもののさやかは少し驚いた。アイドルぶっていたつもりなんてないんだけど、学校中の生徒からある意味色眼鏡で視られていた彼女にとってその反応は意外な事だったんだろうね。

「ふうん、きみ美人だからもしかしたら芸能人か何かなんだと思ったよ。私、テレビとかあんまり見ないから分かんないんだ」

さやかは上目遣いにりかこを見上げたの。

「私もテレビは知らない……知らない人が画面の向こうで騒いでる

だけで、ちっとも面白くないから見ようとも思わない」

さやかがそう言い切るとりかこはぷっと吹き出して、また快活に笑った。

「あはは、そうなんだ。私と同じだね。私もどっちかって言うてテレビはあんまり好きじゃないんだよね、ぎゃーぎゃーうるさいだけだし。天気予報ぐらいなら見るけどね、たまに」

りかこの発する明るい雰囲気^{ほころ}に釣られたのか、さやかの表情も僅かに綻んだ。りかこはそれを目敏く見たの。

「ああ、それだよ。きみみたいな美人は笑顔が似合うんだよ」

そう言われた途端にさやかは顔を顰^{しか}めてしまった。陰で美人だの綺麗だのと言われていたさやかも目の前でそんな事を言われるのは慣れてなかったんだろうね、照れ臭^{みづめ}かったんだと思う。

さやかは閉じた本の表紙を凝視^{みつめ}て、

「そんな事……ない」

って照れ臭そうに呟いたの。

するとりかこは彼女が照れているのを見て、またころろと笑ったんだ。目の前の「りかこ」という女の子が考えている事はさっぱり解らなかっただろうね、きっとさやかも初めて見る人種だったよ。

「何が、そんなに可笑しいの？」

「別に何でもないよ。ところできみ、何年生なの？」

「二年、二年四組」

「そうなんだ、私も二年なの。二年七組。よろしくね、さやか」

そう言ったりかこは手を差し伸べた、握手を求めてね。初対面いきなり下の名前呼び捨てなんて馴れ馴れしいよね、りかこって子。それでもさやかは悪い気はしなかったんだよ。他の人は遠くから観察するようにじろじろ見ているだけだったんだけど、りかこだけは面と向かって話し掛けて来たんだからね。

さやかも白い手を伸ばして答えた。

「よろしく……ね」

するとりかこは本当に嬉しそうに彼女の手を握った。

さやかもびつくりしただろうね、きつと。

みんなから注目はされているけれど友達は一人もいないさやか。そんな彼女に全く遠慮する事無くりかこは接してくれたんだから。無口なさやかを差し置いて饒舌^{じょうせつ}なりかこは聞いてもいないのにぺらぺらと自分の事を話し出したんだ、もしかしたら自己紹介のつもりだったのかな。血液型はA型で、趣味は音楽鑑賞とバレエボール、好きな食べ物は駅前のケーキ屋さんの生クリームが乗ったプリン、だそうだよ。

いつの間にか彼女はさやかの隣の席に座ってたの。りかこって本当に人との距離を詰めるのが上手いね。最初は戸惑っていたさやかも彼女の話にこくりこくりと頷くようになっていた。

「ところで、さやかってどうして図書室で本なんか読んでのの？」

「え、どうしてって言われても……図書室は本を読む場所よ」

いまいち二人の会話が噛み合わない。りかこは苦笑いして頭をぽりぽりと掻きながら言ったの。

「ええと、そんな意味じゃなくてね……昼休みだつてのにどうして一人で本なんか読んでののかって意味！」

「どうしてって言われても……いつもしてる事だから」

「いつも一人で？」

きよんとした顔でさやかは、そうだけど、と小さく頷いた。一人でいる事の何が不思議なのか判らないといった様子のさやかは無垢そのものだったの。

「さやかは……寂しくないの？」

寂しい？ とさやかは復唱して首を傾げた。

「いや、そのね。昼休みっていったらみんな一緒にご飯食べたたり、男子達は運動場で遊んだりしてるじゃん。図書室で本読んでののって珍しいなって思うんだよね、それも一人で。それにさやかぐらい可愛い子だったら友達も多そうなのに」

「友達いないの」

りかこが言い終わる前にさやかは口を開いた。友達いないの。そ

の寂しげなフレーズにりかこは言葉を失ったんだ。

もごもごと口籠るりかこを見てさやかはくすつと小さく笑ったの。そしてさやかは鈴のように澄んだ声で続けた。

「でもね、一人が寂しいなんて思った事ないよ」

今度はりかこが首を傾げた。

「私ね、今まで友達が出来た事なんてないの。小学校でも中学校でもいつだって一人でいた。だから一人でいるのが当たり前なの」

「そっかあ……私は一人でいるのって苦手なんだよね、やっぱり寂しいもん。さやかはそんな事思わないんだね……強い子だね」

強い子、か。さやかはそう小さく零した。

「私は得た事がないから分からないだけ……」

「え、どういう意味？」

長い黒髪を耳に引っ掛けたさやかは、眉を寄せて難しそうにするりかこの顔を見てこう言ったの。

「あなた、プリンが好きなんだったよね？」

「うん、それも駅前のケーキ屋さんのが最高」

「例えばそのケーキ屋さんにプリンを買いに行きました。すると今日はもう売り切れてしまっていました。さて、どう思う？」

「どう思うって……そりゃ、悔しいよ」

りかこは本当に悔しそうに口を尖らせたんだって、例え話だったのに変な子だよね。さやかは気にせず続けるの。

「じゃあ今度はスーパーマーケットで洋ナシが売り切れていました。どう思う？」

「え、洋ナシ？ そんなのガムか飴になったやつしか知らないよ」

どう思う？ さやかは構わず問う。すると、こめかみをぽりぽりと搔いてりかこは答えるの。

「味が分かんないから別にどうとも思わないよ。だって形だってはつきり知らないんだもん、食べたいと思った事もないよ。それが売り切れちゃっても……ねえ」

「それと同じよ」

りかこは、んん、と唸って顔を顰めた。まだ良く解らないといった様子の彼女にさやかは更に付け足すの。

「お寿司を知らない、どこか遠く国の人がお寿司を食べたくて堪らなくなる事なんてなんでしょ。味も知らないんだから。それと一緒に私は今まで友達なんて一人もいなかったんだから、友達がいなくて寂しいなんて思わないのよ」

なるほど、と相槌を打って手をぽんと叩き合わせるりかこ。彼女はさやかの孤独を不憫に思ったんじゃない、さやかの持つ考え方に興味を持ったみたいなの。

「そっかそっか。ジャングル奥地の原住民の人が、食べた事もないハンバーガーを食べたくなるワケ無いもんね」

彼女、うんうん頷きながらそんな事言ってるんだよ。さやかも変わり者だけれど、りかこも変わり者だね。図書室のカーテンはふわふわと風に靡なびいて、そんな二人を扇あふぐように揺れてるんだ。

「ところで、あなたこそ昼休みにこんな所で何してるの、一人（、、）で」

さやかは意地悪っぽい口調でりかこに聞いたの、一人（、、）に強調アクセントを置いてね。ところが彼女はさやかの棘ぬかなんて糠ぬかに釘めって感じで軽く受け流して答えたんだ。

「ああ、探検してたの」

「探検？」

今度はさやかが首を傾げた。

「そう。実は私、今日転校してきたばかりでこの学校の事何も分かんないんだ。それこそ友達だって未だ一人も出来てないよ。てかこの学校の子ってお弁当ほん派始とんどいないんだねクラスのみんなは学食行っちゃったし、一人でお弁当食べるのもつまないし探検がてら色々とお弁当食べる場所探してたの。そしたら……」

「そしたら？」

「図書館にとんでもない美少女が一人でいたからびっくり！」

するとさやかは顔を伏せたの、もしかしたら照れちゃったのかも

ね。美少女なんて言われるとやっぱり恥ずかしいんだよ。普段は鉄仮面みたいに無表情なさやかも中身はちゃんと女の子なんだね。さやかは人との付き合い方が分からなかっただけ。

「そうだ、さやか私と友達になろうよ。てゆうか友達になるの決定！」

そう言ったりかこはさやかの両肩を掴んで真っ直ぐに彼女の円い瞳を見据えたんだ。強引かもしれないけど実に分かり易いお友達宣言。

さやかは戸惑った、それはもう本当に戸惑ったよ。彼女の喩えを借りるなら、見た事もない食べ物を目の前に置かれたようなものだもんね。

「そんな、友達って……言われても」

さやかの完璧に整った顔が戸惑いと躊躇いと疑問に歪む。するとりかこは彼女の肩に優しく手を置いたの。

「さやかは未だ分からないかもしれないけどね、私達もう友達なんだよ」

え……、と小さく驚きの声を洩らすさやか。

「さっきまであんなに楽しくお喋りしたでしょ、私も楽しかった。だから私達はもう友達になってるんだよ。そんなもんだよ、友達って」

本当に驚いた。

さやかには彼女の言っている事が理解出来なかった。自分が今まで触れた事もなかったものが、気付かない内にいつの間にか自分の手の中にあつたって事なんだからね。

「まあ、その内分かると思うよ。さて、今日はこちらでお弁当食べる事にしよう」と

そう言ったりかこは机の上に弁当箱を広げた。

目の前に居るのが自分の友達？ 良く解らない、全然分からない、判らない。ただ一つ言える事は、このりかこって女の子は今まで出会ってきた他の人とは明らかに何かが違うんだ。少なくとも……隣

の席に座られても嫌な気はしない。

さやかは、弁当箱の蓋を開いて目を輝かせているりかこを凝視^{みつめ}て言う。

「ねえ、あなたは知らないの？」

白ご飯を頬張ってもごもご何かを言いながらりかこが彼女の方を向くとね、さやかは言ったんだ。

「図書室は飲食禁止よ、りかこ」

さやかはその時、ちよつとだけ微笑んだの。何日振りに笑ったのかは分からないけれど、とにかくさやかは笑ったらしいよ。

こうしてさやかは初めての味を知る事になったんだよ、友達の味をね。

それからりかこは毎日のように図書室に通った、すると必ずさやかは窓際の席に座って難しそうな本を読んでいたの。最初の方はさやかもちよつとは迷惑そうな顔してただけど、りかこが懲りずに何度も通っている内に、気が付けばさやかも彼女を待っているようになってたんだって。

二人が出会って一ヶ月後、彼女達は毎日一緒に下校するぐらい仲良くなっていったんだ。まあ、りかこが強引に、一緒に帰ろう、って誘うからなんだけれどね。でもさやかも嫌な顔しなかったんだよ。

二人はいつも寄り道をした。紫陽花坂の途中にある見晴らしの良い小さな公園、ブランコと砂場とベンチしかない小さな公園。

そう。

今、私達がいるこの公園の事だよ。

さやかとりかこは並んでフェンスに寄り掛かって町を見下ろしていたの、自動販売機で買った甘いミルクティーを啜^{すす}りながらね。

最初に口を開くのは、やっぱりいつもりかこだったんだ。

「私、ここから町を見るの好きなんだ」

「そうなの……」

「普段歩いてる町を上から見るなんて鳥になった気分じゃん」

「そうね……」

「鳥って言っても焼き鳥になっちゃったやつなんかじゃなくて、勿論空を飛んでる鳥だからね。あはは」

「そうなの……」

「……ちよつとさやか。私の事、馬鹿にしてない？」

「そうね……うふふ」

「もう、さやか！」

さやかもこんな冗談を言えるくらい、りかこには気を許していたんだ。普通の人からすれば何の取り留めもない会話でも、彼女がそれまで生きてきた十七年間では考えられない事だったんだよ。

「それよりさやか。この前の中間テスト、学年トップだったんですよ！」

「うん」

「やつぱり凄いよね、さやかは。私なんか平均五十点よ。今からこんなんじゃ大学厳しいかもね……浪人しちゃうかも。さやかって大学とかもう決めてるの？」

「別に……家から近かったらどこでも良い」

「ううう、勿体無いなあ……さやかなら国公立でも簡単に受かりそうなのにな。でもそこがさやかからしいのかな」

もしかすると本当は「りかこと同じ大学ならどこでも良い」って意味だったのかもね。これは私の考え過ぎかな？

その時、りかこは急に後ろを振り返ったの。

「どうしたの？」

「いや……今誰かに視られてた気がしたから」

公園を見渡しても人の気配は無かった。でもりかこははっきりと視線を感じてたんだって。

確かにさやかといくと男女関係なしに色んな人の視線が絡み付いてくる。それはさやかと仲良くしているりかこに対する羨望と憧れの眼差しもあるけれど、大概はさやかに見惚れている視線なの。彼女もある程度は慣れっこだったし、さやかに関しては全く気にして

いない様子だったの。

でも、その時りかこが感じた視線は違った。強いて言うなら嫉妬に似ているかもしれないけれど、それともどこか違う。

憎悪……。

ぬめぬめとした、憎悪……。

鳥肌が立つような負を纏マイナスまじった刺々しい視線だった。

確実に何者かが自分達に悪意を抱いて視ていた。それはさやかに向けられているのか、自分に向けられているのか、それとも自分達二人に向けられているのか。そう思うとりかこは何だか凄く怖くなっただって。

「さやか、もう帰ろっか……」

そうして彼女達は小さな公園を後にしたんだ。紫陽花坂名物の百階段を下ってね。

ほら、ここから見える急な長い階段あるでしょ。

あれが百階段。

何しろ本当に百段以上あるから下りだけならまだしも、上りは地獄なんだよね。うちの高校の運動部も冬の基礎体力作りの練習でも使ってるぐらいだからね。

花？

ああ、階段の脇に供えられてる花の事ね。それは、また後で話すよ。

……。

……。

刺し貫くような視線、それはこの後も二人に纏わり付いてきたの。

それから一週間ぐらい経ってからかな、その視線が誰に向けられていたものか……りかこは何となく解ったの。

「さやか、一緒に帰ろ！」

ホームルームが終わって教室から出たりかこは丁度四組の教室から出て来たさやかを見つけて声を掛けた。まあ、いつも通りの事な

んだけどね。

「うん……」

さやかも照れ臭そうに笑って彼女に答えた。二人揃って廊下を歩いて、階段を下りて、下駄箱で外靴に履き替える時に、それは起こったんだ。

玄関でさやかが靴箱を開けたの。そうしたら中から封筒や小包がわんさか出て来たんだよ。

「何これ？」

「さあ、いつもの事よ」

りかこはそれらを手にとって見ると思わず笑みが零れたの。さやかの下駄箱から溢れ出して来たのは彼女宛てのファンレター、ラブレター、プレゼントの類たぐいだったんだ。ラブレターらしき内容の手紙は女の子からのものも含まれているから驚きだよ。

「これ……いつもの事なの？」

「そうよ……」

「読むの？」

「読まない……」

どうやらさやかは本人の意思とは無関係に学校のアイドルみたいな存在になっていたんだね。迷惑してる様子もなかったんだけど喜んでるって感じでもなかった、全く興味が無かったんだろうね、たぶん。

「読まないんだったら、どうするの？」

りかこが不思議そうに聞くと、さやかは地面に零れた封筒を拾い集めながら答えた。

「家に持って帰る……一応」

「へえ、ちゃんと持って帰るんだ。読まないのに」

散らばった封筒をとんとんと床に当てて揃えるさやかは、屈んだままりかこを見上げたんだ。

「念を込めて書いた文字には力が宿るの、良い意味でも悪い意味でも。だからここにある手紙は全部生き物なのよ」

「ふうん、さやかって変な所で信心深いよね」

「それに……」

そこまで言い掛けて口を噤んださやかは瞳だけをゆっくりと動かして辺りを見渡したの。

「それに？」

「書いた人が見ている前で捨てるのも気が引けるでしょ」
りかこが後ろを振り返ると下駄箱の陰に誰かが隠れた。

玄関ドアの所にいた女の子もぎこちなく目を逸らした。下駄箱前を通るランニング中のサッカー部の男の子もちらりとこっちを一瞥（いちべつ）したんだ。

「なるほど、ね」

さやかの周りは沢山の視線が溢れていた。

手伝うよ。そう言ったりかこも屈み込んで、無数に散らばる封筒や小包を拾い集めたの。すると……。

りかこが手にしたのは赤いリボンが結ばれた一つのプレゼント箱。下駄箱から落ちた拍子（ふた）に蓋が少し開いちゃったみたいでね、中身がちょっと見えてるの。僅かな隙間から覗いてみるとそれはぬいぐるみだった。

女の子のファンからだろうか。妙な好奇心に駆られたりかこは、さやかに見られないようにこっそりと蓋を開いてみたの。

そしてりかこは……言葉を失った。

どうしたの、と不意にさやかが声を掛けてくる。額から滲む汗を拭いて、いつも通りを取り繕って答えるりかこ。

「え、何でもないよ。全部拾ったね、じゃあ帰ろっか」

りかこはそのプレゼント箱を後ろに隠したの。

「冷汗……出てるよ」

「何でもないって、気にしない気にしない」

りかこは必死に誤魔化（ごまか）す。

……信じられない、我が目を疑った。

こんな物（、、、、）を見せる訳にはいかない。

さやかが傷付くに決まってる、さやかが穢^{けが}れてしまう。

りかこはそう思っただけ自分の鞆の中にその箱をこっそりと仕舞ったんだ。自分の鞆の中にそんな物（、、、、）を入れるなんてどうかしてるって思うけれど、それがりかこなりの氣遣いだったんだろうね。「ほらほら、行こ」

さやかの背中を押して、帰るように促すりかこ。

その時、彼女はまたどこから感じてたんだって、成長し過ぎた嫉妬の念、どろどろの憎悪を孕^{はら}んだあの視線をね。

二人は今日も紫陽花坂の百階段を下りる。

下り階段とは言っても固いアスファルトから返って来る反動はかなり膝を疲れさせるんだ。

二人は全く正反対の性格なのに何故かお互い惹かれちゃったんだよ、いや、正反対だからこそ惹かれ合ったのかな。ほら、磁石のS極とN極が引き合うようにさ。寧ろ同じ性格同士だったらお互い弾き合っちゃうのかもね、同族嫌悪って言葉もあるんだし。

夕陽に照らされた百階段はオレンジ色に染まっていた。そこを歩く、長く伸ばされた二人の影は階段を這うようにぎざぎざになっていたの。

かつかつと踵^{かかと}を鳴らして百階段を下りる二人。そこで二人の通学路はお終い、案外短いでしょ。ここで駅方面のさやかは左に、川沿いの住宅地のりかこは右に曲がるんだ。

「じゃあ、また明日ね」

「うん、また明日……」

二人はお互い手を振った。背を向けたさやかは歩き出したかと思ったら、りかこの方を不意に振り返った。そして。

「りかこは私の生まれて初めての友達なんだ、ね」

そう言っただけさやかはにっこり笑ったんだって。

「バイバイ……」

「えっ、あ、うん。バイバイ！」

再びりかこが手を振ると、さやかも手を振り返してから歩き出し

た。さやかがそんな事を言うのも、そんな笑顔を見せるのも初めてだった。りかこの影響でさやかは少しずつ変わり始めたんだろうね。彼女はもう孤独な女の子なんかじゃない。

りかこは立ち去るさやかの華奢きゃしゃな後姿を朦朧ぼんやりと凝視みつめしていたんだ。そしてさやかは一つ目の角を曲がり、その背中は見えなくなった。

すると、りかこは気持ちを切り替えるように頭かぶりを振る。そう。

りかこは動かなくちゃいけない。

……さっきの、アレを。

……鞆の中のアレを何とかしなくちゃ。

先ず彼女は辺りを見回す、どこか人目に付かない場所はないだろうか、と。

紫陽花坂周辺はもともと小高い山だったんだ。それを開発して出来た所謂いわゆる、新興住宅地ニュータウンってやつなの。

低い場所だと上の方に建っている家からは丸見えなんだね。だから彼女は下りて来たばかりの百階段を再び駆け上がったんだ。

休憩なしに百段を上りきって息を切らすりかこは再び辺りを見回すの。所狭しと新築の綺麗な家が立ち並ぶ紫陽花坂。そんな中でも比較的人通りが少なくて陰になっている所が多い場所を思い出した。

この、公園の事だよ。

彼女は再び走り出して公園までやってきた。そして屋根付きのベンチに座って、鞆からあのプレゼント箱を取り出したの。まるで汚い物でも触るように指でつまんでそろりそろりとね。

額から滲む冷汗を手の甲で拭って、深呼吸をするりかこ。

さっき下駄箱で見たあの光景が信じられない、そのプレゼント箱を見ているだけで彼女の心臓はばくばくと脈打つの。それに、拭っても拭っても冷汗が滲んでくるんだ。

周りで誰も見ていない事を何度も確認してから彼女はプレゼント箱のリボンほどを解いて、蓋を少しだけ持ち上げる。すると変な臭いがしたんだ、さっきの下駄箱の時も同じ臭いがしたの。りかこは思い

切って蓋を取り払った。

本当はぬいぐるみなんかじゃなかったんだよ、それ。

ネズミの死骸……。

それも一匹じゃないよ、その小さな箱に入るだけみっしりと詰め込まれてたんだ。死骸は無理矢理折りたたまれて変な方向に曲がってたし、小蠅も湧いてた。酸っぱい死臭が鼻を衝いて、咄嗟にりかこは手で口を覆ったんだ。

……誰がこんな事を。

悪戯じゃ済まされない、質が悪過ぎる。さやかにこんな非道い事をする人間が同じ学校にいて考えると吐気を覚えた。

言い知れない悔しさを胸の中に押さえつけながら、りかこは再び箱に目を遣ったの。それにしてもこれは処分に困る。このまま公園のゴミ箱ってのも何だか可哀想に思えて、埋めてあげようって考えたんだ。

ほら、噂じゃ丁度その桜の木の下だった筈だよ。

取り敢えず箱から死骸を掻き出したら大きさのばらばらなネズミが五匹も入ってたんだって。下の方にあったやつなんてぺちゃんこになっちゃってて口から何か零れてたらしいよ。

土の柔らかい部分に踵で穴を掘って、一匹一匹ちゃんと土を掛けて吊ってあげたんだよ。

りかこって優しい子だね。

残った箱はゴミ箱に捨てようと彼女が箱に近寄ったの。そこでりかこは箱の中身を覗き込んで背筋が凍りついた。

なるほど、さやかと言った通りだ。念を込めて書いた文字には良い意味でも悪い意味でも力が宿る、か。

どんな気持ちで書けばそこに想いを留めておけるのかは分からない。分からないけれどとにかく、箱の底に書かれた文字からはどす黒い憎悪がじわじわと毒の泉のように滲み出しているんだ。見ているだけで精神をびりびりに破かれてしまいそうなぐらいの、どろどろの憎悪がね……。

箱の底には真っ赤な文字で「死ね」と書かれていたの。

りかこは出来るだけその文字を見ないように箱を畳んで、ゴミ箱に捨てた。公園に残した憎悪の塊から逃げるようにして彼女は一人家路に着いたの。

その後も事件は動き続けるんだ。

十月の半ばの頃かな、秋と冬の丁度真ん中ぐらいの時なの。その頃にはりかこもすっかりクラスに溶け込んで、彼女が転校生だって事なんかみんな忘れてた。

四時間目の授業が終わって教科書を片付けているとね、りかこの席の周りにぞろぞろと人が集まり始めたんだ。

「ねえ、アンタ」

きつい感じの女の声。

りかこはふと顔を上げてその声の主を見た。それはきつい声にぴったりな、きつい感じの顔の女の子だったの。

「ああ、どうしたの？」

りかこがそう聞くと彼女はふんって鼻を鳴らしたんだ。それなりに美人だけど性格のきついこの子は……。ええと、そうだなあ。

じゃあ『お嬢様』って呼ぶ事にしようか。

お嬢様はりかこと同じ七組の生徒。父親が貿易会社か何かの社長だから彼女は社長令嬢^{わがまま}ってわけね、だからお嬢様。

横柄^{たかびしや}で我儘^{わがまま}で高飛車なお嬢様。おまけに高校生なのに化粧が濃い。正直言ってみりかこは彼女の事があるまり好きじゃなかったんだ。

「ちよっとアンタに聞きたい事があるの」

「何よ」

するとお嬢様は舌打ちをしてりかこを見下ろした。きつとりかこの淡泊な態度が気に入らなかったんだと思う。

七組ではお嬢様に誰も逆^いらわれない、謂^いわばクラスの实権は彼女が握ってるってワケなんだ。尤^{もつと}も逆らったりなんかしたらどんなイジメに遭うか分かんないよ、そんな事すれば学校に居られなくなっちゃう。お嬢様の所為で学校を辞めていった子も何人もいたらしいんだ。

よ。

あ、周りにいるのはお嬢様の取り巻き連中だよ、勿論。みんなお嬢様が恐いから従ってるんだけどね。お嬢様って学校内ではいつも四、五人の手下連れてたみたいだよ。

「アンタ、四組の早川サンと仲良いの？」

「ああ、さやかか？ うん、友達だよ」

さやかって名前を口にした途端、お嬢様のこめかみがぴくりと引き攣った。

……やっぱり、思った通りだ。

お嬢様はさやかか？の事が気に入らないんだ。自分より綺麗で、自分より賢いさやかか？の存在が許せないんだ。

白雪姫の継母ママはは分かるでしょ、世界で一番美しいのはだあれって鏡に聞いている魔女。お嬢様ってそんな人なんだろうね。

「あっそう、じゃあアンタからも早川サンに言つてよ。この学校であんまり調子乗らないでって」

「別に、調子に乗ってなんかないと思うけどなあ……」

するとお嬢様は、さぞ不愉快そうに舌打ちして立ち去ったんだ、たいそうにお供を引き連れてね。

こないだのネズミの死骸事件もあったし、りかこは急にさやかか？の事が心配になったんだよ。彼女は弁当箱を持って図書室へ急いだ、さやかか？の居る昼休みの図書室にね。

図書室の戸を開けると、案の定いつもの窓際の席にさやかか？は居た。

「あ、りかこ」

そう言っかすて彼女は幽かに微笑んだ。そのいつも通りの彼女を見ると、りかこは酷く安心したの。

「よっ、さやか。今日は何読んでるの？」

「太宰治『人間失格』……」

相変わらず表情の乏しいさやか。

いつも通り、りかこは彼女の隣に座る。無言のまま数秒の時が流れたの。最初に口を開いたのは、やっぱりりかこだったの。

「あの……さやか？」

「どうしたの」

さやかは本に目を向けたまま答えた。

「あのね、最近変な事ない？」

「別に……」

「んんん、例えば物が無くなったり机に落書きされたりとかないの？」

「ないよ……」

「じゃあ、ロッカーとか下駄箱に変な物入れられたりとかしてない？」

するとさやかが、ふと顔を上げた。

そして……。

「あるよ……」

その返答にりかこは愕然としたんだ。やっぱりさやかは普段から嫌がらせを受けてたんだって思ったの。そして犯人はやっぱり、お嬢様なんだって。

「どんな物？」

そう聞いてりかこは、ごくりと生唾を飲み込んだ。するとさやかはそれらを思い出すように天井を見上げてから答えたの。

「女の子からのラブレターなら、ほぼ毎日」

そう言って彼女は小さく笑った。

「え？」

「例えば……『私の彼女になって下さい』とか『チュウして欲しい』とか。『一緒に裸で寝ましょう』なんて酷いものもあるのよ。封筒に入ってるのは見ないけど、便箋びんせんに書いてあるのは嫌でも見える……」

「そうゆうのばかり？ 脅迫みたいなのとかないの、例えば……」

例えば、まで言っただけで彼女は口籠っちゃったんだ。だって言い難いでしょ、清楚で純粹無垢なさやかの目の前で「死ね」とか「殺す」とか。

「脅迫状？ 『死ぬ』とか『殺す』とか？」

さやかは、りかこの頭の中を覗いたかのように残酷な言葉を二つ口にしたんだ。彼女にだけは口にして欲しくなかった。

「ロッカーや下駄箱の手紙なんてほとんど読まずにいるから分からないけど、中にはそういうものもあるかもしれないね……」

樂觀的なさやか。りかこは彼女の両肩を掴んで揺さぶった。

「もし、何か変な事があったら絶対私に言うんだよ！」

「何の事？」

何が何だか分からないって様子でさやかはりかこの顔を覗き込む。そうしていたらりかこは更に念を押した。

「良いから絶対報告するの！」

りかこの剣幕に気押されて、彼女は戸惑いながらも首を縦に振ったんだ。

「どんな事があっても、私だけはさやかの味方なんだからね」

わかったよ。そう言ってさやかは頷いたの。

そして昼休みが終わって、六時間目が終わって、下校時間になった。さやかは四組の教室の前でさやかと合流したんだ。二人はいつも通り一緒に階段を下りていたら、不意にさやかが口を開いたの。

「私の事、心配してくれるのは良いけれど……自分の身を心配した方が良いと思う」

「え、どうゆう事？」

「怖いよ、嫉妬って……」

そう言われた時、りかこは冷たい視線に気が付いた。

それも一つや二つじゃない、下校時刻で生徒が溢れる階段、廊下のそこら中から、その冷たい視線はぞわぞわと飛んでくる。これはさやかに向けられてるものじゃない、総てりかこに対する非難の目だったの。

「いつも私と居るから、りかこ恨まれてるのかもね」

「そ、そうみたい……だね……」

りかこの額に冷汗が滲んだ。正体不明の何者かに自分は恨まれて

いると考えると気持ち悪い。相手が分からないってのは本当に不気味だね。

「女の嫉妬は恐ろしいから気を付けないと、ね」

二人は下駄箱までやって来た。

さやかが下駄箱を開けると案の定、今日もファンレターやラブレターが溢れ出して来たの。

「相変わらずモテモテだね」

するとさやかは困ったように苦笑いして、床に落ちた手紙を拾い集める。

「これは？」

さやかは一つの小さなプレゼント箱を手にとった。それを見たりかこは青褪めたよ、だってその箱は前に入っていたのと同じ物だったんだから。彼女は咄嗟にさやかからその箱を取り上げた。

「これは……ダメだよ」

さやかから遠ざけるように箱を持ち上げるりかこ。さやかは不思議そうな目でそんな彼女を見ている。

すると箱の中で何かが蠢いた。かさこそ、と。

そう、箱の中に何かいるんだよ。驚いたりかこは短い悲鳴を上げてその箱を床に投げ捨てた。

「どうしたの？」

「な、何でもないよ……」

何でもない、と言いながらもりかこの額からは冷汗が滲んでいた。するとその時、後ろから声がしたの。

「ちょっと。プレゼント投げ捨ててるなんてヒドいんじゃないの？」

振り返るとお嬢様が立っていたの、いつも通り四、五人の取り巻きを連れてね。腕組みをしたお嬢様は歪んだ笑顔を見せていたんだ。床に叩き付けられて包装の破れたプレゼント箱から黒い虫がもぞもぞと這い出て来たんだよ、それも何匹もね、足が沢山ついてる気持ち悪いのもいた。

りかこはさやかの視界を塞ぐように彼女の前に立った、プレゼン

ト箱から這い出てくる気持ち悪い虫をさやかに見せないように。そしてりかこはお嬢様を睨みつける。

「何のつもり？　こんな悪趣味なモノ送りつけて」

「何の事よ、私しーらなーい。だって気持ち悪くて触れないもん、こんな虫とか、ネズミの死骸とか、ね……」

やっぱりそうだ……。

お嬢様の仕業だ、きつと取り巻きか手下にでも命令してやらせたんだろう。お嬢様はにやにやと口元を歪めながら、緩いウェーブの掛かった焦げ茶色の髪をくるくると指先で弄もてあそんでいた。取り巻きの連中もお嬢様と同じように、にやにや口元を歪めながら二人を見てるんだ。

お嬢様は刺々しい切れ長の目でさやかを見据える。

「早川サン。アンタ、スカした態度ばかりとってるから嫌われてるんじゃないの？　だからこんなもの（、、、、）贈られるのよ」
憎々しげにそう吐き捨てるお嬢様。すると、さやかは服飾人形マネキンみたいな無表情で穏やかな口調で言ったんだ。

「ところであなた、誰？」

ってね。

その瞬間、お嬢様のこめかみがぴくりと引き攣った。その不穏な空気を察したのか取り巻きの連中もそわそわし始める。

「アンタ……この私が誰か、知らないの」

腸が煮えくり返る思いだったろうね、お嬢様。お嬢様も学校内で彼女の事を知らない人はいないぐらい有名だったんだよ。美人で金持ち、あと……我儘わがままって理由ことでね。

それなのに……。

「知らない……」

そう、さやかはお嬢様の事を知らないんだ。お嬢様のプライドはズタズタになっただろうね。

お嬢様は真っ赤に血走った目でさやかを睨んだ。

あの嫉妬に狂った憎悪の視線だよ。やっぱりいつも纏わり付いてい

たあの視線の主はお嬢様だったんだね。顔中の筋肉がひくひくと痙攣している。濃く塗られた化粧が罅割れてしまっひびそうだったんだ。一方のさやかはいつも通りの清楚で柔らかな表情でお嬢様を見据えている。するとお嬢様は、あらん限りの憎しみを籠めた舌打ちをしてから踵きびすを返して、

「退どけ！」

って臆ヒステリック躁的に怒鳴って取り巻き連中を押し退けたんだ。

そしてお嬢様はちらりと二人の方を振り返って、一言ぼそりと言いつ残して立ち去って行った。戸惑う取り巻き連中も結局は金魚のフンみたいににお嬢様に付いて行ったんだ。

さやかは判で押したような澄まし顔だよ、まるで何もなかったようにね。でも、りかこは違ったの。彼女は言い知れない悪い予感を覚えてたんだ。

去り際にお嬢様が残した言葉、声は小さくて何て言ったのかは判らなかった。でも、りかこの見た限りその唇は多分、こう動いていたの。

ころす……って。

りかこの鳥肌は治まらなかった。あの時のお嬢様の目、あれは憎悪を通り越していた。怨念、そう呼ぶものに近かったかもしれないね。その日以降りかこは、いつもさやかに付き添うようになったんだ。

心配だったんだね、本人は用心棒ボディーガードか何かのつもりだったんだ。さやかが下駄箱やロッカーを開ける時は特に注意したの。念の為、小包は全部りかこがこっそり回収してたんだ。さやかと別れた後に中身を確認するんだけど、やっぱりほとんどは手作りのお菓子とか普通のプレゼントなんだ。

でもね、やっぱり悪意のプレゼントは時々含まれてたよ。生き物の死骸が多かったかな。確かに精神的に来るよ、死骸は。

そして、ついにその日（、、）はやってきたんだ。

斜陽の射す夕暮れ時、二人はその日も紫陽花坂の小さな公園で寄り道してたんだ。いつも通りの甘いミルクティーを買ってね。二人は

ブランコに座ってそれをちびちびと飲んでいたの。

「ねえ、りかこ……」

呼ばれてさやかに顔を向けたの。さやかから声を掛けてくるなんて珍しい事だったから、りかこは一瞬戸惑った。りかこは、ん？と聞き返したんだ。

「りかこは、海、見た事ある？」

「海って、そりゃ勿論見た事あるけど……もしかして、さやか。見た事ないの？」

さやかは小さく頷いた。

「写真でしか見た事ない。不思議でしょ、十七歳にもなって一度も海を見た事ないなんて。小さい頃から両親は仕事ばかりで、どこへも連れて行ってもらった記憶がないの。それに私、友達いないから家から出ないし……」

自嘲気味に微笑んでミルクティーを一口啜るさやか。

「友達はあるでしょ、ここに！」

「そうだね、ごめん」

するとりかこは立ち上がった。

「そうだ、明日って土曜日だね。明日一緒に海へ行こうよ！」
目を丸くしたさやかは彼女を見上げる。

「明日？」

「そう、明日。流石にもう寒くて泳いだりは出来ないけど、予報じや明日も晴れるらしいし見るだけでも良いじゃん。明日予定空いてるよね、さやか」

するとこくりと首を縦に振るさやか。彼女は小さく微笑んだの。

「見てみたい、海を」

「よし、決定だね！」

明日の午前十一時に駅の切符売り場前集合。そう約束すると二人は公園を後にして家路に着いたの。

「しまった！」

百階段に二人が差し掛かった時に、りかこはある事に気が付いたの。

「どうしたの？」

「弁当箱、教室に忘れてきちゃった……」
舌を出して照れ笑いを浮かべるりかこ。

「ホントおっちょこちょいだよ、私。二連休の間ほったらかしといたらカビ生えちゃうから、ちよつと戻って取って来るよ」

学校は紫陽花坂の上の方にあるでしょ、上り坂だけど走ったら十五分ぐらいで往復できるの。況^ましてや運動神経の良いりかこならもつと早いかもしれないね。

「私も一緒に行く」

さやかはそう言った。

「それは悪いって、さやかは先に帰ってても良いよ」

気持ちは嬉しかったんだけど、さやかと一緒に行くよりも、ぱつと一人で走って取りに行った方がずつと早いんだ。それに自分の失敗にさやかまで付き合わせるのは忍びないでしょ。

するとさやかは百階段の一番上に立って、りかこに背を向けた。

「じゃあ、私ここで待ってる」

「ホントに？」

「ホントよ、今日もりかこと一緒に百階段を下りるんだから」

りかこはにっこり笑ってさやかの肩を敲^{たた}いたの。

「ありがとね、じゃあ猛ダッシュで取りに行ってくるよ。十分以内に帰って来るからタイム計っててよ」

「わかった。それまでここから町でも眺めてる」

りかこはさやかに通学鞆を預けて、夕暮れの紫陽花坂を全速力で駆け上がって行ったんだ。小さくなるりかこの背中を、さやかはじつと見詰めていたの。

思えば、これが駄目だったんだよ。

全速力のまま教室まで辿り着いたりかこは、もう秋だというのに汗だくになっていた。自分の席の荷物掛けのフックにぶら下がる弁当箱を見つけると、少し表情が綻んだ。

「あった……」

綿の袋に入った弁当箱を手にとると、りかこはふと窓の外に目を向けたの。太陽がさつきよりも傾いていた。夏が終わって、日に日に暗くなるのが早くなってるんだ。

何か、嫌な予感がしたんだね。

早くさやかのもとに戻らないと。そう思ったりかこは再び駆け出し、教室を飛び出したんだ。

校舎内はしんとしてるけど、グラウンドからは野球部のバッティングの音が小気味良く聴こえるんだ。りかこは静まり返った階段を駆け下りて、等間隔に並ぶ下駄箱の間を走り抜け、校門を抜けた。そのまま新興住宅地を走り抜けて紫陽花坂に差し掛かる。

郵便ポストの角を曲がった所で、出会い頭に誰かとぶつかった。相手は尻餅を突いて倒れたんだ。

「ご、ごめんなさい！」

同じ制服を着た女の子。りかこはその子に見覚えがあったの。

「あ……きみは……」

アスファルトにへたり込んでたのは、お嬢様。また陰でぐちぐち文句言われるよ、と思ったりかこは顔を顰めたんだ。

「ごめんね、大丈夫？」

りかこが声を掛けてもお嬢様の反応は無い。

何かがいつもと違う。

いつものお嬢様ならきつと凄い剣幕で睨み付けてくる筈なのに、今は茫然としてまるで魂が抜けちゃったみたいになってたんだ。

何よりその時お嬢様は一人でいたの、いつも取り巻きを連れて歩いてるお嬢様がだよ。とにかく、何かが怪訝おかしいんだ。

りかこもお嬢様の事は大嫌いだけど、流石にその時は心配になったんだ。

「どうしたの……」

りかこはその場に屈みこんでお嬢様の顔を覗き込んだ。するとお嬢様は真っ青な顔をしてるんだよ。唇もふるふると震えてるし、汗で化粧も溶けてるの。お嬢様のそんな姿、誰も見た事無かっただろ

うね。するとお嬢様は、うわ言のように小さく呟いた。

「私は……悪くない」

え？ と聞き返すりかこ。お嬢様は独り言のようにぶつぶつと続けているの。

「あの子が生意気だったから……」

「何なの、さやか的事？」

「ちよつと脅かしてやろうと思っただけに……」

りかこの顔から血の気が引いた。嫌な胸騒ぎを覚えたりかこはお嬢様の肩を乱暴に掴んで思いつき揺さぶったの。

「さやかに何したの！」

それでもお嬢様は放心したように目の焦点が合わず、ぶつぶつと何かを呟き続けているだけだったんだ。

そしてお嬢様は最後に一言ぼそりと零してから、電池が切れてしまったかのように止まってしまったの。

「ちよつと、押しただけなのに……」
ってね。

遠くの方で、かきーんってボールを打つ音が響いて聞こえる。爪先からぞわぞわと寒気が這い上がって来る。

「さやか……」

りかこは再び全速力で紫陽花坂を駆け下りて百階段へと向かった。いつもより紫陽花坂が長いような気がする。走っても走っても前へ進んでいないような気がするんだ。下り坂だから何度も転びそうになったし、脇道から出て来た自転車とぶつかりそうにもなった。

……さやか！

それでも、りかこの頭の中はそればかりだったの。

やっとこの公園に差し掛かった頃には陽が沈みかけていたんだ。

この公園の下の方を曲がれば百階段が見えるでしょ。

ついにりかこはその角を曲がった。

「さやか！」

大声で彼女の名前を叫んだんだ。

でも、百階段の所にさやかの姿は無かったの。辺りを見回しても彼女の姿はどこにも無い。何度名前を読んでも返事は返ってこなかった。

そこで、お嬢様の言葉が脳裡^{のうり}を過ったんだ。

……ちよつと、押しただけなのに……。

恐る恐るりかこは百階段の下を覗き込んでみたの。その瞬間、彼女は目の前が真っ白になったんだ。百階段の一番下、そこには確かにさやかは居たよ。

ただ、彼女は仰向けに倒れていたんだ。真っ黒な長い髪が灰色のアスファルトの上にばらりと広がっていた。

そして、さやかの頭から黒いものが流れ出しているの。

「さやかあああああ！」

りかこは半ば飛び降りるように百階段を一気に駆け下りる。筆箱、教科書、ノート。階段の途中にはさやかと自分の鞆の中身がぼろぼろと落ちているんだ。

さやかに近付けば近付く程、彼女が遠くに感じるの。

この意味分かる？

目は虚ろ、顔はいつもに増して真っ白、制服だってぼろぼろ。彼女がいつも見ているさやかじゃなくなってるんだよ。

一番下まで辿り着いたりかこは屈み込んで彼女の名前を呼び掛ける。するとさやかは弱々しい返事をしたの。

「あ、ああ。りかこ？」

今にも消えてしまいそうな声だった。りかこは彼女の白い頬に手を置いて泥を拭ってやった。生きてる人間とは思えないぐらい冷たいほっぺだったんだよ。

「そうだよ、私はりかこだよ……」

「私、足滑らせて……落ちちゃったみたい……おっちょこちよい、よ」

儚げに微笑むさやか。

彼女はお嬢様の事は口にしなかったの。りかこはふと自分の手を見

ると、どろりとした赤黒い血がべったりと付いていたんだ。どう見てもさやかの怪我は軽いものではない。

「喋らないで、今救急車呼んで来るから！」

りかこが立ち上がろうとすると、さやかが彼女の服を掴んで離さないんだ。

「嫌、行かないで……」

「さやか……」

さやかは弱々しい声で話し始めた。

「私ね、りかこを待ってる間……生まれて初めて、寂しいって思ったの。一分が一時間にも感じられた。もしこのまま、りかこが戻って来なかったらって考えると心細くて堪らなかった。一人でいる事がこんなに嫌だと思ったのは、生まれて初めてだった。やっぱり、りかこは私の友達なんだね」

「そんなの……今はどうでも良いから……」

さやかの声はどんどん小さくなってゆく。まさにこのまま消えてしまふんじゃないかと思えるほどね。

「ああ、なんだか寒くなってきたね。寒いよ……りかこ」

さやかの言葉を聴いていると、自然とりかこの目に涙が溢れてきたの。

「もう、喋らないでよ……喋っちゃ駄目だよ」

「ごめんなさい、りかこ。私……海行けそうにないな。折角約束したのに……本当にごめんなさい。私を嫌いにならないで」

「そんなのもう良いから。明日が無理でもまた別の日に行けば良いじゃん。さやかを嫌いになる訳なんてないじゃん！」

だからもう病院行こうよ……。りかこが幾らそう促してもさやかはりかこの服の袖を離してくれない。その間も、さやかの頭からは止めどなく血が流れ続けているのに。

「あれ、りかこ……どこ？」

「何言ってるの、ここにいますよ！」

打ち所が悪かったのか、さやかは朦朧とし始めている。りかこは

そんな彼女の手を握り締めて大声で叫んだ。その手もどんどん冷たくなっていつてるんだよ。

「おかしいな、良く見えない……りかこ」

「さやか……」

さやかの顔はみるみる内に悲しみの色に染まっていったんだ。

「嫌……嫌だよ。一人は嫌だな……」

「一人じゃないって！　ずっと私が付いてるから」

りかこの叫びも、さやかにはもう届いてないんだろうね。

「寂しい、な……」

そう言ってさやかは、動かなくなった。

色を失った彼女の虚ろな瞳からは、一筋の涙が流れ落ちていたんだって。多分、さやかは生まれて初めて泣いたんだろうね。

みるみる冷たくなるさやかの体。りかこはそんな彼女に覆いかぶさって、わんわん泣いていたんだ。

いつまでも、ね。

これが十五年前の「さやか」のお話。

その後、すぐに救急車が来たんだけど、さやかはもう既に息を引き取った後だったんだ。因みにその数ヵ月後に、りかこもまた転校して消息不明。

こうして噂だけが都市伝説として残ったって事だよ。

え、これのどこが都市伝説か分からないって？

そうだね、確かにこれだけじゃただの可哀想な話だよ。都市伝説って現代版の怪談みたいなもんだもんね。怖くなければ、不気味じゃなければ都市伝説とは言えないよね。

じゃあ、その後の紫陽花坂の事も教えてあげる。

花。

ほら、この公園から見える百階段の脇に供えられてる花。あの花の意味、何となく分かったでしょ。

さやかへのお供え物、か……。

まあそれもあるんだろうけどね。実はあの百階段で死んだのって、さやかだけじゃないんだよ。さやか死んでしばらく経ってから、もう一人の死者が出たんだ。誰だと思う？

お嬢様だよ。

奇しくもさやかが死んだのと同じ、夕方にね。

彼女もさやかと同じように、百階段の一番下で倒れていた所を発見されたんだって。ただお嬢様の場合は落ち方がもっと酷かったらしくてね、全身傷だらけになっちゃって、おまけに首の骨も折れちゃってたらしいんだ、ぐにやりって。まったく……綺麗な顔が台無しだったって話だよ。

その後も紫陽花坂、特に百階段での怪我人は絶えなかった。この公園でさやからしき人影を見たって目撃談もあるんだよ。

その頃からだね、紫陽花坂がこの高校の生徒から恐れられだしたのは。「友達の温もりを知ったさやかは寂しさの為、この高校の生徒をあの世に引き摺り込む」って触れ込みでね、こうなればもう立派な都市伝説でしょ。

今でもこの紫陽花坂を夕方に一人で通る生徒なんていない、キミみたいに何も知らなかった子は仕方ないけどね。

ああ、そうだ。確かこんな話もあったよ……

……紫陽花坂でさやかに出会うと五日以内に死ぬ。

なんてね。

嘘臭いけど、ここで怪我したって子はしばらくしたら本当に居なくなっちゃうんだって。因みにお嬢様も即死じゃなかったんだ。苦しんで苦しんで苦しみ抜いて死んだって話らしいよ、五日目にね。

こうして「さやか」は都市伝説になった、ってワケ。

どうする？

一人で帰れる？

キミの家も百階段を下りないと帰れないんでしょ、気を付けて帰りなよ。キミみたいな子もさやかは引き摺り込むかもしれないよ。

もしかしたらキミはりかこに似ていたりしてね。

それだったらさやかは喜んでやって来るよ。そう言えばキミ、転校生なんだよね。りかこも転校生だったし……偶々（たまたま）かな。じゃあ、気を付けてね、さやかに気に入られないように……。さよなら。

※

こうして私はその公園を後にしました。

話し終えた新谷詩緒里しんたに しおりはまだ公園に残っていたようですが、私は帰る事にしました。「さやか」の都市伝説を聞いて、夕方の紫陽花坂を一人で歩く事はちよつと怖かったんですが、それよりもっと怖いものがあつたんです。

はい、新谷詩緒里です。

彼女の存在そのものが怖かったんです。恨み辛みつらを語る時、彼女は必ず私の目をじっと見ているんです、決して目を離そうとせず目瞬きもしません。まるでその恨みを私に向けているかのように……。

一秒でも早く新谷詩緒里から離れたかつたんです。

私は逃げるように紫陽花坂を駆け下りました、本当に怖かったんです、走っても走っても新谷詩緒里の視線が絡み付くように追いかけて来ているような気がしました。

そして百階段の前に立ち、恐る恐る公園の方を見上げてみました。もしも彼女が私の事を見下ろしていたらどうしよう、考えるだけで恐ろしいんです。幸いその時は新谷詩緒里も見えていませんでした。私は、ほっと胸を撫で下ろし百階段の方に向き直りました。

その時、私の足元に何かが当たったんです。

瓶びんでした。

いつの間にか、花を供えていた瓶が倒れていたんです。誤って私はその瓶を踏んでバランスを崩してしまったんです。

そして……そのまま百階段を転がり落ちました。

ただね。その時、一番怖かったのは落ちていく事でも何でもなかったんです。何だと思えますか？

あの……。落ちてゆくとき、ちらりと見えたんです。

さっきまで誰もいなかった筈の公園のフェンスの向こうから彼女が、新谷詩緒里がじっと私の事を視ていたんですよ。

感情の無い瞳で、じいっと……。

目が覚めると病院のベッドの上でした。

ずっと悪夢にうなされ続けていたんです。夢の中にも新谷詩緒里が現れて私をじっと見てるんです。

私は、本当にさやかに気に入られてしまったのでしょうか。

最初は迷信だと思って信じてなかったんですが、私が足を掬われた瓶って、さやかへの花が供えられていた物かもしれないんです。偶然にしても気持ち悪いじゃないですか。

それに「さやかは五日以内に気に入った子連れて行く」って話ありましたよね、私今日で四日目なんですよ。噂が本当なんだとしたら、明日にはもう私は……居ないかもしれません。だから話したんです。もう誰にも話せなくなるかもしれないから……。

怖い。

怖い、怖い。

本当に怖いんです！

新谷詩緒里が私の事をじっと見ている、私が怯える様をじっと見張ってる！ 私が、ちゃんと死ぬか見張ってるんです！

明日死ぬなんて嫌です。

……ああ。

幻覚……ですかね。

本当に、ずっと視られているような気がするんです、怖くてカーテンも開けられません。幻覚なら良いんですけどね。

新谷詩緒里ですか……今も、見えますよ。

これも幻覚ですかね、あなたの後ろにいますよ。

北野秀一

十月二日。

教室の窓からは町を一望する事が出来る。小高い丘の上に建っているこの旭ヶ丘高校あさひがおかならではの光景だ。

中でも二年一組の教室、特に窓際の俺の席からの眺めは格別だ。建物が模型みたいに並んでいて、天気の良い日には遠くの海も少しだけ見えたりもする。

そんなこんなで一日が終わった。

帰りのホームルームが終わると生徒達は蜘蛛の子を散らすように教室から出て行く。部活に行くやつも、これから繁華街に出掛けようかというやつもいる。

俺はいつも、もう一度だけこの窓からの眺めを拝んでから帰る事になっている。生まれてからずっと二階建ての一軒家住まいだから高い所には憧れがあるのだ。窓枠に肘をついて、夕焼けに赤く染まる町を見下ろした。

「秀一しゅういちお前、何セーションしてんだよっ！」

と、俺はいきなり肩を叩かれた。聞き慣れた軽い声だ。

「な、何だよ……」

振り返ると間島健也ましま けんやがにやにや笑って立っていた。校則違反の明るい髪にピアスだらけの耳、だらしなく開かれた胸元。不良っぽい容姿とは相反して毒気の抜かれる笑顔だ。

「帰んないの？」

「もう帰るよ。健也、お前も部活あるんじゃないのかよ」
すると健也は舌を出して、また笑った。

「我が柔道部は昨日試合だった為、今日は練習お休みです」

柔道部とは言っても健也は背も低くて体も細く、全くと言って強そうには見えない。おまけにチャラチャラしている。噂では試合でもそこそこ活躍するらしいのだが、見た事は無い。

「秀一も帰宅部なんだったら何か部活やれよ。例えば……柔道部とか柔道部とか、他にはそうだな……柔道部とか」

「選択肢が柔道部しかないのかよ」

「バレたか。入ってくれよ、部員少ないんだよ。それにお前の親父さん警察ポリやってんだろ、だったらお前もちょっとぐらい柔道出来るって！」

何が「バレた」のか解らないが、とにかく無茶苦茶な理論だ。わざとらしく俺が嫌そうに顔を歪めても彼は全く悪びれる様子もない。

「親父は親父だが。俺は関係ないし」

すると子供のように不貞腐れて、ふん、と洩らす健也。矢張りどう見ても強そうには思えない。

健也も窓の外を眺めて大きく伸びをする。

「相変わらず良い景色じゃん。お前の席、ホント特等席だよな」

「良いだろ」

俺達は顔を見合わせてけらけら笑った。

すると不意に後ろから声を掛けられた。

「あ、ホモだ」

何とも冷たい声。

俺達は同時に振り返った。教室の扉のところに立っていたのは久く保田優美ぼた ゆうみ。彼女は冗談半部、本気半分といった軽蔑の眼を俺達に向けていた。

健也は陽気に、そうでーす僕たち愛し合っていまーす、などと言っ
て俺に抱き付いてきた。馬鹿やめろ、と突き放そうとしたとき、
優美が一步退いたのが分かった。

「え、真剣マッセンで……」

顔を顰しかめる優美。俺は慌てて健也を引き剥がした。

「冗談に決まってるだろ！」

「ああ良かった、てっきり私お邪魔しちゃったかと思った」

判で押したようなにやけた表情で健也が口を開く。

「まあ『さやか』と『りかこ』みたいな美少女なら画になるけど、

男同士ってのは見てらんねえよな。何でレズは見られるのにホモは気持ち悪いんだろうな、ははは」

……さやか。

……りかこ。

健也が口にしたのは、この学校に昔から伝わっている噂話の登場人物だ。さやかというのは非業の死を遂げた少女、と言われている。すると優美は首を傾げた。

「ちよつと間島君、りかこも美少女だったってホント？ 私そんな話聞いた事もないよ」

「さあ。俺はさやかも、りかこも二人とも絶世の美少女と思ってるけど」

この通り、さやかの話はこの学校の生徒なら誰でも知っている。もしかすると先生達も皆知っているかもしれない。それ程有名な話なのだ。しかも健也の中ではかなり美化されているらしい。

「ふうん。そんなの初耳だな、私」

首を傾げる優美は整った顔を難しそうに歪めて、こめかみに人差し指を当てた。

「ほつとけよ、どうせ健也の妄想空想幻想だろ」

俺がそう言っていると健也は実にすけべな笑みを浮かべていた。そうね、と優美も軽くあしらって髪を耳に掛ける。

「じゃあ、私そろそろ帰るわ。玄関で明歩あきほも待ってるし」

バイバイ、と手を振って教室から出て行く。手提げ鞆を肩に掛けた彼女に俺達も手を振って見送った。

すると隣の健也が呆けた顔をしている。

「ああ、やっぱ良いよなあ……」

そう言って健也は恍惚うっとりとした溜め息を吐いた。

彼は窓の外に向き直り、幽かに赤らみ始めた空を眺めている。先程まであれだけぺらぺらと喋っていた健也はまるで瞑想状態に入っただけのように急に口を利かなくなった。

雲一つない空に飛行機が一本の線を引いてゆく。暫くしばしば黙っていた

かと思うと彼は不意に口を開いた。

「なあ秀一。久保田の事……どう思う？」

「どう思うって言われても……もしかしてお前、優美の事……気になっただけなのか？」

はあ、と甘い溜息で返事する健也。

「どうやら肯定と受け取って良さそうだ。」

「だってさあ、久保田って……可愛いし、しっかりしてるし。俺すっげえタイプなんだよ」

なるほど、さっき優美に声を掛けられてから急にぺらぺらと喋る勢いが増した事にも頷ける。好きな子の前で目立ちたい、という心理が働いていたのだろう。

「俺は勘弁だよ。あんな気の強い女……」

噂をしていると、生徒通用門の辺りに優美の姿を見つけた。彼女の隣には一際小柄な女生徒、小森明歩こもり あきはがいる。健也はその二人の姿を窓から見下ろしながら再び溜息を吐いた。どうやら本当に優美の事が気になっているようだ。

「今度、お前の事それとなく勧めといてやるよ」

そう言うのと健也は照れ臭そうに口元を緩めた。余計な事するな、と文句を言われるかとも思っていたので意外だった。

グラウンドからは野球部の気合の入った掛け声がここまで聴こえてきている。すると健也はぼつりと呟く。

「なあ、そろそろ帰ろうぜ……」

健也は空を見上げて急にそわそわし始めた。

「どうしたんだよ、急いでるのか？」

「いや、別にそんなワケじゃないけどよ。ほら……もう陽も大分傾いてるし……」

健也の声は尻すぼみに小さくなっていった。

「まさか、紫陽花坂あじさいが怖いとか言うんじゃないだろうな」

紫陽花坂。

その言葉を発すると健也の肩がぴくりと震えた。ちょっとからか揶揄ただ

けのつもりだったが、どうやら凶星だったらしい。

「お前な、あんなもん迷信だろ。そんなんでビビってたら優美に嫌われるぞ」

「それは……ちよつと……」

困る、と結んで健也は口籠る。

「何だっけ。確か、さやかのお化けが出て来て、気に入られたらあの世に連れて行かれるって話だったよな。良いじゃん、さやかも可愛いつて話だし。もし嫌だったら抵抗しろよ、何の為の柔道だよ」
冗談を言っても健也の表情はいまいち浮かない。いつもの彼ならもっと陽気な切返しを見せる筈なのだが。

健也は上目遣いに、そろりと俺の目を見て言った。

「お前……知らないの？」

お調子者の彼らしくない妙に真剣で、それに弱々しい声。

「知らないって、何が？」

「昨日の事だよ……」

「昨日？」

俺が聞き返すと健也は踵かかとを返して、自分の荷物を手に取った。機嫌が悪いのか、とも思ったがどうやらそういう訳ではなさそうだ。

「取り敢えずもう行こう。帰りながら話すよ」

健也に促されて俺は教室を後にする。俺達が背を向けると窓際に束ねられたカーテンが解けて、ふわりふわりと風に靡なびき出した。

もう夕方と呼べる時間だった。

空を見上げると、オレンジ色の雲が鱗うろこのように等間隔に並んでいる。まるで空を泳ぐ巨大な金魚が腹を見せているかのようだ。

通用門を出て紫陽花坂に差し掛かると、心なしか健也の歩みが急くようになった気がする。ポケットに手をつ突っ込んで歩く彼は、何かを警戒しているようにちらちらと辺りを見回している。

紫陽花坂の傾斜はかなり急だが他には特に何も変わった事もない、山林を削って出来た新興住宅地には良くある坂道だ。

道の傍らには至る所に青い葉を持つ植物が植わっている。植わっていると言うより自生していると言うべきなのか、それらは整地されたアスファルトの間から身を這わせるようにして伸び、大きな楕円形の葉を風に揺らせている。いつもは全くと言って存在感は無いが、その瑞々（みずみず）しい葉は雨の日には良く映えるのだ。

この季節にはそれらの花が咲く事は無いが梅雨時にもなると紫色の花を一斉に咲かせて、この坂の景観を一気に変えてしまう。

この植物は勿論、紫陽花。

これが紫陽花坂と呼ばれる所以だ。ゆえん

その名に相応しい紫陽花坂の姿を俺が見たのは二回、去年と今年の六月だ。雨の中、この長い坂は様々な紫色が現れる。淡い紫、濃い紫。紫という色だけなら総ての種類が揃っているのではないかと思う程だった。

口を噤んだままの健也。つぐ

浮かない雰囲気のまましばらく歩くと小さな公園が見えてきた。確かこの公園からは町を一望する事が出来る。景色が良いにも拘らず、かかわうちの高校の生徒は滅多に訪れたりはしない。それも『さやか』を恐れるからなのだろうか。

公園なら近くにもう一つ広いものがあるので、近所の子供達も皆そちらへ行くらしい。遊具もブランコと滑り台しかない上に狭くてボール遊びも出来ないとなれば誰も寄りつかなくても仕方ない。

そのまま坂を下り、公園の角を曲がる。すると健也の足がびたりと止まった。

「どうしたんだ？」

「ここだよ……」

健也はちらりと前を一瞥する。いちめつ

その先にあるのは通称、百階段と呼ばれる長くて急な階段だ。紫陽花坂から外れるようにして伸びているこの百階段はその名の通り、本当に百段以上ある。以前サッカー部の級友が練習中に数えたそうなのだが、百段ではなく正確には百十三段あったらしい。きつ

と今までにも数えた者がいたのだろうが「百十三階段」だと語呂が良くないので「百階段」と定着しているのだろう。

ここを下りればすぐに駅が見えてくるので、電車通学の生徒はほとんど皆この階段を使用する。自転車通学の場合はそのまま百階段を素通りして紫陽花坂を下りて行くようになっていた。

「百階段が、どうかしたのか？」

すると健也はそろりと視線を伏せた。百階段の縁には瓶に差した花が供えられている、名前は分からないが黄色い花だ。

そして健也は重い口を開く。

「昨日な、ウチの生徒がここから落ちて大怪我したんだよ……」

俺の背筋に冷たい物が走った。

「本当かよ……」

健也がびくびくしているのにも肯ける。うなずいや、この旭ヶ丘高校の生徒なら誰もが気味悪く感じるだろう。何故なら、さやかもここで命を落としたとされているのだから……この、百階段の一番上から転落して。

「落ちたのって、誰？」

わかんねえ、と答えて健也は花の供えられた瓶の前に屈み込む。

「俺もさっき橋本に聞いたんだよ。ほら野球部でアイツら毎日遅くまで練習してるだろ、何でも昨日ウチに転校してきたばかりの女子らしいんだ。とにかく俺達と同じ二年だって事しか判らねえ」

「ここから落ちたんだろ……よく死ななかつたな……」

「なんか幸いすぐ救急車が来たらしいんだ。サイレンの音が学校の近くで止まったから野球部のヤツら練習すっぱかして見に行ったらしいんだ。そしたら百階段の下に救急車が停まってて、アスファルトに血溜まりが出来てたんだってさ」

ふと百階段の下を覗き込む。

そんな凄惨な事故がこの場所で、しかも昨日起こったのだと知ると流石に気味が悪い。どこまでも続くような長い下り階段が死の世界にまで繋がっているような気がした。

健也は続ける。

「これって、やっぱアレじゃねえの？」

「アレって？」

「さやか……呪いってやつ」

その刹那、温ぬるい風が頬を撫でていった。もう十月だというのに生温かく湿ぬっていて気持ち悪い。

「そんな馬鹿な事あるかよ」

偶々（たまたま）だろ、と付け足そうと思ったところで、健也は更に続けた。

「偶々じゃねえかもしれねえんだよ」

「どういう事だ、誰かが突き落としたとでも言うのか？」

「そんなワケじゃないんだけどな。ただこの階段から落ちて死んだのって、確か他にもいたんじゃないか……四年前に」

健也は黄色い花を凝視みつめながら言った。

「そう言えば……」

そう言えば、俺も聞いた事がある。

今から五年前、つまり俺達が中学一年の頃にもここで転落死した生徒がいると聞いた事がある。奇しくもそれも今回の事故や、さやかと同じく季節は秋。その事故の所為で下火になりかけていたさやかの都市伝説が再燃してしまったとも聞いた。

「秀一も知ってるだろ、やっぱマジでさやかがあの世に引き摺り込んでるんじゃないのか。それに『さやかに会ったら五日以内に死ぬ』なんて噂もあるじゃん。もしかしたら昨日落ちた子も五日以内に……」

不安げな顔を上げる健也。

「縁起でもない事言うなよな」

柔道技でさやかもやつつけろ、などと冗談の効く様子でもなくなってきたしまった。今回も五年前もそしてさやかも、符合する点が多い。これは流石に気味が悪い。健也は再び黄色い花に視線を落とす。

「その花が、どうかしたのか？」

こくりと頷く健也。

「知ってるか秀一。この花な、毎日ここにあるんだ」

「それは、知ってるけど……」

「昨日野球部のヤツらがここに駆けつけた時はこの瓶、階段の途中で割れてたらしいぜ。その後から他にも残っていた生徒が駆けつけて来たらしいんだけど、みんな覚えてるそうだ。この瓶は割れてたってな」

「誰かが新しいのに換えたって事だな」

「そうだよ、しかも今朝にはもうあっただろ。誰も見てない間に、いつの間にか元通りになってやがるんだ」

いつになく真剣な顔をした健也。いつもお道化どけている彼の姿はここにはなかった。健也は更に続ける。

「三年の先輩に聞いたんだ。先輩が一年の時から毎日ここに同じ花があるんだって。因ちなみにその先輩が一年の時の三年も同じ事を言っていたらしい」

「つまり誰かが毎日ここをチェックして枯れかけたら直ぐに換えてるって事だよな、しかも何年間も、ずっと」

確かにそう言われてみると気になる。これは誰の為に供えられている花なのだろうか。四年前に死んだ女生徒の為か、いや、健也の話では更に以前からあるらしい。そうなると矢張り……さやかの為の物か。

「さっさと帰ろうぜ、秀一。僕ちゃん怖いよお」

健也は立ち上がり、ようやくいつもの調子に戻った。矢張り彼はこのおちゃらけた感じ方が良く似合う。

「そうだな、帰ろうか。そろそろマジで暗くなりそうだし。ああ、もう最近急に陽が沈むの早くなってきたな」

再び空を見上げると先程よりも空は赤みを増し、より深いオレンジへと色彩を変化させていた。

もう直ぐ、紫陽花坂に夜が来る。

すると、紫陽花坂をとぼとぼと誰かが上って来る姿を目にした。旭ヶ丘高の制服を着ている。どうやらうちの高校の女子らしい。

「あれ、何でアイツがこんなところにいるんだ」

「さあ？」

小学生と思える程の小柄な体、頬にかかる程度の短い髪。小森明歩だ。彼女は俯うつむきながらとぼとぼと紫陽花坂を上って来る。

そんな彼女に健也は声を掛けた。

「おーい、小森！」

すると小森はゆっくりと顔を上げ、あからさまな愛想笑いを浮かべた。正確には愛想笑いに非常に良く似た種類の苦笑いだ。そして彼女はゆっくりゆっくりと俺達の方へと歩み寄って来る。

俺は健也に耳打ちする。

「丁度良いじゃん、小森に優美の事ちよつと聞いてやろうか」

「き、聞くなって何を？」

「優美に彼氏がいるか、とかだよ。小森ならそれぐらい知ってるだろ、優美とも仲良いんだしさ」

真っ直ぐに小森の方を見据えて、ごくりと生唾を飲む健也。

「もし久保田に彼氏がいるって言われたら、どうする……」

「どうするって、俺に聞くなよ。仮に彼氏がいたとしてもすっぱり諦められて良いんじゃないか」

「おいおい、元々脈なしみたいな言い方すんなよ」

二人でぼそぼそ話しているとようやく小森は俺達の所まで来ていた。気配が、いや、存在感が無かった。それにしても改めて近くで見ると、本当に小さい。とても同い年には見えない。

「ああ、北野君に間島君……今、帰りなの」

彼女はいつも眉間に皺しわを寄せ、判で押したような困った顔をしている。しかし本当に困っている訳ではなく生まれつきそういう顔なのだろう。

「そうだよ、健也が一人で帰るの寂しいって言うから付き合ってや

ってるんだ」

「そうなんだ」

「それより小森。お前、さっき優美と帰ったんじゃないのか？」

彼女は上目遣いに俺の顔を覗き込むように見る。しかし俺が目を合わそうとすると直ぐに逸らす。

「う、うん。でも、わたし……ちよつと用事あったから途中で別れたんだよ」

「用事？」

「ちよつとね……それで、今、その帰りなの」

小森は俺の質問をさらりと受け流した。何の用事かは答えたくないのだろうか。さりげなく誤魔化され、話題を変えられた。

「もう、暗くなってきたね」

不器用そうに微笑む小森。

口元は笑っていても目尻は今にも泣き出しそうな程に下がっているのだ。彼女の笑顔にはどこか翳^{かげ}が見え隠れするように思える。まるで小型の草食動物のように、常に何かに怯えながら相手に媚^{へつら}び諂^たつて許しを乞う。そんな笑顔だ。

いかにも話を切りたそうに目を伏せる小森。

俺ももうそれで話を終えようとした。彼女と話しているだけで何だか弱い者虐めをしているような気分になるからだ。しかし健也は肘で突^ついてくる、「久保田の事は？」というサインなのだろう。恥^はずかしいだとか何だかんだ言っても結局気になるらしい、聞きたければ自分で聞けば良いのに。

わかったわかった、というサインを込めて健也に視線^{アイコンタクト}を送る。

「ところでな、優美の事でちよつと聞きたい事があるんだけど」

「な、何……」

警戒させてしまったらしい。テレビドラマに出てくる刑事のような尋ね方が拙^{ます}かったのだろうか、それにしてもいちいち扱い難い奴だ。「いや、そんな大した事じゃないんだ。優美って今、彼氏とかいるのか？」

「彼氏……かあ」

彼女は相変わらずの困った顔で、ゆっくりと唇に指を置いて考え始める。内気で気弱でおっとりした性格を象徴するように彼女の動作は総てがゆっくりだ。こんな彼女が気の強過ぎる優美と何故友達としていられるのか不思議で仕方ない。

丁度健也が苛々し始めた頃、ようやく彼女の答えも出たらしい。

「うん、いないと思うよ……多分」

「多分だって？」

何とも言えない不安げな表情をした健也が詰め寄ると、彼女はまた怯えたように一歩後ずさる。

「ご、ごめんなさい……」

小森は泣き出しそうな顔で呟いた。

何故、彼女は謝るのだろう。それ程深い付き合いではない俺には良く解らないが、小森はいつも事ある毎に謝っているような気がする。そう、彼女は俺の中のイメージではいつも潤んだ瞳でこう言っている。

「ごめんなさい、と。」

小森のごめんなさいには謝罪というよりも「赦ゆるして下さい」の意味合いの方が強く含まれているように思える。

……もうやめて下さい。

……怖い思いはしたくありません。

……だからもう、赦して下さい。

例えば自分が悪くなくとも、自らに非があると認めてそれ以上波風が立つ事を避け、そして赦しを乞う。彼女は、ごめんなさいの一言の裏にそんな悲痛なメッセージを忍ばせているように思える。

俺は人一倍気の弱い小森の胸中を察して健也を引き離れた。

「いやいや、こっちこそゴメンな。健也コイツ実は優美の事が好きらしいんだよ、それで小森なら優美と仲良いし色々知ってるかなと思ってさ」

言いやがったな、という顔をして俺を睨む健也の顔は真っ赤にな

っていた。そうだったんだ、と無感動に相槌を打った小森は顔を伏せる。

「本当に彼氏はいないと思うよ……」

今にも消えそうな声とはこういう声の事を言うのだろう。小森は本当に小さな声でそう言った。すると健也の目にも淡く希望の光が灯った。小森はぼそぼそと歯切れの悪い声で続ける。

「あのね……あたし、優美とはいつも一緒にいるんだけどね、そんな話、一回も聞いた事ないよ」

「そうなのか！」

健也が再び過剰な反応を見せた。また小森が怯えてしまわないように俺は上手く健也を制止する。

「う、うん。放課後も、真っ直ぐ家に帰ってるみたいだし、寄り道して男の子と遊んだりしてる感じは、ないよ」

ちらりと健也の方を窺うと彼は満足そうな顔をしていた。小森も気弱そうに愛想笑いを浮かべている。

そうは言っても、優美の家は確かこの高校から徒歩圏内だ。寄り道せずに帰ったとしても、その後は知らない。荷物を置いて男子と出掛けるのかもしれない。同じ高校の男子であれば家に呼ぶ事だって出来る。

しかしそんな事を思っても決して口には出せない。また小森の口から「ごめんなさい」が零れてくるからだ。彼女のごめんなさいを聞くとこっちまで後ろめたい気分になってしまう。

「良かったな、健也。お前にも可能性はありそうだな」

「そ、そうだな……ちよっと頑張ってみようかな、俺」

健也は照れ臭そうに小森の方を見て茶色い頭をぼりぼりと掻いている。いよいよ夜が近付き、心なしか風も冷たくなってきた。

俺は話に区切りを付けるように言う。

「もう暗くなるぞ、早く帰ろう」

「そうだな、小森も一緒に帰ろうぜ。電車も同じ方面だろ」

健也は小森にそう誘った。一緒に帰ろうと誘ったのは優美の情報

を覚えてくれた彼なりの礼のつもりなのだろう。
すると彼女はまた俯き、ゆっくりと首を横に振った。

「わ、わたしは……いいよ」

「何でだよ、暗くなるから女子一人じゃ物騒だろ」
健也の言う通りだ。

幾ら都市部から離れた郊外の新興住宅地と言っても、こんなに暗くなつてからの女の一人歩きはあまりお勧めできない。
現にこんな町にも変質者が出たという前例はある。

中年の男がすれ違いざまにうちの女生徒のスカートを刃物で切り裂いたという事件がつい最近もあった。しかも犯人は捕まっていない。
況してや、ここは紫陽花坂の百階段。

変質者以外にも危険なものは潜んでいるかもしれないのだ。つい昨日、一人の女生徒が転落して大怪我を負ったというではないか。
それは変質者と違って物理的な危険などではない。

それはもっと抽象的で実体が無く、像の见えない正体不明の恐ろしいもの。言うなれば……。

さやかかの呪い。

……って俺は何考えてんだ。馬鹿馬鹿しい。

俺からも小森と一緒に帰るよう促した。

「そうだよ、この辺りもまた変質者が出るかもしれないし一緒に帰る方が安全だ。もし変態野郎が出たとしても、健也はこれでも柔道有段者だから守ってくれるぞ」

「そうそう、それに秀一も警察の息子だしね。きっと強いよ」

……親父が警察でもそれは関係ないだろ。

しかし、女子一人こんな所に残して行くというのはどうも憚られる。俺の正義感の強さだけは警察官である親父譲りなのかもしれない。

小森は静かに口を開く。

「あの……わたし、ちょっと用事があるの……だから、先に帰っていいよ……」

「用事って……これからまた用事あるのかよ」

「うん。わたしは一人で、大丈夫だから……ごめんなさい」

また出た。ごめんなさい。

小森の口からその言葉を聞くと完全に拒絶されているように感じて、俺達は彼女を連れて帰る事を諦めた。

「なあ小森、何があるんだか知らないけど気を付けろよ」

一応、俺は注意する事だけは促しておいた。俺達は小森に手を振ってから百階段を下って行く。すると健也は小森を振り返り不意に無神経な事を口走った。

「マジで気を付けろよな、さやかに……」

……馬鹿！

俺は健也の脇腹を肘で思いっきり押した。

俺達と会話しているだけでもオロオロするような気の弱い女子がそんな事を言われて平気な筈はない。健也も、しまった、という顔をしている。

しかし、小森の反応は意外なものだった。

「ありがとう気を付けるね、さやかに……」

いつも涙目の彼女の瞳もその時は、何かに挑みかかるような凛々しさを宿していた。俺達が階段から見上げている所為なのかもしれないが、どこことなく小森が少し大きく見える。百階段の上にあの弱々しい小森の姿は無かった。

小森の唇が小さく動く。

何かを言ったようだが聞きとる事は出来なかった。

「小森、お前も結構可愛いんだから明るくしてたら直ぐに彼氏出来るぞ！」

そう健也が冗談ぽく言うと、彼女はいつもの彼女に戻ったらしく、照れ臭そうに内気な苦笑いを浮かべた。

それ以降、小森明歩は姿を消した。

※

母親はいない。

俺が小学二年の時に病気で死んだ。子供の頃は知らなかったが後々聞いた話だと体中に癌が転移して手の施しようがない状態だったらしい。

その時、俺は母が死んだという事実を受け入れる事が出来なかった、いや、正確には死んだという事を理解出来ていなかったのだ。

母の死に目にも会えず、ただ親父から母がもういなくなったという事実を聞かされただけだった。幼かった俺は直ぐに帰って来るものだとはかり思っていた。親父が仕事から帰って来ると毎日のように「お母さんはまだ帰って来ないの？」と尋ねていたと思う。その度に親父は気の毒そうな顔で俺の目を見ていた。そして時々親父は泣いていた、ような気がする。

親父の実家は同じ町内にある為、小学生の頃は学校から帰って来ると親父が迎えに来るまでそこで祖母と待っていた。

しかし中学に入ってから直接自宅に戻って、自分と親父の分の夕食を作って待っているようになった。くたくたに疲れて帰って来る忙しい親父の手助けを少しでもしたいと思ったからだ。

お陰で今となっては料理もすっかり板に着いてきてレパートリーもかなり増えた。今日も俺は先に二人分の夕食を作っておいてから二階の自分の部屋に戻った。夕食は出来るだけ親父と一緒に食べるようにしている。

「さやかのか呪い、か」

ぽつりと独り言を洩らしてベッドに仰向けに倒れ込んだ。音の無い空間でじっとしていると不意に健也の言っていた事が脳裡を過った。

——昨日な、ウチの生徒がここから落ちて大怪我したんだよ……。

——これって、やっぱアレじゃねえの？

——さやかのか……呪いってやつ。

馬鹿馬鹿しいと一蹴していたが、いざ一人になってから考えてみ

ると少し気にならない事もない。

夕方、あの紫陽花坂を一人で歩いていると、さやかにあの世へと引き摺り込まれてしまう。確かにそういった噂話は俺達の学校に伝わっている。そして昨日、百階段からうちの女生徒が転落して大怪我を負ったのは事実。更に二年前にも女生徒があのだ百階段から転落し死亡していたのも事実。

それら元凶となったのは十五年程前、さやかという名前の少女が百階段から転落死した事、という噂がある。

しかし、こういった土地に纏^{まつ}わる怪談や都市伝説は何の根拠もなく噂が噂を呼んで語り継がれている場合が多い。例えば「昔ここで殺人事件があった」とか「ここは元々墓地だった」などや、更に遡^{さかのぼ}ったものであれば「空襲で沢山の人が死んだ」「江戸時代、ここに処刑場があった」といった類の物もある。

しかしどれもその事実を証明する証拠は、と聞かれると不確かなものが多い。要するに作り話だ。少しでも気味の悪い事や縁起でもない事があると噂になる。そして人の噂というのはある事ない事でたらしめな尾鰭^{おひれ}が付いて流布^{るふ}してゆくものだ。だからうちの学校にもさやかの噂も全部作り話だという生徒も少なくない。

だが、俺は知っている。

……さやかは、作り話ではない。

早川さやかは実在していた。

玄関のドアの開く音が聴こえた。

俺は身を起して部屋を出て、階段の上から玄関を覗く。重たそうな革靴の音、この家の玄関を潜^{くぐ}るのは俺以外に一人しかいない。靴を脱ぎ、気だるそうに背広を肩に掛けた男は、ただいま、と言って台所を覗き込んだ。

「お、良い匂いだな。今日はシチューか？」
親父だ。

俺は階段を下りて親父を迎える。

「正解、ビーフシチューだよ」

お帰り。俺がそう言うのと親父は刑事の顔から父親の顔へと変わった。作り置きして鍋に入れてあるシチューを火に掛け、食卓に二人分配膳する。父子二人暮らしの女っ気のない家だけあって食卓も殺風景なものだ。以前、健也の家に遊びに行った時、食卓の真ん中に造花が飾ってあって驚かされたものだ。

親父は冷蔵庫から缶ビールを探しながら言う。

「母さんの分はどうしたんだ？」

「ああ、さつき線香立てた時に供えたよ。昨日祖母ちゃんばあが柿くれたろ、沢山あるし後で俺達もちよつと食おうか」

「そうだな」

ぷしゅ、と小気味の良い音を立てて親父は缶ビールを開けた。そして二人だけの一家団欒だんらんが始まる。

「なあ、最近学校はどうだ？」

親父はいつもこの質問をする。どうだ、とはまた何ともアバウトな尋ね方だが無骨で不器用な親父は上手く具体的に聞けないのだろう。

「まあ、普通だよ」

「そうか」

普通……。俺も親父に負けないぐらいのアバウトな答えを口にするが、親父もそれに納得したように頷く。俺達親子の会話は大概こうして始まる、謂わばこのやり取りは挨拶のようなものだ。

勉強の話、友達の話。俺は学校でのとりとめのない話をしながら食事を口に運ぶ。親父もそれに頷きながら時々意見も口にする。こうして進められる俺達親子の夕食、俺はこの時間が一日の内が一番安らぐ。

食事が終わると流しに食器を浸けて、そのまま食卓で親父と話を続けるのが習慣になってきている。先に洗い物を済ませてしまおうと俺が洗い場に立つと、俺が座っていた席に缶ビールが一本置かれた。

「たまにはお前も付き合え」

そう言った親父は二本目のビールに手を掛けている。

「おいおい、俺は高校生だぞ。警察が言う台詞ボリセリフじゃないだろ」

「固い事言うな。俺は少年課じゃねえし、家に帰ったら刑事である前に、お前の親父なんだよ」

未成年、それも自分の息子に飲酒を勧めるなど、警察官どころか親としても有り得ない台詞だ。そう言いたい所だったが、お言葉に甘えて一本頂く事にした。缶を開けて一口飲んでみる。

苦くて不味い……。

「美味いか？」

「全然！」

俺がそう答えると親父は愉快そうに笑った。

「幾ら生意気になっても、やっぱ秀一もまだまだ子供だな」

「くそ、絶対全部飲んでやる！」

「ははは、無理して後でゲロ吐くなよ」

酒も進み親父はどんな饒舌になってくる。

普段は堅苦しい刑事の顔をしている親父だが、こうなると飲み屋に良く居そうな気さくなおっさんだ。どちらかと言うと俺はこの親父の方が人間臭くて好きだ。酒の入っていない親父は頼り甲斐はあるが厳格過ぎて近寄り難く思う部分がある。

……ちよっと、聞いてみるか。

「なあ、親父。昨日うちの生徒が例の百階段から落ちたらしいんだけどさ、それってどんな状況だったの？」

「何だ、あの事故の子、お前の友達だったのか？」

「そうなんだよ、仲良かったんだ」

嘘だ。

本当は名前どころか顔すら見た事もない子だ。しかし友達と言っておくと色々情報を聞き出し易い。

「あの件はうちの管轄だけど俺の担当じゃないから詳しい事は分からないけど、ありゃ事故だな。足を滑らせて落ちたみたいだ。事件性は全くない」

親父はそう言って美味そうにぐびぐびと缶ビールを飲む。手元はまだまだ残っている自分のビールを見て俺は顔を顰めた。さっきは大人ぶって啖呵を切ったが正直言ってこんなに苦くて不味い飲み物を美味そうに飲む大人の気が知れない。きっとビールの味には生涯親しめないだろう。

「そうなんだ……それなら良いんだけどね。俺、もしかしたら誰かに突き落とされたりしたんじゃないかって思ってたさ」

俺も、もう一口ビールを口に含む。やっぱり不味い。

序でにその子の名前も聞いておきたかったが、尋ねると友達と言った事に矛盾が生じるのでそれ以上質問する事は出来なかった。

「考え過ぎだ。お前らの学校でまだあの階段が心霊スポットみたいになってるのか？」

「まあね」

「事故って言ってもあれだけ続けば無理もないかもな……やっぱりあの早川さやかが由来してんのか？」

俺は小さく頷いた。

十五年前のさやかの事件。それは親父が刑事になって初めて担当した事件だった。都市伝説として語り続けられる『さやか』は確かに実在したのだ。

「噂じゃ、早川さやかは百階段から突き落とされて死んだって話なんだけど、実際はどうだったの？」

「あれも事故として片付けられた。誰かに突き落とされたって言う証拠も何もなかったんだ。あの時はお前もやっと歩けるようになってたぐらいの頃だったよな、思えば古い話だよなあ」

その事故について今まで親父に詳しく聞いた事は無かったが、この機会に色々聞いてみようと思った。

「りかこ。そんな名前の子って本当にいたの？」

誰だっけそれ、と首を傾げる親父。さやかの親友だったって話の女の子さ、と俺は補足した。

「何しろ十五年も前の話だから友達の名前までは正確には覚えてな

いな。でも俺が現場に駆け付けた時には早川さやかの友達らしき女の子が一人いたな」

間違いない。それが、りかこだ。

「その子って、何か言ってた？」

「目の前で友達が死んだんだ。全く、事情聞くのにも大分苦労したよ。でもな、ぽろぽろ泣きながら茫然としててまともに話も出来ない状態だったんだけど、うわ言みたいに何か繰り返してたな」

何て言ってたの、と俺が聞くと親父は顔を顰めながらも答えてくれた。

「さやかは……殺されたんです、ってな」

不吉な言葉に反応した俺の耳がぴくりと動いた。親父は続ける。

「殺されたって事は突き落とされたって事だろ。だからその後も何度か事情聞いたんだけど言ってる事も支離滅裂で、早川さやかが突き落とされたって証拠も何も無かった。だからその件は事故扱いになったんだよ。その数カ月後に同じ場所でまた転落事故が起きたから流石に気味が悪かったけどな、確かその時はどっかの社長令嬢だったか」

矢張りそうだ。

さやかの都市伝説は事実に基づいて作られている。

※

十月三日。

「お前、好きな人とかいるの？」

「はあ、朝っぱらから告白？　ちょっとはムードってもんを考えたらどう？」

優美はそう一蹴した。

確かに彼女の言う通り、電車を下りて駅前で出会って朝一番挨拶代りに聞く事ではなかった。幸い周りにうちの学校の生徒はおらず、妙な誤解を招く事は無かったようだ。

一本早い電車に乗って来ている為、通学路にも生徒の姿は疎^{まば}らだ。その朝は改札を出ると優美の姿があった。近くに住んでいる彼女は家から歩いて学校へ行く途中に、駅前を通る。駅と言っても郊外の小さな町なので駅前にはコンビニもファーストフード店もなく、寂れているとまでは言わないが静かなものだ。

今日も抜けるような秋晴れ、空はどこまでも青く澄^{よじ}んでいる。

澄んだ空とは対照的に優美は俺に澱^{よじ}んだ表情を向けている。俺の聞き方が拙^{まず}かった所為か、彼女は気を悪くしてしまったようだ。

「いや、別に告白って訳じゃないんだ……。ただ、お前にも好きな人っているのかなって思ってた」

「仮にいたとして何で北野君に言わなきゃいけないのかなあ」

怪訝^{けげん}な顔をする優美。

「北野君、何か企^くんでる？」

彼女は耳に髪を掛けて俺の目を覗き込む。

「企^くんでるって……何を」

「うーん、北野君が私の事を好きだって事はまずなさそうだしね」

「何でそんな事、言い切れるんだよ」

「直感^{ちくかん}ってやつだよ。そうだなあ……例えば、私と誰かを無理矢理くっつけようとか考えてたりしない？」

鋭^{あた}い。中^{あた}らずとも遠^{とほ}からず。

優美はちらりと猜疑^{さぎ}の瞳で俺をじっと見た。怒っているという訳ではないが不審には思われているようだ。俺は逃げるように顔を背ける。

ある程度は正直に言うべきか。

「半分正解、無理矢理って訳じゃないよ。優美って彼氏とか作んないのか？」

「あれえ、何で北野君は私に彼氏いない事知ってんのかな。なるほど、もうある程度は下調べしてあるって事ね」

しまった。ここは「彼氏とかいるのか？」と聞くべきだったか。わざとらしく意地悪^{いぢあく}っぽく悪戯^{ただ}っぽく質^たしてくる優美はやけにや

けている。上げ足を取って勝ち誇ったような満悦の表情を浮かべる彼女は妙に艶^{いろ}っぽく見えるから困る。

確かに優美は形の良い切れ長の目をしていて、鼻筋もすつと通っている。俺から見てもかなり綺麗な子の部類に入と思う。気の強い性格は俺の好みではないが若干被虐嗜好^{マゾヒスト}者のきらいがある健也なら惚れてしまうだろう。

「どうせ明歩にでも聞いたんでしょ。大体予想付くよ」

矢張り鋭い。

「ご明答。昨日の帰り道、小森に聞いたよ。放課後も男子と遊んだりしてる様子もないから、彼氏はいないんじゃないかってさ」

「まったく、お喋り明歩め……。そうだなあ。今は彼氏いないけど、もし良い人が現れたらいいなと思うよ」

優美は鞆を肩に掛けて少し照れ臭そうに口元を綻ばせる。

「お前って、どんな奴がタイプなんだ？」

「うーん、性格悪くなかったら別に顔がカッコ良くなかったって構わないんだ。強いて言うなら、私がピンチの時に助けてくれるような強くて優しい人かな。正義のヒーローみたいな」

間島健也は見事に該当する。

彼は二枚目とまでは言えないが、決して容姿^{ルックス}は悪い方ではない。何より健也は柔道有段者だ。相手も格闘技経験者でもない限り大抵の人間は投げ飛ばせるだろう。だから強さには問題ない。

まあこの優美がピンチになる場面などいまいち想像出来ないが……。

それなら良い奴がいるんだ、と俺が言おうとすると優美の方が先に口を開いた。

「でも、今は彼氏いない……」

突然、何かを思い出したかのように急に優美の調子^{トーン}が変わった。妙に声が沈んでいるようだ。

「ああ、そうなのか……」

「うん。ちよっと事情があってね。今、家が忙しいんだよ。だから

今は彼氏がどうか考えてないんだよね」

そう言って優美は気不味そうに笑った。

……家が忙しい、か。

「そっか……そうなんだ」

以前優美自身が言っていた家族構成によると彼女の母は専業主婦、父は医者をしているらしい。俺の家のような父子家庭と比べて生活には十分な余裕があると思っていたのだが、大変な事もあるようだ。少し気にはなったが人の家庭事情に首を突っ込むのも気が引けるのでそれ以上は何も聞かなかった。

やがて紫陽花坂が近付くと、うちの制服を着た生徒の姿も増えてきた。徒歩、自転車の生徒は様々な方角から登校してくる。はるか上空から見ると、きつと砂糖菓子に集まる蟻のように見えるのだろう。

俺達は百階段に差し掛かった。

見上げると相変わらず途方もない程の階段が続いている、しかも一段一段が大きい。毎朝これを登るだけでも良い運動になる。

百階段を見上げて、俺はある事を思い出した

「あ、そうだ。ちょっと気になる事があるんだけど、昨日小森の様子どこか怪訝おかしくなかったか」

小森の名前を出すと優美の顔にも変化が生じた。

「そうなんだよ。明歩ったら昨日一緒に帰ってる時にも、いきなり『用事がある』とか言い出して一人でどっか行っちゃったんだ。百階段下りずに、そのまま紫陽花坂を下って行ったから駅とは全く別の方向だと思うよ。どこ行ったんだらうね」

おおよそ、その三十分後に小森は俺達と偶然会った、この百階段の上で。

「お前はその後、真っ直ぐ家に帰ったのか？」

まるで保護者のような聞き方になってしまったが、一応聞いておこう。もし、二枚目の男子とデートしてました、などといった答え

が返ってきたら……。そうなれば健也にはそれとなく諦めて貰う方向へ持っていこう。

案の定、優美は不愉快そうに眉を寄せた。

「そのまま家に帰ったよ、何でそんな事いちいち報告しなきゃいけないの。それより北野君が明歩の様子が変だったなんて何で知ってるの？」

もしかして明歩の事ストーキングしてるの、と優美は意地悪く冗談を言う。

「馬鹿、さっき昨日の帰り道に小森と会ったって言っただろ。百階段の上でばったり小森に会ったんだよ。何かその時も妙に落ち込んでたって言うか、何て言うか……」

……少なくとも、いつもと違った。

「そうなんだ。実は私も気になって昨日の夜、明歩に電話してみたんだ」

「何か言ってた？」

「それが出なかったんだよ。しかも気になる感じなんだ」

「気になるって？」

「一回目掛けた時には普通にコール音が鳴ったの。五分ぐらい経ってからもう一回電話してみたら今度は、電源が入ってなかったんだよ」

どういう事だろうか。

一度目の電話を掛けた後、直ぐに電池が切れたか電波が届かない状況に陥ったのか。それとも一度目の電話を無視して、自分で電源を切ったのか。後者の場合だと明らかに妙な行動だ。

「その後メールも送っておいたんだけど、返信ないの。どうしたんだろ、私、明歩に何か悪い事でもしたのかなあ……」

百階段を上りながら優美は心配そうに携帯電話の発信履歴を眺めている。階段を上り切った先には今日も瓶に黄色い花が供えられていた。

おはよう！

朝のホームルーム、美那子先生みなこの澁漑はつらつとした挨拶が教室に響く。

俺達の担任である美那子先生は若くて活動的アクティブで男女共に人気があり、勉強や進路の事以外にも個人的な相談プライベートも持ち掛ける生徒も少なくない。他の先生からは「長谷川先生と呼びなさい」と言われるが、俺達は親しみと姉のような尊敬の意を込めて「美那子先生」と呼んでいる。

「来週十二日に体育大会があるのアンタ達も知ってるよね。勿論優勝は我ら二年一組が頂くんだから気合入れてくよ！」

美奈子先生の勢いとは反対に、大半の生徒はだるそうにしている。流石に高校生にもなると体育大会という行事にはあまり乗り気にはならない。

しかし美奈子先生は気にする事なく自分のペースを変えない。

「今から各々の出場競技決めるよ、必ず一人一回は出る事！」
すると優美が発言する。

「先生、でもホームルームもう終わっちゃうよ」

美那子先生はにこりと微笑んで優美を諭した。

「いいのいいの、どうせ一限は日本史で担当は私じゃん。授業は予定ユラムよりちよっと進んでるんだから一回ぐらい潰しても問題ないのよ」
教室のあちこちから嬉しいざわめきが起こる。言うまでもなく授業が潰れるという一言に対する反応だ。皆そんなに授業が嫌なら学校など辞めてしまえば良いのに、とも思うが正直言って俺も授業が無くなるのは嬉しい。

他校の友人からは、日本史の先生が女なんて珍しい、と良く言われるが確かにそうらしい。そう言えば中学の時も社会の先生は男だった。

「クラス対抗リレーのアンカーは取り敢えず北野に決定だからね」

「え、何で？」

「だってアンタそれなりに足も速いし、緊張感プレッシャーにも強いじゃん。足が速くても間島テンバなんかにはやらせた日にゃ動揺テンパってバトン落とすのが

目に見えてるよ」

美那子先生はそう言って健也の方をちらりと見た。すると健也はまるで他人事のようにへらへらと無責任に笑っている。

北野がアンカーつてのに異議がある人いるかな、と美那子先生は教室を見渡す。しかし誰も手を挙げない、それどころか皆俺の方を向いてにやけているのだ。満場一致ということだろう。こうして俺はクラス対抗リレーのアンカーという重役を背負ってしまったのだった。

「あと、おんぶりレーの事なんだけれどね」

美那子先生はおんぶりレーの事についての話題に変えた。その刹那、辺りは静まり返り男子達の目の色が変わった。

おんぶりレーとはその名の通り、バトン代わりに人間を背負って走るリレーだ。まるで小学校の運動会のような競技だが、うちの高校には伝統競技であるかのように昔から残っているらしい。

大概、体重の軽い女子がバトン役になる為、男子の走者志望が殺到する。勿論それは女子の体に触る事の出来る絶好の機会だからだ。

このような煩惱渦巻く競技が何故残っているのかは些ちやか疑問だ。

にやにやと鼻の下を伸ばす男子達に案の定、優美は汚い物でも見るような目で冷めた軽蔑の視線を送っている。

そんな様子を美那子先生は愉しげに見渡している。全く何という教師だ。

「今年のバトン役はね……」

美那子先生が口を開くと男子一同は真剣に先生の言葉に耳を傾ける。いよいよ今年のジュリエットが発表されるのだ。失礼な話だが現実として、バトン役の女子によって出場志望者の倍率オッズが大きく変化する。

「やっぱり小柄な小森が適役でしょ。小森、良いかな……あれ？」

皆一斉に小森の席に目を向ける。

しかし、そこに小森の姿は無かった。

「あれえ。小森の奴、欠席か……風邪かな？ 体育大会も文化祭も

近いんだからみんなも体には気を付けるんだぞー」

美那子先生の気の抜けたような声がすると、優美は小森の席を一瞥し、心配そうな顔をした。

「そうだなあ、本人がいない所で決めるのも悪いし……」

先生は別の生徒を指名する。

「今年はじゃあ日下部やってくれない？」

おお、という感嘆と共に総ての男子が今度は日下部と呼ばれた女子の方を見る。

日下部綾奈^{くさかべ あやな}。彼女は無表情な顔を僅かに歪めた。

「わ、私ですか……」

男子達がざわめくのも仕方ない。

清楚で淑やかな印象の黒髪ときめ（、）の細かい白い肌。芸能人顔負けの容姿を持つ日下部は非の打ち所のない美少女だ。しかし淡泊で無愛想で素気ない。そんな彼女が時々笑った顔が堪らなく可愛いと男子からは人気だ。

日下部は冷めた瞳で辺りを見回して味気ない溜息を洩らした。

頼むよ日下部、と美那子先生が頼む。他の男子も無言で、頼むよ、という空気を発している。

「分かりましたよ……やりますよ」

そう言っただけ彼女が照れ臭そうに少しだけ微笑んだ。

昼休み。

午前中の授業が終わっても小森が登校してくる事は無かった。昼休み、食堂へは階段を飛び降りる勢いで走って行かないとおどましい程の混雑に巻き込まれる。四限の古典の授業が少し延長してしまい出遅れた俺は混雑を避ける為、窓から町を見下ろしながら時間を潰していた。

教室に残った生徒は疎らだ。

健也は怒涛の勢いで食堂に向かって駆け出し、弁当派の優美も他の女子と一緒に中庭に行ってしまった。

朝食を菓子パン一つで済ませてしまったので流石に腹が減っている。都合の良い話だが一応健也の携帯電話にメールを送っておいた。――カツサンドとパックのカフェオレ買って来てくれない？

昼時の食堂はまさに戦場と化す。そんな激戦地で健也が俺のメールに気付くかどうかは分からないし、そもそも出遅れた健也が人気メニューのカツサンドを買えるかどうかもう危うい所だ。

……一人になるとどうしても昨日の事が頭に浮かぶ。

百階段から落ちた女子生徒。

さやかの呪い。

そして、小森の異変。

頭の中でそれらがぐるぐると渦を巻いて溢れ出す。別に気になつて他の事が手に付かないという訳でもないが、全く気にならないと言うと嘘になる。

特に小森は心配だ。

俺とは特別仲が良かったという事はないが、親友の優美の電話にも出ないというのはどういう事だろう。何より俺が最後に小森を見たのは件くだんの百階段、それ以降彼女とは誰も連絡が取れていないのだ。まさか、小森もさやかの呪いで……。

「え、それ本当かよ」

「マジだって！」

朦朧ぼんやりと外を眺めていると教室に残っていた男子生徒二人の会話が聴こえて来た。盗み聞きするつもりはなかったが静かな教室では嫌でも耳に入ってくる。

驚いているのは野球部の橋本の声、もう一方は情報通の中西の声だ。「へえ、真面目そうな顔してんのに意外だな。久保田がそんな奴だとは思わなかったよ、見間違えたんじゃないかねえの？」

「間違いないって。だって俺見たもん！」

優美の話らしい。

すると信じられないような言葉が交わされた。

「あの久保田が援交とはね……」

「馬鹿、声がデカイって！ 秀一に聴こえるだろ……」

「あつ、ヤベ！」

……援交？

……優美が？

俺が噂話をしていた二人の方を振り返ると、彼らは慌てて顔を伏せた。このクラスでは俺と優美が付き合っていると勘違いしている者も多い。そう言えばクラスで彼女の事を、優美、と気安く呼ぶ男子は俺だけだったかもしれない。多分その所為だろう。

俺は中西に尋ねる。

「ちよつと今の話、どういう事だよ」

中西は、何でもないって、と誤魔化そうとしている。先ず誤解を解く所から始めよう。

「あのな、俺と優美は彼氏彼女って関係じゃないぞ」

そうなの？ と橋本は素っ頓狂な声を上げた。

「そうだよ、皆勘違いしてるみたいなんだけどな」

「でも秀一ってよく久保田と一緒に登校してるじゃん。お前ら二人で朝帰りって噂まであるんだぜ」

にやにやしながら中西はいやらしい視線を俺に向けた。

「馬鹿野郎！ あれは偶々駅前で良く会うだけだよ」

何故かがっかりしたような二人。橋本は伸びかけの坊主頭を撫でながら残念そうな顔をしてパックの牛乳を啜る。

「なんだよ、あの高飛車姫の久保田をモノにしたってスゲエなって思ってたのに」

「だから勘違いだって！」

勉強もスポーツも出来ておまけに気も強い優美は男子からは高嶺の花のような存在になっているようだ。彼女は我が旭ヶ丘高校の美人五本指にも入る、と以前中西が言っていたような気がする。

因みに勿論あの日下部綾奈もランキンしている。美人五本指の内二人が同じクラスにいるのだ。とっつき難い日下部に比べて性格の明るい優美は上級生を含め、今まで多数の男子に交際を申し込まれ

ていた。しかし、その総てが悉く撃沈している。

そんな彼女の事を「第二のさやか」と呼ぶ声もあるらしい。しかし、お淑やかな噂のさやかとは随分と印象が違う。どちらかというと日下部の方がさやかのイメージに近いような気がするのだが。そんな事より。

「優美が、援交？」

「あ、やっぱり聴こえてたんだ」

と、中西は舌を出した。

「それって確かな話なのかよ」

「ああ、俺見たんだ。ひと駅先の繁華街のショッピングセンターあるだろ。あの近くラブホとか多いじゃん。昨日の夜、そこらへんで久保田が変なオッサンの車に乗るとこ見ちゃったんだよ」

おかしい、今朝の話と齟齬がある。優美は昨日、真っ直ぐ家に帰ったと言っていた。

「それってホントに優美だったか？」

「確かに久保田だったぞ、それにちゃんとウチの制服着てたもん。時間は大体七時ぐらいだったかな」

優美は俺に、嘘を吐いたのか。

「そうか……。それよりお前はそんな所で何してたんだよ」

「俺はCD買いに行ってただけだよ。ほら、昨日は天野瀬里奈の新しいアルバムの発売日だったろ。俺はそんな如何わしいラブホ街には用なんて無いからな！」

秀一ってホントに刑事みたいな質問するよな、と橋本が横から口を挟む。

それは自分でも分かっている悪い癖なのだ。親父譲りなのか、どうでも良さそうな事でも気になれば質問してしまう。

「それよりな、この事……健也には黙っててくれよ」

何でだよ、と中西は首を傾げた。

「いや、実はだな……」

俺は、健也が優美に想いを寄せている事を二人に説明した。

「マジか、健也のヤツもまた難易度高い女子に惚れたんだな」

ストローを噛みながら橋本は苦笑している。彼の言う通り優美は今まで誰の申し出も了承した事が無い、謂わば不落の城だ。

「なるほど、そりゃ健也には言わない方が良さそうだ。もし知っちゃったら八つ当たりで俺達までブン投げられるかもしれないぞ。アイツ柔道やってるし、背え低いくせにケンカだけはメチャメチャ強いからな」

橋本はそう言うてうんうんと頷いている。

そう、やんちゃそうな見た目の割に普段は温厚な健也だが、見境がなくなるとかなり危険だ。

以前、食堂で上級生の不良グループの一人と肩がぶつかった事がある。文句をつけてきた上級生を健也は大外刈りで床に叩きつけて失神させてしまったのだ。更に、後日報復にやってきた上級生三人も見事に返り打ち。その代償として彼は一週間の自宅謹慎処分を受けた。

喧嘩を売られた程度でそこまでやってしまうのだ。もし優美の援交疑惑を知ってしまうと何をしでかすか分からない。もしかしたら目に付く中年男性を手当たり次第に襲撃するかもしれない。

「それより秀一、知ってるか？」

と、橋本が口を開いた。

「何をだよ」

「一昨日、百階段から落ちたヤツだよ」

そう言えば救急車の音を聞いて真っ先に駆けつけたのは彼ら野球部だったらしい。健也も橋本からこの話を聞いたと言っていた。

橋本は続ける。

「その子、今、旭ヶ丘総合病院に入院してるらしいんだ。美那子先生の話だと今日やっと意識を取り戻したんだってよ」

「そんなに重症だったのか」

「ああ、骨折とかも何か所もあって酷かったらしいぜ、しかも未だ精神的に不安定な状態なんだってよ。結局その子って誰なんだっけ

？」

すると情報通の中西が人差し指を立てる。

「二年四組、真中^{まなか}いずみ……」

奇しくもさやかと同じ二年四組だ、と彼は付け足した。

「そうそう、確か特例で十月から編入した子だっけ」

橋本が思い出したように手を敲^{たた}くと、騒がしい音を立てて教室の扉が開いた。俺達三人は同時にその方を見た。

「おい、秀一！」

汗だくになった健也だ。

教室にいた俺達は目を見合わせて、優美の事は秘密、という合図をする。すると健也はつかつかと俺達の方に歩み寄ってくる。

「ほら。約束のブツだ」

健也は俺にカツサンドとカフェオレを差し出した。

「サンキュー、よく二つとも買えたな」

「当り前だ、俺を甘く見るなって」

と、言って自分のカツサンドを齧る健也。

良く見るとパン生地^{パン生地}に健也の指の型がくつきりと付いていた。これはかなりの争奪戦^{争奪戦}があったと予想できる。

「ほら、四百円だ」

健也は手を差し伸べる。

「はあ？ カツサンドとカフェオレ合わせて三百五十円だろ」

「五十円は俺へのチップだよ。いきなりメールよこしやがって、秀一のオーダー苦勞したんだぜ」

確かに昼休みの食堂の混雑具合を考えると、急に言っ買って来てくれるとは大したものだ。俺は感謝の意味も含めて四百円を彼に払った。

健也も自然に俺達の輪に入る。

「ところでよ秀一、俺の事、久保田にそれとなく聞いてくれたか？」

「あ、ああ。やっぱり彼氏はいないみたいだ。今朝、駅で会った時に聞いてみたよ。お前も頑張ればいけるんじゃないかな」

俺達三人の顔がぴくりと引き攣る。すると健也は中西にも意見を求め出した。こいつは自分の想いを隠すつもりは全くないらしい。まあ健也らしいと言えば健也らしい。

「なあ中西。久保田って好きな人とかいるのかな。お前の情報網に何か引っ掛かってないのかよ」

「いや、俺は特に聞いてないな……」

橋本に助け船を求めて視線を送る中西。しかし橋本は逃げるように顔を伏せた。何か嫌な流れになってきたので俺は話を変える。

「健也。今日の放課後、予定空いてるか？」

「ん？ あ、今日は部活行かなきゃダメなんだ。明日の放課後なら顧問も来ないし練習抜けられるけど、どうした？」

合コンか？ と嘯く健也。

「一昨日、百階段から落ちた女子の正体が分かったんだ」

すると健也の表情が引き締まった。中西と橋本もそんな健也を見てほっとしたような顔をした。そして俺は静かに続ける。

「名前は真中いずみ、二年四組の転校生だ」

四組か、とぼつりと呟く健也。彼も中西と同じく「二年四組」にさやかとの符合を感じているのかもしれない。難しい顔をした健也はカツサンドを一気に頬張った。

俺もカフェオレを一口啜ってから言う。

「旭ヶ丘総合病院に入院してるらしい。明日にでも行ってみるか？」
ももごとカツサンドを咀嚼しながら健也は小さく頷いた。彼は派手な見た目とは裏腹に、矢張りさやかの都市伝説の事にはかなり神経質になっているようだ。

そして俺達は翌日、更なる不気味な事実^{事実}に足を突っ込む事になる。

※

十月四日。

沢山の人がいるのに、やけに静謐^{せいひつ}。

病院という場所はどうも好きになれない。周りを見回すとどこもかしこも、白、白、白で埋め尽くされている。白は純潔、清潔、潔白を連想させる。しかしその色に静謐のニュアンスが加わると、不健康な印象になる。

隣を歩く健也も同じような事を考えているのか、妙に落ち着かない様子だ。

「で、どこの病室だっけ」

「ええと、中西は五階の個室とだけ言ってたけど、五階のどの病室かは分からないな。名前も分かってるんだし受付で尋けば分かるだろう」

ふうん、と相槌を打った健也は顔を顰めながら鼻をひくつかせている。ここはまだロビーだというのに消毒液の匂いが充満しているのだ。

病院など体調を崩したり怪我をした時にしか来ないので、この匂いを嗅ぐだけで反射的に自分の体も調子が悪くなってしまったような気がする。どうも健康体の時に来るような場所ではないらしい。

「俺達その子の知り合いでもないのに、会わせて貰えんのか？」

「学校の友達って言えば大丈夫だろ。旭ヶ丘高の制服も着て来たんだから」

いつもはだらしく着崩している健也も今はシャツのボタンをきちんと上まで留めている。病院という清潔な空間の雰囲気飲み込まれて、態度も改まってしまっているのだろう。心なしかいつもより声の調子も抑え気味だ。

この病院は一階から四階が外来診察、五階から八階が入院患者の病室になっている。東西二棟からなる旭ヶ丘総合病院はこの地域では最も大きく、二駅以上離れている地域から通院する人もいる。

白衣の看護婦の間をすると通り抜け、エレベーターホールまでやってきた。三機のエレベーターが備え付けられたホールには華やかな胡蝶蘭が飾られている。

その花卉も真っ白だ。

五階フロアは小児病室も多いらしく、張り紙なども愛らしい動物のデザインの物が多くて病院というより保育園や小学校のような印象を受けた。

しかし、それでも消毒液の匂いだけは掻き消えない。

五階の一番隅の病室、その個室に掛かったドアプレートには「真中いずみ」と記されている。この扉の向こうに例の事故の生き証人がいる。橋本が言うには、昨日意識を取り戻した所で未だまともに話せる状態ではないかもしれない、との事だった。

真中いずみの病室は直ぐに分かった。

五階のナースステーションで尋ねると快く教えてくれた。制服を着て来たお陰もあって特に不審がられる様子もなかった。容体を聞いてみると矢張り怪我の具合はかなり重症らしく、意識は回復したものの事故の精神的ショックからか鬱^{ふさ}ぎ込んでほとんど口を聞かない状態らしい。

元氣付けてやってよ。

眼鏡を掛けたベテランぽい看護婦は俺達にそう言った。「もしかしてあなた達のどっちか、真中さんの彼氏かい？」そんな事も冗談混じりに言っていた。適当に笑って誤魔化すと、「真中さんも大人しそうな顔していてボーイフレンドがいるなんてね、全く近頃の子はちゃっかりしてるわ」と看護婦は一人で納得したように満足げに深く頷いていた。

真中いずみは、大人しそうな顔、をしているらしい。

俺も健也も真中いずみとは恋人でもなければ友達でもない、況してや俺達は彼女の顔すら知らないのだ。

閉ざされた重々しい扉。個室の扉というのは何故こんなにも頑丈にしなければいけないのだろう、まるで防音扉だ。外から誰かが侵入してくるのを拒んでいるのか、それとも中に居る者を閉じ込めているのか。

俺は冷たい金属の取っ手に手を掛けた。

「ちょっと待った！」

急に健也が俺を制止する。

「何だよ」

「いやいや、いきなり入って何を話すんだよ？」

「十月一日、真中いずみが百階段から落ちた時の状況だよ。学校で俺達がああでもないこうでもないって噂してるだけより、直接本人に聞いた方がはつきりとした真実に近付くだろう」

すると健也が口元を緩める。

「また刑事ごっこかよ。そんなに張り切っても、誰かに突き落とされた、なんて事は無いんだろ」

「まあ親父が言ってただけけど、現場の状況から警察では事故として処理されたんだ。ほら、あの花が供えられてた瓶で足を滑らせたってな」

「警察が事故って言うてるんだったら事故なんじゃねえのか」

「でも警察はあくまでも現場の状況からしか判断していない。昨日意識を取り戻した真中いずみ本人からは事情を聞いていないんだよ」

「もし真中いずみが、階段で何者かに足を引っ張られた、とかホラーな事言い出したらどうするんだ？」

そう言って健也は苦笑いを浮かべた。

「さあな、とにかく幽霊なんてこの世には存在しないんだ。例えばそんな事を言ったとしても何らかの物理的な要因があるに決まってるんだよ」

健也にそう言いながらも俺は自分自身にも言い聞かせていた。

本人に聞いてみればはつきりするよ、と俺は重たいドアを横に引いた。清潔さを不健康さが入り混じった香りが鼻を衝く。締め切られた薄暗い病室のカーテンが僅かな空気の流れの変化にゆらりと揺れた。

凝った空気。

真っ白なベッドの上には、そのベッドよりも肌の白い少女が横た

わっている。四肢をギブスで固定され、至る所を包帯に巻かれている。今、彼女の体で無事な個所などあるのだろうか。まるで生ける屍だ。しかばね

これが、真中いずみ。

彼女の色の無い瞳が、すうと俺の方に向けられる。その冷たい目に捕らえられた途端、俺の背中を冷たいものが走り抜けた。

浮いた鎖骨、色の悪い薄い口唇、温もりを感じさせない白い肌、そして生命を感じさせない色の無い瞳。

……真中いずみは死に片足を踏み入れている。

そんな印象を俺は受けた。

「誰ですか？」

掠れた弱々しい声。

それが目の前にいる彼女が発したと理解するのに数秒間かった。ああ、この子はまだ生きていたのだ。

「あ、ああ。俺達は君と同じ旭ヶ丘高校の生徒だよ。二年一組、北野秀一」

「俺も二年一組、間島健也。よ、よろしく。真中さん、だな？」

真中いずみは健也の方に目を遣って小さく礼をした。どうやら首だけは少しなら動くようだ。

「真中いずみです」

彼女は今にも消え入りそうな儂げな声で名乗った。

「急に訪ねて来てごめんな。ちよつと真中さんに聞きたい事があったんだよ、直ぐに帰るからちよつとだけ良いかな」

俺は出来るだけ低姿勢で彼女に尋ねる。すると彼女はしばらく黙ったまま天井を見詰めていた後、深く長い溜息を吐いた。その溜息は、幽かすかに震えていた。

そして真中いずみは小さく呟く。

「あの日の……話ですか？」

真中いずみは視線を宙に泳がせて顔を顰しかめた。

「正直、思い出したくないんですが……どうしても話さなくちゃ駄目ですか」

「いや、無理にとは言わないよ。そんな大怪我をしたんだ思い出したくなくても無理はない。やっぱり、怖かったんだね」

はい、と彼女は答えた。

目を閉じるだけで百階段を落ちた時の事が脳裡に蘇ると言う。どうやら彼女の中では深い心的外傷^{トラウマ}となっているようだ。目瞬き^{まばた}する度に彼女はあの百階段を落ちる場面を何度も追体験しているらしい。

「何度も、何度も……。そして、あの冷たい視線も」

……冷たい視線？

誰の視線だ。

事故の時、彼女は誰かと一緒にいたのか。それを尋ねようとした時、健也が俺の肘をぽんと敲いた。

「秀一、あれ」

彼の視線の先には一輪の花が活けられてあった。サイドテーブルの上に飾られたピンク色の花。「早く元気になってね☆」と書かれたメッセージカードも添えられている。俺達以外にも誰かが見舞いに來たのだろう。

「ああ。そのテーブルの上に飾ってあるピンク色の花、綺麗でしょ」真中いずみはそう言った。

これはガーベラという花で、幼馴染が持って来てくれた物だそう。彼女はあのガーベラの話をするときだけ僅かに表情を緩めていた。しかしそんな柔らかな表情も俺には儚げで虚しいものにしか映らない。

笑うと、顔を顰めている時よりも何だか可哀想に思えた。

「ところで何で私の名前が判ったんですか？」

彼女は俺達に質問する。その表情には幼馴染の話をしていた時の、儚げな笑顔の残滓^{ざんし}がまだあった。

健也は答える。

「ウチのクラスのヤツに聞いたんだよ」

すると彼女の表情は少し曇った。

「ああ、学校ではもう噂になってるんですね」

「噂って言うか、まあ別にそれ程大きな事にはなってないけどな」
いや、本当は十分噂になっている。だから俺達は実際にどうなったのかを聞く為に病院まで押しかけたのだ。

「転校してきたばかりの私は知らなかったんですけど、旭ヶ丘高校ではあの場所の話は本当に有名なんですね、悪い意味で」

あの場所とは、言うまでもなく紫陽花坂と百階段の事だ。彼女は続ける。

「私がこんなことになっちゃったのも、きっとみんな「さやか」の呪いだとか言ってるんでしょ」

「さやかを知ってるのか！」

彼女はこくりと頷く。転校してきたばかりの彼女が何故さやかの都市伝説を知っているのだろうか。誰かが彼女に教えたのか。

……いつの間に？

真中いずみは少し逡巡してから、今回その身に降りかかった災難を少しでも語ってくれと言った。

「ありがたいな、ちょっとだけ聞いたら俺達も直ぐ帰るわ。それよりこんな薄暗いところでずっと寝てたらカビ生えちまうぞ」

健也が窓際に寄ってカーテンに手を掛けると、彼女は弾かれたようにそれを制止した。

「あつ、カーテンは開けないで下さい」

今までと比べると強い口調だったので俺達も驚いた。

「ごめん。眩しいの駄目なの？」

「いや、別に眩しいのが嫌いだとか、暗い所が好きという訳ではないんですよ。寧ろ私を悪夢に引き摺り込んでくる暗闇は凄く怖いです。でもカーテンだけは絶対に開けたくないんです」

何で？ と健也は聞き返した。すると真中いずみは今までにないくらい嫌そうな顔をした。それは嫌悪を抱いていると言うより、どちらかと言うと何か恐ろしいものを思い出しているといった表情だ

った。

そして彼女は小刻みに震える口唇を開く。

「今もあの女の子に……」

「女の子？」

「新谷詩緒里しんたに しおりに、視られているような気がするんです」

……新谷詩緒里？

……誰だ。

彼女はその名を口にした途端、今にも泣き出しそうな顔になった。彼女の恐怖の対象は、さやかではなく新谷詩緒里という者のようだ。まさか真中いずみはその女に突き落とされたとでもいうのだろうか。

新谷詩緒里。

俺達と同じ旭ヶ丘高の生徒なのだろうか。健也にも確認してみたが、どうやら彼もその名に覚えが無いらしい。

真中いずみはベッドに横になったまま話して良いかと聞いてきたが、俺達は快く了承した。彼女は全身がぼろぼろになっているのだ。今は立ち上がるどころか、座る事すら出来ないだろう。それにぼろぼろなのは体だけでなく精神こころもだ。寧ろそちらの消耗の方が大きいような気がする。

「ところで今日は何日でしたっけ？」

何かを思い出したかのように彼女は日付を俺達に質した。俺は腕時計で日付を確認して伝えると、彼女は大きな溜息を吐いた。

「十月四日ですか……。そうですか。あれから三日も経っちゃってたんですね。そっか、そうなんですね」

すると彼女は目を閉じて黙り込んだ、まるで今までの辛い記憶を反芻すうしているかのように。そんな彼女を俺達が心配そうに見詰めていると、彼女は静かに目蓋を開いた。相変わらずその瞳には光が宿っていない。

……死んだ瞳だ。

……死に魅入られた瞳だ。

「やっぱり……。あの日の事、全部話します」

えっ、と俺達二人は同時に声を上げた。

「あの女の子、新谷詩緒里が私に話した「さやか」の事も、全部。あの子が話した通りに話します」

「ちよつと待てよ、思い出したいくないんだろ。無理しなくて良いって」

「いいえ、良いんです。確かに嫌な事を思い出したりもしますが、それでも良いんです。ちよつと長くなるかもしれないけど聞いて下さい」

だって……もう誰にも話せなくなるかもしれないから。

真中いずみはそう付け足した。俺はその力無い言葉を聞いて身の毛が弥立よだった。

……そうだ。

……そうだったよ。

さやかに会ったら五日以内に死ぬ、という話があったではないか。どうせ迷信だとは思うが、例の噂通りだとすると……。

真中いずみは明日、死ぬ。

サイドテーブルに置かれたガーベラが薄桃色の花卉を一枚落とした。はらり、と。

そして死神に魅入られてしまったかのように痩せた白い肌をした彼女は、まるでスピーカーのように淡々と語り始めた。

十月一日、確か午後四時半頃。

それは私が旭ヶ丘高校あさひがおかに転校した日でした。夕陽で空が真っ赤に染まり、私達の影法師も気味が悪い程に長く伸びていました。場所は知ってるんですよね、そうです、通学路の紫陽花坂の途中にある見晴らしの良い小さな公園です。

そこで新谷詩緒里は、こう話しました。

※

小一時間、真中いずみは半ばうわ言のように十月一日の出来事を語り続けた。その間、彼女は一切表情を変えず、ただ天井をじっと見ているだけだった。

その新谷詩緒里という女が彼女に取り憑いているようで気味が悪かった。

怖い。

怖い、怖い。

本当に怖いんです！

真中いずみは話し終わると突然取り乱しだした。

「落ち着け！ 大丈夫、何も起こらない。そんなのただの噂話だ。君は死んだりなんかしない」

俺は彼女の肩を抱いて、確りとその瞳を見据えた。

真中いずみの体は氷のように冷たい、彼女は生きながら死に近付いて行っているのだろうか。何より彼女の瞳は俺を見ていない。まるで俺など見えていないかのように真っ直ぐ天井を向いたまま目を見開いている。

「新谷詩緒里が私の事をじっと見ている、私が怯える様をじっと見張ってる！」

「一体何言ってるんだよ。おい、秀一。この子おかしいぞ！」

うわ言を繰り返す真中いずみ。その異常な様に健也ですらも動揺を隠せないでいる。彼の言う通り、この子はおかしい。

「私が、ちゃんと死ぬか見張ってるんです！」

額に冷たい汗を滲ませる彼女は目を白黒させて喚き散らす。まさに狂気の沙汰だ。

「ヤバいぞ。秀一、ナースコールだ！」

俺は落ち着かせる為に彼女の肩を押さえる。彼女の華奢でぼろぼろの体がぎちぎちと軋んだような気がしてひやりとした。彼女は今にも壊れてしまいそうな程に脆もろかったのだ。

「幻覚……ですかね」

「そうだよ、幻覚に決まってる」

はあはあ、と息を切らす彼女。どうやら少し落ち着いてくれたようだ。

「本当に、ずっと視られているような気がするんです、怖くて窓も開けられません。幻覚なら良いんですけどね」

真中いずみは再び淡泊な口調に戻った。

「そうだよ、きっと幻覚だ。もうどこにも居ないだろ、そんな女」

「新谷詩緒里ですか……今も、見えますよ」

一体何を言っているんだ。気持ち悪い。彼女のうわ言に付き合うのも好い加減うんざりしてきた。

どうやら相当精神にダメージを受けているらしい。

「真中さん、今日はありがとうね。俺達はもう帰るよ。早く怪我治して学校に来てくれよ」

それでもぶつぶつと何かを呟き続ける真中いずみ。お大事に、と声を掛けて踵を返そうとした時、彼女は俺に向かって言った。

「これも幻覚ですかね、あなたの後ろにいますよ」

そう言った真中いずみは空洞のような瞳を俺に向けていた。

……何なんだよ、この子。

そして真中いずみは再び天井を凝視しながら、ぶつぶつと何かを言っている。冷たい水を被せられたような寒気がした。

その時、俺の背後で物音がした。

まさか本当に、俺達の後ろに新谷詩緒里などという女が立っているとも言うのだろうか。弾かれたように振り返る。

「あ、やっぱり北野君と間島君だ」

そこには優美の姿があった。

彼女は個室の扉の所から俺達に向かって手を振った。

「久保田……」

健也は彼女の顔を見詰めてばかんとしている。まさかこんな所で優美に会えるとは思っていなかったのだろう。

こんな所で……。

「優美、お前こんな所で何してんの？」

「眼科だよ。ずっとコンタクト付けっ放しにしてたら目が真っ赤になっちゃってね。一階の薬局で目薬貰って帰ろうかと思ったたら君達の姿見かけたから付いてきたって訳よ」

「そうなんだ。とりあえず場所移動しないか？ 中庭の噴水前なんてどうだ、俺が缶コーヒーぐらい奢ってやるよ」

「そうね、じゃあ行こっか」

虚ろな目をした真中いずみを残して俺達は病室を後にした。

嘘だ。

嘘を吐いている。

「やっぱ久保田って可愛いよな。まさか病院なんかでアイツに会えるなんて思ってたから口から心臓が飛び出すかと思ったよ」

俺は自販機のボタンを押した。

「良かったな……」

「何だよ、その素気ない言い方」

三本目の缶を健也に手渡して噴水脇のベンチを振り返る。そこには旭ヶ丘高の制服を纏った優美が座っている。

「お前、優美に持って行ってやれよ」

「了解！」

健也は満面の笑みで優美の方へと駆け寄って行った。俺はその様子に怪訝な目を向けている。

優美は嘘を吐いている。

さっき優美は「一階の薬局で目薬貰って帰ろうかと思ったら君達の姿見かけたから付いてきた」と言っていた。

有り得ない。

俺と健也は一時間近く真中いずみの病室に居た。ずっと五階に居た、つまり一階には居なかった。仮に一階の薬局周辺で俺達の姿を見ていたのだとしたら、一時間近くも俺達に声を掛けずに待っている

た事になる。

一階で見た時からずっと俺達を探していたとも考え難い。もしそうなら彼女の性格上「探したんだぞ！」ぐらいの一言がある方が自然だ。それに探していたのなら携帯電話使用禁止である院内から一旦出て、外から携帯電話にメールを送って来るぐらいの事はする筈だ。優美は俺達の会話を盗み聞きしていたのだろうか。

いや、そう考えると一階の薬局で俺達を見たと言う嘘が不自然だと言う事に自分で気付くだろう。何しろ一時間も俺達を探していた事になるのだ。賢い優美ならそんな破綻はたんしやすい嘘はまず吐かない。恐らく優美は「俺達がいつかあの病室に居たのか」を知らなかった筈だ。まさか見舞いに一時間も費やしているとは思わなかったろう。だから俺達を一階で見たと言った。

そうだとすると優美は最初から五階に居た事になる。そして彼女が嘘を吐いてまで隠している事は。

……自分が、五階にいた理由。

それしかないだろう。

俺は二人が座っているベンチへ歩いてゆく。多少緊張しているのか妙に肩の張っている健也と、いつも通り聡明な表情の優美。だが彼女が何らかの嘘を吐いている事は間違いないだろう。

聞いてみるか。

「で、北野君達は何してたの？」

先に優美が質問を投げかけてきた。まるで自分に質問されるのを遮るかのように思えたのは気のせいだろうか。

「ああ、お見舞いだよ。真中いずみって子だな。知らないか？」

「マナカイズミ？ 知らないなあ……」

優美は眉を寄せて首を傾げる。

俺は嘘を吐く人間の態度が何となく解る。俺の勘ではどうやら優美は本当に知らないようだ。もしこれが演技ならば、只者ではない。健也が優美の目を覗き込んで聞く。

「それより久保田、目え大丈夫なのか？」

俺はその様子を黙って確認しておく事にした。

「うん、目薬^さ点したら直ぐに治ったよ」

「へえ、どんな目薬なの？」

「どんなのって言われても……そりゃ、市販されてるやつよりも効くやつでしょ」

「そうなんだ。やっぱ病院でもらう薬って普通のやつより良いんだな」

そこで俺が口を挟む。

「その目薬、見せてくれないか」

「何だよ」

優美は切れ長の目で俺を睨んだ。

「本当は持ってないんだろ、目薬なんて」

お前何言ってるんだよ、と健也が横槍を入れてきたが、無視して俺は真っ直ぐ優美を睨み返した。彼女は薄い口唇を僅かに噛む。

「優美、お前は一階で俺達を見て追いかけて来たんだよな」

「そうだよ。エレベーターに二人が乗るところちゃんと見えたんだから、エレベーターが五階で停まったから私も五階に来てみたんだよ。確か一階のエレベーターホールには綺麗な胡蝶蘭が飾ってあったっけ？」

「良く覚えてるじゃん」

「当り前でしょ！」

「じゃあ俺達は三機あるうちのどのエレベーターに乗ったのか覚えてる？」

それは……、と優美は口籠る。もし本当に俺達の後を追って来たのならば答えられて当然の質問だ。しかし彼女は口を噤^{つぐ}んだままだ。

「もう良いよ、久保田」

健也が口を開いた。

「あのな。実は俺達、久保田と会う一時間近く前からあの病室に居たんだよ。だから久保田の言っている事おかしいぞ、多分……」

苦笑気味の健也、矢張り彼も気が付いていたらしい。こんなに遠

慮がちな態度の健也も珍しい。俺も彼に続いて優美に質す。

「だから俺達が優美と会ったのは偶々の筈なんだよ。つまり、優美は別の理由で五階に居たって事じゃないのか」

その刹那、優美のその整った顔が酷く歪んだ。

今のは見てはならないものだっただのではないだろうか。瞬時に元の表情に戻ったが、彼女の物凄く醜い一面を垣間見てしまったような気がした。

「嘘吐いて、ゴメン……」

優美は顔を伏せる。

「本当はね……お父さんに、お弁当届けに来たんだよ」

「あ、そっか！」

健也は俺の方に人差し指を向ける。

そうだ。確か優美の父親は医者だった筈だ。しかしこの旭ヶ丘総合病院だとは思ってもみなかった。優美の家はここからそう遠くない、一度帰ってからまたここまで来たのだろう。

しかし……。

「何でそんな事隠してたんだよ。親孝行娘じゃん！」

俺が抱いた疑問は健也が声にしてくれた。彼の言う通りだ。親に弁当を届けるなど、別に隠すような事ではない。

優美は開き直ったような清々しい顔を上げた。

「もう、この際だから言っちゃうね」

良く解らないまま俺達はこくりと頷いた。

「うちのお父さん……小児科の先生なんだ」

で？ と間の抜けた声を洩らして健也は首を傾げる。

「分からないかな？」

優美は眉尻を下げて苦笑する。その表情には幽かに翳^{かげ}があるような気がした。父親が小児科医だったら一体何だと言うのだろうか。

小児科医……。

……そう言えば。

旭ヶ丘総合病院。小児科。久保田という名の医師。

「あ、北野君は思い出した？」

優美は不自然に明るい声で言った。俺の記憶が正しければ、決してそんな明るい話題などではない。

まさか、あの医者が。

「テレビだかネットだか忘れたけど……ニュースでやってたような記憶がある。学校の近所の病院の話だったから覚えてるよ。確か一年前だっけ？　まさか……その時の小児科医ってのが優美の親父さんだって……訳じゃないよな……」

優美は、正解だよ、と弱々しい声で言った。健也はベンチから立ち上がって俺の肩を引っ張る。

「ちよっと待てよ秀一。何の話だ？」

「いや、それは……まあ」

どうやら健也はそのニュースの事を覚えていないらしいのだが、どうも俺の口からは説明し難い。

「良いよ、間島君には私がちょっと説明してあげる。何で私が、お父さんの事言いたくなかったかって理由」

優美は口を開いた、まるで他人事のように淡々と。

一年前、この旭ヶ丘総合病院の小児科医が訴訟された。

訴えを起こしたのは、この病院で診察を受けていた子供の親。確か、担当医が診察と称して十歳の女の子の胸や局部を必要以上に触っていたのではないか、というものだった筈だ。メディアは「医師という立場を利用し、無垢な少女に猥褻行為を働いた」と徹底的にその医師を吊るし上げていた記憶がある。

その小児科医の名前は……久保田。

確か、久保田という名前だった。

未だ真実は解らないのに。その時は、マスメディアの情報煽動せんどうとは本当に胸糞の悪いものだ、と初めて思った。

結局、総て診察治療の範囲内での行為、という事で原告側の敗訴となった。

病院側の言っている方が矢張り真実だったのかもしれない。だが

金もコネもある大病院相手に個人が勝訴出来る可能性も低い、金と
いうのは使い方次第で真実を曲げる事すら可能なのだと聞いた事が
ある。

その小児科医は潔白という事実こそ残ったが、真実は結局分から
ない。

病院側の勝訴を以^もって事態は沈静化、やがて医師へのメディアの
銃声も止んだ。こうしてそのニュースは人々の記憶から消えていっ
た。

しかし……地元の人々の記憶から消える事は無かった。

ここからは親父から聞いた話なのだが、件の医師^{くたん}への攻撃は水面
下でその後もしばらく続いていたらしい。

メディアの銃声は止んでも、銃創は残っていたのだ。

久保田医師への誹謗中傷は後を絶たなかった。病院の窓硝子に「変
態医師」「死ね」といった類の中傷ビラが貼られたり、自宅への悪
質な電話も続いたりしたと聞く。ネットでは久保田医師の出身地や
生い立ち、学歴なども公開されてしまっていた。更には家族構成も
載せられていた、高校生の娘がいると書かれていた。

——娘も変態の親父にヤラれてたりして。

——親が親だし、娘も淫乱だよ、どうせ。

——高校生だろ？ いいな、俺にもヤラせてくれねえかな。

下劣な書き込みが多く、吐気を覚えた記憶がある。どこまでが本
当の情報なのか判らない、況^ましてや家族は無関係だろう。

そして、その娘というのが……。

「その小児科医っての……実はうちのお父さんなんだよね」

久保田優美だとは夢にも思わなかった。

彼女は淡泊に言い切った、相変わらず他人事のように。俺にはそ
れ以上優美を詮索する事は出来なかった。これには流石の健也も陽
気に振舞えない様子だ。

「ごめんね、嘔吐いたりして」

……別に良いよ、そんな事。

そう言おうと思ったが俺の口唇は動いてくれなかった。

「だって私のお父さんがあの時の医者だなんてみんなに知られたら……嫌われちゃいそうじゃん。でもね……」

優美は顔を上げて、缶コーヒを一気に飲み干した。

「北野君と間島君なら言っても良いかなって思った！」

俺も？ と健也が声を上げる。

「うん。間島君でチャラチャラしてるように見えて芯はしっかりしてるもん」

そう言われて健也は満足げににやける。優美は、さてと、と呟いて立ち上がって空き缶をゴミ箱に捨てた。

「じゃあ私帰るね。この後、用事もあるし」

「用事？」

「うん。明歩が後で私の家に来るからね」

「小森が？」

そう言えば小森は今日も欠席していた。一体何があったのかは知らないが優美とは連絡を取り合っているらしい。

「何かさっき、今夜行っている？ ってメールが来たのよ。大事な相談があるって感じだったけど、どうしたんだろうね」

会う約束を自ら取り付けるという事は病気という訳ではなさそうだ。ただ、真面目な小森が学校をサボるというのも考え難いのだが……。

俺達に手を振って立ち去ろうとする優美。俺はこっそりと健也の脇腹を小突く。

「お前、優美を送って行ってやれよ」

「マジ？」

顔を赤くして聞き返してくる健也。

「秀一はどうするんだよ」

「俺はお邪魔だろ。第二のさやか、優美とお近付きになるチャンスだぞ」

すると健也は緊張した面持ちでかくかくと頷いた。

俺は俺で、一人で考えたい事がある。もしかすると中西が言っていた優美援交疑惑も久保田医師の噂に尾ひれが付いたものだったのかもしれない。だが中西は、優美が男の車に乗る場面を確かに見た、と言う。

……矢張り、気になる。

「なあ優美、今日は健也に送って貰えよ。ほらもう夕方だし一人で紫陽花坂通るのも気持ち悪いだろ」

すると優美は……

……。

……………。

そうね、と言って微笑んだ。

「じゃあ頼んだぞ、健也」

健也もはにかみながら頷き、二人は微妙な距離を開けながらも一緒に帰って行った。俺はわざと二人から時間を開けるように、ゆっくり缶コーヒーを飲んでから立ち上がった。

それにしても……一体何だったのだろうか。健也と帰る事を勧めた時に一瞬だけ優美が見せた、刃物のように鋭い目つきは。

※

十月五日。

さやかの話なら、そう言えば図書室に過去のレポートがあったぞ。新聞部が何年か前に書いたやつんだけど結構詳しく載ってるって話だ。ほら、新聞部とか文科系クラブって毎年部員獲得に苦労するじゃん？ だからそういった如何わしい噂話の記事なんかも書いて興味惹こうとするんだよ。俺？俺は読んだ事ないんだけどな。まあ秀一も気になるんだったらちよつと読んでみれば？

中西はそう言っていた。

四時間目の美那子先生の日本史が終わると、俺は昼食もとらずに

図書館へと向かった。正直言って実はさやかの事をそこまで詳しく知らない。十五年程前、実際にさやかという名の生徒が百階段から転落したと言う事は親父からも聞いているが、都市伝説としてのさやかは噂程度でしか聞いた事が無かった。

昨日、真中いずみが話してくれた中にも知らない事が沢山あった。彼女は新谷詩緒里という生徒が話した事を異常な程に詳しく覚えていた。気味が悪いと思ったが、それ程までに脳裡に焼きついていたのだろう。

それに、健也と優美。

……健也のヤツ、上手くやったんだろうか。

しかしチャラチャラしているようで健也は意外と奥手^まなのだ。決してや相手はガードの堅いあの優美。最悪の場合何も話せずに終わってしまった可能性すらある。

……多分、駄目だろう。

とぼとぼと階段を下り、図書室のある二階廊下を歩く。

二階は教室も無く理科室や図書室、視聴覚室などの特別教室がほとんどを占めている為いつも静まっている。それに今は昼休みだ。皆、食堂に殺到してこのフロアには誰もいないかもしれない。旭ヶ丘高の歴史上でも昼飯時に二階をうろろしている生徒など俺ぐらいではないだろうか。

いや……。

その昔、昼休み図書室で過ごしていた二人の女子生徒が居たではないか。一人は黙々と本を読んでいて、もう一人は弁当を食べている。さやかとりかこ。

彼女達は図書室で過ごしていたと言う。彼女達は儂い友情を図書室で育んでいたと言う。

そしてその友情はさやかの死によって引き裂かれたと言う。そして……俺は今、その図書室の前に立っている。

扉に手を掛けようとした、その時。

「北野君？」

名前を呼ばれた俺は声のした方を振り返る。

「昼休みに図書室なんて珍しいね。まさか読書に目覚めたとか？」
そこには日下部綾奈が立っていた。

夜を凝縮させたような黒髪を揺らせながら眠たげな瞳で薄く微笑む日下部は不思議な雰囲気を放っている。甘い瘴気のようなこのオーラ、男子が夢中になる訳が判る。仄明るい廊下で彼女と二人きりになってみると、俺も何か変な気分になってくる。

「まあ、調べ物だよ」

「そうなの」

こくりと深く頷く日下部。そこで会話は止まってしまった。すると日下部は予想だにしない事を口走った。

「ところで間島君と優美って付き合ってるの？」

「え？」

「だって、私見ちゃったんだよ……昨日」

くすくす、と目を細めて笑う。こうして見ると意外に子供っぽい。昨日、彼らが二人で帰っている所を見たのだろう。

すると日下部は更にとんでもない事を言った。

「全く優美も大胆だよ……いきなりキスだなんて」
開いた口が塞がらない。

「マジかよ！」

「ホントだよ。優美達昨日の夕方、百階段の所で思いつきりブチュッてやってたよ。私もドキドキしちゃった……」

あの二人は……俺の予想の遥か斜め上を行っていた。

「避妊だけはちゃんとしてれば良いんだけどね」

「いや……そこまでは進んでないだろ」

彼女の口からそんな性的な言葉が出るとは思わなかった。何故か男の俺の方が恥ずかしくなってしまう。

「間島君に先越されちゃったね、北野君も女子からは人気なんだから直ぐに彼女だって出来るって。来週の体育大会で活躍したらきつとモテるよ」

「え、俺って女子から人気なの？」

「そうだよ、北野君の事カッコいいって言ってる子いるよ」

「誰？」

「それは、また今度教えてあげる」

じゃあね、と言って日下部は手を振り去ってゆく。矢張り掴み所のないミステリアスな子だ。それより健也は思っていたよりずっと上手くやっていたようだ。

……そう言えば昨日優美は、小森と会う、と言っていた。

その小森は今日も欠席している。

案の定、図書室には誰もいない。

昨日行った病院もそうだったのだが、図書室という場所も独特の匂いがする。消毒液のように鼻を衝くものではなく、不思議と落ち着く匂いだ。

紙の匂い。

乾燥した木を連想する自然な香り。正直言って本を読むのはあまり好きではないが図書室のこの雰囲気だけは好きだ。恐らく、りかも俺と同じような事を考えて図書室に居座っていたのではないだろうか。

窓際の席に座っていたと言われる、さやかとりかこ。その席にも今は誰もいない。

——文化部発行のレポート関係は一番隅っこの本棚にまとめられてるぞ。

と、中西に聞いた。何故隅に追いやられているかというのは聞くまでもなかった。誰も読まないからだ。

真昼でも薄暗い図書室の隅。本棚は白い埃で覆われていて、久しく手入れされた様子もない。

さて、新聞部の過去のレポートは……。

しっかりした本ではなく高校生の安っぽい自主製作本なので背表紙にも紺色の製本テープが張られているだけで何も書かれていない。

面倒臭いが一冊ずつ本棚から引っ張り出して表紙を確認してゆく。
その度に埃が舞い上がるので堪^{たま}ったものではない。

……あった。

本棚の一番下の段に新聞部の過去レポートがまとまっていた。一冊三十ページ程の薄いものばかりが並んでいる。ざっと見て十年分はあるだろう。残念ながらさやかの都市伝説が生まれた時代ほど古いものは残っていないようだ。

ここにあるのは毎月校内掲示板に貼られている壁新聞とは違って、学園祭などで配布されている別冊誌のようだ。去年の分は俺も見覚えがあった。確かこの町周辺のお勧めスポットなどを特集し、駅前にあるプリンが人気のケーキ屋に取材まで決行していた。

俺は十年分の過去レポートを本棚からごっそりと抜き取り、くっ付いてきた玉^{だま}の埃を指で払った。机に運び、過去分から一冊ずつ確認していく事にした。

十年前のものは、全国大会に出場した柔道部にスポットが当てられている、そして別のコーナーでさやかの都市伝説も少しだけ特集されていた。九年前、八年前と順々に時代を下って読んでいったがどれもスポーツや娯楽特集の陰に、少しだけさやかの都市伝説を潜^{ひそ}ませて書いてある。この旭ヶ丘高校では矢張り昔からこの噂は囁かれ続けていたのだと実感した。いつの時代も怪談は人の心を惹きつける。

趣向が変わったのは四年前。

今にも破けてしまいそうな安っぽい古紙を捲^{めく}ってゆく俺。それは今までの物とは明らかに一線を画している。

全ページ、さやかの話だ。

どう調べたのかは知らないが、後日談などもかなり詳しく書いてあるようで少し気味が悪い。百階段や紫陽花坂周辺の写真まで載せられている。

そしてどういう訳か、それ以降の年度の冊子にはさやかに関する記述は一切なくなってしまうている。まるで四年前を境に「さやか」

という言葉が禁忌^{タブー}になってしまったかのようだった。一体、四年前に何があったのだろう。

俺は、さやかの事が書かれた四年前の冊子の裏表紙に目を向ける。そこにはとんでもない事が書かれていたのだ。俺は我が目を疑った。……そんな、馬鹿な。

発行 旭ヶ丘高校新聞部

監修 新聞部部长 新谷詩緒里

「新谷詩緒里！」

俺は思わず声を上げた。

四年前にこの記事を監修したのは新谷詩緒里だったのだ。そして先日、彼女は真中いずみの前に現れてさやかの都市伝説を事細かに語った。彼女はもうとつくに卒業している筈だが、その時は何故か旭ヶ丘高の制服を着ていたと言う。

もしかすると真中いずみの妄想が創りだした人物なのではないか
とっていたが、新谷詩緒里は実在したようだ。

しかし、目的が全く分からない。

……何故、今頃になって現れたのか。

……何故、真中いずみにその話を聞かせたのか。

……何故、さやかにそこまで固執するのか。

俺はとりあえず四年前のレポートだけ借りていく事にして席を立った。その時、がらがらと扉の開く音がした。

そこには、むしゃむしゃとカツサンドを頬張る健也の姿があった。彼はきよきよと周りを見回している。どこか挙動不審な健也はまるで誰かに見られる事を嫌っているようだ。一体何をしに来たのだろうか、健也は俺以上に図書館とは縁がない人種の筈だが。

「健也？」

思い切って声を掛けてみた。矢張り俺がいた事に気が付いていなかったらしく健也は驚いた顔をしてこちらを向いた。

「ゲッ、秀一……」

「何だよ、その反応は」

どうも健也を見ているとにやけてしまう。先程、日下部から聞いた話が本当だとするとまともに顔を見てもらえない。

「健也が図書室に来るなんて珍しいな」

「お前も人の事言えないだろ、俺はちょっと過去のレポート探しに来ただけだよ」

そう言って健也は隅の本棚、さっきまで俺がいた一角に歩み寄って行った。そしてごそごそと何かを探している。

……過去のレポート？

「お前、何探してんの？」

「別に何でもないって」

もしかすると、と思った俺は試しに口にした。

「新聞部の四年前のレポート……」

すると健也は弾かれたようにこちらを振り返った。その目は大きく見開かれ真っ直ぐに俺を向いている。

「もしかして、探してるのってコレ？」

俺はそのレポートを摘まみ上げる。健也は驚きながらも深く頷いた。彼もこれを探していたという事は内容を知っていたのだろう。

「それより、ちょっとこれ見てみる。四年前に新聞部の部長やったのが、なんと……新谷詩緒里だったんだよ！」

「マジで？」

「そうなんだよ、新聞部のレポート探してたってことはお前もさやかの事調べようと思って来たんだろ？」

まあな、と曖昧な返事をする健也。

「この新谷詩緒里って、もう卒業してるみたいだから在校生に聞いても誰も知らないだろうな。今から職員室行って先生に聞いてみようぜ」

俺はそのレポートを持って図書室を後にした。健也もその後をとぼとぼと付いてくる。彼の顔は妙に悔しそうだった。

職員室は意外とがらりとしていた。

「失礼します……」

先生も弁当派が少ないらしく、みんな食堂へ行っただろうか。旭ヶ丘高は先生の数が多くて二年の俺達でも喋った事のない先生も少なくない。

しかも職員室は広く、俺達の教室の何倍もある。こいつら何しに来たんだよ、という恐そうな理系の先生達の爬虫類のような視線が突き刺さる。俺はともかく、校則違反の茶色い髪の健也はさぞ居心地が悪い事だろう。案の定、彼はまるで泥棒にでも入ったかのようにこそこそとしている。

それにしてもこの空気は何か嫌だ。悪い事をしていないのに怒られるような不思議な緊張感がある。俺と健也は、知っている先生はいないか、と広い職員室をきよろきよと見渡す。

……いた。

「美那子先生！」

俺は腰を低くしながらも手を振った。自分の席に座っていた美那子先生は飲みかけのマグカップに口を付けながらもこちらに手を振り返してくれた。

隣にいた体育教師から鋭い眼差しが向けられる。きっと、長谷川先生と呼べ！ というサインなのだろう。

「おう北野、間島！ 何か用？」

そう言っただけで美那子先生は俺達の方に近付いてきた。

「ちょっと聞きたい事がありました」

「お、今日の授業で解らないところもあったかな？」

俺達の前に立って優しく微笑む美那子先生。先生の持つマグカップからは芳ばしいコーヒーの香りがした。

「いえ、違えます」

「何だ、恋の悩みか？ 最近の子はおマセさんだからねえ……」

美那子先生はそう言っただけで俺達の顔を交互に見比べて目を細める。

さつき日下部に聞いた事を先生の前で穿り返してやろうかと思ったが止めておいた。

俺は口を開く。

「新谷詩緒里。そんな卒業生いますか？」

すると……。

……何だこの空気。

今まで明るく振舞っていた美那子先生の動きが止まる。ちらりと周りを見ると他の先生の表情もどこか曇っている。

「北野……何でその名前、知ってるの？」

先生の声はいつもの明るい調子ではなく、僅かな翳が射している。「図書室で昔の新聞部のレポートを見つけたんです。そこに新谷詩緒里って人の名前があったんですよ。それでちよつと気になりました」

真中いずみの口から出た名前、とは言わなかった。すると美那子先生は俺達の手を取って職員室の外へと引っ張り出した。

「どうしたんだよ先生」

健也が怪訝そうに問い掛ける。昼休みとは言え、職員室の前の廊下は流石に騒がしくはない。健也の声が廊下に残響する。

しかし美那子先生は口元を押さえて黙り込んでいた。

「知ってるんですね。その人は今もう大学生ですか。もし良ければ連絡先とか教えて欲しいんです、ちよつと聞きたい事があるんです。電話番号や住所が教えられないんなら進学先だけでも教えて貰えませんか？」

美那子先生は間違いなく知っている。先生は静かに口を開いた。

「うん、新谷さんね。知ってるよ、だって昔、私が持ってたクラスの子だったから」

よし。これで新谷詩緒里に近付いた。

「じゃあその人は今どこに？」

暫し逡巡した後、美那子先生は呟いた。

——新谷さんはね、亡くなったの……四年も前に。

新谷詩緒里は……死んでいた。

しかも四年も前に。新谷詩緒里はこの世に居ないのだ。

更に驚いたのは彼女の死因は転落死。

なんと彼女もまた、あの百階段で命を落としたという。そう……四年前に百階段で転落死した生徒とは彼女、新谷詩緒里の事だったのだ。それならば数日前に真中いずみが会ったという新谷詩緒里は一体何者なのだろうか。

まさか、幽霊とでも言うのだろうか。

……馬鹿馬鹿しい。

五限目、英文法の授業中。俺は何とも言えない気味の悪さと、何とも言えない焦燥感と、何とも言えない喪失感に苛まれていた。言うまでもなく授業に集中する事も出来ず、俺は図書室から拝借してきた新聞部の過去レポートを机の下に広げる。

ざらざらとした古い再生紙の手触り。あちらこちらに散らばる「呪い」や「祟り」といった類の不吉な言葉。教壇から発される発音の悪い英語を無視するように、俺はそのページを捲ってゆく。

これも四年前の物だという事は、新谷詩緒里はこの冊子を編纂へんさんして直ぐに死んだという事になる。まさか彼女はこの記事を書いた事により、さやかのかを惹いてしまいいあの世に引き摺り込まれたとも言うのだろうか。

そんな馬鹿な事がある筈がない。

どこかに新谷詩緒里の写真でも残っていないだろうかと冊子を捲る、捲る、捲る。しかし新谷詩緒里はおろか、当時の新聞部員誰一人としてどこにも顔写真は残っていなかった。この町で起こった事件や事故なのだから親父なら記憶に残っているかもしれない。見せてくれるかどうかは別としてもしかすると、新谷詩緒里の写真や事故当時の詳細情報も手元にあるかもしれない。

……流石に見せてくれないだろうか。

もし写真でもあれば明日にでも真中いずみに見せに行けば良い。
もしそれで「私が見たのは間違いなくこの子です」などと言われたら……彼女は本当に幽霊を見た、という事になるのだろうか。

今夜親父に話を聞いてから、とにかく明日もう一度病院を訪れてみよう。幸い明日は土曜日、午前中の補習授業を終えれば午後からは予定もない。今度は明るい内に真中いずみに会いに行ける。

俺はレポートを読み進めてゆく内に、ある事に気付いた。

……ない。

……やっぱりどこにも書いていない。

このレポートの内容は、昨日病院で真中いずみから聞いたものと全くと言って良いほど同じだ。それどころか百階段の段数や紫陽花坂の歴史など、更に詳しい記述まで載っている。変な言い方だが「さやかのカイドブック」と評しても過言ではない。

しかしこれだけ詳しいレポートにも何故か載っていない事がある。
いや、寧ろ何故これが載っていないのだろう。

『さやかに会ったら五日以内に死ぬ。』

……何故これが載っていない。

四年前にはまだこの噂は無く、ここ数年になって付いた尾鰭おひれなのだろうか。都市伝説や怪談など、その場その場で形が変わる。恐らく五日間の制約もその類なのだろう。

その時、騒がしい音を立てて教室の戸が開いた。

「あれ、美那子先生……」

授業が止まる。突然教室の戸を開けた美那子先生は英語教師に向かって申し訳なさそうに頭を垂れる。そして。

「久保田！」

真剣な顔をして優美を呼ぶ先生。険しい顔をしているが怒っているという訳ではなさそうだった。

「は、はい？」

目を丸くして素っ頓狂な返事する優美。

「ちよっと職員室まで来て！」

「今からですか？」

早く、と手招きして急かす美那子先生。一体どうしたのだろうか、優美に限って呼び出しを喰らうような問題を起こす事はない。優美自身も何がおだか分からないといった様子で席を立った。

呼び出し……何かがバレたのか？ 喫煙、万引、深夜徘徊。しかしどれも優美とは無縁のものだ。優美にはそんな黒い噂すら立たない。

黒い噂……。

まさか……中西や橋本が言っていたように、本当に。

……援交か。

優美は美那子先生と一緒に教室から出ていった。美那子先生が最後にもう一度こちらを振り返り慇懃^{いんぎん}に頭を下げて、教室の扉が閉められる。すると何事も無かったかのように授業は淡々と再開された。

また出鱈目^{でたらめ}な発音の偽英語が教室内に響く。

教壇に立つ教師の無機質な抑揚のない口調とは裏腹に、俺達は皆多少なりとも混乱していた。何しろ優美が呼び出されるなど想像もつかなかったからだ。遠くの席に居る健也も心配そうな顔をしている。そして、そのまま優美は帰りのホームルームにも姿を現さなかった。美那子先生によると、事情があって早退した、との事だった。

中西や部活をサボった健也と少し寄り道していたので家に帰るのが少し遅くなってしまった。繁華街のゲームセンターへクラスの男連中と遊びに行ったのだが、今日はどうも警察が多いように思えた。何かあったのだろうか。

近くにパトカーも何台か停まっている。中西は「爆破予告でもあったんじゃない？」と不謹慎な事を呑気に言う。しかしこんな地方都市のショッピング街に爆弾を仕掛けて何のメリットがあるのだろうか。

それにしても今日は警察が多かった。

見た目から不良っぽい健也は嫌でも警察や補導員の目に付く。捕ま

って家や学校に報告されても厄介なので俺達は早々に退散した。

午後七時半。

家に帰っても親父は帰って来ていなかった。

留守電を確認すると一件のメッセージが残されていた。親父からだ。

「今日は遅くなるからメシは先に食ってくれ」と五時過ぎ頃。

俺は冷蔵庫を開けて食材を取り出し、手際良く焼き飯を二人分作って親父の分はラップを掛けておいた。

俺は独りぼっちの食卓で、自分で作った焼き飯を口に運びながら色々と思いを巡らせてみる。さっき繁華街に大勢配備されていた警察官、もしかしたら刑事である親父もその影響で帰宅が遅れているのではないだろうか。そう言えば親父は以前にも「遅くても夜九時には帰る」と言っておいて結局次の日の夜九時まで帰って来なかった事もある。

……正義の味方も大変だな。

呑気にそんな事を考えながら俺は自分が使った分の食器を流しで洗う。疲れて帰って来るだろうから、新谷詩緒里の事を聞くのは風呂上がり^{んか}にでもしてやろう。俺はコップに残っていた麦茶を一気に嚙^え下^{んか}する。

その夜、真中いずみは死んだ。

久保田優実

十月二日。

逆流する。

私は逆流する。

押し迫る濁流のように階段を下って来る生徒を掻き分けて、私は逆流する。

下校時分の階段は我先にと帰ろうとする生徒達で溢れ返っている。皆、何をそんなに急いでいるのだろうか。部活？ 買い物？ カラオケ？ デート？ 人それぞれだろうがとにかく皆この校舎から出たがっているというのは分かる。帰りのホームルームが終わって校舎から出ると学生という束縛から一時的には言え解放されるのだから。

教室に弁当箱を忘れて来てしまった私は、折角一階まで下りたにも拘らず再び四階の教室まで戻る羽目^{はめ}になってしまった。しかも今度は濁流のおまけ付き。

ごめん、ごめんね、と濁流に頭を下げながら私は逆流する。

下駄箱の所に残して来た小森明歩^{こもり あきは}は大丈夫だろうか。

この濁流は下駄箱にも押し寄せる筈だ。体も小さく、力も気も弱い明歩ならこの人の流れに押し流されてしまいかねない。彼女は今頃、心細く思っているに違いない。

早く戻ってやらないと。

「あら、優美。どうしたの？」

四階の踊り場で私は呼び止められた。雑踏の中でもはっきりとした存在感を持った澄んだ声。

「綾奈……」

その声の主は日下部綾奈^{くさかべ あやな}だった。彼女は私の方を見て薄く微笑んでいた。

「ちょっと忘れ物しちゃってね、教室までダッシュだよ」

「そうなんだ。優美って意外とおつちよこちよいなんだね」

「う、うるさいなあ」

私が顔を顰^{しか}めて綾奈を睨むと彼女はそれを受け流すようにくすくすと笑っている。まったく、彼女には敵わない。

「綾奈はまだ帰らないの？」

「うん、ちよっとこれ返してから」

そう言って綾奈は手に持っていた分厚い単行本を私にちらりと見せた。太宰治の作品集のようだ。太宰治など現国の授業ぐらいでしか聞いた事のない名前だ。

「まったく、綾奈も変な趣味してるよね。こんなの面白いの？」

「まあ分からない人には分からないだろうね」

「少なくとも私には分かんないや」

私は外国人が良くやるお手上げのポーズをとりながら苦笑した。

まあそうだろうね、と言って綾奈もにこりと笑った。男子からは無口で淡泊な子と思われる綾奈は女子の前だと意外とよく喋るし、よく笑う。

「この時間の図書室って結構良いんだよ。市立の図書館と違って人もいないし静かだし、ゆっくり借りたい本を選ぶからね。もし良かった今から優美もどう？」

「いや、私はいいや。下駄箱の所で明歩待たせてるし」

「そっか、残念ね……」

じゃあまた明日、と言って綾奈は階段を下りていった。

教室に戻ると、まだ二人だけ残っている生徒がいた。

北野秀一きたのしゅういちと間島健也ましま けんや。

彼らは教室の窓から外を眺めている。そう言えば北野君はいつも外を眺めている。授業中も、休み時間も、それに今も。そんなに窓の外ばかり見ていると、飛び降り自殺でも考えているんじゃないのかと時々思ってしまう。

それにしてもこの二人、いつも一緒に居る。

「あ、ホモだ」

と、私は二人を擲^{からか}った。すると間島君がへらへらと笑いながらこちらを向いた。いかにも頭の悪そうな顔だ。服装もちらちらしていて清潔感がない。

シャツのボタン開け過ぎ！ズボンも上げろ！

「それでーす僕たち愛し合っ^てていまーす」

何を言い出すかと思えば笑えない冗談。間島君はそう事を言^つて北野君に抱き付いた。私はどうも間島君が苦手だ。

「え、真剣^{マジ}で……」

無視しても良かったのだが、それはそれで五月蠅くなりそうだったので一応相手にしてやった。すると北野君は慌てたように間島君を引き剥がした。

「冗談に決ま^つてんだろ！」

……分かつてる^つて。

すると間島君は、

「まあ『さやか』と『りかこ』みたいな美少女なら画になるけど、男同士^つてのは見てらんねえよな。何でレズは見られるのにホモは気持ち悪いんだろ^うな、ははは」

と、知性の無さそうな馬鹿笑いをした。

さやかと……りかこ。

この旭ヶ丘高校の生徒でその都市伝説を知らない者はいない。桃太郎や浦島太郎のようなお伽噺^{とぎはなし}と同じように誰もが知っている。

そう。だから誰も近付かない。

夕暮れの紫陽花坂には……。

皆、さやかが怖い。呪いが怖い。祟りが怖い。幽霊が怖い。怪我が怖い。痛いのが怖い。そして死ぬのが怖い。

皆、心の中でそう思っている。紫陽花坂を通る度、百階段を上る度、さやかの噂が脳裡^{のうり}を過る。さやかは皆の心の中に居る。心の中にしっかりと根を張^つて、じわじわと侵食し蝕^くんでゆく。

さやかは……化け物だ。

「ちよつと間島君、りかこも美少女だったってホント？ 私そんな

話聞いた事もないよ」

「さあ。俺はさやかも、りかこも二人とも絶世の美少女と思ってるけど」

そして各々の胸の中でその化け物は成長を続ける。間島君の中ではさやかだけでなく、りかこまで成長しているようだ。

「ふうん。そんなの初耳だな、私」

本当にとんでもない化け物に成長したものだ、さやかは。すると北野君が口を開く。

「ほっとけよ、どうせ健也の妄想空想幻想だろ」

彼は何故間島君と友達なのだろう、その横でへらへら笑っている間島君。そうね、と私も軽くあしらって髪を耳に掛ける。そして私は自分の机の荷物掛けにぶら下がっている弁当箱入れの小袋を手にとった。

「じゃあ、私そろそろ帰るわ。玄関で明歩も待ってるし」

鞆を肩に掛け、私はバイバイと手を振って教室から出て行く。彼らも手を振り返してくれた。

すっかりと人気の無くなった廊下をとぼとぼと歩く私。どうやら下校の濁流も治まってくれたようだ。

……。

……………。

やっぱり、間島君は苦手だ。

それでも、もっと苦手な人物がいる。もしかしたらそれが世界で一番苦手な人間かもしれない。

あの目……。

常に総てを疑い詮索しているような、あの目。言葉の裏に隠れた真意を暴き出さんとする、あの目だ。

あいつの前に立つと、風呂上がりの裸を四方八方からじろじろと視られているような羞恥心と不快感さえ覚える。

北野秀一……。

北野君、私は彼が一番苦手。

彼女は待ってくれていた。

人ごみに押し流されたのか、玄関の隅で下駄箱に隠れるように小さくなっている。まるで臆病な小動物のようだ。しかし体も気も小さい彼女には、その姿がいやに良く似合っていた。

「明歩」

名前を呼ぶと、彼女は相変わらず困惑の混じったような微笑み浮かべて顔を上げた。

「ゴメンね。待たせちゃって」

「い、いいんだよ」

明歩はふるふると首を横に振った。その仕草に合わせて彼女の短い髪がふわふわと揺れる。子犬のように温和おとなしい明歩、子兎のように臆病な明歩、私とは正反対の性格の明歩は私の一番の友達。

高校に入って私が初めて喋ったのはこの小さな友達、明歩だった。彼女とは一年の頃も同じクラスだった。久保田と小森で出席番号が連番だった為、私の後ろの席が明歩だったのだ。

入学式の日、明歩は一人もじもと席に着いたまま小さくなっていた。

きっと彼女も私と同じく出身中学校の同じ友達がいなかったのだろう。

そう思って私は後ろの席を振り返った。そして、

――よろしく、ね。

そう言うと、明歩は照れ臭そうに真っ赤になった顔を伏せた。そしてそろりそろりと上目遣いに私を見てぽつりと零こぼした。よ、よろしく……と。

その日以来、私達は友達だった。

移動教室も一緒、昼ご飯も一緒、下校も一緒。明歩はいつも私に着いてくる。弱気な捨て猫に懐かれたようで何だか嬉しかった。

彼女はいつも穢けがれの無い純真無垢な円い瞳で私を覗き込む。

同年とは思えない程の小柄な背格好と幼い顔も手伝って、友達でありながら私は明歩の姉にでもなった気分だった。

そして、今も明歩は私を見上げてじっとしている。

「んじゃ、帰ろっか」

私が彼女の頭に手を置くと、こくりと明歩は小さく頷いた。

靴を履き替えて外を見ると空は橙色だいだいに染まりつつあった。十月にもなると日が沈むのもかなり早くなる、先月なら下校時間でも空はまだ青かったのに。もう秋から冬に季節が変わろうとしているのだろう。

「明歩、行くよ」

「ま、待って」

振り返ると彼女は靴を履き替えるのにまだ手間取っているようだ。私を待っている間、先に履き替えてくれていれば良かったのだが。

この通り、明歩は動作もいちいちゆっくりだ。

せっかちな人間なら彼女の一挙手一投足を見ているだけで苛々するかもしれない。私もどちらかと言うとせっかちな方で、彼女の行動の遅さにはいつも苦笑させられる。

「早くしないと置いて行っちゃうよ」

「ご、ごめんって……待ってよ」

冗談混じりに急かしてやると明歩は本当に泣きそうな顔になり、慌てて下駄箱に上履きを仕舞った。その仕草がどこか愛らしく私は思わずくすくすと笑っていた。

「優美……ま、待ってよ」

アスファルトの地面の上をかちやかちやと音を立てながら明歩が駆け寄って来る。彼女足元をよく見ると、踵を踏んだローファー靴をからからと引き摺っているのだ。

……結局、まだ靴を履けていなかったのか。

「ちよつとストップ」

「え、どうしたの？」

私は彼女の額を指先で軽く叩く。

「待ってあげるからちゃんと履きなさい」

照れ笑いを浮かべてのろのろと靴を履き直す明歩。この小さな友

達は私が守ってあげないと生きていけない、とすら思う。

「お待たせ……ごめんね」

「よし。ちゃんと履けたね」

私達は玄関を出て通用門へと向かう。

グラウンドの方からは野球部の掛け声が聴こえてくる。あえて振り返りはしなかったがその時も視線は感じていた。

校舎の窓から私達を見ている。

……北野秀一が。

空は東の方から生命力を失くし始めている。

昼が死に、今日も夜が生まれようとしている。

傾いた太陽の光は背の低い明歩の影さえも長く引き伸ばしていた。私は明歩の歩調に合わせて紫陽花坂をゆっくりと下っている。

道の両端に等間隔に植わっている青々とした葉を茂らせている植物、この季節は花が咲かないので一見何という植物かは判り難いが、これは総て紫陽花だ。

不意に明歩が口を開く。

「わたし……この坂、好きじゃない」

「どうしたの、急に？」

「こわいもん……」

「怖い？」

小さく頷いた明歩は音もなく私に身を摺り寄せてくる。動作の一つ一つが本当に子猫のようだ。

「ああ、やっぱり明歩も信じてるんだね」

……さやかの事。

そう言いかけて私は言葉を飲み込んだ。しかし明歩は私の心の中を読んだかのように言った。

「さやかの事？」

私は彼女の目を見て頷く。

「わたしは詳しく知らないんだけど、そんなこわい噂があるよね。」

さやかに気に入られたら五日以内にあの世に連れて行かれるんだっけ。勿論さやかのお話もこわいよ、でもそんな噂なくても……この坂はこわい」

「何で？」

眉間に皺を寄せて明歩は続ける。

「迷子になっちゃいそうだから……」

そう言って明歩は顔を伏せた。

六月の雨の日、紫陽花の咲き乱れるこの坂はまさに別世界。一本道でも迷子になってしまいそうな幻想に包まれてしまうのだろう。花というのは不思議だ。特にこの坂の紫陽花は美し過ぎる、危険な程に。

明歩は途中にある小さな公園を一瞥して目を細めた。

「明歩！」

彼女の名を強く呼ぶと、その小さな体がぴくりと震えた。まるで叱られた子供のようにおずおずと私の顔を見上げる明歩。

「そこは、公園は見ちゃ駄目だよ……」

「どうして？」

「駄目なものは駄目なの、危ないから。一人で入ったりしたら絶対に駄目なんだからね」

「危ないって？」

私は明歩の円い瞳を真っ直ぐに見据えて答える。

「いいから……駄目だよ」

すると今にも泣き出しそうな顔になった明歩は小さく、うん、と答えた。

この公園はさやかの都市伝説の舞台にもなっている。確か、さやかの親友のりかこという少女がネズミの死骸を埋めていた場所だ。あまり縁起の良い場所でもないの、怖がりの明歩は行かない方が
良い。

それに……。

この公園は、それだけではない……。

「ゆ、優美……」

百階段の前、明歩はそこで立ち止まった。

「どうしたのよ。あ、さやかの話をしてたから、もしかして百階段が怖くなっちゃたのかな」

「ち、違うの。今日はここでバイバイ……」

「何言ってるのよ。いつも駅まで一緒でしょ」

「今日はね……その、ちょっと用事があつて寄る所があるの」

明歩は百階段を背に振り返った。

「用事って、私も付き合おうか？」

「大丈夫……一人で行くから」

そう言つて彼女は弱々しく笑っている。

「本当に大丈夫なの？ さやかの呪いかどうかは知らないけどね、昨日ここから落ちて大怪我した子がいるんだよ……」

「知ってるよ」

私の言葉は詰まった。

……これが明歩？

明歩は今まで私が見た事のないような凜とした瞳をしていた。目の前にいるのは私が知っている弱々しい明歩ではない。

「心配しないで大丈夫だから、ね」

私は首を縦に振るしかなかった。

まさか明歩がこんな顔を出来るとは思ってもいなかったのだ。正直、私は明歩の意志に圧倒されていた。

「じゃあまた明日学校で会おうね」

心配してくれてありがとう。

そう付け足して明歩は紫陽花坂を下りていった、百階段を下らずに。私はその小さな背中を呆けて見ている事しか出来なかった。

……今のは、明歩だったのだろうか。

彼女の瞳には明確な強い意志と、仄かな悲^{ほの}しみが宿っているように思えた。あまり良い予感がしない。

やがて彼女の後姿は紫陽花坂の湾曲の果てに消えていった。

茫然と立ち尽くす私の傍らには瓶に添えられた黄色い花が揺れている。この花は総てを見ていたのだろうか。
私は一人、百階段に足を掛けた。

ところで……。

さっき明歩がああ公園に視線を向けた時、私は彼女を咎めた。
何故だろう。

何故、あの公園がいけないのだろうか。

自分でも分からない。
解らない。

※

夜と呼べる暗さになっている。

それでも町の明かりが辺りを昼のように照らしている。

気が付けば私は繁華街のショッピングセンターに足を伸ばしていた。新興住宅地の旭ヶ丘高周辺から一駅、歩いて三十分圏内にあるこの繁華街。

繁華街と言っても所詮は地方都市で、駅前以外は閑静な住宅街だ。私の家もそんな静かな住宅街にある。

私は家が好きでない。

貧乏な訳ではない、親同士が不仲な訳ではない、門限が早い訳でも勉強しろと小言を言われる訳でもない。

それでも私は家が好きではない。

何故なら、私の家には……

怪物がいる。

どう抗つても避ける事の出来ない血縁という名の鎖で繋がれた醜悪な獣が私の家には居るのだ。

だから私は暗くなるまでいつも一人で時間を潰している、何でもあるような賑やかさの裏に無味乾燥な虚しさしかないこの街で。

時間潰しにCDショップに立ち寄った。

黄色い看板が目印の全国的に有名なこのCDショップ。店内には洋の東西を問わず様々なジャンルのCDが陳列されている。

特にお気に入りアーティストがいる訳ではないが、私はこうしてよくCDショップへ来る。山のようにうず高く積み重ねられた円盤状の音声情報が時間を忘れさせてくれるからだ。

試聴コーナーも多く設けられているので退屈しない。黄色いエプロンの店員に注意されなければアルバム一枚を丸々試聴してしまう事すら出来る。時間を無駄に消費させるにはもってこいの場所だ。

私は陳列棚の間をすいすいと進み、試聴コーナーへとやって来た。洋楽、邦楽。

ロック、ポップス、ジャズ、クラシック。

何でもいい。

耳を塞いでくれるなら、何でもいい。

ふと店内BGMに耳を傾けると、音楽に詳しくない私でも知っている歌手の曲が流れていた。いつもマニアックな洋楽ばかり流しているこの店にしては珍しい。

万人受けする優しく透明な歌声、テレビやラジオでも聴いた事がある曲だ。確かこの歌手は天野瀬里奈^{あまのせりな}という名前だったか。

そう言えばうちのクラスの中西君が「今日は天野瀬里奈のアルバム発売日だ」とか言っていた。ミーハーな彼は流行り物の情報に敏感だ。勿論彼もこのアルバムをきつと買うのだろう。

私は天野瀬里奈の試聴機に備えられたヘッドフォンを耳に当てる。

ヘッドフォンの奥から柔らかい旋律に乗って鈴のように澄んだ声が、繊細な言の葉を紡ぎ出している。

綺麗……。

メディアへの露出が少ないので私は彼女の顔すら知らないが、これだけ綺麗な声をしているのだからきっと容姿も綺麗な人なのだろう。それにこんな綺麗な歌詞と旋律を創れるのだ、心も綺麗に違いな

心が綺麗な人は声も、見た目も美しい。

だから……

……私は醜い。

優美は可愛いね、美人だね、モテるでしょ。冗談か本気かは分からないが周りの友達は私に対してそう言うてくれる事がある。

私は自分が綺麗だなんて思ってた事は無い。

それどころか、私は醜い。

鏡を見ると吐気がする。夜の窓硝子、消えたテレビ、不意に自分の顔が映ると寒気がする。何とまあ酷い顔だ、と。

ふと試験機に目を遣ると、いつの間にか二曲目が終わっていた。

何故、私はこんなにも醜いのだろう。

そうだ……。

汚れているからだ。

きつと魂が汚れているからだ。

……そうに違いない。

はっとなって私は目を見開いた。大音量のヘッドフォンですら私の鼓動を覆い隠す事は出来ないでいる。そもそもいつの間にかこんなに鼓動が高鳴っていたのだろう。

天野瀬里奈の涼しい声が優しく私の鼓動を鎮めてくれる。

……私の魂が汚れている？

……何で？

自分で出した答えに疑問と不審感を覚える。魂が汚れるとはどういう事だろう、私は何故そんな事を考えたのだろう。

数秒前、私は自分の魂は汚れていると思った。何故だか判らないが、とにかく思った。

分からない。

解らない。

六曲目まで聴いた所で私はヘッドフォンを置き、CDショップを後にした。最後に停止ボタンを押すのを忘れていたような気がするけれど、どうでも良かった。

もう、どうでも良かった。

ちくちく、ちくちく。

視線がちくちくと突き刺さる。

私は繁華街の外れのいかげしいネオン街をふらふらと歩いていた。矢張り学校の制服では目立つようだ。周りからは近頃流行りの不良娘だとか家出少女だとか思われているのだろうが、これが家へ帰る近道なのだ。

狭い道に小汚い雑居ビルが立ち並び、性風俗店が軒を連ねている。建物自体の薄汚さを誤魔化し覆い隠すように眩いピンクの電光看板がくどい光を放っていた。

そんな店の前には大概、高級そうなスーツをだらしなく着崩した男が立っている。煙草を吸いながら携帯電話の画面を食い入るように見ていて実に品が無い。おまけに頭も悪そうだ。

——ねえねえ、どこ行くの？

——一人？

にやにや笑って馴れ馴れしく声を掛けてくる。鬱陶うっとうしくて吐氣つかがする。

キャッチというものだろう、こちらは制服を着ているにも拘かわらずお構いなしだ。私が法律的に働けないと解わかっているが声こゑを掛けてくるといふ事はナンパなのだろうか。どちらにしろ気分が悪い。

彼らは交差点の信号待ちでも声を掛けてくる。

ぺらぺらと軽い口でぺらぺらに薄い言葉を発している。外見も皆、同じような髪形に同じような服装をしていて見分けがつかない。

青になっても私の横に並んで歩きながら何かを言っている。

今回私に声を掛けて来た色黒の男は私が徹底的に無視していると去り際にぼそりと汚い言葉を吐いて行った。

いちいち気分が悪い。

横断歩道を渡ると煩うるさいキャッチはいなくなるが、更にいかげしさは増す。

一見西洋の城のような華やかな建物が並ぶ。遠くから見ればどれも豪華な建物だが、近くで見ると矢張り薄汚い。

いわゆる
所謂ラブホテルだ。

人通りの少ないホテル街でも時々腕を絡み合わせている男女とすれ違う。きつとこれからする（、）のだろう。

この世で最も使用目的が分かりやすい建物だけあって、その近くを歩いている私もそういう目で見られているのだと思う。一人でいる私はきつと援交少女とでも思われているのだろう。

どのホテルも華やかに装い、その中で行われる淫らな行為を美化しようとしている。怪しさ、いやらしさ、いかがわしさ、後ろめたさを必死で払拭しようとしている。それならば何故出入り口を植木や塀で見え難くしているのだろう。これでは結局いやらしい事だと言っているのと同じではないか。

それに幾ら外見を華やかに飾ったとしてもその中で行われる行為自体は変わらないのだろう。それならばわざわざこんなに飾った場所を選ばないでも家でしてもカラオケボックスでも河川敷でも同じ事ではないのか。

私はした（、）事がないから判らないけれど……。

クラスにも経験している友達はある。彼氏だったり地元の先輩だったり、はたまた街で知り合った名前も知らない男だったり、相手は様々だ。

——痛かった。

——怖かった。

——気持ち良かった。

——意外と普通だった。

皆、好き勝手に感想を述べていた。私も高校二年だ。経験していてもおかしい年齢ではない。寧ろ同い年の子のほとんどが既に経験しているのではないか。私は様々な情事を聞かされる。皆、誇張して自らの経験を劇的に語っていた。ドラマティック

遠回りをしよう。

すれ違う人達の視線が痛くなって私はホテル街から外れ、国道沿いをとぼとぼと歩いている。流石にこの辺りまで来ると賑やかさはなくなる。

もう繁華街とは程遠い。自動販売機とコンビニの灯りが眩しく感じるような住宅地だ。人通りも少なく、車もあまり走っていない。

その時、歩道を歩く私の隣に一台の車が停まった。知っている車だ。

私がちらりと視線を向けると助手席の窓が開いた。

「優美、こんな時間に何やってんだ」

助手席の奥の薄暗い運転席から聞き覚えのある声。

「あ、お父さん」

するとお父さんはにこりと微笑んだ。小児科医をしているお父さんはいつも子供を相手にしているからなのか笑顔がとても優しい。

「今学校の帰りか、随分遅いな……」

まるで子供を叱っているような口調でそう言って顔を顰めるお父さん。

「うん、ちょっとCD屋さんで寄り道しててね……」

するとお父さんは呆れたような笑顔をして、とりあえず乗りなさい、と言った。小さく頷いた私は後部座席のドアを開けてお父さんの車に乗り込んだ。ドアを閉めて外界からの音を遮断すると、カーステレオから淡いジャズが流れている事に気が付いた。流れるようなピアノが心地良い。

「お父さんも今帰りなの？」

「ああ、今日はちょっと遅くなっちゃったな。父さんは優美と違って寄り道じゃないぞ、仕事だならな」

愉快そうに笑いながらお父さんは静かにアクセルを踏んだ。

「こうして二人で車乗るのも久しぶりだなあ」

「そうだね、高校入ってから二人ってのは初めてかな」

確か、最後は中学二年の頃だったろうか。はっきりは覚えていな

いが多分それ以来だろう。

「優美も大きくなったよな」

「そう？」

「そりゃそうさ、だって昔のお前は片手で抱っこ出来るぐらい小さかったんだぞ。流石にもうそれは無理だな」

お父さんは昔の事を思い出すようにうんうんと頷いている。するとお父さんはバックミラー越しに私を見た。

「ところで彼氏とかいないのか？」

「突然何言い出すのよ！」

「いやいや、優美ももう十七歳だろ。若い頃の母さんに似て綺麗になってきたから周りの男の子も放っておかないんじゃないかな」

彼氏か……。

……今まで考えた事も無かった。

「いるよ……」

そう言うとお父さんは一瞬だけ顔を引き攣らせた。

「って言ったらどうする？」

と付け足すと、安心したように眉尻を下げて溜息を吐くお父さん。

「何だ……びっくりした……」

彼氏がいるのかと自分で聞いておいて、いる、と答えると狼狽する。私のお父さんもドラマに出てくる父親のように、自分の娘に男が出来ると思ふのだろうか。

セックスもしたよ……。

そんな事まで言ってしまうと、どんな反応をするのだろうか。温厚なお父さんでも激昂したりするのだろうか。

「優美に彼氏が出来たら……そりゃ父さんも嬉しいけど……半分は、悔しいな」

「悔しい？」

「ああ。小さな時から可愛がってきたのに知らない男に優美を取られるのは、ちょっと悔しいな、あはは」

あからさまな苦笑いを見せるお父さん。

「大丈夫だよお父さん。彼氏、いないから」

「そ、そうか。父さんちょっと安心だな。でも彼氏出来たら直ぐに報告するんだぞ。大学卒業してからなら結婚だって反対しないからな」

「ふうん。その相手がホスト風のチャラ男でも？」

「それは駄目だ！」

冗談だというのに、お父さんはむきになって否定した。

「私だって相手ぐらいちゃんと選ぶよ。だからそんなに心配しないで」

「そうだな。あはは」

お父さんはようやく安心してくれたようだ。

車は私を通っていた小学校の校門前を横切った。もう直ぐ家に着く、お母さんが晩ご飯を作って待っていてくれる筈だ。それを家族三人で食べた後、私は風呂で今日一日の汗を流して、部屋で本を読んでからぐっすり眠る。今日も、ぐっすり眠る。

その時、手に何かが触れた。

……何だろう。

シートが黒っぽい何かで汚れている。

指で撫でてみる。それは何かどろりとした液体を零したような跡だった。もうほとんど乾いているようだが私の手にも少しだけ付着した。

お父さんは気付いていないのか、ジャズを聴きながらご機嫌な様子でハンドルを握っている。

そっと私の手に付いたものの匂いを嗅いでみる。

私は背筋が薄ら寒くなった。

……血だ。

シートにこびり付いていたその血痕らしきものに爪を立ててかきりと削る。清涼感のある青い色のシートには黒い染みだけが残った。私の爪の間にも、ぼろぼろと剥がれた汚れが残っている。

お父さんの目を盗んで、私はぺろりとそれを舐めてみた。

……鉄臭い。

……やっぱり、血だ。

何だか凄くいけない事をしているような気がする。

こめかみから冷汗が滲み、ばくばくと心臓が激しく脈打つ。私はスカートで手を拭ってから、髪を耳に掛けた。

「それだよ、優美……」

その刹那、口から心臓が飛び出そうになった。ぞわぞわと身の毛が^{よだ}立つ。

「何がなの？」

バックミラーに映るお父さんの目が細くなる。お父さんは笑っている。そしてその目はじっと私を見ていた。

「その仕草だよ」

暗くてよく分からないけれど矢張り多分お父さんは笑っている。

「小指で髪を耳に掛ける仕草」

「え？」

「実はその仕草、母さんにそっくりなんだ」

「そ、そうなの……」

どうやらシートの汚れについての話ではないようだ。

「母さんをよく見ていれば分かるよ、しょっちゅうそれやってるから。やっぱり優美は母さんに似てるんだなあ」

「そうなんだ。今度気を付けて見てみるよ」

お父さんは実に嬉しそうに頷いている。

結局、シートに付いていた汚れの事を聞く事は出来なかった。まあ聞いた所でどうにもならない。いや、寧ろ……。

聞いてしまったらどうなるのだろう……。

私は残った汚れを、指を擦り合わせて拭おうとする。すると滲んだ冷汗と混じり合ってべたべたと指の腹に広がった。

……気持ち悪い。

お母さんは運転免許の更新に行っていないので、この車はお父さんしか運転しない。つまりお父さんは運転席にしか座らない。しか

しこの血痕は後部座席にある。

少なくとも、お父さんの血ではない。

それならば誰の血なのだろう。もしかすると私がどこかで怪我をしていたのかもしれないと思い、手や足を確認してみたがどこも怪我をしていない。

況してやこの血は乾いている。どう考えてもこの十分足らずの間に付着したものは考えられない。それに私が最後にお父さんの車に乗ったのはもう何か月も前の話だ。だから私が以前付けた血とも考え難い。

お母さんもずっと家に居て車には乗っていない筈だ。つまりお母さんのものとも思えない。

つまり……

……私達家族以外の血。

そう考えると……怖い。

「どうしたんだい優美？」

不意にお父さんが声を掛けてきた。

「別に、何でもない」

「そっか。何かそわそわしてるから、トイレでも行きたいのかと思っただよ」

「ち、違うよ……」

「まあトイレだったら言ってくれたら車停めてあげるけどな。もしそうだったら我慢しないで直ぐ父さんに言いなよ」

「はい」

私が返事をするとお父さんはいつものように優しく笑った。

「良い返事だなあ。昔の優美を思い出すよ、昔の……小さな頃の素直な優美をね」

ようやく私達の家が見えてきた。

私はお父さんに、はい、と答えた。一般的な現代の家庭では考えられないような丁寧な返事。何故だか判らないけれど、自然とそう答えた。

にこにこと微笑むお父さん。
大好きなお父さん。

けれども……怖いお父さん。
怖い、怖い、怖い、怖い、怖い。

……お父さん。

これが我が家の、怪物。

※

十月三日。

目覚めの気分は最低最悪。

ベッドの上で体を起こして顔を拭うと目尻が濡れていた。それは耳の方まで続いているようだ。

多分、涙だ。

最悪の気分の理由^{わけ}は夜明けに見た夢。

私は重くて黒くて生温かい粘液に覆われて動けなくなっていた。

それは意思を持っているかのように私の^{からだ}軀の上をねちっこく滑っていて、まるで醜く大きな怪物に舐め回されているようだった。何も見えない真っ暗で湿氣^{しき}でいて狭苦しい空間、押さえ付けられているように私の体は動いてくれない。

嫌だ。

やめて。

怪物の舌は私の頬を、口を、耳を、首を、胸を、脇をゆっくりと味わうように舐めてゆく。恐くて気持ち悪くて、本当に嫌だった。

そして何より一番嫌だと思ったのは、一瞬とは言えそれが心地良^よいと感じてしまった事だった。

粘液に包まれる感覚、気持ち良い。

軀が溶けてゆく感覚、気持ち良い。

自分が消えてゆく感覚、気持ち良い。

憂鬱^{メラソリック}で不快な夢から醒めて少しずつ私の精神^{こころ}の軸はいつもの私に

戻り始める。夢魔の責めに雌猫のように喘いでいた自分自身を思い出してこう思った。

消えたい、と。

本当に自分自身が嫌になった。夢の中とは言え、汚くて穢きたない粘液に舐められて気持ち良いと思ってしまった。

洗面所で顔を洗って鏡に映った顔を見て更に私の気分は落ちた。

……何て、醜いんだろう。

リビングに行くと言った誰もいなかった。

テーブルの上には作り置き朝食。ラップを掛けられた目玉焼きとベーコン。そこに「冷めてたら温め直してね」とお母さんの書き置きも残されている。確かお母さんは近所の奥さん方と朝から出かけると言っていた。きっとこの家で二番目に出掛けたのだろう。

私は冷凍庫から食パンを一切れ取り出してトースターで焼きながら、すっかり冷めてしまっていた目玉焼きとベーコンを電子レンジで温める。待っている間、コップに水を注いで一気に飲み干した。

一番早く家を出たのは、きっとお父さん

我が家の怪物は一番に出掛けた筈だ。

それにしても何故あんな夢を見たのだろうか。私は定期的にあれと良く似た夢を見てしまう。それは決まって良くない事が起こった日の夜明け頃だ。

良くない事……。

そう言えば昨日は何があっただろうか。

……。

……………。

良くない事というか、気になる事があった。

あれは確かお父さんの車で家に帰ってから風呂に入った後だったろうか。髪をタオルで拭きながら私の部屋に戻ると携帯電話のランプが点滅していた。何だろうと思って画面を開くとメールを受信していたのだ。

From…明歩

件名…なし

本文…もう死にたい

絵文字も顔文字も句点すらない無味乾燥の一文。しかしその内容は何とも悲痛な助けを求めるものだった。

背筋が冷たくなる。

心配になった私は急いで電話を掛けた。しかし無機質なコール音が受話器から発せられるだけで明歩が電話に出る気配は一向になく、諦めて私は一度電話を切った。

——もう死にたい

その短い言葉が忙しく私の頭の中をぐるぐると回る。私は直ぐにもう一度明歩に掛け直した。すると今度はコール音すら鳴らずに、圏外、とアナウンスされた。

一体、明歩に何があったのだろうか。心配で、心配で堪らない。

まさかこのまま本当に死を選んでしまったりしないだろうか。

……嫌だ！

そんな事を考えながら私はベッドに倒れ込んでそのまま憂鬱な眠りに落ちていったのだった。多分その所為だろう。その所為である夢を見たのだろう。

今日もいつも通りの一日に違いない。だから明歩もいつも通りだ。昨日のメールは何かの間違いに決まっている。そうして私の脳裡に過った不吉な考えが杞憂きゆうである事を祈るしかなかった。

私は明歩にメールを送っておいた。

Re…明日も学校来るよね？

抜けるような秋晴れの朝。

爽やかな青空と相反して私の気分は最低最悪。何故なら朝一番に会ったのがあの北野秀一で、しかも彼が意図の分からない質問をしてきたからだ。

「お前、好きな人とかいるの？」

一体何のつもりなのだろう。

「はあ、朝っぱらから告白？　ちょっとはムードってもんを考えたらどう？」

私はあからさまに嫌そうな顔をして言ってやった。

毎朝歩いて学校へ通う私は、何故か旭ヶ丘の駅前で北野君と会う事が多い。きっと私が家を出る時間と歩く速さが電車のダイヤとぴたりと合ってしまったているのだろう。お陰で三日連続北野君と登校している。

その所為で、私と北野君が付き合っている、なんて噂も立ってしまっているらしい。まったく勘弁して欲しい。

「いや、別に告白って訳じゃないんだ……。ただ、お前にも好きな人っているのかなって思ってる」

「仮にいたとして何で北野君に言わなきゃいけないのかなあ」

また北野君の詮索が始まった。彼は私から何かを引き出そうとしている。私は髪を耳に掛けて北野君の顔を覗き込んだ。

「北野君、何か企んでる？」

「企んでるって……何を」

僅かに北野君は動揺した。

「うーん、北野君が私の事を好きだって事はまずなさそうだしね」

「何でそんな事、言い切れるんだよ」

「直感ってやつだよ。そうだなあ……例えば、私と誰かを無理矢理くっつけようとか考えてたりしない？」

どうやら凶星だったらしい。北野君は観念したように息を洩らした。

「優美って彼氏とか作らないのか？」

「あれえ、何で北野君は私に彼氏いない事知ってんのかな。なるほど、もうある程度は下調べしてあるって事ね」

わざとらしく言葉尻を吊り上げて言うのと北野君は更に焦っていた。いつもの冷静な北野君と違って少しだけ好感が持てた。

「どうせ明歩にでも聞いたんでしょ。大体予想付くよ」

「ご明答。昨日の帰り道、小森に聞いたよ。放課後も男子と遊んだりしてる様子もないから、彼氏はいないんじゃないかってさ」

……昨日の帰り？

私と別れた後、明歩は北野君と会ったのか。

「全く、お喋り明歩め……。そうだなあ。今は彼氏いないけど、もし良い人が現れたらいいなと思うよ」

どんな人がタイプなのかと北野君は聞いてくる。何故彼にこんな事を教えなければいけないのか。私は適当に、勸善懲惡の子供向けヒーローのような人物像を答えてやった。すると北野君はうんうんと頷いている。まさかそんな人に心当たりがあるのだろうか。

いる訳がない。

この世に正義の味方なんている訳がない。

正義の味方がいるのなら……

……あの時。

……どうして誰も私を助けてくれなかったの？

ちょっと待って！

あの時って、いつ？

わからない……。その時また私の胸の中に夢の粘液が溢れ出した。

「でも、今は彼氏いらない……」

だって私は醜いから、と続けてしまいそうになった。北野君は、そうなのか、と言って残念そうな顔をしている。

彼氏か。でも私にそんな資格などない。それに……。

「うん。ちょっと事情があってね。今、家が忙しいんだよ。だから今は彼氏がどうか考えてないんだよね」

そう言うのと北野君はそれ以上勧めようとはしなくなった。

家が忙しい。そう。私の家には怪物がいる、どんな正義の味方でも退治する事の出来ない怪物。例えば正義の味方が助けに来てくれた

としても、きつと怪物を見つける事は出来ないと思う。何故なら怪物は、普通の人が見てもただの優しいおじさんにしか見えないのだから。

私の家には、私にしか見えない怪物がいる。

やがて紫陽花坂に差し掛かり、百階段を上り始めると北野君は不意に明歩の事を口にする。彼は昨日の明歩の様子が怪訝おかしくなかったかと聞いてきた。確かにその通りだ、私は明歩が紫陽花坂で私と別れた後に駅とは違う方向に歩いて行った事を北野君に教えた。

「お前はその後、真っ直ぐ家に帰ったのか？」

そうやって北野君は私の事も聞いてくる。どうして彼はいちいち人の事を詮索してくるのだろう。

「そのまま家に帰ったよ、何でそんな事いちいち報告しなきゃいけないの」

嘘だ。

一人で繁華街に行ってCDショップで音楽を試聴していました、などと本当の事を言おうものなら更にねちっこい取調べが始まるに決まっている。

そんな事よりも……。

「それより北野君が明歩の様子が変だったなんて何で知ってるの？もしかして北野君って明歩の事ストーキングでもしてんの……」
妙な警戒心を張らせない為に冗談っぽく聞いてみた。

「馬鹿、さっき昨日の帰り道に小森と会ったって言っただろ。百階段の上でばったり小森に会ったんだよ。何かその時も妙に落ち込んでたって言うか、何て言うか……」

そう言って北野君は口籠った。

矢張り明歩は私と別れた後に北野君に会っている。しかも元気な様子ではなかったらしい。一体何があったのだろう。

「そうなんだ。実は私も気になって昨日の夜、明歩に電話してみたんだ」

「何か言ってた？」

「それが出なかったんだよ。しかも気になる感じなんだ」

「気になるって？」

「一回目掛けた時には普通にコール音が鳴ったの。五分ぐらい経ってからもう一回電話してみたら今度は、電源が入ってなかったんだよ」

北野君は眉間に皺を寄せて考え込んでいる。

一応『もう死にたい』というメールの事は伏せておいた。あれはきっと私だけに向けられたメッセージなのだろうから誰にも言うてはいけないような気がした。

それに北野君にその事を言ってしまうと更に事が大きくなってしまいそうな気がして堪らなかったからだ。

「その後メールも送っておいたんだけど、返信ないの。どうしたんだろ、私、明歩に何か悪い事でもしたのかなあ……」

そう言って明歩から来たメールの事は徹底的に誤魔化しておいた。いつの間にか私達は百階段を上り切っていた。話をしながらだと長い百階段も意外と直ぐに上っているものだ。ここまで来ると旭ヶ丘高の生徒もかなり目に付くようになる。ふと後ろを振り向くと、百階段の下の道には同じ制服を着た男女がまるで蟻の行列のようにぞろぞろとこちらへ向かって来ていた。

私と北野君は葉だけになった紫陽花に囲まれた坂道をのんびりと歩いてゆく。すると北野君はちらりと脇見した。

「どうしたの、北野君？」

「いや、確かここってさやかかの都市伝説にも出てきたなって思ってた。彼は百階段を上り切った所にある小さな公園をちらちらと見ている。私はそんな北野君に向かって言った。

「どうでも良いじゃない、そんなの……」

十月になり随分寒くなってきたが正午を回るとぽかぽかと暖かい気候になる。

中庭で昼ご飯を食べているとちよつとしたピクニック気分も味わえ

るのだ。一日中こんな調子なら嬉しいのだが。

「まったく……美那子先生も強引過ぎるよね」

綾奈はそう言いながら紙コップのカフェオレを一口啜^すった。

「あはは、まあ綾奈がスリムだって証拠じゃないの」

「まあそう考えとこうかな」

彼女は来週行われる体育大会のおんぶりレーのバトン役として抜^ぼ擢^きされた。本来ならばクラスで最も小柄な明歩が選ばれる筈だったのだが今日彼女は欠席していた。

昨日のメールでは様子のおかしかった明歩も今日になればいつも通り学校に來ていると思っていた。しかし結局明歩は学校へ來ていなかったのだ。私が思っていた「いつも通り」は少しだけ壊れている。そして明歩からメールの返信も來ていない。

「明歩來てないね」

食べかけの弁当の箱を見詰めながら私はぽつりと漏らした。

「そう言えば明歩が学校休むなんて珍しいよね。ちっちゃくて体も弱そうな割に風邪とかひかないのに」

「うん……」

そう言う綾奈も色白で華奢で十分病弱そうだ。彼女の言う通り明歩は滅多に学校を休んだりしない。本当に何かあったのだろうか。普段は私と綾奈と明歩の三人で昼ご飯を食べているのに、こうして一人足りないとか調子が狂ってしまう。

明歩はいつも学食で買った小さな蒸しパンをウサギやリスのようにちびちびと食べる。彼女はそれだけを食べて、もうお腹いっぱい、と幸せそうな溜息を吐くのだ。そんな明歩を見て私達も幸せな気分になる、というのがお決まりのパターンだった。

「心配だよ、後で電話してみようかな……」

「私も昨日電話してみたんだけど電源が入ってないみたいなんだ」
私がそう言うのと綾奈は顔を顰めた。その時、オラァどけどけえこの野郎、と食堂の方から野卑な叫び声が聴こえた。その方を見て綾奈は苦笑しながら呟く。

「ああ、今日もやってるね」

その声の主は我が二年一組の間島健也。

校則違反の茶色い頭の間島君は遠くから見ても良く目立つ。

彼は購買に並ぶ人垣を強引に掻き分けて突き進んでいた。

「ホントだ、やってるね。まったく間島君ってちょっと暴力的で恐いよ」

動く度にウォレットチェーンをじゃらじゃらと鳴らしながら間島君は目の前にたむろしている生徒を投げ飛ばしている。

「そうかな、私は結構紳士的だと思うけど」

「どこが？」

「よく見てごらんよ、間島君が投げ飛ばしてるのってみんな男の子だよ」

「当り前！ 幾らなんでも女の子ブン投げるなんて事はしないでしょ」

「それもそうだね。でも間島君ってちゃらちゃらしてるようで結構純情らしいよ。優美って子供みたいに純粋な男の子って好きなんじゃないの？」

綾奈は不敵な笑みを浮かべながら横目に私を見る。

「まあ遊び人よりは純粋な人の方が良いけど、間島君は……ちょっと……」

「ちょっと？」

「服装がだらしな過ぎる！ ズボン下げ過ぎてパンツ見えちゃってるじゃん！」

「まあね、私もアレはないと思うわ。でも中西君とかも言ってたけど彼って本当に純粋らしいよ。ああ見えて今まで彼女出来た事ないんだってさ」

「ふうん、意外だね」

すると私達の前をパックのコーヒーとカツサンドを二つずつ持った間島君が走り過ぎて行った。

「ほら、きつと誰かの分も買って行ってあげたんじゃないの。あれ

だけ混んでる食堂で人の分まで買ってあげるなんて友達思いな証拠でしょ」

「それってただのパシリってやつじゃん」

すると綾奈はまた不敵に笑う。

「優美も使ったら？」

「へ？」

「優美の美貌で間島君を召使いにしちゃうんだよ」

そう言って綾奈は肘で私の脇腹を小突いてくる。純粹そうで清楚な顔立ちをしながら彼女はまるで魔女のような事を言う。

「綾奈の馬鹿……」

「冗談だって。でも間島君と一緒にいると少なくとも安全だと思うよ」

「安全ってどういう意味で？」

「ほら紫陽花坂に最近出たでしょ、変質者が」

そう言えば先週ホームルームで美那子先生が言っていた、紫陽花坂でうちの学校の生徒が下校中に襲われたと。

「ああ、そんな事あったね」

確か被害に遭ったのは一年の女子で、幸いその子は無事に逃げ切れたらしいのだがスカートを切られたらしく、大事には至らなかったがその子は太腿に切り傷を負ってしまったそうだった。

そう、件の変質者は刃物を持っていたのだ。

目撃情報によると犯人は痩せ型の中年男。身なりは小綺麗なサラリーマン風で、道を尋^きくふりをして近付いてきたと思ったらいきなり刃物を突き付けられたそうだった。

「優美はそんな人と鉢合わせになったら、どうする？」

「うーん、大声上げて助け呼ぶかな」

「へえ、どうだろうね。実際目の前に刃物なんか出されたら恐くて声も出ないもんなんじゃないかなあ」

刃物を突き付けられた経験など無いのでどうなるかは分からないけれども、きっと綾奈の言う通り私も恐くて動けなくなるのだと思

う。

「間島君なら撃退できるんじゃない？」

「へ？」

「だから変質者をよ」

綾奈は猛スピードで駆けてゆく間島君の後姿を一瞥して言った。

「いや……いくらなんでも、それは」

相手は大人、更に刃物まで持っている。幾ら間島君が柔道の心得があるとしても流石にそれは無理だろう。危険過ぎる。

「でもね、優美の為なら例え刃物を持った危険人物とでも戦うと思うよ、間島君って」

何で？ と尋ねると綾奈はにやりと笑って私の目を真っ直ぐに見据えた。

「間島君、多分だけど優美の事好きなんだと思うよ」

「そんな訳ないって……」

迷惑だ。

あんなちゃらちゃらしてだらしない男の子なんて絶対にごめんだ。

「鈍いね優美は。今、走って行った時だって優美の方ちらっと見てたんだよ。もしかしたら購買の所で大暴れしてたのも優美の前でカッコつけたかったからなのかもね」

「目立ってたけど、カッコはついてないよ……」

それが男の子なんじゃないのかな、と言って綾奈はまたカフェオレを一口啜った。芳ばしいカフェインの香りが私の鼻腔を^{くすぐ}擦る。

「一回ぐらいデートしてあげたら？」

「そ、そんな……」

絶対嫌だ。

あんなズボンのずり下がっている人と一緒に歩くなど恥ずかし過ぎる。第一共通の話題など何一つない。

「そっか、そうだよ。優美には北野君がいるもんね」

「馬鹿！」

そんな事より紫陽花坂に出没したという変質者の特徴。痩せ型の

中年男、小奇麗なサラリーマン風の服装。私は不意にお父さんの姿を想像してしまった。車の後部座席に残っていた血痕が脳裡を過る。

まさかお父さんが？

まさか……ね。

その日、結局明歩は学校に來なかつた。

メールも電話も返つて來る事はなかつた。上手く表現できない不安が募つてお腹が痛くなる。

美那子先生の歸りのホームルームも終わり、私はただ一人家路に着く。

独りぼちで紫陽花坂を下る私の頭の上に広がる空は昨日よりも赤い。時刻は同じなのに昨日よりも赤い、暗い。秋が深まり冬が見え隠れし始めた所為で少しずつではあるが、確実に毎日昼の時間が減っている。

葉だけになつた紫陽花が風に揺れてかさかさ^{わら}と鳴つていた。紫陽花が私を見て笑っている、嗤^{わら}っている、晒^{わら}っている、嘲^{わら}っている。

……ねえ明歩。

……死にたいって、どういう事？

……嘘だよ、ね。

私は携帯電話を取り出して明歩の番号を呼び出した。しかし発信ボタンを押す事は出来なかつた、また出てくれなかつたら悲しいから。

ふわりと冷たい風が頬を撫でる。もう、秋なのだ。

気が付けば私は百階段の手前にある小さな公園に佇んでいた。何故だかは分からない、ふと気付いた時には金網に凭^{もた}れかかるようにしてミニチュアの町を見下ろしていた。夕陽に染まる建物はどれもオレンジ色に輝いていた。

……私は何故こんな所に？

この公園には近付いてはいけないのに。誰も近付いてはいけないのに。近付けてはいけないのに。

そして私は町に背を向け桜の木を見た。その瞬間、不意に気味の悪い映像が私の頭に再生される。

……何、これ。

赤くぬるぬるした生温かいモノ。それが泣いている、啼いている、鳴いている。いや、哭ないている。

その赤いモノが私を見ている、じつと。

「いやあ！」

私は悲鳴を上げた。はあはあと息を乱す私の頭の中からそのモノは消えていた。一体今のは何だったのだろう。

気持ち悪い。

胸の中に残留する確かな不快感。耐えきれなくなった私は昼に食べた物を全部吐いてしまった。びちゃびちゃと不潔な音を立てて吐瀉物が砂利の上に零れる。汚い、矢張り私は汚い。醜い。

口元を拭いながら金網に凭れ掛かって深呼吸する。するとひんやりとした夕暮れの空気で肺の中が満たされて少し気分が良くなった。今の衝動は何だったのだろうか、あの赤いモノが脳裡に浮かんだ瞬間、堪らなく……

……死にたくなった。

いつの間にか私の頬は濡れていた。あの怖い夢を見た後と同じように涙を流していたのだ、泣いていたのだ。

蹲うずくまって頭を抱えて震えていると人の気配がした。

「優美？」

名前を呼ばれて顔を上げると、そこには綾奈の姿があった。彼女は相変わらずの蠱惑的な瞳で私を見ていた。彼女は続ける。

「こんな所で何してるの？」

「分かんない……」

綾奈は薄く笑う。

「変なの」

「うん、私は……変だ……」

「何ワケわかんない事言ってるの。用事がないんだったら一緒に帰

ろうよ、変質者が出たら怖いし」

綾奈はそう言って私を引っ張り起こした。

「綾奈……何でここにいるの？」

「ちよつと興味が沸いてね。図書室で昔の新聞部が書いた冊子見つけたんだ。優美も知ってるでしょ、さやかの話」

「ああ、あの噂ね」

「この桜の木の下はさやかの親友、りかこがネズミの死骸を埋めた場所なんだよね。どんな感じなのか気になったのよ」

綾奈は風に黒髪をふわりと靡^{なび}かせながら背を向けた。

「ホントに詳しく書いてあったよ。凄いよね、新谷詩緒里^{しんたにしおり}って人」

「新谷詩緒里……」

「うん。昔の新聞部の人なんだけど、さやかの話をホント良く調べてあったんだよ。文章も丁寧だったし、まるで短編小説みたいだった。さやかの話なんて旭ヶ丘高の生徒なら誰でも知ってるけれど改めて文章で読むとまた興味深いよね」

背中を向けたまま話し続ける綾奈。

「で、この公園はりかこの場所なんだよ……」

死骸が埋まっている。

この公園には、死骸が埋まっている。

「私全部覚えてるから優美にも教えてあげようか、さやかの事……」

……死骸が。埋まっている。

「いない」

私がそう答えると綾奈はゆらりと振り向いた。全く空気が動かないような静かな動作だった。

「そっか、つれないのね」

その話は嫌いな、と言うと綾奈は幽かに顔を顰めた。

「綾奈、そろそろ帰ろっか」

私は綾奈の肩を抱いて公園の外へと促した。この公園には近付いてはいけない、私の総ての細胞がそう言っている。ふと空を見上げると、いつの間にか空は赤色を通り越して紫色になりつつあった。

夜がやって来る。

綾奈の口から零れた一つの言葉、それが私の耳に張り付いて離れようとしないう。気にしないでおこうと思っても歯痛のように付きまとう。

……新谷詩緒里。

私はその名前を知っていた。

綾奈を駅まで送り、その後のろのろと亀のような歩みで家に帰ってきた。

「ただいま」

玄関の靴箱の上に飾ってあるロシア土産のマトリョシカにそう呟いた。これはお父さんが仕事でロシアに行った時に買って来たものだ。最初はボーリングのピンのように見えて可愛いとは思っていなかったが、こうして毎日見ていると愛着も湧いてくる。女の子を象かたどった木工細工はいつでも私に柔らかな笑みを向けてくれていた。

七時前、もうお父さんが帰っている時間だ。

靴を脱いでそろりそろりとリビングを覗く。しかしそこには誰もいない。いつもはお父さんがソファアにどっかりと腰掛けて新聞を読んでいたりするのに。

キッチンから物音がする。

「ただいま」

「あら、優美。おかえり」

お母さんが忙せわしなく夕飯の支度をしていた。匂いから察するにお母さんの得意料理、ハッシュドビーフだろう。この良い匂いが鼻を掠かすめると何だかお腹が空いてくる。

「お父さんはまだ帰ってないの？」

「そうなの、何か最近遅いのよ。そう言えば昨日も遅かったしね」
片手で鍋の火加減を調節しながらお母さんは答えた。

「きっと忙しいんだろうね、お医者さんって」

お母さんの言葉に私は小さく頷いた。

お父さんは旭ヶ丘総合病院で小児科医をしている。優しくて子供からも人気があるらしい。私はお父さんが仕事をしている所を見た事はないけれど、普段からにこにこしているお父さんから「優しい先生」という姿を想像するのは実に容易だ。

「うん、お父さんは先生だからね」

お父さんが医者という安定した仕事をしているお陰で私たち家族は、他の人より少しだけ大きな家に住めて、少しだけ美味しい物が食べられて、少しだけ贅沢な暮らしが出来ている。

「何か手伝おうか、お母さん」

床に鞆を置いて腕まくりしようとする私を、大丈夫よ、と一言遮った。

「ありがとう、でももうほとんど出来ちゃってるから良いの」

「あ、そうなの」

「うん、準備出来たら呼んであげるから部屋で待ってなさい。その内お父さんも帰って来るでしょ」

「わかった、そうする」

真っ白な壁紙に焦げ茶色のフローリング。階段もお母さんが毎日掃除しているのでいつもぴかぴかだ。

一段一段、階段を踏みしめながら私はお父さんの事を思い出す。一年前、ある事件が起こった。お父さんが患者の母親に訴えられたのだ。女兒の体を診察の枠を超えて必要以上に触ったというものだった。

——そんな事ある訳がない！

お母さんはそう言っていた。いつもは上品で物静かなお母さんが声を荒げているのを、その時初めて見た。勿論お父さんもはっきりと否定していた。きっと患者さんの勘違いなんだろう、と言っていたのを覚えている。

幸いお父さんのその言葉が通り、病院側の勝訴になった。

こうして一件落着いたように思えたのだが、拙い事まずになっていた。小児科医女兒の体を触る、という見出しで小さくではあるがニュー

スに取り上げられていたのだった。それにはお父さんの名前まで発表されていた。

これでは潔白を証明できたのにまた善からぬ噂が立ってしまう。病院どころか名前まで晒されたお父さんの名誉はどうなってしまうのだろう。

案の定インターネット上では旭ヶ丘総合病院やお父さん、果ては私達家族への中傷が始まった。

——何も悪い事なんてしていない。だから堂々としていれば良いんだ。

そう言ってお父さんは中傷を全く気にしている様子はなかった。

変態医師と言われて後ろ指を差されてもお父さんは堂々としていた。

しかし……

——お前達にも迷惑が掛かって、すまない。

そう言ってお前達家族の前でだけ時々沈んだ顔を見せていた。

正直あの頃は本当に辛かった。学校の友達の中にもそのニュースを見た子がいるかもしれない、もしかすると久保田という名前から私のお父さんだと気付く子もいるかもしれない。毎日毎日びくびくしていた。

そして恐いもの見たさでインターネットの掲示板を覗いてみたりすると、その瞬間見た事を後悔してしまう程の中傷で満ち溢れていたのだ。お父さんや私達家族に向けられた汚い言葉の数々。目が回りそうだった。

そして一年経った今、人々は皆飽きてしまったのか私達への中傷も止んだ。また別の中傷の的を見つけて私達の事など忘れてしまったのだろう。

日常は帰ってきた。お父さんは今まで通り医者を続けられている。私の事も周りの誰にも気付かれる事はなかった。

お父さんがそんな事をする筈がない、とお母さんは初めから信じていたようだけれど私は少し違った。

……きっと真実は違う。

……お父さんは本当にやった。

何故か私はそう思ってしまった。お父さんの潔白を心から信じる事が出来なかったのだ。何故だか判らないけれど……。

お父さんを信じられなかった。

階段を上りきって部屋の扉を開けた。

勉強机と本棚とベッド。可愛らしいぬいぐるみなどは一つもなく、我ながら女の子らしくない部屋だと思う。この無機質さはまるで自分が女である事を否定しているような気さえする。

決して男になりたい訳ではない、ただ女でなくなりたいという感じだ。

勉強机に鞆を置いて、私はベッドに倒れ込んだ。仰向けにぼんやりと天井を見詰めていた。四角く切り取られた窓から見える空はもう黒に近い紺色をしている。外には夜が広がっているらしい。

ゆっくりと流れてゆく時間の中で私は溶けるようにうとうととまどろんでしまう。

その時、突然携帯電話が鳴った。

一気に現実引き戻された私は弾かれたように飛び起きて携帯電話を手取る。耳障りな電子音を鳴らせ続ける携帯電話の画面を確認すると綾奈の名前が表示されている。

一体どうしたのだろう……。怪訝に思いながら私は受話ボタンを押して電話に出る。

「もしもし、どうしたの？」

『優美？ あの後大丈夫だった？』

綾奈の声は少し上擦っていて、どこか焦っているようだ。彼女が取り乱している所はあまり見た事が無い。

「大丈夫ってどういう事？」

『また出たのよ、変質者が』

えっ、と洩らして私は口を噤んだ。

『ほら、三組に中村由佳^{なかむら ゆか}って子がいるの分かる？』

「知ってるよ。確か美術部の子だよ」

そうそう、と受話器の向こうで相槌を打つ綾奈。私はその由佳という子と特別仲が良いという訳ではなく、精々すれ違った時にあいさつする程度だ。温和おとなしい感じの女の子という事ぐらいしか私は知らない。確か綾奈とは仲が良かった筈だ。

『由佳がね、さっき百階段の下でその変質者に襲われたんだって』
「マジで」

『うん。腕掴まれたんだけど怖くなって大声出したら駅の方に逃げて行ったらしいの。丁度優美と別れた後に由佳から電話があってね、さっき優美にも電話したんだけど出ないから優美まで襲われちゃったと思って心配したんだよ』

携帯電話を鞆に入れたまま歩いていたので彼女からの着信に気が付かなかった。

「そうだったんだ、心配掛けてゴメンね」

『良いの良いの、無事だったって分かったから』

「それより由佳ちゃんは大丈夫だったの？」

『辛い怪我もしてなくて大丈夫だったみたい。ただ凄く怖かったみたいで電話してきた時も泣いてたけどね。殺されるかと思った、って言ってた』

「そっか。わざわざ心配してくれてありがとうね」

『うん、私達も気を付けないとね』

そうだね、じゃあまた明日。そう言っただけで私は電話を切った。

取り乱した綾奈の声と不穏な話題の所為ですっかり目が覚めてしまった。ここ数日現れる紫陽花坂の変質者、そして全く連絡の取れない明歩。点と点が私の中で線になりつつある、悪い予感が線で繋がりつつある。

そして、玄関が開く音がした。ただいま、と明るい声が家中に響き渡る。実に遅い帰宅だ。私の中に新たな点が浮上してしまった。

我が家の怪物が帰ってきた。

※

十月四日。

綾奈ちゃんに聞いたの？

うん、私は大丈夫だったよ。本当に怖かったけれど思いっきり大声で「助けて！」って叫んだら逃げていったの。恐かった……殺されるかと思った。

だってカッターナイフ持ってたんだよ！

あ、ごめんなさい。大声出しちゃって……。コンクールに出展する予定の絵が行き詰って一人で残って描いてたの。それで帰りも私一人だったのね、暗くなりかけてたから急いでただけけれど。もしたら百階段を下りた所で知らない人に声を掛けられたの、君は旭ヶ丘高の生徒なのかって。

制服見れば分かるのにね。

一応、はい、って答えたらいきなり腕掴まれてカッターナイフ見せられたんだよ。今からおじさんの言う通りにしなさい、って。その瞬間は恐くて声が出なかったんだけど何とかしないと殺されちゃうと思って叫んだの。もしたら逃げて行ったよ、確か駅の方へ逃げて行ったよ。

私、その男が逃げていった後も恐くて動けなかった。恥ずかしい話だけどその場で泣いちゃった。その後、直ぐに綾奈ちゃんに電話したの、一人でいるのが恐かったから。綾奈ちゃんとの電話を切らないまま駅まで歩いて行ったんだ。

綾奈ちゃんと電話してなかったら私……ずっと泣いてたかも。

確か六時半過ぎだったと思う。はっきりとした時間は覚えてないけど、結構暗くなってたからそれぐらいだと思う。

犯人の特徴？

スーツ姿のどこにでも居そうなサラリーマンみたいな男の人だったよ。一目見て「不審者」とは思えないような格好だったな。体型は、そうだなあ……痩せ型っていうの？ 少なくとも太ってはいなかったよ。

ん、どうしたのそんな顔して。心当たりでもあるの？

まあ良いや。とにかく私は絶対に一人で帰らないようにする、もうあんな目に遭いたくないもん。私も優美ちゃんや綾奈みたいに可愛かったら男の子に守って貰えるんだろうけどね。

優美ちゃんも気を付けてね。

中村由佳はそう結んで三組の教室の奥へと引っ込んでいった。

「あ、ありがとう」

私が礼を言うと彼女はこちらを振り返り、困った顔を浮かべて軽く会釈をした。

昨日、綾奈から掛かってきた電話の内容が無性に気になって、昼休みの終わりに昨日の被害者である美術部の由佳の教室を訪ねてみたのだ。

どうも私は由佳とは合わない。

決して嫌いという訳ではないが好きにはなれない種類の人間だ。少なくとも友達にはなれない。

今、ほんの五分喋っただけでもそれは分かる。目の前にいるのになぜか由佳が遠く感じられていた。それは彼女が私に対して距離を置いたような話し方をするからだろうか、上手く表現は出来ないけれど由佳は声に仮面を被せているようだった。慣れない相手と一定の距離を保つための仮面。バリケード

因みに私達は一度も目を合わせなかった。

そして彼女の話を聴いている内に私の舌の上がざらざらと乾いていった。会話の空気が悪い所為ではなく、由佳の語った犯人の特徴をもとに頭の中で構築した犯人像がとんでもない姿をしていたからだ。

……小奇麗なスーツ姿。

……痩せ型。

私は妙な胸騒ぎを覚えずにはいられない。

私の頭の中にイメージは、どうしても私のお父さんと重なってしま

う。スーツを着た痩せ型という特徴の男ならこの国には掃いて捨てるほどいるかもしれないけれど、不思議と私はお父さんを連想してしまった。

勘違いだとは、思う……。

多分……そう思う。

私は今日の放課後からお父さんの監視を始めようと思う。それで紫陽花坂の変質者の正体がもし本当にお父さんだったとしたら……どうしよう。

ざわざわと騒がしい休み時間の廊下。その時、私の携帯電話が一通のメッセージを受信した。

From…明歩

件名…なし

本文…今夜、遊びに行ってもいい？

※

消毒液の匂いが染みついた建物。

この巨大な白い建造物の中で毎日一体何人の人間が生まれて、そして死んでゆくのだろうか。戦争もない平和なこの現代で、病院とこののは最も人の生死にかかわる場所と言えよう。

私は一階の小児科を覗いたが、診察室に掛けられている担当医のネームプレートにお父さんの名前はなかった。どうやらこの時間、お父さんは外来患者を診ているのではないらしい。入院患者を回診しているのだろうか。確か小児患者が入院しているのは五階。

エレベーターで五階に上がると、壁に可愛らしい象やキリンの切り絵が貼られていてまるで保育園のようだった。保育園との違いは消毒液の匂いが充満しているという事ぐらいだろう。

入院病棟に入る際には、ナースセンターの前に置かれている面会名簿に記名しなければいけないきまりなのだが、私にはそんな事で

きない。もし後でお父さんに私の名前を見られる事でもあれば隠れて監視している意味がない。適当な偽名を書いても良いのだが、下手な小細工は逆に身を滅ぼす結果になり兼ねない。出来るだけ嘘は最小限しか使うべきではない、と何かの本で読んだ事がある。

私は身を屈めてこっそりとナースセンターの前を通り過ぎた。謂わばこれが関所のようなもので、ここからは堂々としていれば良い。すれ違う看護婦や医師にも会釈をする。要はお父さんにさえ見つからなければ問題ない。

廊下を歩いて行くと病院とは思えない程賑やかな声が聴こえてくる。小児患者の大部屋だ。入院しているという事は体のどこかを病んでいる筈なのだが、矢張り小さな子供は元氣だ。狭い部屋に閉じ込められて、あっさりした物しか食べさせて貰えなくて欲求不満が爆発寸前なのだろう。

ちらりと中を覗いてみると、そこはどうやら女児の六人部屋のようだ。点滴のスタンドに乗ってスケートのように滑る子や隣のベッドの子と何やら歌を歌っている子もいる。ここは本当に病院か。

「こらっ、騒いじゃダメだぞ！」

小さな彼女達を注意したのは男の声。すると皆、ごめんなさい、と素直に大人しくなった。

聞き覚えのある声。

男は白衣を身に纏まとっている、医師だろう。その医師は一番奥のベッドの前に立って、そこに座っている女の子の口の中を診ている。どうやら診察中のようなだ。私はその医者いしやの横顔をみとめると慌ててドアの陰に身を隠した。

お父さんだ。

白衣を着ているお父さんは家で見るといつものお父さんとはまるで別人だ。今は私のお父さんではなく、子供達の久保田先生。子供達に優しい笑顔を向けるお父さんを見て私は少し嫉妬やきもちをやいた。しかしそれと同時に安堵もした。

こんな優しい人が変質者の訳がない、と。

お父さんが由佳を襲ったなどきつと私の杞憂^{きゆう}に過ぎない、私はそう信じている。しかし私の胸に痞^{つか}えている一かけらの黒い塊は何なのだろう。

どろどろとしたゼリー状の黒い塊。

その塊が夜になると溶けて、夢の中でぬるぬると私の体の上をぬめぬめと這い回り、押さえつけ、舐め回してくる。

何故かあの夢の粘液が脳裡を過った。

「先生、ユウミはいつ退院出来るの？」

お父さんの診察を受けている女の子が口にした名前を聞いて、私の口から心臓が飛び出しそうになった。

「大分元気になってきたみたいだね、良かった良かった。直ぐに退院出来るよ。ただしユウミちゃんが良い子にしていたらね」

するとユウミと呼ばれた女の子は白い歯を見せて笑った。

「じゃあユウミ、良い子にしてるよ」

ユウミ。私と同じ名前だ。

お父さんもユウミちゃんに向かって優しく微笑んでいる。そしてお父さんは聴診器を耳に付ける。

「よし、じゃあ最後に胸の音聴くからね。良い子だからお洋服脱いでね、ユウミちゃん」

……。

ぞくり。

お父さんのその言葉を聞いた刹那、私の全身に鳥肌^{よだ}が弥立^{よだ}った。

寒い、寒くて寒くて死にそうだ。

……お洋服脱いでね、ユウミちゃん。

頭の中でその声を繰り返すと寒気は吐気^とに変わった。黒い塊がどろどろと溶けだして私の肌の上に広がる。

ぬるりぬるり。

ちらりと病室を再び覗くとユウミちゃんは従順に小さな指でボタンを自らはずし、まだ膨らんでいない乳白色の胸を露わにさせていた。お父さんはユウミちゃんの胸に聴診器を持った手を徐^{おもむろ}に近付け

てゆく。

思わず私は目を背けた。

……お洋服脱いでね、ユウミちゃん。

……オヨウフクヌイデネ、ユウミちゃん。

いや……。

……ユウミちゃん。

……優美ちゃん。

お願い、もうやめて。

私は弾かれたように駆け出して女子トイレの個室に逃げ込んだ。

そして胃の中の物を全て吐き出してそのまま汚い床に蹲うずくまる。いつの

間にか私の頬に涙が伝っていた。狭く薄暗いトイレに私の鳴咽だけが反響し続ける。

しくしく、と。

携帯電話を開くと、トイレの個室にパチンという音が甲高く響いた。

いつの間にか三十分近くも経っていた。貝のように、泥のように、死体のように、私はぴくりとも動かずに項垂うなだれていたらしい。そして受信メールを見返していて、ふと思い出した。

後で明歩が家に来るのだった。

芋虫のようにのろのろとした動きで立ち上がり涙を拭いた。じっとしている間に体の周りに付着して固まっていた汚い泥が私の動きに合わせてぱらぱらと剥がれ落ちてゆくような感覚を覚えた。

……今日はもう帰ろう。

とぼとぼ、とぼとぼ。廊下を歩いていると金切り声とも呼べる臆ヒステリ躁ツラ的な女の声が聴こえてきた。

——怖い、怖い。本当に怖いんです！

ガラスを擦り合わせたような耳障りな叫び声。この廊下にあるどこかの部屋から発せられているのだろう。その声に不快感を覚えて顔を顰めながら廊下を歩いていると、その音源が分かった。

この個室だ。

何やら中から男と女が言い争うような声が聴こえてくる。男は「落ち着け大丈夫だ」「ナースコールを押せ」などと言っているが、女の方は相当取り乱しているのか何を言っているのか聴き取れない。きつと頭の狂^{おか}しい人なのだろう。

ネームプレートには「真中いずみ」とあった。

ドアが半分開いていたのでちらりと中を覗き込むと、ベッドの上には包帯でぐるぐる巻きになったミイラのような女が天井を見上げてぶつぶつと何かを呟^{つぶ}いていた。

……この子は……。

そしてその前にある二人の男の背中。驚いた事に、その二人は旭ヶ丘高校の制服を着ているのだ。しかもこの後姿……。

この二人が、何故ここに。

……間違いない。

間島健也。そして、北野秀一。

拙^{まよ}い、見つかる訳にはいかない。彼らに私がここにいる事を知られてはならない。間島君だけなら何とでも言い包める事は出来る……：……しかし北野君は厄介過ぎる。

彼はどんな秘密でも暴こうとする。たとえそれが知られたくない事であろうとも。それに勘が鋭く頭の回転も良い分性質^{たち}が悪い。

お父さんが紫陽花坂の変質者かもしれないと私が思っている事も知られてしまえば必ず首を突っ込んでくるに決まっている。更に、私の胸の中に潜んでいる黒いモノにも触れてくるかもしれない。他人にその記憶を触れられると、多分私は毀^{こわ}れてしまう。

そして二人は同時にこちらを振り向いた。私と目が合う。見つかった。私の首筋に冷たい汗が伝う。

どうしよう？

「あ、やっぱり北野君と間島君だ」

咄^{つつもて}嗟に私は平素^{じつもと}を装って二人に手を振った。声に動揺は顕れていないだろうか、笑顔は不自然でないだろうか、手は震えていないだ

ろうか。薄っぺらな平素の仮面の下には焦りの色しかなかった。もしその色が僅かでも滲みだしてしまっていたら忽ち見破られてしまう。北野君にはそんな能力がある。

久保田……と、間島君が私を呼んだのを皮切りに、早速北野君は私に質問を投げ掛けてきた。

「優美、お前こんな所で何してんの？」

その何気ない質問が今の私にとっては詮索、詰問、いや、尋問のようを感じる。私は細心の注意を払って事実を隠そうとした。

「眼科よ。ずっとコンタクト付けっ放しにしてたら目が真っ赤になっちゃってね。一階の薬局で目薬貰って帰ろうかと思ったたら君達の姿見かけたから付いてきたって訳よ」

思いの外、言葉はすらすらと流れ出てきた。その言葉は勿論嘘だ。しかし北野君の前で、嘘を吐く、という行為自体が危険過ぎる。上手く誤魔化せただろうか。

そして北野君は口を開く。

「そうなんだ。取り敢えず場所移動しないか？ 中庭の噴水前なんてどうだ、俺が缶コーヒーぐらい奢ってやるよ」

私には分かる。

北野君は私の嘘に気付いている。仮に気付いていないにしても、確実に訝しく思っている。その証拠に彼は私の目をじっと凝視^{みつめ}たまま逸らそうとしない、まるで私の瞳に真実が映っているかのように。

ここで目を逸らしてはいけない。私も彼の瞳を見据えたまま返事した。

「そうね、じゃあ行こっか」

体が冷える。

夜が近付いているからだろうか、それとも噴水の飛沫^{しぶき}が舞って来るからだろうか、それともさっきの北野君の目に凝視^{みつめ}られた所為だろうか。

とにかく少し寒い。

彼らは私を一人中庭のベンチに残して自動販売機へ缶コーヒーを買いに行った。ここからでも二人の背中に見える。彼ら何かぼそぼそと話しているようだ。後ろから見ていても間島君はいつもの軽い印象だけれども、一方の北野君は……何かが違う。

エレベーターに乗っている時からそうだった。あからさまに表情の種類が減っているのだ。

きっと彼の頭の中は今フル回転しているのだろう。私の行動と言葉とを照らし合わせて矛盾を探している、そして私の秘密を暴こうとしている。

私の言葉に変な点はなかっただろうか。

自分で言った台詞を反芻はんすうしながら北野君の後姿に目を向ける。その背中が堪らなく恐ろしいもののように思えた。

すると間島君が缶コーヒーを三本抱えて駆け寄って来る。腰に付けているウォレットチェーンや鍵がじゃらじゃらと喧やかましい。

「おまたせ、久保田の分は俺達が出しとくよ」

そう言って三本のコーヒーの中に一本だけあったカフェオレを私に差し出す間島君。私はそれを、ありがとう、と言って受け取った。その時、私の指が間島君の手に触れ、彼は幽かすかにぴくりと震えた。

可笑しかった。間島君は派手な髪型をしていて不良っぽい格好をしているが意外と純粹なのかもしれない。純粹ゆえに単純なのかもしれない。

「と、隣、座って良い？」

彼らしくない遠慮がちな言葉。猫を被っている訳ではなさそうだが、いつもの乱暴な言葉遣いは影を潜めている。どうぞ、と答えると間島君は二度小さく頷いて私の右隣に腰を下ろした。私との間にはコンマ五人分の空席が出来ていた。

間島君の顔を覗き込もうとすると彼はふと顔を背ける。そして彼は黙ったまま自分の缶を開けて、ずるずると音を立てながらコーヒーを飲んでいく。妙な沈黙。私もカフェオレの蓋を開けると、芳醇ほうじゅんな香りが鼻を掠めた。

そして北野君が戻って来る、私を観察するような目をして。彼の口が動こうとしている、尋問が始まる。拙い。

「で、北野君達は何してたの？」

彼が言葉を発する前に先手を打つ。こうでもしないと泥沼に引き込まれるように彼のペースに持って行かれてしまいそうだ。先手を打ったからと言ってそれを防げるとは限らないのだが。

「ああ、お見舞いだよ。真中いずみって子のな。知らないか？」

「マナカイズミ？ 知らないなあ……」

確か彼らがいた個室のネームプレートにあった名前だ。私はそんな名前に聞き覚えはない。さっきベッドに横たわっていた女がマナカイズミというのか。包帯だらけで、顔もちらりと見えただけで良く分からなかったけれども……

……誰だ、あの子は。

「それより久保田、目え大丈夫なのか？」

間島君が聞いてきた。

「うん、目薬点したら直ぐに治ったよ」

「へえ、どんな目薬なの？」

心配してくれているのか。余計なお世話だ。いくら焦っていたといえども、矢張り余計な嘘は吐くものではなかった。あまり追及されるとこの嘘は直ぐに破綻する。

「どんなのって言われても……そりゃ、市販されてるやつよりも効くやつでしょ」

「そうなんだ。やっぱ病院でもらう薬って普通のやつより良いんだな」

そして、ついに北野君が動き出した。

「その目薬、見せてくれないか」

「何だよ」

私は北野君を睨みつけた。しかし彼の詮索は止まらない。

「本当は持ってないんだろ、目薬なんて」
思った通りだ。

鋭い。矢張り北野君は私の吐いた嘘に何らかの綻びを見つけていたようだ。私は唇を噛んだ。追い打ちをかけるように北野君は更に続ける。

「優美、お前は一階で俺達を見て追いかけて来たんだよな」

「そうよ。エレベーターに二人が乗るところちゃんと見えたんだから、エレベーターが五階で停まったから私も五階に来てみたんだよ。確か一階のエレベーターホールには綺麗な胡蝶蘭が飾ってあったっけ？」

「良く覚えてるじゃん」

一気に捲し立てると北野君の声の調子に若干の変化が見られた。このまま押し切れるだろうか。

「当り前でしょ！」

更に強気に出てみたけれど……無駄だった。

「じゃあ俺達は三機あるうちのどのエレベーターに乗ったのか覚えてる？」

それは……。

私は口籠ってしまった。こうして私の嘘は脆くも破綻した。

しばらく間が開いた後、もう良いよ久保田、と間島君が口を開く。彼の話では、二人は私と会う一時間も前からあの病室に居たらしく、もし私が彼らの後を追って来たのならもっと早い時間に出会う筈だ、というものだった。

すると北野君が、

「だから俺達が五階で優美と会ったのは偶々（たまたま）の筈なんだよ。つまり、優美は別の理由で五階に居たって事じゃないのか」と更に付け足してくる。

別の理由……

……そこまで考えていたのか。

北野君の考えは私が思っていた以上に核心へと迫っていたようだった。私がこの病院に来た理由、五階に居た本当の理由。それは知られる訳にはいかない。

「嘔吐いて、ゴメン。本当はね……お父さんに、お弁当届けに来たんだよ」

私はもう一つの嘘を吐いた。

お父さんが医者だという事は二人とも知っているだろうから、この言葉だけでこの病院が私のお父さんの職場だと気が付くだろう。

一番知られたくない事を隠す為に二番目に知られたくない事を餌にする。そう、あの事（、、）を餌にする。

「もう、この際だから言っちゃうね。うちのお父さん……小児科の先生なんだ」

ここまで言うのと北野君なら気付くかもしれない。この病院で起きた小さな騒動、ある小児科医が貼られたレッテルの事を。

すると北野君は何か閃いたような顔で言った。

「テレビだかネットだか忘れたけど……ニュースでやってたような記憶がある。学校の近所の病院の話だったから覚えてるよ。確か一年前だったけ？　まさか……その時の小児科医ってのが優美の親父さんだって……訳じゃないよな」

矢張り気が付いたか。

間島君は知らない様子だったのであの騒動を手短に説明する事にした。いざ自分の口から説明するとなると非道く気分が悪い。話しながら当時の事を思い出して吐気が思想になった。それでも今、私がしようとしている事を知られるよりかは遥かにましだ。

「ごめんね、嘔吐いたりして」

話し終わると二人は黙り込んでいた。

一つ秘密を暴露すると、満足してそれ以上詮索しようとしなくなり核心だけは守る事が出来る。肉を切らせて骨を断つと言った具合にこちらも多少は痛手を負ったけれども致命傷だけは避けられた。様子を窺うように私は二人を見比べると、北野君ですら顔を伏せて黙り込んでいる。

作戦は成功した。

「だって私のお父さんがあの時の医者だなんてみんなに知られたら

……嫌われちゃいそうじゃん。でもね……北野君と間島君なら言っても良いかなって思った！」

爽やかを装ってそう言うど濁った空気は少しばかり良くなった。

……よし、退散するなら今のうちだ。

「じゃあ私帰るね。この後、用事もあるし」

「用事？」と、北野君。

「うん。明歩が後で私の家に来るからね」

「小森が？」

「何かさっき、今夜行っていい？　ってメールが来たのよ。大事な相談があるって感じだったけど……どうしたんだろうね」

そうかと北野君は呟いた後、彼は何やら間島君に耳打ちしている。何を言われたのかは知らないが間島君は少し動揺した様子だった。そして北野君は私に言う。

「なあ優美、今日は健也に送って貰えよ。ほらもう夕方だし一人で紫陽花坂通るのも気持ち悪いだろ」
ふざけるな。

これからまだ私にはやる事がある、この後が一番大切なのに。仕事が終わった後のお父さんを監視しなくてはならないのに。

しかし、ここで下手に断ってしまえばまた怪しまれてしまう。それに一緒に着いて来るのは間島君だけのようだ、北野君も来ないならばまだ良しと考えよう。

「そうね」

と言って私は精一杯の作り笑顔をした。

「じゃあ頼んだぞ、健也」

北野君が声を掛けると間島君は何とも言えない笑みを浮かべている。こうして私と間島君は二人で帰る事になった。

そして私達は歩き出す。

「よろしくね、間島君」

「お、おう」

隣の噴水が撥ねて、その飛沫が霧のように踊っている。それは斜

陽を反射して時折虹色に写る。

そして私の背後には鋭い視線。北野君は私の背中を視ている。じいっと。

夕暮れの紫陽花坂ほど気味の悪いものはない、と私は思う。

単調な坂道に同じような作りの一軒家が延々と立ち並び、道の両脇には紫陽花が延々と植わっている。それ程長い坂でもないのに景色が変わらないので非道く長いように感じてしまう。何もない一本道で迷子になってしまいそうな、そんな不安な感覚。歩いていても歩いても終わりが無いような坂道。

そんな紫陽花坂を私達はゆっくりと上っている。

間島君はあまり喋らない。沈黙に堪えかねて私の方から何気ない事を言っても彼はああとか、うんとか生返事をするだけだった。

しかし百階段の所まで来た所で彼は急に立ち止まった。

「今日もだよ」

間島君は初めて自分から喋った。

「何が？」

「ほら、この黄色い花。今日も新しいのに代わってる」

「その花っていつも供えてあるよね。そう言えば誰が何の為に供えてあるんだろう」

さやか、と間島君は小さく呟いた。

「さやかの為に供えられてるんだと俺は思う。久保田も知ってる。十何年も前にここでさやかって生徒が死んだって」

知ってるよ、有名な話だから。そう答えると間島君はふと五メートルほど上にある公園のフェンスの方を見上げた。

「間島君？」

名前を呼ぶと彼ははっとしたように私の方を向き直った。

「こないだもここでうちの生徒が大怪我したのって知ってるか？」
十月一日の事か。

「知ってるよ」

私が答えると間島君は重い口調で続きを話し始めた。

「実は俺と秀一な、さっきその子に会いに行ってたんだよ。その子の名前が真中いずみなんだ」

……真中いずみ。

……あの子が、真中いずみ。

「何で会いに行ったの？」

「例のさやかのか呪いってやつが本当なのか調べてたんだよ、俺達。それで中西にその子が入院してる病院聞いて話聞きに行ったんだ」
「そうなんだ、と私は相槌を打つ。小指で髪を掬って耳に掛けるとその下からじわりと不快な汗が滲み出した。」

「なあ、新谷詩緒里って知ってるか？」

それは……。

その名前は……。

「真中って子がある新谷詩緒里の事をおかしいんじゃないかってぐらい怖がってたんだ。真中がその公園に一人で居たら新谷詩緒里って子が現れて、彼女からさやかの都市伝説を聞いたらしいんだよ」

「そうなんだ……」

新谷詩緒里……。

私はぐくりと生唾を飲んだ。まさかそこまで嗅ぎつけていたとは。新谷詩緒里の名前まで知っていたとは。

北野君……矢張り恐ろしい人だ。

「聞いた話じゃ真中の怪我は事故だと思う。彼女は自分で足を滑らせて百階段から落ちたんだ。でもその時、新谷詩緒里は真中が落ちる様をじっと視てたらしいんだ」

そこから、と言って間島君は公園のフェンスを見上げる。

「新谷詩緒里が真中を突き落としたって訳じゃないとしても、新谷詩緒里は何かを知ってるんだと思う」

間島君は大きく息を吸い込む。

「出て来い新谷詩緒里！」

彼は馬鹿でかい声で叫んだ。静かな新興住宅地に真島君の乱暴な

声が響く。

「久保田、一緒に公園の方を見てみないか。何か分かるかもしれないねえんだ」

「ちよつと間島君……やめなよ」

しかし彼は私の制止も聞かず、あろう事か坂を駆け上がって例の公園へと向かって行った。

……ダメだよ。

……その公園に行っちゃダメ。

私の声は喉から先に出る事はなく、胸の中でぐるぐると回転するだけだった。間島君は公園に入ったらしい。私の頭上から間島君の声が聞こえてくる。

新谷詩緒里、新谷詩緒里、と。

私は一步も動けずにその場で立ち尽くしていた。動けないどころか声すら出ない。間島君やめて、その言葉が肺の少し上で何かに引っ掛かってしまっているように口まで上がって来ない。

すると……

……足音が聴こえた。

かつん。

革靴を踏み鳴らす音。

堅い踵^{かかと}がアスファルトを踏む音。公園の地面は砂利だから間島君のものではない。その足音の主は百階段を上って来ている。ゆっくりと、しかし確実に近付いてきている、私の方へ。

かつん、かつん。

ふと綾奈や由佳の言っていた紫陽花坂の変質者を思い出して背中が薄ら寒くなった。もしそうだとしたら相手はカッターナイフを持っている。

そして遂にその足音は百階段を上り切ったようだ。つまりそれは私の直ぐ後ろにいる事になる。

かつん。

足音は私の背後で止まった。

足音の主が私の後ろにじっと立っている事は振り返らなくても分かる。何故ならその影は私の影にぴたりと重なっているからだ。
ぞわり。

何よりも耳に掛かる程の呼吸音がその存在を証明している。生温かく湿った空気が私の首の周りを漂う。

男だ。

匂いで判る。男の人だ。

そしてごつごつした大きな両手が私の肩を掴む。その手が私の体に触れた瞬間、私の体はぴくりと痙攣した。息が、いや、心臓が止まるかと思った。

そして背後に立つ男は強い力で爪を立てるように肩に指を喰い込ませてくる。痛い。自分の肉が軋むのが分かる。

普通じゃない。

殺される、という言葉が脳裡のうりを過る。まともな人間がする事じゃない。つまり私の後ろにいるのはまともな人間じゃない。

紫陽花坂の変質者だ。

ぞわり、ぞわり。

恐くて怖くて震えが止まらない。逃げ出そうにも足が震えて動かない。大声を上げようにも喉から上に空気が出てこない。腰を抜かしてその場にへたり込んでしまいそうだが、猛禽もっさんのような手で肩を掴まれているので、それすらも許されない。だから私はただ人形のように立ち尽くすしか出来ない。

私は恐る恐る上を向いて男の顔を見ようとした。ゆっくり、本当にゆっくりと首を上げてゆくと男の顔があった。

お父さん……

……じゃない！

見た事もない中年の男だった。

スーツ姿の痩せ型の男、由佳が言っていた通りの特徴。お父さんが紫陽花坂の変質者ではなかった、という安堵が一瞬だけ胸の中にじんわりと広がる。しかしその安心感も忽ち恐怖一色たちまに変わってしまった。

った。

「君、可愛いね……」

男は……嗤わらっていた。

私の顔を上から覗き込んで、にやにやといやらしく嗤わらっていたのだ。

ぞくりと背筋に冷たいものが走り、喉がからからに乾く。笑顔というものは野生動物が牙をむいて威嚇する時の表情に一番近いのだと聞いた事がある。つまり笑顔とは相手に脅威を与える為の表情なのだ。

私は今、それを実感した。

「旭ヶ丘高校の生徒だね、何年生だい？」

それにその笑顔は目の前にいる私に向けられているものではないような気がする。多分その笑みは、この先に起こる行為に向けられている。

肉体的に嬲なやるのか、精神的に嬲なやるのか。はたまた性的に嬲なやるのか。私を使って愉たのしむ行為を思い浮かべて男は嗤わらっていた。男が愉たのしくなれば愉たのしくなるほど私は酷い目に遭う事になる。そんな自分勝手な笑顔を見て私は戦慄した。

「い、いや……たすけて……」

ようやく声が出た。

しかしそんな小さな声では周りの民家どころか直ぐ五メートル上の公園にいる間島君にも聞こえない。精々、目の前にいる男にしか聞こえない。

私の震えた声はどうやら男を悦よろこばせてしまったらしく、男は目尻に皺を浮かべて更に深い歪んだ笑顔を見せた。

「やっと声が聴けた。声も可愛いね。もっと君の声をおじさんに聴かせて欲しいな」

そして男は左腕を私の首に回す。私はこの変質者に後ろから抱き締められる形になってしまった。

ひっ、と小さな悲鳴が漏れる。

「おっと、大きな声は出さないでよ」

ぐいと私の首を男の腕が圧迫する。痩せ型とは言え男の人の力は強く、私にはどうする事も出来ない。抗えない力を前にどうする事も出来ず、泣き出した程の絶望感を覚えた。

……苦しい。

すると変質者の男は自由になった右手で何やらポケットをまさぐっているらしい。そして男は私の耳元に口を近付ける。

「騒いだらいけないよ……分かったかな」

子供を叱る時のような低くて落ち着いた声。生温かく湿った生臭い息が私の耳に掛かった。

そして私の顔の直ぐ傍で嫌な音が鳴った。

ちきちきちきちき。

それは私も良く知っている音。身近な道具から発せられる音。それが身近な物だからこそ自分に起こった状況も即座に理解出来てしまう。

それはカッターナイフの刃を出す音だ。

冷たい刃が私の頬に当てられる。興奮して更に呼吸を荒げる変質者は顔を近付けてきてぼそりと囁く。

「声なら後で好きなだけ出して良いから。後で、ね……」

そう言って男はくすくすと笑った。

……殺される。

そう思った。

誰か助けて……。

「誰か助けて、って思ってるんでしょ」

ぞくり。まさにそう思っていた所にその男に先読みされて吐氣がした。凶星でしょ、と言ってから男は実に愉快そうに続ける。

「そう思っても叫ばない方が良いよ。怪我したくないよね」

すると逆手に持たれたカッターナイフが私の喉元にそえられる。叫べない。動けない。息も出来ない。変質者は耳元にたにたと顔を歪めている。私を品定めしているのだろうか、この後どうやって

愉しもうかと。恐くて怖くて、私は堅く目を瞑った。

……嫌だ。

男の息が野犬のように荒くなった。そしてその左手は私の胸に、太腿に、スカートの中に入ってくる。

……体を触らないで。

……やめて、お願い。

どろり、どろどろ。

私の胸中^{うちがわ}に黒い粘液が溢れ始める。ふつつつと不潔に泡立つ生温かくて汚くて穢^{きたな}い、あの粘液が。

……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。
ごめんなさい……。

私は何故か心の中で懺悔^{ざんげ}を繰り返していた。

瞳を閉じて自ら創り出した暗闇の中で何度も何度も、ごめんなさいと叫び続けていた。私は何も悪い事をしていないのにどうして謝っているのだろう。そもそも誰に謝っているのだろう。

解らない。

目を閉じていると更に恐ろしいものが暗闇の奥から見えてくるような気がする。それは今、現実^{現実}に私の身に起きている事よりも遙かに恐ろしい。

私はおずおずと目蓋を開ける。

すると……

空から、間島君が降ってきた。

状況をいまいち理解出来ない。とにかく彼は公園のフェンスを乗り越えて五メートルもの高さから飛んだのだ、と思う。

そして彼はその勢いで私の体を弄^{もよほ}っている変質者の顔面を蹴り飛ばした。すると変質者は後ろに吹き飛び倒れる。

……正義のヒーロー？

私に突き付けられていたカッターナイフは首の薄皮をほんの僅かに裂いてアスファルトの上に落ちた。

飛び蹴りという無理な姿勢でいた間島君も着地に失敗して堅いアス

ファルトに叩きつけられた。そして間島君の全体重の乗った蹴りを見事に顔面で受けた変質者はもんどり（、、、、）打って倒れ、私の足元で顔を押さえて悶^{もだ}えている。

「間島君……」

ずらされた下着をつけ直しながら天から舞い降りた正義のヒーローの名前を呼んだ。しかし次いで何と言えば良いのか判らない。

「いってええ……マジで死んじゃうって」

険しい顔をした間島君はウォレットチェーンをじゃらじゃらと鳴らしながらむくりと立ち上がる。

「久保田、怪我はねえのか！」

「えっ、あ、うん」

本当は、刃先が掠めていった首が少しだけひりひりと痛む。血は出ていないにしても多分赤く腫れているだろう。それでも私は、何ともない、と間島君に向かって頷いた。しかし間島君は険しい表情を崩そうとしない。

「じゃあさっさとそこから離れろ！」

大袈裟に手をばたばたと振るって私を追い払おうとする間島君。ふと足元に目を向けると、変質者は動き出していた。蹴られた頬を摩り、獣のようにぐるぐると呻きながら男はカッターナイフに手を伸ばそうとしている。

恐ろしさを思い出した私は弾かれたように地面を蹴ってその場から駆け出した。その時、私の足首に何か引掛かった。いや、絡み付いた。その刹那、私の総ての汗腺から冷汗が吹き出し、総ての動きが停止してしまう。恐る恐る足元を見ると……男が私の足を掴んでいた、もう一方の手にカッターナイフを握り締めて。

……ヤバイ。

すると憎々しげに舌打ちをした間島君は全速力でこちらに向かって駆け出した。

「放せ！」

間島君はアスファルトの上をうつ伏せに這う変質者の顔面をもう

一度思いつき蹴り飛ばした。勢い良く首を跳ね上げられた男は、ぐうと呻いて私の足首から手を離れた。それを確認するや否や間島君は私の体を突き飛ばす。

立ち上がった変質者は標的を私から変更し、間島君に向かってカッターナイフを突き出した。

「危ない！」

私は思わず叫んだ。

すると間島君は兇刃を素手で掴み、そのまま男の体を投げ飛ばしてアスファルトに叩きつけた。強かに背中を打ちつけた変質者の動きが一瞬止まる、きつと呼吸が出来ないのだろう。

「変態野郎め。久保田に触りやがって……許さねえ」

刃を防いだ時に切った間島君の手から、ぼたぼたと血が垂れ落ちていた。そして鬼のような形相をした間島君は仰向けに倒れた男を見下ろしながらぶつぶつと呟いている。間島君は、怒っている。

男はももぞと身を起こす。蹴られて投げられて、酷い目に遭った筈だと言うのにその顔には不気味な笑顔が貼りついたままだった。

「このクソガキ……生意気だな、ホント」

「ああ、無駄口叩いてんじゃねえぞオッサン」

すると変質者はまた嗤う。愉しげにな声にも聞こえなくはないが、その嗤い声にはどす黒い憎悪が見え隠れしているように思える。

一頻り嗤うと間島君に向かってぼつりと言葉を零す。

「君から殺そうか」

男は落としたカッターナイフを拾おうと手を伸ばした。しかし間島君が素早くその手を踏みつける。彼が踵でごりごりと手を踏み躪ると男は苦痛に顔を歪めた。

「誰を殺すって？」

ぞくり。

野卑な行動とは裏腹に彼の声は落ち着いていて表情も極めて穏やかに戻っている。それが余計に気味悪い。

「俺を殺す気なのかよ？」

変質者が恐いのではない、刃物が恐いのもない。私を助けてくれた間島君。今は彼の事が恐くて堪らない。

「俺からって事は、その後は久保田のつもりか」

間島君は悠々とカッターナイフを拾い上げる。

「そいつはヤベえな。殺される前に……」

殺さねえと、な。

間島君がそう呟いた瞬間、男の顔が初めて恐怖の色に染まった。

男は、手の肉が削けても良い、というような勢いで踏まれていた手を引き摺り出した。そして男は一目散に逃げ出そうと起き上がる。

「さっきも言っただろ、久保田に手を出すやつは許さねえ」

重くて鈍い音が紫陽花坂に響く。

男が立とうとした所、間島君が男の脇腹に蹴りを入れていた。今の鈍い音は、もしかすると肋骨が折れた音かもしれない。

私は思わず口元を押さえた。私の目の前で男は再び地面に倒れてのた打ち回っている。苦しげな表情なのに声が出ていない、矢張り骨が折れたのかもしれない。

「まだ許さねえよ」

間島君のこめかみの血管がぴくりと動く。

……それ以上は、ダメだよ。

そして間島君は男の太腿にカッターナイフを突き立てた。

僅かな間を置いてから男は短く喚く。垂直に突き立ったカッターナイフは小刻みにぶるぶると揺れていた。

生き物を刺すとぐさりだとか、ざくりだとか生々しい音がすると思っていたし、血も沢山噴き出るものだと思っていた。しかしそんな大袈裟な音もなく、血も全くと言って良い程出ていない。

……何だ、大した事ないじゃん。

私は自分でも信じられない程、冷静にその様子を見ていた。

……何だ、間島君って私の為なら……。

……何だっけるんじゃん。

私は……笑っていた。気が付けば、私は嗤っていた。楽しくて、愉

しくて喰いを堪える事が出来ないでいた。それと同時に喰っている自分が怖かった。

恐怖と苦痛に顔を歪める男に向かって、間島君は更なる追撃を加えようと自らの血が滴る拳を振り上げる。瞳に冷たい炎を宿した間島君は多分この変質者を殺すつもりでいる。その時、ようやく私の体は動くようになった。

「もう良いよ！」

私は間島君に抱きついた。

すると彼は一瞬躊躇した素振りを見せてから、久保田、と私の名前を呟いた。そして彼の強張った筋肉から徐々に力が抜けてゆく。

男はよろめきながら立ち上がり、カッターナイフの刺さった足を痛そうに引き摺って紫陽花坂を転げ落ちるように逃げていった。

「てめえ待ちやがれ！」

情けない声を上げて逃げる変質者を追いかけようとする間島君を制止する。間島君の引き締まった体に腕を回したままじっとしていると、やがて彼の鼓動の激しさも治まり始める。私は無言のまましばらく彼に身を寄せていた。

「け、怪我はなかったのかよ……マジで」

もしかして照れているのだろうか。クラスの男子同士で喋っている時と同一人物とは思えない程の穏やかで遠慮がちな言葉。

「大丈夫だよ」

「あの変態野郎に変な事されたりしなかったのか？」

「だから私は大丈夫だって。そんな事より間島君だって、あんな高い所から飛び降りたり刃物掴んだりしてたけど……」

あ、と洩らして間島君は自分の手を見てから、照れ臭そうに血の滲んだ手のひらをズボンに擦りつけた。

「何ともねえよ」

「嘔吐き。血が出てるじゃん」

私が耳元でそう言うのと彼は、ちょっとだけ痛え、と言った。彼の鼓動がまた早くなるのが分かる。これは怒りとは別の感情の所為だ

と思う。もしかして間島君はこうして女の子に触るのも初めてなのだろうか。

そうだとしたら……。

「間島君……大変な事しちゃったね……」

「大変な事？ 何だそりゃ」

「人……刺した、よね」

どくん。間島君の心臓は、私がそう言った瞬間に跳ね上がった。

彼の手が震えている。ようやく自分がした事を理解出来たのだろう。

「だって、俺は久保田を助ける為に……」

「そうかもしれない。だけど間島君はもう逃げようとした無抵抗な人を蹴り飛ばして、そして刺した。違うの？」

それは……。と、彼は口籠る。私は決して彼に、助けてくれてありがとう、とは言わなかった。何故なら礼を言って素直に恩として受け入れてしまうと支障が出るからだ、これからの計画に。

「いくら相手が変質者だからって、それはヤバくない？ 流石にあそこまでしちゃったら警察に捕まっちゃうんじゃないかな。それに私が止めないと間島君……あの人の事……」

殺してたよね。そう囁いた時、間島君の心臓は更に跳ね上がった。そして彼は怯える子供のように私の体を抱き締めた。

「怖かったか？ 俺の事、嫌いになっちゃったか？ ゴメン、ゴメンな……」

……ほおら、やっぱり。

「そんな事ないよ、それに私この事は誰にも言わない」「ホントか？」

彼は母親に許して貰った幼い子供のような表情をしている。

……ねえ、こういう事でしょ。これで良いんですよ。

「その代わり、一つだけ私の頼みを聞いて欲しいの」

「何だよ、俺に出来る事だったら何でもしてやるぜ」

私は間島君の耳に口を寄せてぽつりと囁いた。すると彼は意外そうな顔をしながらも小さく頷いた。

「出来そう？」

「ああ、任せてくれ」

ほら、やっぱり間島君は……利用出来る。^{つかえ}

ふと、私は間島君の肩越しに公園の方を見上げる。するとそのフェンスの奥には見覚えのある人影があった。

……さっきからそこで見てるのは気付いてるんだよ。

……召使いにするってこういう事でしょ。

私は間島君の口唇に吸い付いた。最初は驚いたような声を洩らした彼もやがて大人しくなって目を閉じ私を強く抱き締める。

私は目を閉じずにフェンスの奥をしっかりと凝視^{みつめ}していた。

私の視線の先には日下部綾奈が立っていた。彼女は公園のフェンスの向こうで薄笑いを浮かべながら私達を見下ろしていた。

明歩が私の家に來たのは七時を回った頃だった。

「何か食べる？ あ、そうだ。台所にクッキーがあったんだけど、いる？」

「いらない、ごめんね」

「うーん、じゃあ紅茶でも入れてきてあげよっか？」

すると小さな明歩は小さく頷いた。彼女は私の部屋のベッドに腰掛けて枕を抱いたまま俯いている。今日はまだ一度も目を合わせてくれていない。

「入れて来るからちょっと待っててね」

そう言っただけで私は明歩を部屋に残して台所へ向かった。ダージリンのティーバックをカップに入れてその上からポットの湯を注ぐ。すると、白い湯気と共に安らかな香りが舞い上がる。

明歩は明らかにやつれていた。

まるでまな板に乗った死んだ魚のような目をしていて全く生命感が無い。この僅か二日間で彼女の身に一体何があったのだろう。一体何がここまで彼女を変えてしまったのだろう。私が最後に明歩を見たのは二日前の紫陽花坂。その時の彼女も普段とは違う強い眼差

しをしていたが、その後になにかがあったのだろうか。

二つのカップを持って部屋に戻ると、明歩は全く変わらない姿勢のまま枕を抱いて座っていた。

「ほら、置いとくよ」

テーブルに明歩の分の紅茶を差し出すと彼女は小さく、ありがとう、と言った。そしてしばらくの間、重い沈黙が続く。明歩は紅茶に手を付けようともせずじっとしている。二つのカップからはゆるらと湯気が昇っていた。

「二日も学校休んでメールも返してくれなかったのにどうしたの、急にうちに来るなんて言い出して」

「ごめんなさい……」

「全く、私や綾奈だって凄く心配してたんだよ」

ごめんなさい。明歩は壊れた機械のようにそう繰り返した。彼女の瞳は非道く虚ろだ。機械ではないにしろ少なくとも明歩は、壊れかけている。

私は明歩の隣に座って彼女の顔を覗き込もうとする。すると明歩はぷいと顔を背ける、まるで顔を見られたくないかのよう。

「ねえ明歩、元気ないけど何かあったの？」

「何でもないよ」

嘘だ。私には分かる。

「じゃあ何で死にたいだなんてメール送って来たりするのよ！」

「そ、それは……」

明歩は口元を押さえて黙り込む。

「紫陽花坂……」

私がそう呟くと明歩の小さな体は敏感に反応し引き攣った。矢張りそうだ、あの日紫陽花坂で彼女の身に何かが起きたのだ。すると明歩はその小さな体をふるふる震わせながらしくしく泣き出した。

「わたし……わたしね……」

彼女の目からぽろぽろと涙が零れる。私はまるで子供でもあやすように、そんな彼女の頭を優しく撫でた。

「もしかして、あの日……変な奴に襲われたりしたの？」

すると明歩は私にしがみ付いて堰を切ったようにわんわんと泣き出した。良く見ると彼女の両手首には強い力で掴まれたような痣が残っている。矢張り明歩は、あの紫陽花坂の変質者に会ってしまったのだ。

「恐かった……すっごく恐かったんだよ！」

明歩は私の胸に顔を埋めて子供のよう^{うず}に喚く。具体的に何をされたのか、彼女の心的外傷^{トラウマ}を更に抉^{えぐ}る事になりそう^{えぐ}で聞けなかった。しかし予想は容易にできる。

「もう、大丈夫だよ」

「え？」

明歩は潤んだ瞳で上目遣いに私の顔を覗き込む。

「紫陽花坂の変態男はね、さっき間島君が退治したんだよ」

「間島君が……ホントに？」

「ホントだよ！ 実はさっき私も襲われそうになったんだ。でもね、間島君が助けてくれたんだ。正義のヒーローみたいだったんだよ」

無抵抗な相手を蹴り転がしたり、太腿を刺したりした事は伏せておいた。

「凄^{ほの}いんだね、間島君かっこいいな」

明歩の顔に仄かな笑顔が戻った。

「うん、だからもう紫陽花坂に変質者は二度と出ないと思う。もう大丈夫だから、死にたいなんてもう二度と言わないで！ それに……明日からまた学校においでよ……」

すると明歩は少し逡巡した後、うん、と答えた。

私達はようやく今まで通りの親友に戻る事が出来た。そこから私と明歩はちびちびと冷めかけたダージリンティーを啜りながら何気ない事を語り合っていた。友達の話だろうか、テレビの話だろうか、流行りの音楽の話だろうか、良く覚えていないがとりあえずどうでも良いような話だった。しかし徐々に明歩の顔に笑顔が戻っていったのだけははっきりと覚えている。

「わたし、そろそろ帰るね」

空になったカップをテーブルに置いた明歩はそう言った。にこりと微笑むその顔は来た時とはまるで別人で、まるで憑き物が落ちたかのようなだった。

「うん、明日からはちゃんと学校に来なよ!」

念を押すように私はもう一度そう言うと言明歩はこくりと頷いた。

玄関まで明歩を送ろうと一緒に階段を下りていると不意に玄関の扉が開いた。

「ただいま!」

お父さんが帰って来たのだ。

お父さんはいつも通りの優しい笑みで私に手を振る。良く良く考えると私はお父さんに対してとんでもない疑惑を掛けていた。まさか自分のお父さんが紫陽花坂の変質者だと疑っていたとは。

変質者の正体がお父さんではなかったと知って、私の胸の中はすっかり晴れていた。

「おかえり、お父さん」

きつと疑っていた事を言うと思うだろうな、いや、うちのお父さんの事ならいじけてしまうかもしれない。

……とにかくお父さん、疑ってごめんなさい。

「おや、優美の友達かい?」

お父さんはふと私の傍らに目を向ける。

「うん。クラスメイトの明歩」

初対面の人に会って緊張しているのか明歩は私の後ろに引っ返もうとした。こういう所が彼女らしい。

「そっか、うちの優美と仲良くしてやっておくれよ。明歩ちゃん」

お父さんはそう言って明歩に微笑みかけた。すると明歩も私の後ろからひよこりと顔を出した。

※

十月五日。

……明歩の嘘つき。

生徒も疎らな昼休みの教室。

明歩は今日も学校へ来なかった。昨日の夜、彼女は学校へ行くと約束した。しかし明歩の席は今日も空っぽ。

午前中の授業が終わって昼休みになっても明歩は来ていない。電話を掛けても留守電に繋がるし、メールを送っても返事はない。昨日私の家に来た明歩は夢か幻だったのだろうかときえ疑ってしまう。

私は食べ終わった弁当箱の蓋を閉じる。

「それって毎朝優美が作ってるんだよね」

私の向かいに座っていた綾奈が弁当箱に目を向けて言った。

「そうだよ、どうしたの？」

「いや、凄いなって思ってたね」

「多分綾奈が思ってるほど手間は掛からないよ。炊飯器に残ってるご飯と冷蔵庫にあるあり合わせの惣菜詰めてるだけだし」

へえ、と彼女は感心したように頷いている。昨日、公園のフェンスの向こうから綾奈が見ていた事。私は気付いていないふりをしておいた。そのお陰で綾奈とはいつも通りの「友達」を続ける事が出来ている。

綾奈自身も昨日の事を自分から口にしない、きつと隠しているのだろう。隠しているとしたら、何を隠しているのだろう。

あの公園にいた事？

間島君が人を刺した事？

私達がキスをしていた事？

それともあの場所で起こった事、総て？

「もう寒くなってきたから中庭でご飯食べるのも限界だね」

そう言って綾奈はいつも通りのカフェオレを一口飲んだ。

本当に彼女はいつも通りを振舞っている。そのいつも通りの綾奈の態度が逆に気味が悪い。昨日彼女は色々な意味の生々しい光景を目の当たりにしている筈なのに、どうして何も聞いてこないのだろう。

どうしてもいつも通りでいられるのだろう。

その時、教室のドアが開いた。間島君だ。

彼は沈んだような表情で私を一瞥した。そして私と目が合うなり視線を床に落として、ぽつりと呟く。

ごめん、な。

彼の口はそう動いたように見えた。肩を落とす彼の手には何も無い、手ぶらだ。私は髪を耳に掛けて間島君から視線を外す。

彼には一つ仕事を任せていた。私の召使いとしての最初の仕事だ。しかし、失敗したか。

アレを見つけられなかった（、、、、、、）のだろうか、それならまだ良い。しかし……もしアレが北野君の手にも渡っていたら、面倒な事になる。

……結局使えない。

……役に立たない召使いめ。

「どうしたの、怖い顔して」

綾奈の声でふと我に返る。怖い顔……一体私はどんな顔をしていたのだろうか。

「いや、ちよつと考え事をね」

私がそう誤魔化すと彼女は含みのあるような表情で、ふうん、と相槌を打った。開け放たれた窓から吹き込む冷たい秋風に綾奈の黒髪がゆらりと靡く。

五限目、英文法の授業中。

私は何とも言えない歯痒さに苛まれていた。間島君が私に何も言っていない事から察するに、どうやら彼は「失敗」してしまったらしい。彼はこの授業中もちらちらと私の方を一瞥し、私と目が合うと申し訳なさそうに視線を伏せる。

苛々する。

英語教師が英文を読み上げる声も、私の苛々を引き立てる。実際に英語も話せない癖に出鱈目な発音で得意になっている。腹が立つ。

その時、騒がしい音を立てて教室のドアが開いた。

「あれ、美那子先生……」

誰かがそう言うと言業が止まり、英語教師を含んだ皆の視線はドアに集中する。そこには担任の美那子先生が立っていた。突然教室の戸を開けた美那子先生は英語教師に向かって申し訳なさに頭を垂れる。いつも笑顔の美那子先生ではない、先生は幽^{かす}かではあるが明らかに狼狽^{ろうばい}している。

「久保田！」

先生は上擦った声で私を呼ぶ。は、はい？ と突然の事に私は間の抜けた返事をしてしまった。

「ちよつと職員室まで来て！」

「今からですか？」

早く、と手招きして急かす美那子先生。不穏な予感を覚えながら私は席を立ち、教室を出て行った。背中にクラス全員の視線が突き刺さっているのが分かる。

美那子先生に急かされ促されるままに職員室までやってきた。授業中の職員室にはほとんどの先生がいない、コーヒーの芳ばしい香りだけを残して先生達が消えてしまったかのようなだった。こんな寂しい職員室を初めて見た。

私は空いていた椅子に座らされ、美那子先生はその前に座った。そしていつになく真剣な眼差しで私を見据えている。そして美那子先生は、大きく深呼吸した後によりやく口を開いた。

「久保田……落ち着いて聞くんだよ」

先生の声は、震えている。

「どうしたんですか……」

「あの、ね……」

美那子先生はぽつりと言った。

次に先生の口から零れた言葉に私の思考は総て停止させられた。目の前が真っ白になり総ての音が止まった。

私は弾かれたように職員室を飛び出し、そのまま校門を抜けて紫

陽花坂を駆け下りて行った。

……嘘だ。

……嘘に決まってる。

駅を通り過ぎ、繁華街の人混みをすり抜け、ようやく見えてきた我が家の戸を開くと私は乱暴に靴を脱ぎ捨てた。

リビングではソファ―に腰を下ろしたお母さんが力無く項垂れていた。ゆっくりと私に顔を向けたお母さんの目には光が宿っていない。そしてお母さんは、美那子先生と同じ事を言った。私の目の前は再び真っ白になる。

お父さんが、死んだ。

※

自殺だったらしい。

今日の正午頃、お父さんは昼休み中に勤務先である旭ヶ丘総合病院を抜け出して、繁華街にあるショッピングセンターの屋上から飛び降りたのだそう。そう、先日私が天野瀬里奈の新譜を試聴していたCDショップのある建物だ。地上十二階から叩きつけられたお父さんの体は人である原形を酷く損なわれていたらしい。

——見ない方がよい。

警察署で担当の北野という刑事にそう言われた。

警察は勿論、私達ですらお父さんが死を選んだ理由に心当たりはない。本当に自殺なのか、誰かに殺されたんじゃないだろうか。そうとさえ思ってしまう。

何が何やら判らない中、お父さんは死んだという厳然たる事実だけが私達の目の前には横たわっていた。

私とお母さんは一緒に家に帰って来て、会話もないまま向かい合わせて食卓に着いた。お母さんは糸の切れた操り人形のようにテーブルに崩れ落ちてそのまましくしくと泣いている。私はそんなお母さんをじっと見ていた。

……何故だろう。

……涙は一滴も出ない。

私の感情は何一つ変化を示さなかった。身内の死という信じがたい事実を突然眼前に突き付けられて、私の感情は機能しなくなったのだろうか。

それでも私の胸の中では、冷たい空気がもやもやと沸き上がっている。悲しいのだろうか、何が悲しいのだろうか。分からない、判らない、解らない。強いて言うなら泣けない事が悲しいのだろうか。目の前で形振り構わず鳴咽なりふを漏らすお母さんが少し羨ましかった。そんなお母さんをそっとしておこうと、私は静かに席を立った。

広い家私とお母さんの二人きりになった。仄暗い廊下は肌寒さを余計に引き立てる。私は俯いたまま廊下を歩き、二階への階段を上った。

そして、お父さんの部屋の戸を開き、電気を点ける。

机や棚に所狭しと積まれた難しそうな本。雑然としているが、主がいなくなったその部屋はやけに空っぽに見えて寂しげだ。

私は机の上に置かれたノートパソコンの電源を入れた。

……お父さん。

……何で死んだの？

この部屋にお父さんが死んだ理由が残っている、そう私は思ったのだ。

パソコンが完全に立ち上がるまで机の引き出しを開けたりしていたが特に何も見つからなかった。筆記用具に病院の封筒やデジタルカメラ、どこにでもあるような物ばかりだ。遺書らしきものは見つからない。

ようやくパソコンが立ち上がり、私は最近使ったファイルを見てゆく。良く解らないグラフや表ばかりが出てくる。それから小一時間、私はお父さんの椅子に座ってパソコンを調べ続けていた。

そして二日前の日付が入った画像ファイルを見付けた。

「これは……」

名前の無いそのファイルを開いた時、私の目の前は真っ白になった。身の毛が弥立ち、涙が零れ出す。それは悲しみの涙ではなく、恐怖の涙だ。

……怪物だ。

私の胸の中のどろどろの黒い粘液は、今までにないぐらいに膨張して私を包み込む。頭も割れるように痛いし吐気も酷い。嫌だ嫌だ嫌だ。

嫌だ！

見たくない、見たくない。

こんなの見たくなかったよ……。

……思い出した。

……全部、思い出しちゃったよ。

私が封じ込めていたお父さんの記憶、それが一気に逆流して全身に溢れ返る。私は総てを思い出してしまった。

逆流する。

私は逆流する。

震える指でマウスを握り、私はその画像ファイルをフォルダごと総て削除した。お母さんにも警察にも、誰にも見つからないように。

我が家の怪物は死んだ。

私の胸を、私の記憶を抉^{えぐ}り出してから……。

小森明歩

家の方は大丈夫、もう大分落ち着いたよ。

でも流石にこのままお金の掛かる私立に通い続けるのは厳しいらしいんだ。もしこのまま卒業してれば付属大学にエスカレーターで入学出来たってのはちょっと惜しいかな。受験勉強しなくて良いなんて考えてたんだけど、結局一年後には大学受験が待ってるのね。

いよいよ明日からだよ、私が旭ヶ丘高に行くの。

旭ヶ丘高って今の学校よりもちよつと偏差値高いから編入試験も不安だったけれど、なんとかなったみたい。勉強で着いて行けなかったらどうしようって思ってたんだけど意外と大丈夫そうだね。

クラスも決まったの、四組だって。

アキちゃんと同じクラスじゃないみたいだけど我慢する、またアキちゃんと一緒に学校の学校に通えるようになったんだから。

懐かしいね。私達家も近いし中学の時はいつも一緒に登下校してたよね。これからもアキちゃんといられると思うと、凄く嬉しい。

私、旭ヶ丘高のこと何も知らないからまた色々教えてね。

※

十月二日。

「ゴメン、忘れ物しちゃった」

優美はそう言って人の流れを押し退けて教室へと戻って行きまして。

下駄箱の前に残されたわたしは濁流のような人ごみに飲み込まれてしまわないようにしっかりと傘立てにしがみ付いています。

わたしの横を通り過ぎる人は口々に噂しています。

——昨日二年の子が百階段から落ちたんだって。

——誰だか分かんないけど、転校してきたばっかりの子らしいよ。

——マジで。でも紫陽花坂ってことは、それって……

——さやかのかい？

そんな事を言って皆は実に楽しそうにしています。

上っ面は怖がるような顔や気の毒そうな顔をしているんですが、その裏側に好奇心や他人の不幸を面白く思う顔が見え隠れしているんです。そんなの見え見えなんです。

そんな会話を聞いていると、腹が立って涙が出そうになります。

明歩、と名前を呼ばれてわたしは顔を上げます。するとそこには弁当箱の袋を下げた優美が立っていました。

「ゴメンね。待たせちゃって」

優美は整った顔でにこりと微笑みかけながらそう言いました。わたしも優美の真似をしてにこりと笑って答えます。

「い、いいんだよ」

矢張り優美のように上手くはいきません。可愛くてスタイルも良く、おまけに勉強もスポーツも出来る優美はわたしの憧れです。彼女とは同い年だけれども、わたしは優美の事をお姉ちゃんのように思っています。

「んじゃ、帰ろっか」

優美はわたしの頭に手を置いて言いました。しかしまだわたしは靴を履き替えていません。待って、と言うと優美は、早くしないと置いて行っちゃうよ、などと言いました。彼女が冗談で言っているのは分かっていたましたが、それでも見捨てられるような気分がして不安を覚えました。急がないと、急がないと。

「ちょっとストップ」

「え、どうしたの？」

わたしがローファアの踵を踏んだまま駆け出そうとすると、優美はそれを指摘しました。待ってあげるからちゃんと履きなさい、と言う優美は本当にわたしのお姉ちゃんのようなうでした。わたしは靴の踵に指を入れてきちんと履き直します。

「お待たせ……ごめんね」

「よし。ちゃんと履けたね」

わたし達が通用門を出る頃、もう空はオレンジ色になっていました。

紫陽花が視ている。葉だけになった紫陽花が、道の両側からわたし達をじいっと視ている。それは風にわさと揺れてわたし達を囓るように。

「わたし……この坂、好きじゃない」

わたしは紫陽花坂がどうしても好きになれません。この季節のわんと広がる緑の葉もどこか不気味ですが、六月の雨の日の紫陽花坂は不気味などという言葉では片付けられません。どうしたの急に？と優美は首を傾げています。

「こわいもん……」

こわいんです、恐いし怖くもあって畏こわくて慄こわい。梅雨の季節、この紫陽花坂は紫色の花に彩られます。異界を思わせる怖ろしく美しい紫色。それが、すごくこわいんです。

「怖い？」

優美はその完璧に整った顔でわたしの顔を覗き込みました。すると彼女は納得したように頷きながら続けます。

「ああ、やっぱり明歩も信じてるんだね」

……違う。

優美は何か勘違いしているようでした。

「さやか的事？」

すると優美は小さく頷きました。矢張り優美は勘違いをしているようです。

「わたしは詳しく知らないんだけど、そんなこわい噂があるよね。さやかに気に入られたら五日以内にあの世に連れて行かれるんだっけ。勿論さやかのお話もこわいよ、でもそんな噂なくても……この坂はこわい」

「何で？」

「迷子になっちゃいそうだから……」

そう言ってわたしが顔を伏せると、優美も黙り込んでしまいました。私達二人は言葉も交わさないままとぼとぼと紫陽花坂を下ってゆきます。

この紫陽花坂は、こわい。どこまで歩いても変わらない一本道、その両脇で等間隔に植わっている紫陽花は麝香じゃこうのような淫靡いんぴな魔力を放っているんです。このままこの坂から出られなくなるような怖ろしい魔法を。

そんな紫陽花がこわくて目を逸らすと優美はわたしの名前を強く呼びました。

「そこは、見ちゃ駄目だよ……」

そことはどこの事でしょうか。その時わたしの視線の先には小さな公園がありました。彼女はその事を言っているのでしょうか。

「どうして？」

「駄目なものは駄目なの、危ないから。一人で入ったりしたら絶対に駄目なんだからね」

矢張り公園の事を言っているようです。

「危ないって？」

「いいから……駄目だよ」

いつになく厳しい口調で釘を刺されたわたしは、うん、と返事して俯うつむきました。そして公園の前を通り過ぎると百階段が見えてきます。

……昨日、ここで。

「ゆ、優美……」

わたしは百階段の前で立ち止まりました。

「どうしたのよ。あ、さやかの話をしてたから、もしかして百階段が怖くなっちゃたのかな」

「ち、違うの。今日はここでバイバイ……」

「何言ってるのよ。いつも駄まで一緒でしょ」

「今日はね……その、ちょっと用事があって寄る所があるの」

百階段を背にして優美を振り返りました。

「用事って、私も付き合おうか？」

「大丈夫……一人で行くから」

そう言うのと優美は少し寂しそうな顔をしていました。しかしこれはわたしの用事なんです。だから優美を付き合わせるのは少し悪いように思いました。すると彼女は続けます。

「本当に大丈夫なの？ さやかのかどうかは知らないけどね、昨日ここから落ちて大怪我した子がいるんだよ……」

「知ってるよ」

……知ってる。

……昨日ここで真中いずみって女の子が怪我をしたのは良く知ってるよ。

「心配しないで大丈夫だから、ね」

わたしは優美に向かってそう言いました。すると優美はきょとんと眼を円くして頷いています。可笑しいですよ、しっかり者の優美がこんな呆けた顔をしているなんて。わたしがはっきり物を言うのがそんなに意外だったのでしょうか。

「じゃあまた明日学校で会おうね。心配してくれてありがとう」

わたしは優美に手を振って紫陽花坂を一人で駆け下りました。秋の夕暮れ時の冷たい風が頬を撫でてゆきます。

もう少して旭ヶ丘総合病院が見えてきます。

病院というのは何故か緊張します。

この静謐さ。^{せいひつ}白い壁が更に清潔感を付け加えて、私語を慎まなければ咎められるのではないか、という息苦しさに包まれているのです。この清潔すぎる空間はわたしには合わない、清潔すぎて息がつまりそうです。

透明度の高過ぎる水の中では魚が住めないのと同じように、清潔すぎるのも居心地が良くありません。

エレベーターホールに生けられていた絢爛豪華な胡蝶蘭を見てわ

たしは少しげんなりしました。わたしの持っているガーベラはそれに比べてあまりに小さかったのです。

ここへ来る途中の花屋さんで見舞いの花を選んでいると一際目立つピンク色の花が目にとまりました。お見舞いには相応しくない花なのかもしれませんが、その元気な発色に思わず惹かれてしまいました。

それがガーベラという名前だというのはお店のおばさんから聞きました。プレゼント用だと伝えるとおばさんに勧められてメッセージカードも書きました、「早く元気になってね☆」と。すごく優しいおばさんでした。

わたしはエレベーターに乗り、五階のボタンを押しました。ぶーんと低く唸るエレベーターに運ばれて、入院病棟へやってきました。掲示板にゾウやキリンの切り絵が貼ってあって随分子供っぽい印象を受けます。わたしはその掲示板の横にあるナースセンターを覗き込みました。

「あ、あの……すいません」

中にいた看護婦さんはわたしの声に気付いてくれません。すいません、ともう一度大きな声で呼ぶと紺色のカーデガンを羽織った中年の看護婦さんが返事をしてくれてわたしの方へやってきました。

「あら、どうしたの？」

まるで子供を相手にするような口振りで。わたしを中学生とでも思っているのでしょうか。

「その……面会を……」

「ああ、それならその名簿に面会先とあなたのお名前を書いて行ってね」

看護婦さんに促されてわたしは鉛筆を手に取り、小森明歩と自分の名前を書いた後に面会先を書きました。

真中いずみ、と。

彼女の個室はわたしが力いっぱい引かないと開かないぐらい重い

扉に閉ざされていました。そして薄暗い病室のベッドに、彼女は静かに横たわっていました。

「いずみちゃん……」

彼女はわたしの声にも全く反応を見せません。彼女に近付いて顔を覗き込んで、わたしは絶句しました。薄目を開けて天井を見上げているんです、それに真っ白なんです。サイドテーブルにお見舞いのガーベラを置いて彼女の頬に触れました。冷たい。それに彼女の体を良く見ると全身に包帯を巻かれているようなんです。

いずみちゃんは死んではない、でも生きていません。ちょうどその間にいるんです。彼女は生命を宿していない瞳でただ天井を見詰めていました。幼馴染のいずみちゃんはわたしにとって世界で一番大切な友達。小さな頃からずっと一緒にいたし、これからもずっと一緒にいたい。

子供の頃、ふざけ合ってキスした事もありました。何かいけない事をしたようで後ろめたかったのですが、二人だけの秘密を共有できたようで凄く嬉しかったんです。わたしのファーストキスはいずみちゃん、高校生になった今でもキスしたのはその頃のいずみちゃんだけです。

呼吸以外をやめてしまっているいずみちゃん。わたしはそんな彼女の口唇に顔を近付けてみましたが、やめておきました。彼女の口唇が冷たくなっているのが怖かったから。

確か、いずみちゃんが怪我をした百階段にはある噂があったはずです。

紫陽花坂のさやか。

わたし達の学校ではそんな都市伝説が囁かれています。百階段を一人で歩いていると、十何年も前に死んださやかという女の子の幽霊にあの世へと引き摺り込まれてしまうというお話です。

今までにも大事にはならなかったもののあの百階段で怪我をした子は沢山います。まさか噂は本当だと言うのでしょうか。そうだとしたら……。

……いずみちゃんは、さやかに連れて行かれちゃう。
わたしはぼろぼろになったいずみちゃんの体に顔を埋めて、少し泣きました。何故涙が流れるのでしょうか。

それはきつと目の前にいずみちゃんがないからでしょう。目の前にある（、）のはいずみちゃんの形をした、ただのモノなのですから。

このまま本当にいずみちゃんの中身はさやかにとられてしまうのでしょうか。そんなの嫌だ、絶対に嫌だ。わたしはいずみちゃんの蒲団で涙を拭ってから顔を上げて、彼女の顔を覗き込みました。相変わらずいずみちゃんは死んだ瞳で虚無を眺めています。

おい。

病院からの帰り道、紫陽花坂をとぼとぼと上っていると聞き覚えのある声が聞こえました。ふと顔を上げると百階段の辺りに見覚えのある顔が二つ並んでいました。同じクラスの北野君と間島君です。こんな時間にこんな所で何をしているのでしょうか。今の気分では上手く笑えませんが、わたしは精一杯の笑顔を二人に向けました。

「ああ、北野君に間島君……今、帰りなの」

二人の顔を見上げてそう聞きました。

「そうだよ、健也が一人で帰るの寂しいって言うから付き合ってたてるんだ」

「そうなんだ」

実はこの二人、ちょっとだけ苦手なんです。

間島君は不良ぽくて恐いし、北野君は賢過ぎて怖い。勉強が出来ると言う種類の賢さではなくて、頭が切れ過ぎると言うか勘が鋭過ぎるんです。

「小森お前、さっき優美と帰ったんじゃないのか？」

「う、うん。でも、わたし……ちょっと用事あったから途中で別れたんだよ」

「用事？」

「ちょっとね……それで、今、その帰りなの」

このように北野君はいつも質問責めをします。質問の意図が解らないので何か怖いのです。しかも今日はその横で間島君がにやにやしているので余計に気味が悪い。

「ところでな、小森。優美の事でちょっと聞きたい事があるんだけど」

「な、何……」

取調べのような口調で北野君は聞いてきました。

「いや、そんな大した事じゃないんだ。優美って今、彼氏とかいるのか？」

「彼氏……かあ。うん、いないと思うよ……多分」

すると間島君が眉に皺を寄せて、多分？ と聞き返して来ました。その恐い顔に気押されたわたしは思わず、ごめんなさい、と謝ってしまいました。するとすかさず北野君が割って入ってきます。

「いやいや、こっちこそゴメンな。健也コイツ実は優美の事が好きらしいんだよ、それで小森なら優美と仲良いし色々知ってるかなと思ってさ」

北野君が一息にそう言うの間島君は真っ赤になって顔を伏せていました。どうやら優美の事が好きだというのは本当のようです。

「そうだったんだ。本当に彼氏はいないと思うよ……」

恐る恐る顔を上げると間島君はすごく嬉しそうな顔をしていました。きつと本当に優美の事が好きなんでしょう。

「あのね……あたし、優美とはいつも一緒にいるんだけどね、そんな話、一回も聞いた事ないよ」

「そうなのか！」

「う、うん。放課後も、真っ直ぐ家に帰ってるみたいだし、寄り道して男の子と遊んだりしてる感じは、ないよ」

嘘です。

本当は優美も寄り道しているの、わたしは知っています。わたしと別れた後に一人で繁華街へ行ったり、すぐそこにある小さな公園

でぼーっとしているのを。

間島君はわたしの言葉を信じてくれたのか満足そうな顔をしています。そして二人はにやけながら何かを言い合っています。

「もう暗くなるぞ、早く帰ろう」

「そうだな、小森も一緒に帰ろうぜ。電車も同じ方面だろ」

間島君はわたしにそう提案しました。でも。

「わ、わたしは……いいよ」

「何でだよ、暗くなるから女子一人じゃ物騒だろ」

わたしは今、二人と一緒に帰るつもりはありません。ここはわたしの大切な友達が壊れてしまった場所、百階段なんです。この場所でいずみちゃんに何が起こったのかを少しだけ調べてみたいんです。「あの……わたし、ちょっと用事があるの……だから、先に帰って良いよ……」

「用事って……これからまた用事あるのかよ」

「うん。わたしは一人で大丈夫だから……ごめんなさい」

「なあ小森、何があるんだか知らないけれど気を付けろよ」

北野君が心配そうな顔をしています。彼もこんな顔が出来たなんて意外です。じゃあなと言ってから北野君は背を向けました。

「マジで気を付けろよな、さやかに……」と間島君。

さやか……。

そうです。わたしの大好きないずみちゃんをさやかなんかに連れて行かれる訳にはいけません。いずみちゃんはわたしの友達なんです。わたしがしっかりしないと……。

「ありがとう気を付けるね、さやかに……」

すると二人は意外そうな顔でわたしを見えています。さっきこの場所で別れた時の優美と同じように目を円くしていました。わたしがはっきりと物を言うのがそんなに意外な事なのでしょうか。彼らはわたしに手を振って百階段を下ってゆきました。

彼らがいなくなった後の紫陽花坂、わたしは一人で百階段の一段目に腰掛けました。真っ赤な夕陽がわたしの肌も赤く染めていまし

た。

太陽は先程よりもまた傾きました。わたしは分度器でも何でもないので正確な角度までは判りませんが十度は地平に近付いたのではないでしょうか。

その時、わたしの後ろで車の停まる音がしました。

振り返ると男の人が出てきていました。ぴしっと背広を着こなした上品そうな中年の人です。

「君は旭ヶ丘高校の生徒かな？」

わたしは立ち上がって、はいと答えました。

「やっぱりそうなんだ。そのブレザー制服、この辺りでよく見るからね」

「そうなんですか……」

男の人はわたしの着ている制服を見ながら頷いています。

「一年生かな？」

「いえ、二年です」

するとその人は「あ、ごめんね」と言って目を細めました。どうやらまた子供に見られていたようです。

「あの……何かわたしに用ですか？」

「いやあ、ちょっとお話ししたくなってね、君と」

低い声でそう言われてわたしはぞっとしました。ここ最近、この紫陽花坂で変質者が出没すると言う事を思い出したんです。確か一年生の子がカッターナイフを突き付けられてスカートに裂かれたと聞いた事があります。

こわくなりました。

「わ、わたし……もう帰ります。ごめんなさい」

身の危険を感じて背を向けた時には、もう遅かったんです。わたしはその人に羽交^{はが}い締め^{はが}にされてしまいました。こわくて声も出ませんでした。

「良いじゃないか。ちょっとだけお話ししようよ」

男の人は耳元で妖しく、いやらしく囁きます。

必死に手足をばたつかせるわたしの抵抗も空しく、わたしは引き摺られるように車の後部座席に押し込まれました。ボタンと音を立ててドアが閉まり、わたしは男の人と一緒に外部から完全に遮断されてしまいました。そうなったのとほぼ同時に、男の人がわたしの上に覆い被さってきます。

間違いありません。やっぱりこの人が紫陽花坂の変質者なんです。

「可愛いね……」

男の人はわたしの頭をがさつに掴んで無理矢理キスをしてきました。舌が口の中に這入ってきます。こわくてこわくて、抵抗する事も出来ません。

そしてわたしのブラウスのボタンは引き千切られて強引に下着を押し上げられました。男の人はわたしの両腕を押さえ付けたまま、わたしの顔をじっと見下ろしています。

「ご、ごめんなさい……」

そんな言葉が何故かわたしの口から零れました。何も悪い事なんてしていないのに何故私は謝っているのでしょうか。するとその男の人はいやらしい笑みを浮かべてわたしのブレザーの胸ポケットを弄り生徒手帳を取り出しました。

「ふうん、小森明歩ちゃんっていうんだ」

「ごめんなさい……」

「何で謝っているんだい。こっちの顔写真も可愛いけれど、今みたいに泣き出しそうな明歩ちゃんも可愛いよ」

そして男の人はデジタルカメラを手に取りわたしの顔の横に生徒手帳を並べて、写真を撮りました。多分はだけた胸も写っているでしょう。それからわたしの内腿を撫でながらスカートを捲り、下着の中に指を滑り込ませてきました。そしてそれはわたしの中に這入ってきます。

痛い……。

「明歩ちゃん……声が漏れてるよ」

ごめんなさい、ごめんなさい。

わたしは何度もそう繰り返しました。こわくて痛くて、ごめんなさい以外の言葉が出てきません。そして男の人は息を荒げてベルトに手を掛けます。

わたしはそのまま、犯されました。

散々弄ばれた後、わたしは漸く凌辱から解放されて仄暗くなった紫陽花坂に放り出されました。

またね。わたしを辱しめた人はそう言い残して去ってゆきました。

そこで初めて涙が零れました。一粒零れると堰を切ったように次々にぼろぼろと溢れ出してわたしの頬を濡らします。こわかった、痛かった。そんな恐怖と苦痛からももう解放されました。

でも、終わりではないような気がします。

生徒手帳を見られて名前を知られました。しかも写真も撮られました。顔と生徒手帳を並べた写真だけでなく、わたしは犯されている最中何度も写真を撮られました。誰かに助けを求めるとその写真でわたしに脅しを掛けてくるかもしれません。

更にあの男の人はこう言いました。またね、と。

また。またがあるんです。きっとまたあの人に犯されるんです。明日も明後日もそのまた次の日もわたしを待ち伏せしているんです、この紫陽花坂で。嫌だ、厭だ、イヤだ。乱れた着衣を直しながら袖で涙を拭きます。

初めてでした。セックスなんて一生わたしには関係の無い事だと思っ

ていましたが、まさかこんな形で経験してしまうなんて……。

気持ち良いだなんてとんでもない。ただ痛くて、ただ苦しくて、ただこわくて、ただ悲しいだけでした。勿論キスだっていずみちゃん以外の人とは初めてでした。

いずみちゃんにだけはこんな事知られたくありません。わたしが強姦された事を知られてしまうと、彼女に距離を置かれてしまうような気がするからです。もしかしたら汚れたわたしを嫌うかもしれない。

いずみちゃんは初めて出会った頃から変わらず純粋な女の子です。だからわたしも純粋で居続けなければいけないんです。

純粋でいたかった。純潔でいたかった。

止めどなく涙が溢れてきます。

そしてわたしの内股から赤い血が滴り落ちて、白いソックスを赤く染めました。

昔から押し入れの中が、わたしの安住の地です。

家の外を車の通り過ぎる音がする度にわたしの体はぴくりと痙攣し、冷たい汗が背中に滲みます。お母さんもお父さんも仕事に行っていて帰るのがいつも遅く、今日もまだ帰って来ていません。

わたしは押し入れの中に引き籠って膝を抱えていました。

こわい事があったら、子供の頃からいつもわたしはこの押し入れの中に隠れています。あれは確か幼稚園に通っていた時の事でしょいか、節分の豆まきの時にお父さんが鬼のお面を着けていたのがこわくてわたしはこの押し入れにずっと隠れていたのを覚えています。お母さんが、鬼さんはもういないよ、と言ってくれてもまだ隠れていました。しくしくと泣きながら隠れていました。十七歳になった今でも同じです。

わたしの股からはまだ血が滲んでいます。ひりひりと、じんじんと痛みます。

……もう、嫌だ。

わたしは泣いています、しくしくと。

真っ暗な押し入れの中でわたしが開いている携帯電話の画面^{ディスプレイ}だけが青白く仄かな光を放っています。わたしは一通のメールを送りました。

F o r …優美

件名…なし

本文…もう死にたい

画面には送信完了の文字。しかし送信して直ぐに後悔しました。わたしは何て事をしてしまったのでしょうか。優美に要らない心配を掛けるだけです。

わたしがしくしく泣いていると携帯電話が耳障りな呼出音を鳴らして着信し、わたしの体は再び引き攣りました。案の定、優美からの着信です。

きっと彼女はこう聞いてくるでしょう。

——一体どうしたの？

——何があったの？

——相談に乗るから話してみなさい。

嫌です、絶対に嫌です。わたしが強姦されただなんて優美にも絶対に話したくありません。きつとわたしから離れて行ってしまう。だからわたしは着信音が鳴り止むのを、耳を塞いでじつと待っていました。

一分ほど経って、ようやく呼出が切れました。わたしは涙を拭って携帯電話の電源をオフにしました、もう誰からも掛かって来ないように。

地獄のような一日はわたしの胸に深い傷を残して過ぎてゆきました。

しかし、翌日。そんな地獄よりも更に非道い事があるのだと、わたしは実感する事になるのです。

※

十月三日。

「今日は、ちょっと……お腹痛い」

朝、わたしの部屋まで起こしに来たお母さんに向かってそう言いました。

「だから……学校、休むね」

そうなの、とお母さんは少し呆れたように言って部屋の戸を閉めました。わたしのお母さんもお父さんも、こんな事を言っても怒ったりはしません。わたしに関心が無いのでしょうか。

お腹が痛いというのは勿論嘘です。本当はただ学校へ行くのが嫌なだけなんです。正確に言うと、一人であの紫陽花坂を通るのがこわいんです。また、あの男の人がわたしを待ちかまえているような気がしてなりません。

昨日の事は誰にも言っていない。恥ずかしくて、こわくて誰にも相談できなかったんです。血は止まっていたましたが、まだ股の辺りがひりひりと痛みます。

しばらくするとお父さんもお母さんも仕事に出掛けて行きました。わたしはパジャマのまま蒲団を頭まで被って昼過ぎまで蹲うつすくまっていました。そして時々泣きました。

お腹が空いたので一階のリビングに下りて何か食べるものはないかと探してみましたが、テーブルの上には何もありません。お母さんはわたしの分の朝ご飯も置いておいてはくれていますでした。少し悲しく思いましたが仕方ありません。お母さんもお父さんも仕事

が忙しくてわたしの事なんてどうとも思っていないのですから。冷凍庫の中から食パンを取り出して、膝を抱えて床に座り込みました。フロリング冷たさがわたしのお尻に伝わります。そして凍ったままの食パンをそのまま食べました。しゃりしゃりとした食感と味気ない虚しさが口の中に広がります。

……不味いなあ。

気が付けば、わたしはまた涙を流していました。

午後三時を過ぎた頃、わたしは制服に着替えて家を出ました。学校へ行くのではありません、いずみちゃんの所へ行こうと思ったのです。私服だといずみちゃんに学校を休んだのかと思われてしまいます。制服を着たのは彼女に変な心配をさせないためです。

電車に乗って旭ヶ丘総合病院までやってきました。

相変わらず消毒液の匂いが充満したロビーを抜けて、エレベーターで五階まで上がり、昨日と同じように面会名簿に自分の名前を書いて、いずみちゃんの個室に向かいます。

途中、小さな子供達の病室の前を通りました。その中に居た子供達はみんな笑顔で、本当に病人なのかと思うほど元気そうです。彼らの空間だけ病院と言うよりは保育園や小学校のような雰囲気になっていました。そんな子供達を診ている先生は本当に優しく良い人なんでしょう。子供が好きな人に悪い人はいませんから。

いずみちゃんの個室は防音扉のような重々しいドアによって外界と隔たれています。まるでそこへ入ってはいけないのかのような、金属でできたスライド式の引き戸。わたしは全体重を掛けてその扉を押し開けて、中を覗き込みました。

電気を消し、カーテンを閉め切った薄暗い病室の奥にあるベッドに何か横たわっているのが見えました。それがいずみちゃんでしょう、きっと。ドアの隙間から、わたしはまるで別世界のような陰鬱で暗い空間に視線を泳がせています。次第に暗さに目が慣れてくると、少しですが病室の輪郭が明らかになってきました。

「いずみちゃん……」

ぼつりと呟くと、それに反応したのかベッドの上のいずみちゃんがおそりと動いたように見えました。気の所為だと思っていましたが、

「もしかして……アキちゃん？」

と、返ってきました。

虫の羽音のように小さな音で、一瞬自分の耳を疑ってしまったのですが本当に聞こえた音でした。目を凝らしてベッドの方を見ると、いずみちゃんの顔がこちらを向いているんです。そしてその顔は仄かに微笑んでいるように見えました。するとわたしは嬉しくて泣きそうになりました。

「ねえ、ちょっと入っていい？」

わたしがそう聞くと、いずみちゃんは小さく頷きました。嬉しく

なったわたしはそろりそろりと薄暗い部屋に身を滑り込ませてベッドに駆け寄ります。そこにはわたしが最後に見た時より少しやつれたいずみちゃんの顔がありました。

「久しぶりだね、アキちゃん」

いつ以来だっけ。そう呟いてからいずみちゃんは僅かに口元を綻ばせます。

「夏休みの終わりにファミレス行ったとき以来だよ……」

そっか、と言っていずみちゃんは再び微笑みました。彼女が笑う度に何故か悲しくて寂しい気持ちになります。それ程までに彼女の笑顔は儚いものでした。

「ちよつとこの部屋暗くないかな。まだ外は明るいよ」

わたしはカーテンに手を掛けました。すると、

「やめて」

と、いずみちゃんは言いました。

「ど、どうして？」

「良いからカーテンは開けないで。そこに電気のスイッチあるから、そっちにしてよ」

彼女は視線で示します。ベッドの上のナースコールの横に電気スタンドのスイッチがあったのでわたしはそれを押しました。部屋の明かりが点くといずみちゃんの姿が露わになります。わたしは彼女を見て言葉が詰まりました。

「酷いもんでしょ……」

いずみちゃんは、点滴やよく解らない医療機器に繋がれ体中を包帯に巻かれていたのです。きっと首から下はまともに動かす事も出来ないのでしょう。その痛々しい姿を見て胸が痛くなりました。

「きっと大丈夫だから……心配要らないって」

いずみちゃんの発するそんな前向きな言葉も逆に悲しく感じるんです。

「ホントに……大丈夫なの？」

「うん。だってアキちゃんがこうしてお見舞いに来てくれるんだも

ん。ちょっと元気になったような気がする。ほら、その花もすごく嬉しかったんだよ」

サイドテーブルには昨日わたしが持って来た花がありました。

「それ、何て花なの？」

「あ、うん。ガーベラっていうの」

「綺麗なピンク色だね。でもそれってあまりお見舞いの花っぽくないよね」

「ごめんなさい……」

するといずみちゃんは、くすつと笑い声を洩らしました。

「ほら、また出たよ」

何が？ と、わたしは首を傾げました。

「アキちゃんの口癖。ごめんなさいって台詞」

「え、そんなにわたし謝ってるの？」

「うん、小学校の頃からいつも言ってるよ。悪い事なんて何もしてないのに直ぐに、ごめんなさいって言うんだ、アキちゃんは」

「そうかなあ……」

「うんうん。でもね、ごめんなさいっていうのは悪い事した時に言う台詞だよ。だからそんな簡単に言うような言葉じゃないの」

「ごめんなさい……」

「ほら、また」と、いずみちゃんは笑いました。「あ、ホントだ」と、わたしも一緒になって笑いました。まあそれがアキちゃんらしい所なんだけどね、と言っていずみちゃんは小さく頷いています。

彼女と話していると嫌な事があっても全部忘れてしまえます。いずみちゃんの前だと無邪気な子供に戻るような気がします。今のわたし達は小学生の頃のままです。それはお互いに穢けがれの無いまま変わっていないからでしょう。だからこそわたし達はずっと友達のままでいられるのでしょう。これから、ずっと。

だから、いずみちゃんには言えません。

昨日、わたしが穢けがれてしまった事なんて……とても言えません。そんな事を知られてしまっってはわたしたちの関係は壊れてしまいます。

そんなの絶対に嫌です。もし私達の関係が壊れる事があるのだとすれば、それはどちらかが死んでしまう時でしょう。

知らないおじさんに犯された。そんなこと絶対に言えません。

「ところで、いずみちゃん。百階段で転んだんだよね……」

話を切り替えてわたしがそう言った途端にいずみちゃんの顔の筋肉がぴくりと引き攣りました。少し、こわい顔です。わたしはまた思わず言ってしまうました、ごめんなさい、と。すると彼女の顔は直ぐに元の穏やかな表情に戻り、わたしの問い掛けに答えてくれました。

「そう。あの階段を下りようとした時に、お供えの花が差してある瓶を踏んじゃってね。それでそのまま転んで落ちちゃったの」

大丈夫？ と聞こうとしましたがどう見ても大丈夫でないのは明らかなので、わたしはその問いを飲み込みます。その代わりに彼女の体に痛々しく巻かれたギプスや包帯を見下ろして顔を顰めました。

「それって、百階段の上に供えてある黄色い花の事だよね」

すると、小さく頷くいずみちゃん。確か、いずみちゃんが怪我をした翌日の帰り道、いや、朝学校に行く時には既に瓶はいつもの場所に戻っていました。いずみちゃんが踏んづけて倒れた瓶を、一体誰が元に戻して更に花まで差し換えたのでしょうか。

「じゃあ、いずみちゃんが百階段から落ちたのは……事故なんだよね？」

「うん……そうだけど。何でそんな事を？」

「例えば……誰かに背中を押されたとか、足を引っ張られたとか……ないよね？」

すると、いずみちゃんの顔色が幽かに変わりました。そして彼女の口唇がゆつくりと動きます。

「さやか的事？」

彼女ははっきりと口にしました、さやかという言葉。

「知ってるの？」

「うん、旭ヶ丘高校の生徒なら誰でも知ってるんだってね。昔の旭

ヶ丘高校の生徒に、さやかとりかこって仲良しの二人組がいたんでしょ。そのさやかかって子が、あの百階段から落ちて死んだんだっけ。それ以来夕暮れの紫陽花坂にはさやかの幽霊が出て、気に入った子をあの世に引き摺り込むって話でしょ」

「そうだけど、何でいずみちゃんが知ってるの」

「ああ本当に有名な噂なんだね。あの子が言った通り……」

どうやらいずみちゃんは誰かからさやかの噂を聞いているようです。

「あの子は今でも私の事を視てるんだよ、じいっと」

いずみちゃんの表情がみるみるうちに青褪め、声も上擦ってきています。あの子って誰、と聞くと彼女は小さく身を震わせました。

「新谷詩緒里^{しんたにしおり}」

いずみちゃんは震える声でその名を口にしました。シンタニシオリ……。わたしは心の中で復唱しましたが、どうもそんな名前に心当たりはありません。うちの学校の生徒にそんな人がいるのでしょうか。何だか気味が悪くなってきました。

そしていずみちゃんはもう一言呟きます。

——私はもう直ぐ死ぬ、多分。

家に戻ったのは夕方でした。

お父さんもお母さんも仕事で今日も遅くなるようです。いつもの事なんです。ああ、時計の秒針の音がうるさい。

わたしは和室の畳の上でごろりと横になって、今日いずみちゃんが言っていた事を反芻^{はんすう}していました。

どうやらいずみちゃんは、新谷詩緒里という人に例の噂を教えて貰ったのだそうです。その人はさやかの都市伝説を事細かに語り、そしていずみちゃんが百階段から落ちる様をじいっと視ていたらしいのです。あの小さな公園から。

いずみちゃんから少しだけ聞きましたが、その新谷詩緒里という人はさやかの話について異常に詳しく、前から旭ヶ丘高校に通って

いたわたしですら知らない事も知っていたのです。一体何者なのでしょうか。

いずみちゃんが言うには、彼女は旭ヶ丘高校の制服を着ていたそうです。何年生なのでしょう。少なくともそんな名前の子は二年生にはいないと思います。それ程までにさやかな噂に詳しいと一年生とは考えにくいので、そうだとしたら三年生なのでしょう。

それ以外の見た目の特徴も聞いておきました。するといずみちゃん、黒い髪に冷たい瞳と答えました。その特徴から、思わずあるクラスメートの姿を連想しました。

絹のようなしなやかな長い黒髪。同い年とは思えない妖艶ようえんさを孕はらんだ切れ長の瞳。まさかとは思いますが私はその子の姿を思い浮かべました。

くさかべ あやな
日下部綾奈。

いずみちゃんの話から、どうしても綾奈の姿を想像してしまうのです。

……まさか、ね。

黒髪の女の子なんて旭ヶ丘高校には沢山います。私は新谷詩緒里イコール綾奈という説を払拭しようと頭を掻き毟りました。

するとその時、玄関の扉が開く音がしたのです。私の耳は兎のようにぴくりと反応しました。壁に掛かった時計を確認すると、もう五時を回っています。お父さんが帰ってくるには早い時間なので、お母さんが帰って来たのでしょうか。

わたしは起き上がって玄関の方に行きます。

「お帰りなさい」

そう言って玄関を覗いて、私は言葉を失いました。私の目の前に立っていたのはお母さんではありません。

「こんにちは、明歩ちゃん。ほら忘れ物だよ」

斜陽を背に、玄関に佇んでいたのは昨日のあの男の人……私を穢した男の人でした。その手には私の生徒手帳を持っています。

男の人が私の目を見てにこりと笑った刹那、舌の上がざらざらに乾き頬から首筋に冷たい汗が滴ったのが自分でも解りました。嫌だ、この人に見られていたくない。わたしは家の中に逃げ込もうとしましたが、ごつごつした手にわたしの腕は掴まれてしまいました。

「この生徒手帳ね、車の中に落ちてたんだよ。住所も書いてたから届けに来たんだ」

「いやだ……離して下さい」

すると男の人は様子を窺うように背伸びして家の奥の方を覗いています。

「家の人はまだ帰っていないのかな……」

います！ お父さんもお母さんも帰ってきてます！ と、わたしは激しく首を横に振って手を振り解こうとしました。

「誰もいないんだね？」

「います！」

「いないんだね……」

わたしは玄関に引き倒されました。そして男の人はわたしの両腕を押さえ付けてのしかかってきます。

「嘘はいけないな、明歩ちゃん」

「ご、ごめんなさい」

ごめんなさい、ごめんなさい。

わたしは何度もそう繰り返しました。ごめんなさいとわたしが言う度に男の人の笑みにいやらしさが増えてゆくような気がしました。ごめんなさい。

無理矢理ブラウスを脱がされ、強引に下着を引き剥がされました。男の人は私の髪を掴んで冷たい石の床に顔を押し付けてきます。そしてもう一方の手が股に伸びてきます。

そして昨日と同じように、わたしは穢あがされてしまいました。

抵抗しても無駄なんです。どう足掻あがいても力では勝てませんし、泣いても叫んでも助けてくれる人なんて誰もいません。苦痛と屈辱と羞恥心を噛み殺しながら事が終わるのをただ耐えていました。

……痛い、痛いよう。

その間もずっと心の中でごめんなさいと繰り返していました。やがて男の人が体をひくひくと震わせると、わたしの中にどろりとした粘液が入り込んでくる感覚がしました。どうやら事は終わったようです。

男の人は満足げに私を見下ろしながら、ズボンのベルトを留めて自分の着衣を整えています。そしてポケットから一万円札を何枚か取り出してわたしのお腹の上に無造作に置きました。

「お小遣いだよ」

またね、と言って男は帰ってゆきました。わたしは玄関の冷たい床の上で仰向けになったまま放心しています。

男の人は、またね、と言っていました。これで終わりではないんです。また（、）があるんです。まだ……続くんですね。

しくしくと痛む内股に手を伸ばして触ってみると、わたしの中からさっきのどろりとした物が垂れ出していました。わたしの血と混じったその体液は生臭くて汚らしく、吐気がしました。手に着いたその粘液を投げ捨てられた一万円札で拭きます、何度も何度も拭きます。

半裸のまま、わたしは嗚咽して泣きました。

※

十月四日。

もうわたしに安息の地はありません。

学校も休んでどこへも行かず、ずっと家に居れば安心だと思っていましたが、もうそうとは言えません。あの人に家まで知られてしまったのです。

わたしは真っ暗な押入れの中で朝からじっとしています。時計を見ていないので時間は分かりませんが、きっと正午を回った頃でし

よう。少しお腹が減りました。少しだけ襖ふすまを開いて眩しい外を覗き込みます。誰もいません。

眩しさに目を窄すばめながらわたしは芋虫のようにもぞもぞと押入れから這い出して、台所に向かい冷蔵庫を開けるとアルミホイルに包まれたおにぎりが一つありました。わたしはそれを無造作に掴んで押入れという殻の中に戻りました。

襖を閉めて再び暗闇に包まれると不思議な安心感を覚えます。しかし、それもつかの間の間の安堵に過ぎません。

助けて下さい。誰か、助けて下さい。

わたしの目からほろりと涙が零れます。アルミホイルを剥いておにぎりを一口齧ります。具はおろか塩味すらない冷たく味気ないおにぎりでした。わたしはそれを半分ほど食べてから再びアルミホイルに包んで、うとうとし始めました。

それからしばらくして、耳障りな電子音で目を覚ましました。

温かい暗闇が充満した押入れの隅で、携帯電話の画面ディスプレイが青白く光っています。どうやらメールの受信音だったようです。確認すると、どうやらそれは近所のCDショップからのニュースレターでした。

二日前に天野瀬里奈あまのせりなの新譜が発売されたので、そのコマースシャルでした。

そう言えば優美から何度もメールが来ていました。きっと、わたしの事を気に掛けてくれているのでしょう。嬉しいけれども、本当に申し訳なく思います。

時間を見ると午後の一時を回った頃でした。もう五時間もすればこの家も危険です。昨日と同じように、またあの人が来るかもしれないから……わたしを凌辱しに。もう痛いのは嫌です、恥ずかしいのは嫌です、こわいのは嫌です。

……逃げなきゃ。

だからと言っていずみちゃんの所へ行く訳にはいきません。わたしが汚れている事をいずみちゃんだけには知られたくないのです。どうしよう、どうしよう。

そこでわたしは一通のメールを綴りました。

F o r .. 優美

件名..なし

本文..今夜、遊びに行ってもいい？

お願い。優美。

わたしを助けて。

今まで心配させて、ごめんなさい。ごめんなさい。

わたしは午後の四時にアラームを設定して携帯電話を閉じると押入れの中は再び真っ暗に戻ります。何も見えません、何も見えないという事がこれほどまで心に平穏を与えてくれるものなどと思った事はありませんでした。この数日間、見たくないものを多く見過ぎたせいでしょうか。安心したわたしは少しだけ眠りました。

四時のアラームに合わせて目を開け、押入れから這い出して洗面所で顔を洗い出掛ける準備を整えたわたしは大急ぎで家を出ました。暗くなり始める前に家を出なければいけません。夕方になればまたあの男の人がやってきます、わたしを凌辱しに。

電車に乗って優美の家に向かいます。がたごとと揺られる事三十分、旭ヶ丘高校から一

つ離れた駅に着きました。駅のホームでわたしと同じ学校の生徒ともすれ違い、わたしは思わず顔を伏せました。

正確な時間は決めていませんが、約束したのは夜です。しかし今はまだ五時になった所で、とても夜と呼べる時間ではありません。駅前の繁華街でせめて陽が落ちるまでの時間を潰す事にしました。

平日でも夕方にもなると繁華街には沢山の人が集まります。人混みは正直言って大嫌いだったのですが、今日は何故かその人混みの中に紛れていると安心感を覚えるのです。C D ショップ、お洒落なカフェや雑貨屋さん。お金はないのでほとんど見ているだけなのですが、わたしは一人で色々なお店を回りました。

街灯が灯されると街に夜の気配が漂い出します。繁華街は夜になるとその表情を一変させます。昼は学生やカップルで賑わっているのですが、夜になると恐そうな男の人や化粧の濃い女の人の姿がちらほらと見られ始めて、どこか危険な香りが漂い始めるのです。

バス停で時計を確認すると七時を示していました。もう夜と言える時間です。わたしは逃げるように繁華街を離れました。

今日は少し肌寒いです。

優美の部屋にはぬいぐるみなどの可愛い物は一切ありません。すっきりしていて清潔な印象なのですが少し寂しいような気がします。

「何か食べる？ あ、そうだ。台所にクッキーがあったんだけど、いる？」

優美はわたしの顔を覗き込みながらそう言いましたが、わたしはそれを断ります。わたしが優美の家に着いたのは夜の七時を過ぎた頃でした。浮かない顔をしていたわたしを、彼女は何も聞かずに笑顔で部屋へと入れてくれました。

わたしは彼女のベッドの上でシンプルな無地の枕を抱えて小さく座っています。ふかふかの枕に顔を埋めているわたしは、まだ一度も優美の顔をまともに見ていません。

「うーん、じゃあ紅茶でも入れてきてあげよっか？」

それでも優美は心配するでも動揺するでもなく、あくまでいつも通りにわたしに接してくれるのです。わたしはその申し出を受け入れて小さく頷きました。ちょっと待っててね、と言い残して優美は部屋を出て行きました。

ぱたりとドアが締められる音がして、わたしは一人になってしまいました。わたしの胴体ほどもある枕をぎゅうと抱き締めます。

わたしは一体何をしに優美の家に来たのでしょうか。夕暮れに訪れる凌辱の魔の手から避難する為でしょうか、彼女にその魔の手から救って貰う為でしょうか、それともただ独りぼっちが怖かったから

なのでしょうか。もしかするとその総てが目的となっていたのかも
しれません。

結局最後は優美に頼るしかないんです。

いずみちゃんをあんな姿にしてしまった新谷詩緒里の正体を突き
止めようと一人で紫陽花坂に立った日、わたしは自分自身を変えら
れるような気がしました。それでも結局^{ひど}非道い目に遭って小さな自
分に逆戻りしてしまいました。変われないんです、きっとそういう
運命の下に生まれたんです。

ダメなんです。

やっぱりわたしは、ダメなんです。

その時ドアが開いて紅茶の柔らかく甘い香りがしました。二つの
カップを両手に持った優美がドアの傍に立っていたのです。

「ほら、置いとくよ」

そう言ってテーブルの上にカップを置いた彼女はわたしの隣に座
ります。わたしは枕を抱えたまま、ありがとうと小さく礼を言って
再び黙り込んでしまいました。そのまま無言の時間が流れてゆきます。
「二日も学校休んでメールも返してくれなっかのにどうしたの、急
にうちに来るなんて言い出して」

沈黙に堪えかねたのでしょうか、会いたいと言い出したのはわた
しなのに優美から口を切ったのです。

「ごめんなさい……」

また言ってしまいました。

わたしはこれが口癖になっていて、意識しなければ直ぐにこの言葉
が出て来るのです。すると優美は悲しそうな顔をして言いました。

「全く……私や綾奈だって凄く心配してたんだよ」

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。わ
たしは何度もそう繰り返しました。泣きそうです。そして優美がわ
たしの顔を覗き込もうとしましたが、わたしは逃げるように顔を背
けました。

「ねえ明歩、元気ないけど何かあったの？」

何でもないよ、とわたしの口から零れました。わたしは優美に助けを求めてきたのに、この期に及んで隠し事など何の意味があるのでしょうか。つくづくわたしは馬鹿だと思いました。

「じゃあ何で死にたいだなんてメール送って来たりするのよ！」

優美は厳しい口調ではありませんでしたが、それはまるでお母さんのように優しくわたしを咎めました。そ、それは……と洩らしてわたしはまた黙り込んでしまいました。

「紫陽花坂……」

彼女の口から出たその言葉に反応してわたしの目に涙が込み上げてきました。そう、わたしは紫陽花坂で見知らぬ男の人に凌辱されたのです。

……もう、言ってしまおう。

「わたし……わたしね……」

言葉は溢れ出す涙に邪魔をされて上手く口から出て行きません。しかし優美はわたしの頭を優しく撫でて慰めているようでした、それはまるでわたしに起こった総ての事を知っているかのように。

「もしかして、あの日……変な奴に襲われたりしたの？」

優美の口からその言葉が出た途端にわたしの目からは涙が溢れてきました。彼女は本当にお見通しだったのです。気が付けばわたしは優美にしがみ付いて子供のようにわんわんと泣き喚いていました。

「もう、大丈夫だよ」

「え？」

もう大丈夫。その言葉が意味している事が解らず、わたしは優美の顔を見上げました。すると彼女は優しく微笑んでいます。

「紫陽花坂の変態男はね、さっき間島君が退治したんだよ」

「間島君が……ホントに？」

「ホントだよ！ 実はさっき私も襲われそうになったんだけどね、間島君が助けてくれたんだ。正義のヒーローみたいだったんだよ」

あの悪そうな怖い間島君がそんな事をするなんて正直意外でした。彼ほど正義のヒーローが似合わない人はいません。

「凄いんだね、間島君かっこいいな」

「うん、だからもう紫陽花坂に変質者は二度と出ない。もう大丈夫だから、死にたいなんてもう二度と言わないで！ それに……明日からまた学校においでよ……」

退治したという事はあの男の人はもういないのでしよう。わたしが狙われる事もないのでしよう。わたしの家に来る事もないのでしよう。そして、きっと紫陽花坂に現れる事もないのでしよう。

もうこれ以上汚れてしまう事はありません。そう考えてわたしが、うんと小さく頷くと優美の顔にも安堵が現れました。わたしは実際には何も言っていないませんが、胸の中のもやもやを優美に打ち明けて、しかもそのもやもやの要因が既になくなっていた事を知って気持ちに少し楽になりました。

優美が淹れてくれたダージリンティーはすっかり冷めてしまっていました。が何故かとても美味しく感じます。ここ数日、何を食べても何の味もしませんでした。口に入れたものの味を感じたのは何日ぶりでしょうか。

それからわたしと優美はいつも学校でしているような取り留めもない話をしていました。そんな話をしている内に随分と遅い時間になっていた事に気が付きました。

「わたし、そろそろ帰るね」

何だかすっきりしました。

わたしが汚れてしまったという事実だけは変わる事はありませんが、もうこれ以上非道い目に遭う事はないのです。今日、本当に優美に会えて良かった。

「うん、明日からはちゃんと学校に来なよ！」

カップを置いて立ち上がろうとしたわたしに彼女はそう念押しします。わたしはこくりと頷き、優美と一緒に部屋を出しました。

明日からは、また学校へ行こう。

階段を下りていると不意に玄関の扉が開き、ただいまと男の人の声がしました。誰かが帰ってきたようです。優美のお父さんでしょ

うか。

「おかえり、お父さん」

やはりお父さんだったようでした。

確か優美のお父さんはいずみちゃんが入院している旭ヶ丘総合病院の小児科の先生です。優美のお父さんということはきっと凄く賢くてそして優しい人なのでしょう。人見知りで初対面の人が苦手なわたしは少し照れ臭くなりましたが、優美の後ろからひよいと顔を覗かせてみました。

「おや、優美の友達かい？」

玄関に優しそうな男の人が立っていました。しかしその優しそうな顔はわたしと目が合った刹那、僅かに曇ったのです。

私もその顔を見て背筋が凍りました。

「うん。クラスメイトの明歩」

そう優美がわたしを紹介します。しかしわたしは彼女の後ろに隠れました。

「そっか、うちの優美と仲良くしてやっておくれよ。明歩ちゃん」

優美のお父さんはそう言ってわたしに微笑みかけました。わたしは優美の後ろから恐る恐る顔を出します。

……やっぱりそうだ。

引き攣った笑顔の優美のお父さん、きっとお父さんも気が付いたのでしょう。実はわたしとは初対面ではないのです。

間違いありません。玄関に立っている人は……

……わたしを、犯した人です。

※

十月五日、多分昼前ごろ。

わたしはまた押入れの中。暗い暗い押入れの中。今日は学校へ行くという優美との約束も破ってわたしは押入れの中。昨日、家に帰って来てから暗闇を求めるように押入れに籠ってそのまま眠ってし

まっていたようです。

徐に襖を開けるとまるで瞳を焼くような日光が射し込んで、思わず私は目を窄すばめました。もぞもぞと這い出るわたし、昨日の事を思い出すとまた内股が少し痛みます。

とても優美の顔なんて見られません。

わたしを汚して汚して凌辱つくしたあの男の人の顔は、思い出せば思い出すほど優美と似ているのです。それもその筈、あの人は優美のお父さんだったんですから。これ以上家の中でじっとしていると鬱々とした気分に体ごと食い殺されてしまいそうです。

わたしは顔も洗わずにふらふらと家を出ました。

目的地なんてありませんが、とにかく外へ出ました。服装も昨日のを着たままですがそんな事はどうでも良いんです。情報を与えられ続けて自分で何も考えなくても良くなるような場所に行きたい。わたしの足は自然と繁華街へと向かっていました。

特急電車も止まる大きな駅の改札を出ると、案の定沢山の人々が行き交っていてわたしの存在は一瞬にして薄まりました。こうして消えてゆく感覚も悪くはありません。いつそこのまま消えてしまいたいとさえ思いました。

駅前のスクランブル交差点を渡り人混みをすり抜けながら、あてもなく昼の繁華街を彷徨さまよっていました。私以外は皆せかせかと足早に通りを歩き去ってゆきます、わたしだけがのろまなんです。横断歩道を歩いていると携帯電話で通話しながら歩いているスーツの男の人にぶつかりました。ごめんなさい、とわたしは頭を垂れましたが相手はわたしを一瞥する事も無く去ってゆきました。

この時間には夕方に多い学生も、夜になると現れる恐そうな人もいません。スーツを着たサラリーマンの姿が多く見かけられます。会社にも昼休みがあるのででしょうか。

そう言えば学校も今頃は昼休みです。きっと優美も綾奈あたりと一緒に昼ご飯を食べている筈です。優美はわたしの事をどう思っているのでしょうか。約束を守らなかったと怒っているのでしょうか、

それとも何故来ないのかと心配しているのでしょうか。

……どちらにしろ、ごめんなさい。

それでも優美には会いたくないんです。何故ならわたしは優美のお父さんに二度も犯されたんですよ。痛かったし、こわかった。もうこれ以上非道い事はしないで下さい、乱暴に髪を掴まれ犯されながら心の底からそう叫んでいました。しかし痛すぎてこわすぎぎて、一切言葉になりませんでした。

わたしを非道い目に遭わせた犯人が優美のお父さんだという事は彼女には言っていません。言える訳がありません、そんな事。

彼女は、わたしを非道い目に遭わせた犯人は間島君が退治したと言っていました。きっとそれも嘘ではなく事実なのでしょう。しかし真実はわたしや優美が考えていた事よりも少し複雑だったのです。

紫陽花坂の変質者は二人いた。

一人は優美の言う間島君が退治したという男、これは学校でも噂になっていた男の事でしよう。そして別にいるもう一人は、優美のお父さん。同じ時期に良く似た特徴を持つ二人が同じ場所に現れて旭ヶ丘高校の生徒を襲う。何という偶然なのでしょう。

自動販売機で温かいミルクティーを買ってショッピングモール脇の植え込みに腰を掛けました。石造りの縁がひんやりとしていて腰のあたりまで冷えてきます。自動販売機に入れたばかりだったのかミルクティーの缶もそれ程温まっています。

いつかは優美にもいずみちゃんにもみんなにも知られてしまうのでしょうか、わたしが汚されていた事を。嫌です、嫌です、嫌です。これからもわたしはあの人に犯されるのでしょうか。

厭です、厭です、厭です。

ぬるいミルクティーを啜りながらわたしは逡巡しています。すると妙な事に気が付きました。わたしの前を行き交う人たちが立ち止まって空を見上げているのです。大学生風のお兄さんが呆気に

とられたような顔で真上を指差します。OL風のお姉さんが口元を覆って空気を切り裂くような悲鳴を上げました。

そしてそこに立ち止まって上を向いていた二十名程の人々が一斉に視線を下ろしたのです。皆、間の抜けた顔をしていました。

わたしの隣で重い音がしました。それはまるで工事現場にある土嚢^{どこう}がおちてきたような、どさりという音でした。その時に水が撥ねたのか、わたしの顔に水飛沫^{しぶき}が引っ掛かりました。それを拭うと手の甲に茶色い水が付きました。

周りの人々の視線はその音のした方に釘付けになっています。誰もがぽかんとわたしの傍を見ているんです。皆してそんなにじっと見ていると流石にわたしも気になるじゃないですか。だからわたしも皆の視線を辿って顔を横に向けたんです。

張り付いていました。

こんもりと盛り上がる小汚い布の塊がアスファルトの地面に張り付いていました。男物の革靴も転がっています。これは一体何なのでしょうか。

そしてOL風のお姉さんが再び甲高い悲鳴を上げたのを皮切りに、周りを取り囲む人垣はパニックに陥ります。

わたしは座ったまま動く事も声を出す事も出来ません。わたしのソックスにもスカートにも、その茶色い水飛沫が飛び散って来ていました。

飛び降り自殺だ！

誰かがそう叫んで初めて理解出来ました。わたしの横にあるのはただの薄汚い布の塊ではありません。

人間です。いや、これはもう人間の形を留めていないただの肉の塊です。正確には人だった物（、、、）と言うべきなのでしょう。そこにある人間の残骸は糸の切れた操り人形なんてレベルではありません。体に空気を入れ続けて破裂させたらこんな具合になるのでしょうか。所々に見える白く尖った物は骨か何かでしょうか。わたしは手の甲に付いていた茶色い水をぺろりと舌先で撫でてみま

した。鉄臭くてしょっぱい。

わたしの周りは大騒ぎです。それでもわたしはただ黙ったままそれをじっと凝視^{みつめ}していました。随分形が崩れてしまっていますが顔の部分は何とか原形を留めています。薄く開かれた濁った瞳が虚ろにわたしを見詰めています。

……ああ、この人は。

知っている人です。

……死にたいのはこっちの方なのに。

これ、優美のお父さんなんです。

こんな夜に限って月が綺麗です。

わたしが警察署を出る頃にはすっかり夜になっていました。あの後、一番近くに居た目撃者としてわたしも色々と状況を聞かれたのです。

——わたしが座っていると、気が付いたら横にあの人が落ちてきていました。

そう答えるほかありません。未だに私自身状況を理解できていないのですから。思い出そうとただで吐気を催し、その度にわたしはトイレに駆け込み嘔吐しました。するとわたしに質問する刑事さんは気の毒そうな顔をします。確か、北野という名前のベテランそうな刑事さんでした。

——思い出したいくないのは分かるよ、ごめんな。

分かるんなら聞かないで下さい。

——でも出来るだけその時の状況を教えて欲しいんだ。

そう言って眉間に皺を寄せた北野さんはわたしに湯気の立つマグカップを差し出しました。中にはコーヒーが入っています。

——良かったら温かい物でも飲みなよ。

しかし、砂糖もミルクも添えられていません。ブラックコーヒーなんて苦い物はとても飲めません、大体高校生の女の子がブラックコーヒーなんて好むと思っていたのでしょうか。この北野さんは気が

利かないと言うより女の子の気持ちが解らないといった無骨な印象でした。まるでドラマに出て来るような男臭い刑事さんです。

わたしがコーヒーに手を付けようとしなのを見て、北野さんは更に困った顔をしてしまいました。流石に悪く思っ、わたしはマグカップを手にとってその真っ黒な液体に口を付けました。

……苦い。

こんな物のどこが美味しいのでしょうか。やっぱりコーヒーは嫌いです。するとわたしが一口飲んだ事に気を良くしたのか、無神経にも北野さんはわたしへの事情聴取を再開したのです。

――飛び降りた人に見覚えはない？

――いいえ、知らない人です。

嘘です。わたしは咄嗟に嘘を吐きました。

……わたしは、あの人に強姦レイプされました。

……しかもあの人は、わたしの友達のお父さんなんです。

そんな事、警察が調べれば直ぐに判るのでしよう。例え警察が動機の捜査に乗り出さなくとも優美の家族が遺品の整理をしている途中に見つけるのでしよう、わたしが犯されている時の写真が。

そうなる皆に知られてしまいます、わたしが汚れてしまっていた事を。

――ところで小森さんは高校生なのかい？

こくりと頷くわたし。

――今日は平日だよ。何で昼間からあんな所にいたんだ？

北野さんは不良娘を咎めるとがような顔付きになりました。まさかこの状況で学校を休んで繁華街に居た事を叱られるとは思いませんでしたが、良く考えれば補導というのも警察官の仕事の一つでした。

――ご、ごめんなさい……。

わたしはそう言って顔を伏せました。

学校サボるような子には見えないんだけどなあ、とぼやく北野さんは複雑そうな表情を浮かべています。何か裏があるとでも訝いぶかっているのでしょうか。

——今回だけは場合だから特別に許してあげるけど、補導員に見つかってたら学校に連絡されるぞ。もうあんな時間にうろろしない事。良いね？

ごめんなさい。わたしは小さく頷きます。

——ところで、どの学校？

——旭ヶ丘高校です……。

そう答えた途端に北野さんの顔の筋肉がぴくりと動きました。

……しまった！

わたしは心の中でそう叫びました。

警察が調べている自殺した男の娘、つまり優美はわたしと同じ学校の同じクラスです。わたしが旭ヶ丘高校と答えた事によって、この自殺した男との関係性が少しと言えども浮き上がってしまうのではありませんか。

もしわたしが優美のお父さんに強姦されたという事実が警察に知れたなら事件として成立して、間違いなく捜査が始まります。するともしかするとその事件がメディアに晒されるかもしれません。そうなってもわたしの名前は伏せられるでしょうが、優美のお父さんの名前は容赦なく公開されるでしょう。

わたしの事を知らない人は被害者がわたしだと解りません。しかしわたしの事を知っている人は気付くかもしれません、強姦されたのは小森明歩だと。

いずみちゃんも、気付くかもしれません。

頭の中で最悪のシナリオが渦巻いています。すると北野さんは難しそうな顔をして腕組みをして、ぽつりと呟いたのです。

——また旭ヶ丘高校か……。

※

月は更に高く濃紺の夜空に上がり、時折雲に顔を隠したりしながら青白い光を放っています。

わたしはぶかぶかと浮かぶ月を見上げながら寂しげな住宅街を一人歩いています。今はもう十時を回った頃でしょうか。正確には判りませんが人通りもほとんどなく家々の明かりも消え始めているのできつとそれぐらいの時間でしょう。

わたしの足は家に向かっているわけではありません。今夜はどうしても会いたい人がいるんです。この時間、その人に会うのは少し難しいかもしれませんが、どうしても顔が見たいんです。

一番の友達、いずみちゃん。

わたしは彼女に大事な用事があるのです。

電柱の陰から一匹のイタチが飛び出し、わたしの前を横切って道路脇の植え込みの方へと消えて行きました。

線路沿いの道は悲しくなる程にどこまでも続いています。

しかもこの時間は滅多に電車も通らないので、その静けさが更に寂しさを増幅させるんです。どこまで続くやも判らない暗闇に等間隔に設けられた弱々しい電灯。今はそれだけが頼りです。歩けど歩けど聞こえるのは踵かかとを引き摺るわたしの足音だけ。何だか本当に悲しい、悲しい、悲しい。悲しいんです。

金網フェンス越しに特急電車が轟音とともに走り去ってゆきます。その巨大な鉄の塊が放つ風にわたしの頬に掛かる髪がはらりと揺れました。

優美にももう会いたくない。でも決して彼女の事を嫌いになってしまった訳ではありません。いずれ優美は気付くでしょう、自分のお父さんにわたしが汚されてしまった事に。そうなってしまった時、優美はどんな目でわたしを見るようになるのでしょうか。想像しただけでも全身の血液が冷たくなります。

こわいんです。

だからもう、優美にも会わないでおこうと思います。

噂にもなってしまうでしょう。北野君も間島君も綾奈も、どんな目でわたしをみるようになるのでしょうか。やがて旭ヶ丘高校の生徒徒がわたしの事をそんな認識で見るようになるのです。だから、学

校も辞めてしまおうかと思っています。

学校を辞めたいなどと言うと、きっとお父さんもお母さんもすごく怒るでしょうね。

いや、もしかしたらすんなり許してくれるかもしれません。もしかしたら学費が掛からなくなったと言って喜ぶかもしれませんね。何しろお父さんもお母さんも勝手にわたしが学校を休んでも何も言わないんですから。もしかしたらわたしに全く関心が無いのかもしれませんがね。

それでもいずみちゃんにだけは会いたい。彼女だけは小さな頃から親友なんです。彼女の顔を見ると少し元気になれる気がするんです。それにいずみちゃんの前だけではずっと汚れの無い姿でいたいです。

そんな事を考えながら夜道をとぼとぼと歩いていると暗闇の中にぼうつと浮かび上がる白い建物が姿を現しました。

旭ヶ丘総合病院です。

消灯時間を過ぎているのでしよう、電気の点いている病室は疎らまばらです。中庭までやってくると、噴水も今は死んだように止まっています。その静かな水面はまるで鏡のように冷たい月を映し出していました。

正面玄関は施錠されて電気も消されていました。裏手の夜間入口なら開いている筈です。警備員の目を盗むように忍び足で中庭を通り抜けました。すると案の定、夜間入口は開いていました。

相変わらず歯が痒ぼんやりくなるような消毒液のにおいが充満しています。非常灯だけが朦朧ぼんやりと輝く廊下を進んでいると、わたしの足音が反響してまるで何人分もの足音に聞こえて何だかこわくなりました。

もう面会時間などつくに終わっています。こんな所でうろろしていて堂々とエレベーターになど乗ろうものなら見周りの警備員に見つかって追い出されかねないので、防火扉を開けて非常階段で五階まで上がる事にしました。

ごうん、と重い音を響かせて防火扉が閉まります。階段室は外の廊下よりも更に薄暗くて何とか足元が見える程度の明るさです。そんな中、階段を上りながらわたしはここ数日の事を反芻していました。……痛かった、こわかった。

……死にたかった。

マイナス

負の単語ばかりが頭の中を巡ります。しかしその根源である優美のお父さんが死んだ事によって少しはましになりました。友達のお父さんが死んで、安心した、などという気持ちを抱くのは本当ならいけない事なんですよね。

この先わたしは死ぬまで汚れた記憶を引き摺っていかなくてはならないのです。出来る事なら誰にも知られたくありません。

五階まで階段を上り、防火扉を開けると相変わらずの暗い廊下に出ました。

掲示板に貼られているゾウやキリンの切り絵。昼間は明るい印象を受けたのですが、電気の消えている今はどこか寂しげです。まるで夜の小学校に侵入したような、そんな気分です。小児病室の子供達もぐっすりと眠っているのか物音ひとつ聞こえませんでした。

やがていずみちゃんの病室の前に辿り着きました。そしてわたしはその重い扉を静かに開きました。

暗闇の中で治療機器のランプだけが無数に小さな赤い光を放っています。真っ暗な部屋の中でじっと目を凝らすと、ベッドの上でいずみちゃんらしき影が静かに横たわっていました。

「いずみちゃん……」

わたしが声を掛けるとベッドの上で物音がして、薄闇の中でその顔と思しきものがゆっくりとこちらを向きました。

「もしかして……アキちゃん？」

弱々しい声でした。虫の鳴くような弱々しい声でした。

「そうだよ、わたしだよ。明歩だよ」

わたしの声は震えていました。ずっと泣きたいのを我慢していたからです。そんなときにいずみちゃんの声を聞いて本当に泣いてし

まいそうになりました。わたしはいずみちゃんに駆け寄って彼女の蒲団に顔を埋めました。

「どうしたの、こんな時間に……」

必死に涙を堪えます。

「特に用って訳じゃないんだけどね、ちょっと近くまで寄ったから来てみたんだよ」

また嘘を吐きました。

本当はとても大切な用があるのにそう言い出せませんでした。わたしは嘘を吐いてばかりです。

ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。

「もう面会時間も終わってるのにどうやって入ったの……」

えへへ、と笑って顔を上げました。何だか久しぶりに笑った気がします。目尻に滲んだ涙をさりげなく拭ってからカーテンに手を掛けました。

「やめて、開けないでよ」

いずみちゃんは少し怯えたような声でそう言います。幼稚園の頃からいつも明るかった彼女がどうしてこうなってしまったのでしょうか。

もしかして……。

「大丈夫、新谷詩緒里なんていないよ。いたとしてもわたしがやってあげるんだからね」

自分でも不思議なぐらい強気です。いずみちゃんの前ではどうしても格好をつけたくなるのです。それでもいずみちゃんは不安げな声で言います。

「でも……」

やっぱりです。いずみちゃんは今でも新谷詩緒里とかいう人の事をこわがっているのです。

……かわいそう。

いずみちゃんをこんな怯えた小動物のようにしてしまった新谷詩緒里。わたしは許しません。絶対、絶対に許しません。

「こわくないよ、わたしがいるんだから。そんな事より今夜は月が綺麗だよ」

そう言ってわたしは勢い良くカーテンを開けました。すると消毒液臭い病室に柔らかな月明かりが射し込んできます。しかしいずみちゃんは顔を背けました。

「見てごらんって」

するといずみちゃんはゆっくりと窓の方に目を遣りました。

「ホントだ、綺麗な月だね。星もよく見える」

ようやくいずみちゃんの表情も綻びました。わたし達はしばらくの間、無言のまま窓硝子越しの夜空を見上げていました。

不意にいずみちゃんの顔を見ると、彼女は以前よりも更にやつれていました。瞳に光が無く顔色も悪く口唇もかさかさです。その体に繋がれているチューブも本数を増して、備え付けられた治療機器も大仰な物になっていました。容体が悪くなっているのは素人目にも明らかです。月明かりに照らし出された彼女の肌は、まるで死人のように青白いのでした。

そんないずみちゃんのベッドの傍らには以前わたしが買って来たガーベラが飾られています。この病室に来てから一度も太陽の光を浴びていなかった所為か、元氣なく項垂れているように見えました。「ねえ。まだ体……良くならないの？」

わたしは彼女のベッドの傍にあった丸椅子に腰掛けて彼女の顔を覗きます。

「うん……まだ一人じゃ起き上がる事も出来ないよ」

いずみちゃんにはこりと微笑んで天井を見えています。今の彼女が笑っても余計に幸が薄く見えるだけです。何だか見ているだけで可哀想にさえ思えます。

「そんな事よりもどうしたの、もう十時も過ぎてるのにこんな所にいて。明日学校行かないの？」

「うん……行かない」

もう学校には行かない。そう言おうと思いましたが、いずみちゃ

んに心配を掛けなくなかったの言いませんでした。これ以上いずみちゃんの表情が曇るのは嫌なのです。

「ところで、いずみちゃんは怪我が治ったら学校行くの？」

「うん……。正直あの坂を通るのは怖いから本当は嫌なんだけど、うちお父さんいないし大変だから高校ぐらい卒業しとかなきゃいけないしね」

いずみちゃんは窓の外に目を遣ります。そして、行くよ、と彼女は小さく呟いたのでした。

「私、高校卒業したら直ぐに就職しようと思ってるんだ。大学行くお金なんてうちにはないし、お母さんに少しでも楽させてあげたいからね」

これが、最後の確認だったのに。

「そっか……。いずみちゃんも行くんだね。学校」

「今はミイラみたいに包帯ぐるぐる巻きだけど命には別条ないんだって。完全に歩けるようになるのはつきりとはいっになるか判らないけれど松葉杖付きなら年内にでも歩けるかもしれないね」

……………。

「そうになったら毎日アキちゃんと一緒に登校したい……」

ぶちん、と短い音がしました。

「アキちゃん……。何してるの……」

いずみちゃんは目を皿のようにしてわたしの顔を見えています。何故だか解らないといった表情です。

仄暗い部屋の中で唯一煌煌と光を放っていたランプが消えました。わたしは治療機器のコンセントを引き抜いたので。

黙ったままいずみちゃんを見詰めます。

いずみちゃんは学校へ行くと言いました。そうすればいつかはわたしが汚れてしまった事を誰かから聞く事になるでしょう。きっとわたしを見る目も変わってしまうに違いありません。いずみちゃんの前だけでは綺麗なままでしたかったです。

しかし、それも無理なんでしょうね。

酷い怪我を負って手足を動かす事すらできないいずみちゃん。わたしはそんな彼女の鼻と口を両手で覆いました。

いずみちゃんとは死ぬまで親友のままでいたんです。そう、死ぬまで。

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

わたしは両手に強く力を込めて押さえつけます。すると彼女の顔はみるみるうちに紫色になってゆきます。いずみちゃんはわたしの顔を見上げたままぼろりと涙を流しました。

……ごめんなさい、ごめんなさい。

嫌なんです、親友を失うのは。いずみちゃんがなくなってしまふ事よりも、彼女が親友でなくなってしまう事の方がずっと嫌なんです、ずっと辛いんです、ずっと悲しいんです、ずっとこわいんです。

でもこうしてしまえば、彼女は永遠にわたしの親友のままでいてくれます。親友のままでいるにはこうするしかなかったのです。

いずみちゃんの目が真っ赤に血走ってきました。わたしはその目を見ないように顔を背けます。ごめんなさい、ごめんなさいと何度も胸の中で繰り返しました。

やがていずみちゃんは動かなくなりました。

彼女が虚ろな瞳を天井に向けているだけになっても、わたしは取り憑かれたように彼女の口と鼻を強く押さえ続けています。

二十分以上もそうしていたでしょうか。ようやくわたしが手を離すと、悲しい程に冷たくなっただいずみちゃんの白い顔が月明かりに照らされていました。そしてその光の無い瞳はわたしに向けられたままです。

静かにわたしは彼女の目蓋を下ろします。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

こうして彼女はわたしの親友のままでいる事になりました、永遠に。気が付けばわたしはぼろぼろと涙を流していました。

わたしは、この手でいずみちゃんを殺してしまいました。

新谷詩緒里

◇紫陽花坂の少女◇

私達は毎朝あの急な坂を登って登校しますね。早起きしてようやく学校の近くまで来てもその長く急な坂を見上げると思わず溜息を洩らしてしまいます。旭ヶ丘高校へは必ずその坂を通らなくてはなりません。

通称、紫陽花坂。

綺麗な新築の一軒家が立ち並ぶ間を縫うようにして通っているあの坂。脇に植わっている紫陽花が六月には一斉に花を咲かせますね。私達、旭ヶ丘高校の生徒であるの坂を知らない人はいません。

そして、紫陽花坂にまつわる噂を知らない人もいません。

校門からしばらく紫陽花坂を下った所にある寂れた小さな公園。視界が広がるその辺りに、駅への近道にもなる長い階段がありますね。百階段の事です。毎日の登下校で上り下りするだけでも十分な運動になりそうな程の階段です。

その百階段で十年ほど前に一人の女生徒が転落死したという噂は勿論皆さんご存知ですよ。

さやか。

その名前に誰もが聞き覚えがある事でしょう。一人で夕暮れの百階段を歩いていると、さやかにあの世へと引き摺り込まれてしまう。そこまでは誰もが知っている事です。しかしこの噂の元になった出来事の詳細を知っている人は多くありません。

今回私は個人で過去にこの旭ヶ丘高校、そして紫陽花坂で起こった出来事をここに記す事にします。しかしこれはあくまでも私が様々な生徒、先生方、卒業生の方々、地域の方々を取材した話を元に構成しています。ですからここに記す事が総て真実とは限りません。噂とは人の口から渡る際に微妙に変化するものなのですから。どこ

までが真実でどこからが脚色なのか、その判断はお読みいただく本人にお任せします。

なお、出来るだけ自主規制していますがそれでも高校の新聞部の出版物として相応しくないような生々しい内容も含まれています。ですがこれはあくまで私個人が独断で企画したもので他の部員は一切関与していません。したがって部長である私、新谷詩緒里が全責任を負います。

(中略)

小中高問わず、他の学校でも定番の学園七不思議やトイレの怪談、開かずの教室などの話が上級生から下級生へと伝わり、その都度微妙に形を変えながら噂として生き続けていたりします。私の友人の姉で、現在市内の大学へ通うOBの方と連絡を取り、紫陽花坂の噂の事を伺いました。どうやら当時は「ネズミの死骸」ではなく「猫の死骸」だったようです。もしかすると更に遡るとまた新たな相違点が表れるかもしれません。このように噂や都市伝説というものは矢張り時代と共に形が変わってゆくもので、この点ではさやかの噂も例外ではなかったようです。

しかし我が旭ヶ丘高校にあるさやかの噂は更に特殊なのです。他校の噂や階段は大概校舎内、学校の敷地内に収まっているのです。それに対してさやかの噂は通学路を舞台としています。勿論他校にも通学路にまつわる噂は存在していますが、その場合はその地域全体に広まっているものです。

さやかの噂は地域には全く認知されておらず、旭ヶ丘高校の生徒にしか浸透していません。つまりこれだけ我々に深く根付いているさやかも舞台の周辺地域では全くと言って良いほど認知されていないのです。紫陽花坂にある小さな公園で出会った中学生の女の子にさやかにについて聞いても、彼女は全く知りませんでした。

疑問点はまだあります。さやかにについての情報は多々あるのですが、もう一人の主人公であるりかこについての情報は皆無に等しいのです。

重要人物であるにもかかわらず性格以外は名字も容姿も不明。さやかの死後、彼女がどうなったのかも一切不明なのです。実際の名前も本当に「りかこ」なのかどうかも怪しい所です。あくまでもこれは私の想像なのですが、もしかすると彼女はさやかの悲劇を引き立てる為に創り出された架空の人物なのかもしれません。口裂け女も赤マントも人面犬も、総ては根拠のない噂から発生した怪物です。無から生まれた少女「りかこ」。

そう考えるとどこか言いようのない寂しさを覚えませんか。言ってしまうえば紫陽花坂の噂自体に証人が誰もいないのです、りかこを除けば。もしりかこ自体が架空の人物だとすると総ては架空のおとぎ話なのかもしれませんね。

真偽の程は各々の判断に委ねる事にします。

発行 旭ヶ丘高校新聞部

監修・文責 新聞部部长 新谷詩緒里

※

十月六日（土） 午後一時三十分。

日下部綾奈は中西に彼女の入院先を聞いて今日の補習の後に足を運んでみた。

ナースステーションにて旭ヶ丘高校の生徒が入院していないかと尋ねる。件の女生徒の名前すら知らなかったが自分自身が旭ヶ丘高校の制服を着ているので勝手に見舞いとも思ってくれるだろうと踏んでいたのだが、意に反してフロントに立っている紺色のカーディガンを羽織った中年の看護婦は険しい表情を浮かべた。温和そうな印象の太った体系とは対照的にその表情の所為で神経質そうに見える。

正体不明の自分を訝いぶかっているのだろうかと思ったが、どうやらそういう訳ではないらしい。すると看護婦は気の毒そうに小声で聞いた。「真中いずみさんのお友達？」

綾奈は、はいと答えた。女生徒の名前を知ったのはこの時だった。いずみは今どこに？ と知ったばかりの名前をまるで古くからの友人のように呼んだ。

「実は……」

真中さんは亡くなれました。

看護婦は目尻を下げて言った。その瞬間、綾奈の表情に戦慄が走った。

五日以内に死んでしまうなど、あの噂の通りではないか。ふるふると震える口唇をきつと噛み締める。

その表情を友人の死を悼んでいると勘違いしてくれたのか、中年の看護婦は実に自然に綾奈を真中いずみが入院していたという個室へ案内してくれた。

誰もいない真っ白な壁の病室。開け放たれた窓からは少し冷たい秋風が吹き込んで来て、カーテンを生き物のように踊らせている。ベッドは少し前まで真中いずみという人間が存在していた事を完全否定するかのようになりとベッドメイクされていた。完全な無菌状態、無生命状態だ。

看護婦は続ける。

「真中さんとは仲が良かったの？」

いつの間にか砕けた口調になっている看護婦。

「ええ、とても大切な友達でした」

平然と嘘を吐いた綾奈。すると看護婦は崩れるように頭を下げた。「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい。真中さんが亡くなられたの、実は病院のミスなんです」

「え？」

看護婦が「我々のミス」ではなく「病院のミス」と言った事に個人の責任を逃れようとしているのを薄々感じながらも綾奈は、どういう事なんですか、と聞いた。

「今日、十時頃に朝の検診に来たら何か様子が変わる事に気付いたの。治療器具のコンセントが抜けてたのよ。慌てて真中さんに駆け寄っ

ただけど、彼女、もう息をしていなかったの……」

今にも泣き出しそうな表情の看護婦。まるで実体験のように主観的な話の内容からすると、どうやら第一発見者は彼女らしい事が分かる。

「そうだったんですか……」

肩をひくひくと引き攣らせながら綾奈は両手で顔を覆う。勿論嘘泣きだった。綾奈の悲痛な啜り泣きにまんまと（、、、、）同情したのか、中年の看護婦は綾奈の肩に優しく手を乗せた。

「真中さんはホントに友達に想われている子だったのね」

「はい。いずみが亡くなってしまったなんて……」

会った事もなく、名前もつい数分前に知った故人を気安く下の名前で呼ぶ事には少々抵抗があった。

「ここ数日、他にも真中さんの友達が何回か来てくれたのよ。みんな礼儀正しい良い子ばかり」

「ああ、そうだったんですか」

きっと真中いずみの以前の学校の友人だろう。何故なら彼女は転校初日にこの病院に搬送されていたので、まだ旭ヶ丘高校には見舞ってくれるような友達はいない筈だったからだ。しかし看護婦の言った事は意外なものだった。

「勿論あなたもそうだけど、旭ヶ丘高校の子は本当にしっかりした子ばかりなのね。最近の高校生ってみんなあんな感じなのかしら」

感心したように微笑む看護婦。表情を緩めると丸っこい体格からアシカやオットセイのような海獣類を連想してしまう。この看護婦、本来はこのような人当たりの良い性質たちなのだろう。一方の綾奈は意外な言葉に嘘泣きを忘れて聞き返す。

「高校生って……旭ヶ丘高校の生徒ですか？」

「そうよ、みんなあなたと同じ制服だったよ」

……誰だ。

どうやら綾奈以外にも今回の転落事故に興味を持っている人物が数名いたらしい。

しかもその数名は生前の真中いずみとのコンタクトに成功している。何か出し抜かれたような気がして綾奈は心の中で舌打ちした。

「しっかりしてるって言っても、一人だけ不良っぽい男の子がいたわね……」

「不良……ですか？」

心当たりがない訳ではない。

「男の子二人と女の子の三人組だったんだけど、その中に茶色いボサボサ頭でズボンをずらして履いてる子がいたのよ。他の二人が爽やかで賢そうな感じだったからちよつと浮いてたよ。もしかして知ってる子？」

……間違いない、間島健也だ。

さあ、と綾奈は知らないふりをしておいた。意味のある嘘もない嘘も、意識せずとも気が付けば自然に口から出るようになっていた。これはもう病気かもしれないと綾奈は胸の中で自嘲する。

「その人達だけですか？」

「高校生は確かそうだった筈だよ」

綾奈は空っぽの病室を見渡しながら考える。

三人の内の一人が間島健也だとすると一緒に居た男子というのは北野秀一と考えて間違いなさそうだ。さやかの都市伝説に興味を持っていた秀一が健也を連れて来たのだろう思われる。

もう一人の女子は誰だろうか。二人の交友関係を考えてと同じクラスの久保田優美である可能性がかなり高い。

……そう言えば。

健也と優美は深い関係になっている、正確に言えば主従関係に近いのかもしれないが。

先日綾奈が目撃した夕暮れの紫陽花坂での一件。優美の為に身を呈して刃物を持った変質者と戦う健也は、優美の家来という印象を受けた。

「あ。そう言えばもう一人、別で来てた子がいたわ」

綾奈の思考を遮るように看護婦が声を上げた。

「それも確か旭ヶ丘高校の制服を着た女の子だね。この子が一番にお見舞いに来たんじゃないのかな」

ほら、あれよ。そう言って看護婦はサイドテーブルを指差す。綾奈が目を向けるとそこにはプランターに植わったピンク色の花があった。

「片付け忘れてたんだけどね、その子が真中さんに持って来た花よ。ガーベラって言うのかしら」

「ガーベラ……」

綾奈は、ずっとそのサイドテーブルに近寄った。

「普通は根っこの付いた花はお見舞いに持って来ないものなんだけどね。見た目も子供っぽい子だったけど、知らなかったのかな」

子供っぽい子というキーワードからふと小森明歩を連想した。

綾奈は無造作に添えられていたメッセージカードを手取る。そこにある「早く元気になってね☆」という手書きの文字もどこか見覚えがあるように思える。

ここ数日明歩の姿を見ていないし連絡すら取れない状態が続いている。もしかすると学校へ行かずにここで真中いずみと会っていたのだろうか。

しかし何故、明歩が真中いずみと……。綾奈には二人の接点が全く解らない。

その時、綾奈は手に持っていたメッセージカードをぽろりと床に落としてしまった。そしてそれはベッドの下に滑り込む。

「あ、ごめんなさい」

一言詫びてから綾奈は身を屈めてベッドの下に潜り込んで、落としたカードを拾おうとした。その姿勢のまま視線だけを上げるとコンセントの差し込み口が、ベッドの枕側の真下の壁に備え付けられているのが見えた。恐らくあそこに取り付けられていたコードが抜けてしまったのだろう。

カードを拾った綾奈は乱れた髪を整えて、再びカードをプランターに戻す。そして窓の外を眺めた。

「良い眺めなんですね」

「そうでしょ、この病室からだとか中庭の噴水も良く見えるのよ」

窓際に寄った綾奈は、そこから中庭を見下ろす。看護婦が言った通り、ヨーロッパの公園にあるような立派な噴水が飛沫しぶきを上げて仄かな虹を作り上げている。そして北の方角に目を凝らすと自分達に通っている旭ヶ丘高校が見える。

その裾に広がっているのが紫陽花坂だ。

「折角の眺めなのに真中さんは一度もカーテンを開けようとしなかったの」

「何故です？」

「何かう言みたいなのを言ってたのよ、ナントカって女が窓の外から見ているとか何とか……」

……何それ、頭おかしいんじゃないの？

気の毒そうな顔を作った綾奈はだったが、こっそりと鼻で笑った。

「じゃあ看護婦さんが今朝カーテンを開けるまでこの部屋は真っ暗だったんですね。いずみったら可哀想……きっと星だって綺麗に見えるのに」

綾奈は心にもない事を口にする。すると看護婦が僅かに顔を顰める。

「そう言えば、今朝カーテンを開けた覚えがないわ。そうよ、開いてた。明るかったから真中さんの様子が変だって事に直ぐに気付いたのよ」

「いずみは急に外を見なくなったんでしょか」

「そうかもね。きっとその時にコードが抜けてしまったのかも……」
そんな馬鹿な事がある筈がない。真中いずみは満身創痍で動いたりできる状態ではなかったと聞いている。一人でカーテンを開ける事など不可能だ。

誰かが夜中に侵入した。

そうとしか考えられなかった。

「因ちなみにいずみは何故死んでしまったのですか？」

すると看護婦は更に困った顔になる。

「家族の方以外にはあんまり詳しい事を言うもんじゃないんだけどね、あなたは真中さんと仲が良かったみたいだから特別よ」

死因は酸素欠乏症。看護婦はそう言った。

確信した。

これは事故ではない。

……殺人だ。

綾奈は堪え切れず、無邪気な悪魔のようにケタケタと声を上げて笑い出した。その様を見て看護婦は絶句し真っ青になっている。まるで興味がなくなったように病室に背を向けて綾奈は歩き出した。

静謐な廊下に彼女の甲高い笑い声が響き渡っていた。

※

十月六日（土） 午後二時十七分。

まだ昼過ぎと言っても土曜の繁華街の人通りは多い。

ファーストフード店にも学校帰りの若者で溢れている。土曜補習を終えて、賑やかな街に羽を伸ばしていた北野秀一達もそんな中に居る。秀一は氷ばかりで満たされたコーラを飲み干して大きく息を吐いてから口を開く。

「死んだって？」

秀一の問いに正面に座る中西はうんうんと頷く。

秀一は滅多な事がない限り動揺する事などなく、普段から常に冷静な判断が下せるような精神の持ち主だ。しかしそんな彼でもその突然の訃報を聞いて、驚きを隠せない様子だった。

死んだというのは、まさに今日この後に訪ねようとしていた真中いずみの事だ。百階段での一件で大怪我をしていた彼女だが、まさか死んでしまうとは……。間島健也も人差し指でテーブルをコツコツと敲きながらいつになく神妙な顔をしていた。

「ああ、さっき日下部にメールで聞いたんだ。確かな話らしいぞ。」

医療機器のコンセントが抜けてたらしいんだ」

情報通の中西も真剣な顔で腕組みをしている。

「事故か？」

「さあ、そこまでは……」

この後、真中いずみの病室を再び訪れようとしていた秀一の予定は完全に振り出しに戻ってしまった。歯痒い思いと後味の悪さから彼は手で顔を覆って溜息を吐いた。親しい間柄ではなかったものの二日前にあった人間がもうこの世にいないのだと思うと矢張り気持ちの悪いものではない。

そして三人は黙り込んでしまった。賑わう店内で彼らの席だけが重々しい雰囲気包まれている。

「ちよつと待てよ。これってマジでさやかの仕事じゃねえのかよ」
沈黙に耐え切れなくなったのは健也だった。

「馬鹿……そんなものある訳ないだろ」

「だって噂の通りじゃんかよ！」

健也が声を荒げると何席の店内からちらちらと視線が集まる。しかし彼が凶悪そうな鋭い目で辺りに目配せすると周りの客は皆顔を伏せた。それをちらちらと確認した健也は机に肘をつけて手を組み、前のめりになって秀一と中西の方に顔を近付けてああともううともつかない唸り声を洩らしている。

「確かに健也の言うように噂の通りだよな」

中西も難しそうな顔をしたまま頭を掻いてそう言った。

「マジで呪いなんじゃねえのか、さやかのか」

茶色い頭をくしゃくしゃと手で触って健也は柄にもなく弱気な声で言った。まさか、と一笑する秀一。

結果、真中いずみは噂の通り五日以内に死んでしまっている。これは本当にさやかのかの呪いだとも言うのだろうか。健也の言葉をそれとなく否定した秀一自身も、これは呪いなどではない、とはつきり言い切れなくなっていた。

「ところで秀一はどう思う？」

新谷詩緒里の事。真中いずみはその

女にさやかの噂を聞いたって言うんだろ」

「ううん。どうって言われてもなあ」

秀一は鞆から図書室で借りてきた新聞部の過去のレポート冊子を取り出して机の上に置いた。その安っぽい再生紙の束に、他の二人の視線も集まる。

「それは？」と中西。

「ほら、お前がこないだ言ってた四年前の新聞部のレポートだよ。

さやかの噂についての事がかなり詳しく書かれてるんだ」

関心ありげにふうんと相槌を打ってずるずるとコーラを吸う中西。因みにその記事を書いたのは新谷詩緒里だよ、と言うと中西はコーラを吹き出して咽^{むせ}た。

「マジかよ！」

激しく咳き込みながら上目遣いに秀一を見る中西。

「流石の中西もそこまでは知らなかったんだな」

「まあな、俺とした事が……」

「昨日の夜、家でじっくり読んでみたんだけど、めっちゃめっちゃ詳しく書かれてるぞ。どうやら先生や近隣住民に聞き込みまでやってたらしいんだ」

「じゃあ新谷詩緒里にアポ取ってみりゃ良いじゃん。四年前のレポートなんだったらまだ大学生かそこらだろ？」

「新谷詩緒里も、もう死んでるらしいんだよ」

何だって！ と中西が大声を上げた。再び三人に周囲の視線が集まると、中西はぺこぺこ頭を下げて愛想笑いを浮かべる。

「ちょっと待てよ。どういう事なんだよ」

「さあな、美那子先生に聞いたんだよ。どうやら新谷詩緒里は美那子先生の生徒だったらしいんだ。四年前に死んだんだそうだ、しかもあの紫陽花坂から転落してな」

ぽかんと口を開けたまま固まる中西。口には出せないでいるが、嘘^{うそ}だろ、という言葉^{ことば}を全身で表している。

「とにかく新谷詩緒里という人間が実在していたという事は分かっ

た。それ以外は俺もワケが解らない」

「じゃあ真中いずみが会ったっていう新谷詩緒里は……」

幽霊？ とぼつりと零^{こぼ}して中西は二人を見比べている。

「さあ。少なくとも俺は幽霊なんてものは信じない。だから誰かが新谷詩緒里を名乗って真中いずみに語った。そう考えるのが自然なんじゃないかな」

「そんな事一体誰が、何の目的で……」

そう聞かれても秀一は何も答えられなかった。真中いずみが紫陽花坂で会ったという新谷詩緒里もつくの昔に死んでいる。正体が幽霊などではないにしろ中西が言うように一体誰が何の為に紫陽花坂に現れたのだろう。

「どちらにしろ気味の悪い話だな」

秀一はそう呟いて顎に手を置く。すると中西は思い出したように口を開いた。

「気味が悪いと言えば、昨日の警察が多かった事何で知ってるか？」

昨日の夜、警察官である秀一の父親は結局帰宅しなかった。きつと何らかの仕事が入って忙しかったのだろう。もしかしてそれに関係する事を中西が知っているのかと期待して秀一は、さあ、と首を傾げて見せた。すると中西は得意気に、

「自殺だよ」

と、続けた。

「自殺だって？」

「うん、飛び降り自殺さ。ほら、ここからも見えるだろ」

窓の外のショッピングモールを指差して中西は秀一と健也に目配せする。二人の反応を窺っているのだろう。

父親が帰宅できなかったのは、きっとその飛び降り自殺の件だろうと秀一は納得出来た。自殺なのに父親が残って仕事をしていたという事は、ただの飛び降り自殺ではなく、何らかの事件性があるのかもしれない。

「昨日俺達がうろうろしていた時間のちょっと前だよ。あのショッ
ピングモールの屋上からオッサンが飛び降りたんだって。野球部の
橋本の知り合いに実際に現場見ちゃったやつがいたそうなんだけど、
酷かったらしいぞ。肉の塊がべったりとコンクリートに張り付いて
いて人間の原形が残っていなかったんだって」

聞いてもないのに中西はぺらぺらと話し続ける。やはりこの男
は真性のお喋りのようだ。

やめろよ、と顔を顰めて吐き捨てたのは健也だ。

新聞部のレポートをテーブルの上に出してから彼が一切口を利い
ていなかった事に秀一は気付いた。そう言えば健也は先程から不
然な程レポートに見向きもしない。まるでわざと見ないようにして
いるように思える。逆にそれは過剰なまでに意識している証拠だ。

「俺、そろそろ帰るわ」

「どうしたんだよ、何か気に触ったか？」

中西は腫れものに触るような態度で健也に聞いた。

「別にそんなワケじゃねえよ。ちょっと用事があるんだよ」

じゃあ行くわ、と残して健也は席を立った。形の崩れた通学鞆を
肩に背負うように持って、がに股歩きで店を出てゆく。

「何か俺、悪い事でも言ったかな？」

「さあな」

中西は怪訝な顔で健也を見送った。人混みを避けようともせず
ずかずかと歩いてゆく健也の背中を、秀一は心配そうに窓からじっ
と見ている。

「ふり出したよ……」

え？ と首を傾げる中西。

「新谷詩緒里の正体さ。このレポート持って真中いずみの所に行け
ば何か分かる事があると思っただけだなあ」

紙コップに残った水を弄ぶようにストローでかき混ぜながら秀一
は深いため息を吐いた。コップの中にはほんのりコーラの色の名残
がある僅かに濁った水が残っている。秀一はその味気ない氷水をス

トローで吸った。

「ああ。その事なんだけど、秀一はどう思う？」

中西はふと腕を組んで秀一に問いかける。

「どうって？」

「切れ者のお前らしくないな、おかしいと思わないか。大病院の管理下にあって偶然コンセントが抜けるなんて落ち度があるか？

そもそもどんな治療機器か知らないけど電源が切れたぐらいでそんなに直ぐ死んでしまうものなのか」

真中いずみの病室を思い返してみたが、人が足を引っ掛けたりするような所にコードなど這っていなかった。それに当の本人である真中いずみは立ち歩く事すら不可能な状態だった。だから彼女が躓つまずいてコードが抜けるなどという事はまずあり得ない。

「本当に事故なのか……」

「でも事故って言われてたんだろ？」

「ただ外傷がなかったってだけじゃなかったのかな。病院も事を荒立てたくなかったんだろうし」

真中いずみは誰かに殺害されたとも言うのだろうか。

外傷を残さず殺す事はそう難しい方法ではない。

例えば何らかの薬物を投与するなどの方法。薬物と言っても青酸や砒素であれば苦しんだ痕跡が残ってしまうので、眠ったまま安楽死させるような物が良い。筋肉弛緩剤などは手に入り難いとしても、薬品というものはどんな物でも人体に何らかの影響を与えるものだ。例えば風邪薬であろうとも適量を超えた量を摂取すると死に至る。寧ろ「いくら飲んでも死なない薬は、薬とは呼べない」とすら聞いたことがある。薬物に明るい人間なら身近な薬品で死に至らしめる事も可能なのではないだろうか。

しかしこれは、外傷は残らないにしろ体内から薬物が検出されてしまう。そもそも簡単に手に入るような市販の薬で死亡させるとなると、少なくとも五百錠近く飲ませなければいけないと聞いたこともある。

それ以外にも方法はまだある。

例えば窒息死させる方法。最もオーソドックスな方法ではあるが、これなら出血もない。しかし首を絞めた縊死の場合には首に手やロープの跡がくつきり残ってしまう。柔らかいタオルで絞めても調べればうつすらと跡が分かってしまうらしい。

しかし真中いずみは四肢が動かせない程の大怪我を負っていた。態々（わざわざ）力一杯締め上げる必要などない。例えば口と鼻を塞ぐだけでも簡単に窒息死させる事も可能だ。もし、その方法ならば小柄な女性の力でも真中いずみを殺害する事は十分出来る。そう考えてもおかしくはないかもしれない、と秀一は思った。

※

十月六日（土） 午後三時二分。

久保田優美は今日行われている土曜補習を忌引きという形で欠席していた。

棺という箱はなんと存在感の大きな物だろう。木の色味を主として家具を選んだりリビングに突如として現れた真っ白な祭壇と棺。

優美は抹香臭いリビングを避けて、カーテンを閉め切った自室で膝を抱えていた。自分で淹れたミルクティーにも全く手を付けないまますっかり冷ましてしまっている。

今朝、父親の遺体は漸く警察から返却されて、今夜通夜を執り行う事になっている。棺の中の父親の変わり果てた姿を想像して何度も吐きそうになる。一つ死体があるだけで、心なしかこの家全体が死臭で覆われている気がした。北野刑事が言っていたように父親の亡骸は人間の形をしていないのだろう。

……いや、元々人間なんかじゃなかったんだ。

……怪物だ。

まさかお父さんが明歩を……。

父親のパソコンの中にあった画像データ、恐らくデジカメを使っ

て本人が撮影したものなのだろう。優美はそれらの画像を目の当たりにして全身の血の気が引いて頭が真っ白になった。

撮影されている場所は優美もよく知っている、自宅の車の中だった。

そこで小さな胸をはだけさせて泣いている明歩、苦痛と羞恥に顔を歪ませている明歩、涙でぐしゃぐしゃになった顔で放心したように横たわる裸の明歩。そしてその白い太腿ふとももには真っ赤な血が滴っていた。

そう、明歩は優美の父親に凌辱されていたのだ。

あの夜その父親と鉢合わせになった時、明歩はどう思ったのだろう。自分の友達の父親に犯されたのだと知った時、明歩はどう思ったのだろう。

父親の自殺した理由は優美にも何となく解る。きっと明歩に自分の素姓を知られてしまったからだ。そんな事実を周りに知られてしまったては社会的に破滅だ。

一年前の件は何の証拠もないただの疑惑に過ぎなかったからネットで叩かれた程度で済んだのだ。しかし、今回は言い逃れできない。だから父親は死という完璧な逃げ道を選んだ。

まさか自分が凌辱し弄もてあそんだ少女が娘の友達だったなどとは思ってもみなかっただろう。いや、優美の父親はそのリスクも承知の上だったのかもしれない、それでも我慢できなかったのだろう、何故なら明歩は旭ヶ丘高校の制服を着ていたのだから。優美と同じ旭ヶ丘高校の制服を……。

……何でよりによって、明歩なの。

優美は力無く項垂うなだれる。

父親が自殺した夜、優美はパソコン内に入っていた例の画像データを総て削除した。あれを残しておくと思しめられている明歩の姿がきつと他人の目にも触れてしまう事になるだろう。父親の名誉を守る為というより、明歩を晒しものにしたくないという気持ちの方が強かった。

……それにしても、あの滴る血液。

何故か優美にも身に覚えがあるような気がした。我が身でも味わった事があるような不思議な感覚。

オヨウフクヌイデネ、ユウミチャン。

まどろみの中で悪夢と現実を行き来していると、優美の携帯電話は一件のメールを受信した。ふと目を醒まして画面を確認すると、それは間島健也からのものだった。内容は「今、下に着いた」との事だった。

気だるそうにゆっくりとした動作でカーテンを捲った優美は窓の外を覗く。すると玄関の門の前にはオレンジがかった斜陽の下に健也がぼつりと立っていた。窓を開けるとその音に気付いた健也は顔を上げる。その顔はまるで捨て犬のように心細そうだった。

「遅い……」

眉間に皺を寄せて小さくそう呟く優美。その声が聞こえたのかどうかは判らないが健也は更に気弱な表情になる。彼は優美に愛想を尽かされる事を何より恐れている様子で、勘の良い優美本人もその事に気付いている。そんな情けない犬のような反応が面白くて仕方ない優美は思わず口元を綻ばせて笑ってしまった。

「上がって」

優美はそう言って窓から手招きする。すると頷く健也は安心しきったように緩んだ笑みを浮かべた。優美は紫陽花坂での一件以来、健也を意のままに操る事に成功していた。自分の命令に忠実に動き、顔色を窺うように媚び諂^{へつら}う健也の怯えた態度が優美からすれば愉快で堪らない。

学習机の椅子に腰掛けた優美は置きっ放しにしていたミルクティーに口を付ける。すると階段を上ってくる足音が近付いてきた。そしてそれは部屋のドアの前で止まる。

「入れば？」

ドアが開かれると薄暗い廊下の闇に紛れて健也が立っていた。優

美が視線で床に座るように促すと彼は素直に従って冷たいフロリングの上に胡坐あぐらをかいた。健也は顔を上げる事無く押し黙っている。「で、手に入ったの？」

沈黙を破ったのは優美の冷淡な一言だった。

「こないだ言った新聞部の過去レポート。まだなのかな」

健也はばつの悪そうな顔をゆっくりと上げる。その表情を見て優美は嫌悪混じりの溜息を洩らした。

「図書室でお遣いの一つも出来ないなんて。思ったより使えないんだね、間島君」

「ごめんって……」

それより……と言って健也は続ける。

「凄い事が分かったんだ！ 実は新谷詩緒里って幽霊なんだよ！」

「え、どういう事？」

「四年前に書かれたあのレポートはなんと新谷詩緒里が書いたものだったんだ、しかも信じられない事にその新谷詩緒里……四年前に死んでるんだ」

百階段から落ちてな、と健也は勿体ぶったように付け足した。

「嘘でしょ……」

優美の顔から一切の笑みが消える。

「間違いない、美那子先生に聞いたんだ。だからこないだ真中いずみが会ったって言ってる新谷詩緒里は幽霊なんだよ、きっと」

健也も前のめりになって拳を握り締めながら力説する。その拳には無数の傷と拳だこが浮かび上がっていた。いかにも喧嘩慣れしている手だ。先日付いたカッターナイフの生傷もまだ痛々しく残されている。

「そんな……新谷詩緒里が、死んでいたなんて……」

「そうなんだよ。これってさやかに続く新たな怪談じゃねえか？」

そう言いながら健也はテーブルの上のミルクティーを勝手に飲んだ。図々しくも思えたが、優美が口を付けた部分を意識したのか、その口唇の跡を避けた事はどこか可愛く思える。

「うーん。それもそうなんだけど、レポートを書いたのが新谷詩緒里って知ってるって事は間島君もちょっと読む事は出来たの？」

「いや、秀一が言ってたんだ」

「北野君が？」

深く頷く健也。

「今は秀一が借りてるからなあ。久保田に持ってくるのはその後でも良いかな」

「他に誰かそのレポート読んだりしたか知ってる？」

「ええと、確か……日下部も読んだ事あるような感じだったらしいぞ」

北野秀一と日下部綾奈。

よりによってあの二人か、と優美は心の中で舌打ちする。特に秀一の手にある事は優美にとって好ましくない状況だった。

「ねえ、間島君。何とかして直ぐに手に入らないかな、直ぐにでも」

「お。もしかして久保田もさやかかの都市伝説に興味あるのか？」

まあね、と優美は答える。そして優美も健也が口を付けた部分を避けてミルクティーを一口飲んだ。

「じゃあ俺と秀一と一緒に調べたら良いじゃん、何なら俺が色々調べて来てやっても良いんだぞ。百階段とか公園とか」

「いや、調べるとかじゃなくて個人的に読みたいの。だからどうしても手元に欲しいんだよ、あのレポートが」

「でも、今は秀一がなあ……」

腕を組んで渋る健也。それを見て苛立つ優美。彼女には一刻も早く新谷詩緒里のレポートを手に入れなければならない理由があった。痺れを切らした優美は彼に顔を近付ける。

「キスしてあげるから……」

健也は目を丸くして言葉を失った。

そして優美は健也の口唇に吸いついた。すると健也は少し戸惑いながらも優美の体を力任せに抱き締めた。

……単純。

健はもう、優美の言いなりだった。

……私の体は穢れている。

……そんなので良ければ、好きなだけ抱けばいい。

※

十月六日（土） 午後三時二十一分。

日下部綾奈は駅に向かって線路沿いの道を歩いていた。回送電車が突風を孕^{はら}んで彼女の隣を通り過ぎ、その漆黒の長い髪を揺らしてゆく。

やがて紫陽花坂の下に差し掛かった綾奈はそこで足を止めて上り坂の奥を見上げる。どれも築十年以内の小奇麗な家々の間に、どこまでも伸びる真っ直ぐな坂道。その脇に植わった花のない紫陽花の行列。

切れ長の目で坂の上を見据えながら彼女は溜息を吐いた。

……まさか死んでしまうとはね。

数日前に百階段から転落した女生徒がもうこの世にいない事を知った時は驚いた。確か名前は真中いずみと言ったか、と綾奈は思い返している。

補習の後、真中いずみの入院している病院へ寄ってみたのだが彼女は今朝、ベッドの上で息を引き取っている所を発見されていた。

事故ではない。

恐らく、真中いずみは殺害されている。

コンセントの位置、起き上がる事の出来ない体、開いていたカーテン。様々な因子^{ファクター}が他殺という事を綾奈に訴えている。他殺だとすれば一体誰が彼女を亡き者にしたのだろうか。本当にさやかがあの世に連れて行ったしまったのだろうか。綾奈は紫陽花坂から目を背けて再び歩き出した。

しばらく歩くと一定のリズムの警告音を鳴らす踏切が見えてくる。そこには下りた黄色と黒の遮断機を両手で握り締める小森明歩の姿

があった。

「何してるの？」

綾奈が声を掛けると明歩はひくりと肩を引き攣らせてから顔を上げた。二人の脇を巨大な鉄の塊が轟音を上げて通り過ぎてゆく。

「綾奈……」

明歩が手を離すと遮断機は音もなく上がった。彼女はいつものように自信のなさそうな今にも泣き出しそうな表情で綾奈をじっと見詰めている。そして二人の間を、電車に掻き回された空気と寂しげな沈黙が通り過ぎた。

「学校も何日も休んで、私や優美にも連絡もくれないで。心配したんだよ」

「うん……ごめんなさい」

そう言って明歩はまた俯いた。いつも彼女は「ごめんなさい」と言う。しかしいつも以上に悲愴な顔をしている明歩を見て、綾奈は今から彼女が何をしようとしているのか悟った。

「それはみんなに迷惑を掛けるから止めときなさい」

綾奈が言うのと明歩も視線だけを上げる。

「何の事？」

「電車が止まると沢山の人が困る。ダイヤの乱れの損失を支払うのはあなたの家族だよ。それに明歩がいなくなったら私は寂しい、勿論優美だってそう思うよ」

綾奈は続ける。

「死のうとしてたんでしょ」

時間が止まったような静寂が二人を包む。明歩は否定も肯定もせず悲しげな瞳を綾奈に向けているだけだった。

「何でそう思ったの？」

明歩の目が潤んでいる。はっきりと肯定はしていなかったが矢張り綾奈の予想していた通りだったようだ。

「何となくだよ。馬鹿な事考えないで」

明歩は手の甲でこしこしと顔を擦る。涙を拭っているのだろうか、

化粧気のない幼い明歩の顔はそれでも醜く崩れたりはしない。小さな嗚咽をしばらく漏らしてから明歩は口を開いた。

「綾奈には大切な物って、ある？」

「大切な物か……」

綾奈はその言葉に逡巡^{しゅんじゆん}させられる。今までの人生を反芻^{はんすう}してみても「大切な物」など何もない。頭の中で「そんなものはない」という結論を出した後も、彼女は考えているふりをしていた。

しばらく綾奈が考えている演技をしていると、明歩は話し始めた。「わたしはね、大切なものを失ったんだよ。ううん、自分の手でね……壊してしまったんだよ」

明歩は自らの両手を見詰めながら震える声でそう言った。その左手の腹には小さな傷がある。切傷とも擦傷とも違う、何か堅い物で挟^{えぐ}られたような跡。

綾奈はその傷を見逃さなかった。

訝^{いぶ}しさを顔に出さないようにして綾奈は会話を続けようとする。

「壊したって……何でそんな事したの？」

「大切なものが、わたしの元から離れていくのがこわかったの」

「だから壊したの？」

明歩は小さく頷いた。

「綾奈ならどうする。大切なものが自分の元を離れて、どこかへ行きそうになったら」

同意を求めるような明歩の問い掛けに対して、綾奈はひっそりと冷淡に笑う。

「さあね、やっぱり私には特に大切なものなんてないから分らないよ。考えても何も思い浮かばなかった。得た事がないものが無くなる場面なんて想像も出来ないでしょ」

それは綾奈が知っているさやか^{さやか}の台詞だった。それを聞いた明歩にもどうやら心当たりがあったらしく、

「何かその台詞、どこかで聞いたことあるな。何の台詞だった？」
と聞いてきた。

「忘れた」

淡泊な綾奈の返事に明歩は、そっか、と洩らしてから口を噤つぐんでしまい、どこなく気不味い沈黙が二人を包んだ。

このまま長い沈黙が続くと綾奈は思っていた。しかし話題を変えたのは意外にも明歩だった。

「ねえ綾奈」

「どうしたの」

「綾奈は、新谷詩緒里って知ってる？」

確か新谷詩緒里と言うのは四年前の新聞部部長だった生徒だ。

過去の新聞部の記事を読んだ事のある綾奈も勿論その名前を知っている。しかし綾奈は、何それ？ とわざと知らないふりをして明歩の様子を窺っていた。

「わたしの親友だった人がずっと言っていたんだけどね。その子、ずっとその新谷って人に怯えてた」

「親友だった（、、）？」

「うん、死んじゃったんだ……」

そう言うのと明歩は幼さの残る顔を伏せた。

「で、もしかして明歩も死のうとしたって訳かな？」

明歩は躊躇ためらってから小さく頷く。

馬鹿、本当に馬鹿。そう咎めた綾奈は明歩の顔を覗き込んだ。するとその口唇は幽かすかに震えていた。

「あのね、わたし、その新谷って人がきらい。大きらい。わたしの大切な、大好きな親友を無茶苦茶にしてしまったんだよ……だから、許せないんだよ」

小さな明歩が感情をここまで露わにする場面を初めて見た。普段、綾奈や優美が幾らからかって彼女も怒らない。他のクラスの女子にダサいだの地味だのと馬鹿にされても彼女は笑って誤魔化していた。しかし彼女は今、間違はなく怒っている。新谷詩緒里に対して確かな怒りを沸き立たせている。

「無茶苦茶にしたって？」

「わたしの親友がおかしくなったのは全部その人の所為。新谷って人の所為なんだよ」

明歩はそう言って肩を震わせながら黙り込んでいる。泣いているのだろうか。踏切の遮断機が下りると、二人の隣をまた電車が通り過ぎてゆく。

「まあ……とにかく死ぬとか馬鹿な事考えないで。嫌な事があったら一人で悩んでないで誰かに相談するとかしなさい。私でも良いんだよ」

じゃあ私は行くね。

綾奈は明歩に背を向けた。それは駅とは反対の方向、紫陽花坂のある方向だった。

「あ……綾奈。どこ行くの？　もしかして、百階段……あの公園？」
明歩の言葉に綾奈は振り返る。

「どうしてそう思ったの？」

「実は、わたしの親友なんだ……百階段から落ちたの。その事で頭がいっぱいだったから何となく、ね」

「ああ、あなたが真中いずみさんの友達だったんだね、やっぱり」
すると明歩は目を皿のようにして固まった。

「何で……名前まで知ってるの……」

くすくすと笑う綾奈。それに対して明歩はみるみる青褪めてゆく。明歩の左掌の腹あたり^{てのひら}に付いた新しい傷。それは人間の菌型のようだった。仰向けになっている人間の口を押さえればきつとそのような傷が付くのだろう。そう言えば真中いずみの死因は窒息だったと綾奈は思い返している。

「綾奈が……綾奈が新谷詩緒里なの？」
さあね。

冷淡にそう言い放った綾奈は再び明歩に背を向けて歩き出した。背後で明歩が動く気配はない、その代わり刺し殺すような視線が向けられているのが分かる。

どこまでも伸びる紫陽花坂が斜陽に照らされている。葉だけの紫

陽花も不気味な陰影を伸ばして揺れていた。
ひとごろし。

綾奈は声を出さずにそう口を動かして、冷たく微笑んだ。

※

From…間島健也

件名…なし

本文…今どこ？

十月六日（土） 午後三時五十三分。

Re…今から紫陽花坂の公園にちよっと行ってくる。

そう返信して携帯電話を折りたたんでポケットに仕舞う。

秀一は繁華街のファーストフード店から来た道を戻っていた。

普通なら繁華街から歩いて三十分。考え事をしながら本屋やコンビニに寄り道をしていたので四十分以上かかっていた。

秀一は今、学校のある駅の前を歩いている。

中西の話を聞いて気になる事があまりに多かったので我慢できずに戻って来たのだった。真中いずみが死亡した。さやかと同じようにあの百階段から落ちて死亡した。その事実を知った秀一はじっとしていられなかった。

Re…何でそんなところ行くんだよ。まあオレも近くだから今から行くわ！

健也から再びメールが来たのは百階段が見えてきた頃だった。もう陽は随分と傾き始めている。しかし健也は野暮用とやらで帰ったのではなかったのか。「わかったよ」としか返信しなかったので秀一に何の用事があるのかは知らないが、とにかく彼もこちらに向かっているらしい。

秀一は百階段に足を掛ける。みしりと死の感触がした。

この無機質なコンクリートの階段に叩き付けられて何人もの生徒が

死んでいる。名前が分かる者だけでも早川さやか、新谷詩緒里、そして真中いずみ。

わらわらと揺れる両側の紫陽花の影から不気味な気配を感じながらも秀一はとぼとぼと百階段を上ってゆく。じやりじやりと自分の足音がうるさい、それが誰かに聞かれているようでどこか気味が悪い。新谷詩緒里という女生徒と出会った、そう真中いずみは言っていた。しかし新谷詩緒里も四年前にこの百階段で転落死している、さらにその真中いずみも死んでしまった。

さやかの都市伝説。

さやかに会うと五日以内に死ぬ。

さやかは友達を求めて一人で夕暮れの百階段を通る生徒をあの世に引き摺り込んでしまうというものだ。その内容を思い出して秀一は悪寒を覚えた。今、秀一はまさにその通りの状況に置かれている。自然と彼の足取りも早くなる。

確か例のレポートによるとさやかは長い黒髪で色白の清楚な美少女だったそうだ。しかしそれは典型的な幽霊の姿ではないか。今も紫陽花の葉の隙間からそんな女がこちらを窺っていたりしたら……そんな事を考えると流石の秀一も寒気がする。

俯いたまま早足で百階段を駆け上がった。そして上りきった所でふと顔をあげた秀一は青褪めた。

そびえる壁の上、金網フェンスの向こう側。

「さ、さやか……」

秀一は目を剥いたまま全身の筋肉が硬直した。あの公園からそれは秀一を見下ろして薄く笑っている。

秋風に絹のように揺れる長い黒髪、透けるように白い肌。都市伝説の怪物はそこに立っていた。

「あれ、北野君……どうしたの？ 忘れ物？」

さやかは秀一に聞き覚えのある声で聞いた。

「え、ああ。日下部か……」

……見間違えか。

「そんな動揺してる北野君初めて見た。もしかして私の事、噂のさやかとでも思ったのかな」

綾奈はまた薄く笑う。

見間違ってしまった。日下部綾奈はあまりにもさやかのイメージに近過ぎる。秀一は少し急ぎ足で紫陽花坂を上り、綾奈の居る公園へと向かった。綾奈は下から見た時と同じ場所、同じ姿勢でこちらに背を向けて夕焼けに赤く染まりゆく町を眺めているようだった。

「何やってんだよ……こんな所で」

「北野君こそ……」

そのまましばらく間が空く。すると綾奈が振り向いた。

「私も、北野君と同じ理由だよ。多分」

「俺と同じ？」

「うん、北野君が考えてる事って大体分かる。さやかの都市伝説が気になったんでしょ？」

少し違うが秀一は頷いた。

確かに昨日までは、真中いずみの死を知るまではそうだったが今はもっと別の事が気になっている。真中いずみにさやかの都市伝説を語った女生徒。

新谷詩緒里、その正体だ。

「死んじゃったね」

綾奈は不意に口をついた。秀一は、えっ、と一言漏らすだけしか出来ない。

「真中いずみさん。こないだその百階段から落ちた子だよ。中西君から聞いてないの？ 私さっき彼にメールしたから北野君も知ってるのかなと思ってね」

「ああ、聞いたよ」

ふうん、と興味なさそうな相槌を打った綾奈は続ける。

「死んじゃったって言うより本当は殺されたんだろうね、真中さん。賢い北野君なら何となくそう思ったんじゃないのかな」

同じく秀一もそう思っていた。

中西から聞いた情報からでも真中いずみの死は不自然な点が多過ぎる。それと同じ印象を綾奈も受けていたようだ。矢張り綾奈もかなり思慮深いらしい。

「で、ここに來たって事は北野君も新聞部のあのレポート読んだんだよね」

「まあな」

やっぱりね、と言って綾奈は笑った。

「みんな百階段の事は知っていても、この公園もさやか物語に係あるってあまり知られてないもんね」

その口振りから綾奈も四年前のレポートを読んだ事があるのだろうと判断できた。それなら知っている筈だろう、この名前を

「なあ、新谷詩緒里って知ってるだろ」

秀一の言葉に綾奈は初めて反応した。

「それってさやかの記事を書いた、当時の新聞部の人じゃないの？」

「そうだよ、実は俺もこの前病院に行って生前の真中いずみに会った事があってな。彼女が言ってたんだ、新谷詩緒里が私を見ているって。彼女は新谷詩緒里を名乗る女にさやかの話を聞いた直後にこの百階段から転落した」

「名乗るって、それって本人じゃないの？」

「本人は死んでるんだよ、四年前にこの百階段から落ちて」

驚くと思いきや綾奈は今まで以上に無表情になった。

「なるほどね……じゃあやっぱり二人いるんだね……」

「二人？」

「いやいや、二人とは限らないんだけどね。もしかしたら両方同じ人かもしれないんだけど……いや、どうだろうね」

一体綾奈は何を言っているのだろう。彼女は一人で納得したように上品に笑っている。それが気味悪かった。

綾奈は一人で頷きながら公園を立ち去ろうとする。

「待てよ。何か知ってるのか？」

すると振り向く綾奈。

「北野君が聞いた新谷詩緒里。それと真中いずみを殺した人。もしかしたら別の人かもしれないね。そうでなければ二人とも新谷詩緒里か、それともさやかか」

「日下部は知ってるんじゃないのか、真中いずみを殺した犯人を」
すると綾奈は、

内緒……。

と言って公園から去って行った。

茫然と立ち尽くす秀一。

綾奈は何かを知っている。それどころか綾奈自身が今回の事件に関与しているのではないかという疑惑すら浮かんできた。

しばらく思慮に耽っていると健也が公園に掛け込んできた。

「秀一……わりい、遅くなって」

陽も落ちかけて随分気温も下がっているのにも関わらず、彼の肌には汗が滲んでいる。おまけに息まで切らしている。どうしたんだ、と秀一が聞くと彼は手の甲で額の汗を拭ってからこう答えた。

「昔の新聞部のレポートを貸してくれよ！」

健也は真っ直ぐに秀一の目を見ている。

その勢いに押されてしまった秀一は彼に新聞部のレポート冊子を手渡した。

※

十月七日（日） 午前十一時四十九分。

抜けるような青空とは裏腹にじめじめとした気分、じめじめとした雰囲気。

町外れの斎場。今、真中いずみの亡骸の入った白い木の箱は火葬場へ向けて出棺されたのだった。

見送る喪服の葬列。

その中に小森明歩の姿もあった。

葬儀中、いずみは遺影の中でずっと笑っていた。中学の頃の写真で、その時はまだ彼女にも幼い感じがある。もちろんその時期の彼女を明歩は知っている。このショートヘアは確か中学三年の秋頃だった。

焼香の際、棺に収まるいずみの顔を覗き込んだ。

死体というモノから先日見た優美の父親の自殺体を連想して吐きそうになったが、いずみのそれは全く違う。静かに目を閉じてまるですやすやと眠っているかのようだった。肩を揺すれば目を覚ますのではないかとすら思う。

しかしそんな事は決してないと一番解っているのは明歩自身だ。

十月五日金曜日の夜。明歩の手の中でいずみは死んだ、明歩が殺した。鼻を押さえていた左手は何ともなかったが、口を塞いでいた左手を噛まれてしまって傷が出来てしまった。滲んでいた血は直ぐに止まったけれどもまだ腫れは引かない。

棺の前に屈み込み合掌する明歩。

いずみの眠る傍らにそっと手紙を添えた。明歩が綴った手紙にはたった一言、ごめんなさい、と書かれていた。

左手の傷がちくりと痛む。

そして最後の別れを終えて、いずみの棺を乗せた霊柩車を見送った後、明歩の目から一粒の涙が零れ落ちた。

訃報を受けて集まった中学の頃と同級生も沢山来ていた。中学を卒業して一年半、皆随分雰囲気が大人ぽくなっている。

昔から目立たない存在だった明歩は誰からも声を掛けられる事はなかった。自分は皆を覚えているのに、皆は自分の事を忘れてしまっているのだろうか。思えば中学の頃、友達といえはいずみしかなかった。他の誰かと話している時も必ずいずみに間に入って貰っていた。

明歩はいずみの付属品だった。

そんな付属品が単体で居ても誰も気付かないのだ。明歩は斎場の柱の影から恨めしそうにかつての同級生達を眺めていた。

もし自分が死んだ時も彼らは来てくれるだろうか。いや、来てくれないだろう。

式が終わり閑散とした斎場の中、まだその場を動こうとしない女性がいた。その見覚えのある背中に明歩は声を掛ける。

「おばさん……」

呼び掛けられた女性は顔を上げた。

「ああ、明歩ちゃん」

いずみの母親だった。久しぶりに見たいずみの母親は随分齢を取ったように見える。いや、老けたというより憔悴し切っているといった様子だ。父親に続き娘までも不幸に見舞われたのだから無理もない。彼女は不幸続きの真中家を一身に背負っている。

「今日はありがとうね。明歩ちゃんが来てくれてきつといずみも喜んでたと思う」

本当にありがとう、と言っていずみの母親は悲しく微笑んだ。

「火葬場。行かなくて良いんですか？」

「うん、もう直ぐしたら行こうと思うの。もう少しだけじっとしてたいのよね」

彼女は生気の尽きた瞳でいずみの遺影を見上げる。

「いずみはね、この十月から旭ヶ丘高校に通える事をすごく楽しみにしてたの。お父さんの事で家が色々大変だったんだけど、ほらあの子ったらびっくりするぐらいプラス思考でしょ？ だから新しい環境も楽しみに出来たんだと思う」

「うん……」

「旭ヶ丘高校には明歩ちゃんがいるっていうのが一番大きかったの。『また明歩と同じ学校に通える』って嬉しそうに言ってたんだから」「わたしもすごく楽しみでした……でも、一日目にあんな事が……」すると彼女は明歩の目を見て首を横に振る。その話はやめて欲しいというサインなのだろう。明歩ははっとなって、ごめんなさい、と呟いて口籠る。

「いいの……いいのよ。何か明歩ちゃんの顔を見てるといずみがかかった頃の事思い出すのよね」

「わたし、そんなに子供っぽいの？」

「そういう意味じゃないのよ。ほら、いずみと明歩ちゃんって幼稚園の時からずっと一緒だったでしょ。だから思い出すのよね。明歩ちゃんだけは死ぬまで友達だってしょっちゅう言ってたのよ……死ぬまで友達だって……」

いずみの母親は両手で顔を覆って背を丸める。

……そうだよ、死ぬまで友達だったよ、これからもずっと友達だよ。だからわたしは今でも幸せだよ。でもあのままいずみちゃんが生きていればわたしが犯されて穢されてしまった事にきつと気付く。そんな事知られたらわたし、いずみちゃんに嫌われちゃう。

……だから。

……いずみちゃんは死んで正解だった。

……ああ、殺して良かった。

いずみの亡骸は火葬場へ運ばれて行った。あと数時間も経てば彼女の肉体は灰となって完全にこの世から消え去ってしまう。

……でも。

……いずみちゃんがこの世にいないのは、とても寂しい。

※

十月八日（月） 午前十二時四十七分。

昼休みの教室。秀一はいつものように健也、中西、橋本というお決まりのメンバーと一つの机を囲んでカツサンドを齧っている。今日はジャンケンで負けた中西が全員分のオーダーを取って学食まで買いに行っていた。

秀一達の二年一組の欠席者は多い。

まず十月三日から休み続けている小森明歩。十月五日、突然早退した久保田優美。そして二日前、意味深な言葉を残して公園を去った

日下部綾奈。中でも特に綾奈が欠席するのは珍しい。

「結局その子って死んじゃったのかよ！」

伸びかけた坊主頭を撫でながら橋本が言った。

今朝から学校中がその噂で持ちきりだ。十月一日に百階段から転落した女生徒、真中いずみが死亡した事。どこから流れ出したのかは分からないが午前の中にその話は学校中に広まっていた。

さやかか呪い。誰もがその事を脳裡に過らせていた。真中いずみは噂通り五日以内に死んでしまった。

「馬鹿……声がでかいよ。でもまあ今更小声で話しても意味ないか。どうせこのクラスのやつも皆知ってるんだしな。秀一と健也はその子に会った事があったんだっけ？」

「まあ、な」

「呪われてる感じってあった？」と中西。

「呪われてる感じってどんな感じだよ。俺達は霊能力者でも何でもないんだからそんなこと分かんねえって」

健也が不愉快そうに返した。

「うーん、でも確かに俺の印象ではまともじゃなかったな。何かに取り憑かれたように怯えてたんだ」

すると中西は顔を顰めながら言った。

「やっぱり何かあるんだよ、あの紫陽花坂って」

……何かある。

秀一も中西と同じ事を考えていた。

旭ヶ丘高校だけに代々伝わる怖ろしい伝説、紫陽花坂のさやか。その舞台となった百階段で実際に数名の死者が出ている。本当に呪いなどというものが存在するのかもしれない、とさえ秀一は思い始めている。

「まさか本当に五日以内に死んでしまうなんて俺達も思ってもみなかったよ」

四人はそれぞれ俯いて黙り込んだ。

「実は……」

その沈黙を破ったのは橋本だった。

「俺な、こう見えて幽霊とかダメなんだよ……」

「へえ。ホントに見かけによらないな」と茶化す中西。

「うるせえな。お化けとか幽霊を信じてるワケじゃないんだけど、想像すると気味悪くなるんだよな」

「じゃあ橋本は、今回の真中いずみの一件はさやかの呪いだと思うか？」

すると橋本は難しそうな顔をする。

「たまたまだろ？ 呪いで人が死ぬなんてあるもんか！」

でも怖いんだろ？ とニタニタわらう健也が彼の顔を覗き込む。

秀一と中西も同じように橋本の表情を窺っている。

すると橋本は観念したように溜息を吐いた。

「正直言ってやっぱり怖いって。俺ら野球部が練習終わる時間ってちょうど陽が沈みかけの頃なんだよな。だから紫陽花坂も凄い不気味なムードが出来上がってるってワケ。今回みたいな件があったんじゃ怖ろしくてもう一人で百階段なんて通れないよ」

そう言って再び溜息を洩らす橋本。

確かに橋本の言う時間の紫陽花坂は最も禍々（まがまが）しい瘴気を放っている。紫陽花の葉の大きな影がアスファルトの上でわらわらと蠢くのだ。夕方の紫陽花坂を通るぐらいなら完全に陽が落ちて夜になってからの方がまだましだ。

正直でよろしい！ と健也が橋本の肩を叩く。橋本は宙を見上げてぼやき始めた。

「昔から紫陽花坂のさやかの話は知ってたんだけどやっぱり気味悪いわ。旭ヶ丘高の合格通知が来た時は受験勉強から解放されたって浮かれてたんだけど。よく思い出してみれば近くにそんな心霊スポットみたいのがあったんだよな。ホント入学前から紫陽花坂を通るのが憂鬱だったよ」

橋本は自嘲気味に笑った。

……入学前？

「おい、ちょっと待てよ!」

秀一は弾かれたように立ち上がる。

「どうしたんだよ急に」

「今、入学前からって言ったよな?」

真剣な表情の秀一を三人は怪訝けげんそうに見ている。橋本は秀一に掴みかかれんばかりの勢いで詰め寄られて怯おそんでしまっている。

「ああ、言ったけど。それがどうかしたか?」

「旭ヶ丘高に入学する前からさやかの話を知ってたって事かよ!」

「そうだよ。だってめっちゃめっちゃ有名な話じゃん。俺は中二の時ぐらいから知ってたぞ」

そんなに有名な話だったのか、と中西。情報通の彼でさえさやかの話を知ったのは高校に入ってからだったようだ。もちろん秀一や健也も旭ヶ丘高に入るまでそんな噂は聞いた事もなかった。

しかし橋本はそれ以前から知っていたらしい。

「誰から聞いたんだよ」

「ええと、中学の時の野球部仲間だよ。『さやかに出会ったら五日以内に死ぬ』って言ってたぞ」

さやかはこの学校周辺でも知名度が低く、旭ヶ丘高校の生徒以外には全くと言って良いほど知られていない。都市伝説というよりは所謂旭ヶ丘高校に伝わる「学校の怪談」だ。しかし旭ヶ丘高校から決して近くはない地域に住んでいる橋本が何故入学以前からその噂を知っていたのだろうか。

「そいつも怪談好きなやつでさ、色んな所から怖い話を仕入れて来るんだよ。最近も地元で仲間集めて百物語大会とかやってたな。俺は野球部の練習があるって言って逃げたんだけどな、ははは」

「で、その友達ってのはどこでさやかの話を知ったんだ?」

「さあ、そこまでは俺も知らないなあ」

そうか、と洩らして秀一は窓の外に目を遣った。

「どうした秀一。気になるのか?」

牛乳パックのストローを咥えたままの中西が秀一に尋ねる。

「まあね」

「何なら今日の放課後にでもそいつ呼んでやろうか？ 怪談が聞きたいて言うて飛んでくるぞ」

「良いのか！」

秀一の目が輝く。

「今日監督来ないから部活抜け出せるし俺も付き合おうよ。場所は旭ヶ丘の駅前の喫茶店とかで良いかな？ そこなら俺の友達も自転車で来られると思うし」

そう言つて橋本は携帯電話を取り出して、例の友達にメールを送つてくれた。

※

十月八日（月） 午後三時五十七分。

芳ばしいコーヒーの香り。

マグカップを二つ持った優美は困惑しながら自室に戻った。おまたせ、と言って彼女はカップをテーブルに置く。

「ありがとう。あ、今日は砂糖はいらないや」

カップを受け取った綾奈は優美の目を見てにこりと微笑んだ。

「そうなんだ。綾奈はカフェオレのイメージがあったから甘いのか飲まないと思つてた」

「普段は甘いのが飲まないよ。でも今日はブラックで飲んでみたい気分なの。たまにはカロリーも気にしないとね、女の子なんだし」

綾奈は突然訪ねてきた。

湯気の立つブラックコーヒーを一口啜る綾奈。彼女は薄い唇をカップから離すと満面の笑みで、やっぱり苦いね、と呟いた。

「優美の部屋ってカッコいいよね。何て言ったら良いのか分からないんだけど、他の女の子の部屋とは何か違う。無駄なものがなくてスタイリッシュってというか、整理整頓が行き届いているっていか」

この部屋にはぬいぐるみもなければアイドルのポスターも貼っていない。勉強机に無地のシーツのベッド。あとは教科書と参考書と数冊の文庫本が収められたシンプルな本棚があるぐらいだ。

「女の子らしくない。そう言いたいのか？」

そうとも言えない、と綾奈は花のように笑う。

「ホント優美を見習わなくちゃね。私の部屋なんか結構散らかってるんだよ。雑誌とか整理しなきゃね」

綾奈はリズム良く指でこめかみを敲たたきながら鼻歌を洩らしている。優美には聴いた事のない歌だった。

あ、それよりさ。綾奈は優美の目を見る。

「付き合ってるの？」

「何がよ？」

「いや、だから間島君とだよ。ほら、この前百階段の所でキスしてたじゃん。もしかして私が見てたの気付いてなかった？」

ああ。と思い出したように相槌を打った優美はゆっくりと頷く。

「見られてたんだ、知らなかったよ。恥ずかしいな」

優美は照れている、フリ（、）をした。あの瞬間を綾奈に見られている事も知っていた。寧ろ見せ付けるつもりだった。

「さあ、どうだろうね。微妙な所だよ。少なくとも間島君の方は私ともう付き合ってるつもりなんじゃないかな」

冗談ぽく舌を出して笑う優美。

「なるほど……私が言ってた通り、本当に召使いにしちゃったワケだ。ああ見えて間島君は純粹だから優美の言う事なら何でも聞いてくれるだろうね。ホント、優美も怖ろしい女だねえ」

すると優美は苦笑いを浮かべ、そんな事ないよ、と首を振る。

「ねえ、優美。これから間島君に……何をさせる気なの？」

しかし何も答えず優美はにこにこ笑っている。しんとした部屋の空気は固体になってしまったかのように凝こもっている。綾奈も彼女に微笑みかけた。

その瞬間、優美の顔から表情が消える。

「本当はそんな事、聞きに来たんじゃないんでしょ？」
何とも冷たい優美の声と瞳。

学校で見る優美とは何かが違う、いや、先週までの優美とは何かが違う。以前の彼女はこんな目をしていなかった、寧ろ出来なかった。彼女の中で何かが変わったのだ。

すると綾奈の顔からも明るい笑みが消えた。

「正解……」

そう言った綾奈は、今度は妖しく微笑む。

「じゃあ何の話をしに来たの？ あ、ちよつと刺々（とげとげ）しい聞き方してごめんね。最近私も苛々する事が多くてね」

そう言った優美は無理に口元を綻ばせる。自分の中に生まれた化け物に戸惑い、それを強引に押さえつけていて、今にも感情の堰が決壊してしまいそうな印象だ。矢張り今までの彼女とは違う。

それとは裏腹に綾奈は涼しい顔をしている。

「良いの、気にしないで。やっぱり優美は他の子と違う、読みが鋭いよ。実は私、そんな優美が大好きなんだよね」

で、何なの？ 優美が鋭く冷たく綾奈を睨みつける。話をはぐらかされたようで気に障ったのだろう。一方の綾奈は暖簾に腕押しといった様子でにたにた笑っている。まったく悪魔じみている。

「実は報告があるの。三日前の金曜日、真中いずみが亡くなりました」

その言葉に優美の眉がぴくりと動く。

「マナカイズミ？ 何か聞いた事ある名前だね。確か北野君達がそんな名前を言ってたなあ……誰だっけ、それ？」

綾奈は幽かに口元を緩める。

「十月一日に紫陽花坂の百階段から転落した女生徒、だよ」

「え、それって学校で噂になってた子じゃないの……」

僅かに優美の顔色が変わった。マグカップをテーブルに置いた綾奈が更に続ける。

「そうそう、その子。一昨日、入院先の旭ヶ丘総合病院で息を引き

取ったそうなの。しかもどうやら明歩の友達だったらしいんだ」

「そうなんだ……」

「うん、優美って明歩と仲良いでしょ。だから明歩から何か聞いてないかなって思ってたさ」

「私は何も聞いてないな。何で綾奈がそんな事気になってるの？」
すると綾奈は優美の言葉を遮るようにすうっと彼女に手のひらを向けた。

「待って、私の質問はまだ続いているの。じゃあ優美はこの名前は知ってるかなあ、もしかしたら知ってると思うんだけどなあ……」

綾奈は言う。新谷詩緒里、と。

その名前を聞いた優美の顔色はまた変わった。先程とは比べ物にならない程に狼狽しているようだったが、優美は直ぐに取り繕った。
「知ってるよ。四年前の新聞部の人だっけ、さやかのを調べてたんだよね。確かその人も百階段から落ちて死んだんでしょ？」

「そうだったの？」

今度は綾奈の方が驚いている。

……なるほど、もう死んでるんだ。

「間島君が言ってた、新谷詩緒里は死んでたって」

「そっか……死んでたんだ。じゃあ明歩や真中いずみが言ってたのは一体何なんだろうね。幽霊でも見たのかな」

いつの間にか綾奈にはまた薄い笑みが戻っている。彼女にとってこのような不思議は愉快で堪らないものらしい。

一方の優美は真っ直ぐに綾奈の目を見据えて言う。

「今度は私の質問だよ。もう一度聞くん、何で綾奈が今回の紫陽花坂の事故のことを気にしてるの？」

ふう、と甘い息を吐いて長い足を組みかえる綾奈。暫^{しば}しの間が空く。大概の異性ならこの仕草にドキッとさせられるのだろう。しかし、同性である優美の目には少しふてぶてしく映った。勿体付けないで早く言って欲しい。

「私も北野君と同じ。ただ興味があるからだよ」

「嘘ばかり。他にも何か考えがある癖に」

「本当だってば」

少々苛立った様子の優美とは対照的に、綾奈は整った顔に不敵とも言える程の柔らかな微笑みを浮かべている。

強いて言うなら、と綾奈は思い出したように付け足す。

「実は私の血縁者にもかつて旭ヶ丘高に通っていた人がいるの」
そう言うのと優美も納得したように頷いた。

「ああそうだったんだ。じゃあ昔からさやか的事は聞かされてたって事か。なるほど綾奈の親戚に旭ヶ丘高の出身者がいたんだね」

「いや、出身者って言い方……ちよっとおかしいかも」

綾奈はまだ温かいマグカップを手にとってコーヒーの芳醇な香りを堪能する。

「え、もしかしてまだ在学中って事？ いや。でも通っていた（、）って過去形で言ってたよね。もしかして退学したとか？」

それもちよっと違うなあ、と答える綾奈はマグカップを置いた。

「死んじゃったんだよ」

死……。

その言葉に優美の耳はぴくりと反応し、体は凍ったように動かなくなった。固まった優美を無視するように綾奈は続ける。

「百階段から落ちて死んじゃったんだよ。十五年も前にね……」

温かったコーヒーが一気に冷めた。

※

十月八日（月） 午後五時四分。

その少年は広田と名乗った。

私立の高校に通っているのだろうか、橋本に紹介されたこの少年はフラスナー式の珍しい学生服を着ている。

約束していた駅前の喫茶店の一番奥のテーブルで広田は一足先に到着していて、メロンソーダらしき緑色の飲み物を注文して待って

いた。

「おっす、この人が秀一君？」

そう確認する広田は妙に楽しげだ。そうだよ、と橋本が答えると彼は人懐っこく笑って会釈をする。秀一も軽く頭こうべを垂れる。

「まあまあ、良いから二人とも座りなよ」

広田は手を差し出して二人に座るように促す。鞆を足元に置いた秀一はアイスコーヒーを、橋本は広田と同じくメロンソーダを注文した。

この広田という男は気さくで話しやすそうといった良い第一印象なのだが、秀一が想像していたものとは随分違った。

「初めまして、北野秀一です」

「こちらこそよろしく。あ、秀一君も高二だろ？ タメ口で良いよ」

橋本の部活仲間だったと聞いていたので坊主頭の野球少年を勝手に想像していたのだが、目の前にいる広田は今風の茶色い頭をしていて、髪もスポーツをするには随分長い。左耳にはシンプルなシルバーのピアスをしている。

健也ほどではないが、チャライ。

しばらく広田は橋本と二人で談笑していた。話の流れからすると、どうやら広田は高校では野球部に入らなかったようだ。別に他の部活を始めた訳でもないらしい、秀一と同じく所謂いわゆる帰宅部だ。

毎日のようにレンタルビデオ店で実話を銘打った胡散臭い怪奇ドキュメンタリーを借りたり、コンビニで心靈スポットをまとめた地図などを見つけると思わず買ってしまったりするような筋金入りの都市伝説ホラーおたくだという事も分かった。

これは期待できそうだ、と秀一の表情は緩んだ。

「ところでさ、今日は何で俺が呼び出されたんだっけ？」

「ああ、そうだった。実はこの秀一にとある都市伝説の事について教えてやって欲しいんだ」

秀一はぺこりと首を縦に振る。すると広田は腕を組んで天井を見上げて、うーん、と唸った。

「なるほど、都市伝説ね。そう言えば最近買ったインチキ臭い雑誌に結構書いてあったなあ。まあ本の四割近くは風俗広告とか怪しい通販の宣伝だったんだけどな」

某バーガーショップの肉はミミズパティを使用しているやら、某アイドルの芸名は大手自動車会社と時計会社の名前から取っているやら、ダイナマイトに含まれるニトログリセリンは甘くて美味しいやら、ナチスのアドルフ・ヒトラーはまだ死んでいないやら、広田はそんな胡散臭い話を次から次へと延々と始めた。

「ちよっと、何か全部嘘臭いんだけど」と橋本。
もっと
尤もだ。

どうやら秀一が思っていた事を橋本が総て代弁してくれたようだ。「でも今『怪しいけど、もしかしたら……』なんて思っただろ？」
うーん、と二人は渋りながらも頷いた。

「それが都市伝説だ」

いつの間にか広田の都市伝説講座が始まっていた。もうすっかり彼のペースに秀一と橋本は巻き込まれている。

「怪談じゃないから幽霊が出なくても良いし、何なら怖くなくたって良いんだ。もしかしたら本当かもしれない噂。つまりそれが都市伝説というモノなんだよ」

軽い見た目をしているが広田の言葉には妙に説得力がある。どうやらただの怪奇おたくではないらしい。なるほど、と秀一が相槌を打つと広田は嬉しそうに目を輝かせた。さらに弾んだ声で広田は続ける。

「興味持ってくれた？ 流石秀一君だよ。そうなんだ、『もしかしたら本当かもしれない』つまり、『本当かどうかわからない』だから結果として『気味悪い』って事になってるだけなんだ」

「例えばさっき広田君が話してくれたものの中には何かある？」

「そうだな、例えばヒトラーの話か。ヒトラーは第二次大戦終結間近にして死んだんだ、死因だって事故だか自殺だか他殺だかはつきりしない。でもな、死亡が発表されたものの肝心の遺体を見たもの

はほとんどいないんだってさ。しかも遺体は直ぐに火葬されたんだ、土葬が風習であるドイツではあり得ないよな」

「その不可解な点の所為で噂が生まれるって訳か」

「そう。『ヒトラー生存説』って都市伝説さ」

「なるほど、別の死体を用意して自分の死亡を発表させて直ぐに火葬してしまう。焼いてしまえば本人かどうかなんて調べようもないからね。そして自分は死んだふりをして世界中からの糾弾を逃れ歴史の闇に隠れる。そして全体主義の時代の再興の為に、今もどこかで虎視眈々とその時を待っている。と、いう訳かな？」

「正解！　そういう事だよ」

拍手して秀一を称える広田。彼も秀一を気に入ったようだ。

「凄いなあ、ホント秀一は頭良いよ」

橋本は苦笑しながら二人を見比べている。

「いやいや、広田君の説明が分かりやすいんだ」

彼はただ情報を得て愉しむだけではなくて、その集めた情報についてきっちり自分で考察している。

得意気に広田は話し続ける。

「良く考えればガセネタってヤツも結構あるんだよな」

「他にぶっ飛んでるネタと言えば、ダイナマイトが甘いつてやつ？」

「それはよく解らないんだな、俺の周りにダイナマイト齧った奴なんていないしさ。明らかにガセってのはハンバーガーがミミズの肉ってヤツだよ」

すると橋本は咄嗟に反応した。

「え、それってメチャ有名な話だろ？　あまりにも皆言ってるから俺も『昔、食用ミミズを使った時期があった』なんてちよつと信じてたのに」

まさかこんな話題になるとは秀一も思っていなかった。集合場所をいつものファーストフード店にしないで良かったとつくづく感じている。

「百円以下の安い値段でハンバーガーを売ってるから『これ本当に

牛肉なのか?』と思った誰かから始まったただの噂だよ。実はミミズで肉を作る方が手間も費用も掛かるんだ。一匹ずつ丁寧に切り開いて体内の砂を洗い出さなきゃならない。それを挽肉に加工するんじゃない大変だ。もしそうやってハンバーガーを作るんだったら一個当たりの定価は五百円以上に設定しないと儲けは出ないんだってさ」

「そうなのか、ミミズの方が安いと思ってたよ」

「意外だろ? 手間やら何やらを計算すると結局高くなるんだな。」

だからって今度は『ミミズじゃなくて野良猫の肉だ』なんて話も出て来たんだけど、それも有り得ない話だよ。肉食の動物は餌代が嵩むから家畜には適さない。結局どれもこれも根拠のない噂に過ぎないのさ。『その噂は某バーガーショップの評判を落とす為にライバル店が流した』なんてのも聞いた事があるけど、そっちの方がまだ信憑性があるかも」

一気に喋った所為で喉が渴いたのか、広田はメロンソーダを一口飲んだ。

「なるほど、面白いじゃん。都市伝説って怪談の類だと思ってたけどなかなか奥が深いんだな」

「まあね。インターネットが普及して情報伝達速度が格段に上がったのは良いんだけど、みんな何が真実で何が嘘なのか判断できないんだ。だからこんな噂が瞬く間に広まる。まあ最近の都市伝説っていうのはこんな感じのが多いな」

「最近のって?」

「二、三十年前に流行ったのはもっと怪談ぽいのが主流だったんだよ。口裂け女、人面犬、赤マント……聞いた事あるよね?」

「まあ……口裂け女ぐらいなら誰でも知ってるかもな」

「うん、そういうのは一般的に都市伝説妖怪って呼ばれてるんだよ一般的……なのだろうか。秀一は内心そう思った。」

「その頃はインターネットも携帯電話も普及してないからじわじわ噂が広まる。人の口づてだからその度に微妙に形が変わって脚色もされる。都市伝説妖怪にも色んな派生バージョンが現れる。同じも

のから派生しているのに名前だって全然違ったりするんだ。さっき言った赤マントも地域によれば『青マント』とか『A』なんて呼ばれてたりもする」

「でも最近そんなの聞かないよなあ」

と、橋本はずるずるとストローを吸いながら口を挟んだ。

「実はそんな都市伝説妖怪は、ある一派に市民権を奪われてしまったんだ」

「どういう意味だよ？」

「怖い話を本気で信じたり、興味を持ったりするのはいつの時代も子供だろ？　じゃあその子供が一番集まる場所と言えよ？」

「あ、学校だ！」

「そうそう。携帯電話やパソコンをそう頻繁に使用しない子供達の情報交換の場はほぼ学校に限られると言っても良い。そうなれば自然と都市伝説の舞台も学校に移されて行った。そして新たなカテゴリ、学校怪談が生まれたのさ」

「知ってる。トイレの花子さんとか動く二宮金次郎像とかだろ？」

広田は満足そうに頷いている。

「こうして場所を選ばず幽霊の登場する心霊怪談、学校という舞台限定での怖い噂の学校怪談、霊的存在の有無すら問わない噂話の都市伝説っていう住み分けが出来たって事なんだよ。まあ学校怪談ってのは旧都市伝説の空間を限定したバージョンだと言えなくもないんだけどね」

そう言い終わると広田は背凭れせもたに体を預けて背伸びをする。彼の話は興味深いものだった。情報通の中西も連れて来てやれば喜んだかもしれない。

広田が再び口を開く。

「そう言えばさ、旭ヶ丘高にも何かあったよね。学校怪談」

……紫陽花坂のさやか。

「それだよ！」

秀一は弾かれたように立ち上がった。

「うわあ、何だよ急に！」

「実は今日俺が広田君に会いに来たのはその話について聞きたかったからなんだよ」

勢いに押された広田は僅かに仰け反っている。

「ええと、確か……通学路の坂道にさやかって女の子の幽霊が出るって話だよ」

「そうそう！」

ここにきてようやく秀一は広田を呼び出した経緯を説明し、旭ヶ丘高の生徒でない広田が何故さやかの噂を聞いた事があったのかを聞こうとした。都市伝説怪談講座を披露する為に呼ばれたと勘違いしていた広田は少し残念そうな顔をしていたが、答えてくれる事に快く了承してくれた。

口火を切ったのは橋本だった。

「お前が初めてその話をしたのって野球部の遠征の時だったよな」

「ああ、そうだったな。確か中一の夏だっけ」

……中一。

……また、四年前か。

「練習試合の帰りのバスが渋滞に捕まったんだ。貸切バスだからウチの部員しかいなくて皆好き勝手にワイワイ騒いでただけど、いい加減退屈してきてな。『怪談大会しようぜ』って先輩が言い出したのが始まりだったよな」

「そこで広田は『紫陽花坂のさやか』の話をしたんだっけ」

思い出すように眉に皺を寄せて広田はこくりと首を縦に振った。

「先輩も誰も知らない話だったみたいでウケは良かった記憶があるね。『さやかに出会ったら五日以内に死ぬ』って具体的な期限付きなのがインパクトあったんだろうな」

……期限。

「広田君も五日間のルールの事は知ってるのか？」

「うん、知ってたよ。俺もそういうふう聞いたもん」
怪訝^{おか}しい。

彼らが話していたのは四年前。それと同じ年に、新谷詩緒里によって書かれた新聞部のレポートには「五日間」の事には一切触れられていなかった。

これが広田の言う都市伝説の広がり方の特徴。

……誰かが脚色している。

「因みに、その噂ってどこで仕入れて来たんだ？」

「えーと、確か中学の時通ってた塾の知り合いが言ってたんだよ。実はうちの親が勉強しろってうるさくてさ、中一の時から塾入れられてたんだぜ。しかも大手で評判の良い市街地の塾だ。こっちは部活もあって忙しいのにわざわざ遠くの塾まで電車乗って通ってたんだよ。高校に入ったら、部活も塾も行かずにのんびりしてやるってこの時から決めてたよ」

「そう言えば広田って部活終わったらダッシュで帰ってたっけ」

「遅刻したら家に電話掛かって来るからな。行っても同じ中学のヤツなんていないから休み時間もヒマだったんだよ。周りのヤツらも俺と同じような感じで、皆中学はバラバラだったな」

「それで、さやかの話聞いたってというのは？」

「ごめんごめん、ちょっと脱線したかな。教室の隅っこで、怪談で盛り上がってるヤツらがいたのさ。俺も興味あったからそれを盗み聞きしたワケ。その時の話が『紫陽花坂のさやか』だったんだ。妙にインパクトのある話だったんで覚えてた。それで野球部の皆にも話したって事さ」

こうして噂は広まってゆく。

しかし旭ヶ丘高校に通い、実際に紫陽花坂を毎日目にする者達以外は皆「紫陽花坂のさやか」を忘れる。噂にも上らなくなる。橋本も入学が決定するまでさやかの噂など忘れていたそうだ。

こうして、所謂都市伝説妖怪「さやか」は空間を限定された都市伝説、学校怪談となっているのだ。

広田のような怪談蒐集者は別として、舞台に関係しない者はこの噂を忘れる。もし仮に「五日間のルール」が何らかの目的があつて

脚色されたものであるとしても、それは旭ヶ丘高校の生徒にしか効果を齎^{もたら}さない事になる。

噂の出所を手繰り寄せていけば何かが分かるかもしれないと秀一は考えた。

「『五日間のルール』を言っていたその人がどこの中学に通っていたか覚えてる？ 中学が分かれば噂の発信源の地域も大体特定出来るかなと思ってさ」

秀一の問い掛けに広田は難しそうな顔で眉を顰めた。

「十校以上が集まってたから誰がどこの中学かなんて全然把握してなかったんだよね。それどころか俺、そいつと喋った事もないんだ」

「そっか……」

がっかりして電池が切れたように項^{うなだ}垂れる秀一。

「あ、でもな」

何かを思い出したように広田は口を開いた。電池を入れ替えたように顔を上げる秀一。

「そいつの名前だけなら覚えてるよ」

「マジで！」

「どんな漢字かは知らないけどね。名前が分かってても本人の進路も連絡先も分からないんだから出身中学調べるのは一苦労だよ。それに噂の出所なんてあってないようなもんさ。都市伝説なんか玉葱みたいに剥いても剥いても中身が無かったりするんだよ」

「そうだよな。でも気が済むまで調べてみたいんだ」

そいつの名前を教えて欲しい、秀一は真っ直ぐに彼の目を見て言った。橋本も同じように広田を見ている。

すると広田の表情が綻ぶ。

「わかった、教えるよ。その代わり俺は名前しか知らないからこれ以上は何の力にもなれないからね」

「ありがとう、本当に助かる」

「ええと、そいつの名前は確か……」

からんからんからん。

その時けたたましいベルの音と共に入口のドアが開いた。三人はほぼ同時に入口に目を向ける。

「あれ、もしかして二人の友達？ 旭ヶ丘高の制服だけど」
立っていたのは健也だ。

シャツの袖とズボンの裾はどろどろに汚れていて、今にも泣き出しそうな顔をしている。悲しい事があったというより狼狽ろうばいしきっているという表情だ。他の客達も不審に思ったのか健也を見ている。

何かがおかしい。

「秀一……良かった、やっぱりここに居たんだ」

彼の声は震えていた。秀一の姿を見つけると健也は覚束おぼつかない足取りで近付いてくる。膝が笑っている。

「どうしたんだよ。何があったんだ」

警察……。ぼそりと健也が口にした。

「警察がどうしたんだ。お前まさか何か悪い事やって、警察に追われてるんじゃないだらな？」

健也は首を横に振って否定する。いや、ただ震えているだけかもしれない。すると健也は弾かれたように秀一の肩を物凄い力で掴んだ。その指も泥で汚れている。

「警察を呼んでくれっ！」

店中が彼に注目する。

「馬鹿、あんまり大声出すなよ。落ち着いて話すんだ。何があったんだ？」

橋本が隣のテーブルから椅子を一脚引き寄せてきたので健也も同じ席に着かせる。ぜえぜえと息を切らしている健也。良く見ると彼の服はどろどろで、まるで砂遊びでもしていたかのように爪の間に泥が入り込んでいた。

普段の健也なら仲間内に見慣れない顔がいたら「誰だよお前」と突っかかって行く事もあるのだが、今は初対面である広田を前にしても温和おとなしいままだ。温和しいというより憔悴していると言いた方が正しいかもしれない。

「落ち着いたか？」

返事はない。だが呼吸は充分整ってきている。

「あのな、こないだ秀一に借りたレポートあったろ。俺もアレ読んだんだ。そしたら紫陽花坂のあの公園の事も書いてあってな、気になってちよつと調べてみたんだよ。アイツの手伝いが何か出来ねえかって思ってた……」

……アイツ？

恐らく優美の事を指しているのだろう。綾奈の話によると二人はそれなりに深い関係にあるらしいのだ。

アイツの手伝い。その言葉から察すると優美もさやかについて調べていたのだろう。そうなるとレポートを欲しがっていたのは健也本人でなく優美である可能性が高い。

「やっぱ、あの公園……おかしいぞ」

「おかしいって？」

「花壇に……」

そこまで言って健也の体はまた震え出す。俯き頭を抱えたまま、彼は絞り出すように言葉を続けた。

死体が埋まってたんだよ、と。

※

十月八日（月） 午後六時十五分。

夕暮れの紫陽花坂はいつになく騒がしかった。

喫茶店の公衆電話から死体の件を警察に通報し、秀一と健也が公園に駆けつけた頃には既に公園は封鎖されていた。まだ部活で残っていた生徒も多数いたので現場周辺は騒ぎを聞き付けた旭ヶ丘高校の生徒でごった返している。秀一は人の波を掻き分けて前に進んでゆく。

公園入り口で人払いをする制服警官の奥には現場検証中の刑事達がいる。その中に見覚えのある背広姿があった。

「親父！」

すると一人の刑事が振り返る。

「秀一か。子供の遊びじゃないんだ、家に帰ってろ。ついでに野次馬も連れてってくれ」

「ちよっと待ってくれよ。俺達が通報者なんだ！」

眉を顰める父親は若い刑事を一人こちらに寄越した。その刑事はまず第一発見者である健也をパトカーの中へと促した。

数分して健也は直ぐに出てきた。

「なあ、俺にも話してくれよ」

健也は公園の中を恐る恐る覗き込みながらも、こくりと首肯した。例のレポートを読んだ健也は今日の放課後、一人で公園を隅から隅まで調べようとしていた。まずネズミの死骸が埋まっていると書かれていた桜の下を掘り返してみたが何も見つからなかったらしい。そこで次に目に付いたのが花壇。

何の花も植わっていない、ただ枯れかけた雑草があるだけの放置された花壇。そこを五十センチ程掘り返すと、黒いポリ袋が出てきた。変な臭いがしたから、誰かがペットの死骸でも埋めたのかと思ったそうだ。

しかしその中に入っていたのは、赤ん坊の死体だった。

花壇の雑草の生え具合から考えるとかなり昔から埋まっていたのだろうが、気密性の高いポリ袋で覆われていた為か完全に白骨化しておらず、まだ人としての原形を残していたそうだ。

人の死体が発する只ならぬ瘴氣に錯乱した健也はそのまま逃げるように秀一達の居る喫茶店に掛け込んできた、という事だった。

「思い出しただけでも吐きそう。俺、死体なんか今まで見た事なかったし」

「そんなの俺だって見た事ないよ。ところで、この事って俺達以外に言ったりしたか？」

「いや言っていない。ホントは一番に優美に電話したんだけど留守電になったんだ。それで誰かに話さないと思って秀一達の所へ行

ったんだよ」

「優美の留守電には何か残したりした？」

「何だよ、さっきの刑事と同じような事ばっか聞きやがって」

健也は不愉快な顔で舌打ちした。

「まあ『何で最初に警察に電話しなかったんだ』って言わねえだけさっきの刑事よりマシだけだな。俺もテンパってたからよく覚えてないけど留守電には『花壇に死体が埋まってた！』ってだけ言った筈だ」

そうか、と秀一は公園の中に目を遣る。花壇の周りで刑事達はそこにあるモノを隠すようにビニールに包んでいる。

公園の周りに集まった生徒達は帰る気配を見せない。寧ろ秀一達が来た時よりも増えているように思える。

そんな集団から一步離れた場所に綾奈が立っていた。

彼女は秀一達の方をちらりと確認すると、再びビニールに包まれた塊のある方を向き直った。

彼女は今日、学校を休んでいた筈だ。

「赤ん坊、なんだってね」

そう綾奈は呟いた。

「うん、そうらしいな」

「可哀想に。生まれたばかりで、楽しい事も悲しい事も何も知らない内に死んでしまったんだね。悪い事なんて何もしてないのに」

いつも冷たい表情をしている綾奈も流石に人の死は悼む。彼女は周りに聴こえない程の小さな声で何かぶつぶつと呟いている。耳を澄ますとそれは聖書の一節のようだった。綾奈はその小さな命の死を弔っている、見ず知らずの小さな死を。

「育児放棄……」

綾奈は小さな声を今度は秀一達に向けて言った。

「さっき刑事さん達の話盗み聞きしちゃったんだけどね、まだ臍へその緒も付いたままだったんだって。赤ん坊って言うより生まれたば

かりの新生児よ。親が、育てられないからって産んで直ぐに土の中に埋めちゃったんだよ」

秀一と健也は何も言えなかった。

「殺してから埋めたのか……それとも、生きたまま埋めたのか……」
どちらにしろ最悪ね、と綾奈は結んだ。

部活動中の生徒達も練習を中断してまで現場を覗きに來ている。様々なスポーツのユニフォームが入り混じって目がちかちかする。普段はいつも同じ制服を着ているのにこうして見れば皆同じ学校の生徒とは思えない程に統一感が無い。

優美が紫陽花坂を駆け上がって來たのは午後六時半を回った頃だった。

「ちょっと、コレ凄い騒ぎ……」

彼女は秀一達の元へとやってきた。

「赤ん坊の死体が見つかったんだって？」

優美は真剣な目で三人を見比べ、健也に視線を固定した。すると健也はみるみるうちに狼狽し始めた。そして健也は彼らしくない弱気な声で言う。

「もうやめようぜ、久保田。さやかの事に関わるのはもうやめよう。やっぱりやバ過ぎるって……」

一瞬、優美は眉間に皺を寄せた。

「秀一も、日下部も同じだ！ やっぱりさやかは触れちゃいけない伝説だったんだよ」

彼は臆^{ヒステリック}躁^ク的に叫ぶ。

初めて死体を見た所為で健也はかなり動揺している。強気でお調子者の健也はここにはいない。彼を落ち着かせるのに今日はかなり時間を使いそうだ。

……赤ん坊の死体。

また現れた新たな因子、^{フアクター}秀一の頭の中はパンク寸前だ。やり切れない溜息を吐いてふと下り坂の方に目を遣ると、紫陽花の影に誰か

が立っていた。

小森明歩だ。

彼女は真っ赤な夕陽を背にして秀一達の方をじっと凝視^{みつめ}ていた。

——小森！

と、声を掛けようとした所で、明歩は逃げるように百階段の方へと消えて行った。彼女はいつから視ていたのだろう。

今日の明歩は気味悪ささえ感じた。

その夜、秀一は一人で作戦を練り直していた。

十時を回っても玄関のドアが開く気配はない。案の定、例の死体の件で父親の帰りは遅い。

秀一は思い切って冷蔵庫から父親のビールを勝手に飲む事にした。酒の力を借りれば何か新しい考えが浮かんで来るかと思ったのだ。爪を引っ掛けて缶を開けると、ぷしゅっと小気味の良い音が鳴る。風呂上がりという事もあり、ビールが美味そうに感じた。そう思っ

て一気に喉へと流し込んだが、矢張り苦くて不味い。

そのまま不味い炭酸水を持って部屋に戻り、ベッドに寝転ぶ。火照った体にアルコールが沁み渡り、体がだるくなってきた。やがて脳までじわじわと温かくなってくる。そんな柔らかくなった頭で、秀一は考察を始める。

……まず、新谷詩緒里は二人いる。

一人は四年前に死んだ本物の新谷詩緒里。そしてもう一人は十月一日、真中いずみの前に現れた新谷詩緒里。秀一が正体を追っているのは後者だ。必ず実体はある筈だ、幽霊でもない限り。

そして「五日間のルール」について。

これは四年前から付加され始めたものであるようだ。新谷詩緒里のレポートにこの事は書かれていない。しかし十月一日の新谷詩緒里はこの新ルールも付け足している。「五日間のルール」は新谷詩緒里がレポートを書いた後に出来たと思われる。

総てを混乱させたのが今日の赤ん坊の死体。

さやかに縁のある公園で発見された所為で、新たな謎が出現したかのように思えた。しかしよく考えれば赤ん坊の事など今まで聞いた事もなければ、あのレポートにも一切触れられていない。深く考え過ぎてはいけない、これは完全に無関係と思っていてもよいだろう。秀一は上半身を起こしてもう一口ビールを飲んだ。じんわりと痺れにも似た酒気が更に巡り出す。

……そう言えばどうして日下部はあの時、紫陽花坂に居たのだろう。ふとそんな疑問が過った。

今日綾奈は学校を休んでいたし、下校途中に立ち寄ったとは考えられない。学校に用があったのか、それとも今日死体が発見されるのを知っていたのか。

その時、携帯電話が鳴った。

発信者は、橋本。彼には今日、広田に会わせてくれた礼も言えていない。その礼と詫びも言いたくて秀一は電話に出た。

『もしもし秀一。起きてたか？』

「ああ、起きてたよ。それよりさっきはいきなり飛び出して行ってゴメンな」

受話器の向こうで橋本は温和に笑った。

『ああ気にするなって』

「喫茶店に置き去りだったよな、今度コーヒー代ちゃんと払うよ。それより広田君、怒ってなかったか？」

『いやいや、それどころか大満足してたぞ。久々に深い話が出来たって言っただ。また会いたいってさ』

そうか良かった、と秀一は一安心する。

『それよりさ、広田の言い掛けてた事聞かずに飛び出して言っただろ』

「言い掛けてたって？」

『五日間のルールの話をしてたヤツの名前だよ！』

秀一ははっとなって飛び起きた。そうだ、その名前を聞き忘れていた。

「もしかして、橋本は聞いたのか？」

『ああもちろんさ』

……よし、やったぞ。

秀一は胸の中でガッツポーズをした。新しい欠片ピースが手に入れば新しい展開が見えるかもしれない。

『俺も広田にこの名前を聞いた時はぶっ飛んだよ。今から言うから秀一も心して聞けよ』

……何だよ、勿体付けるなよ！

『そいつの名前は……』

そして受話器の向こうで橋本は呟く。

……え。

……嘘だろ。

秀一は驚愕した。

自分の耳を疑って何度も橋本に聞き返した。しかし橋本は何度も同じ名前を繰り返して答えた。

……信じられない。

……しかしもしそうだとすると。

総ての辻褄つじつまが合う……。

十月一日に新谷詩緒里が現れた理由も、真中いずみが転落した事も、五日間のルールが付加された事も、そして今日の赤ん坊の死体の事も。

……まずい、新谷詩緒里は直ぐにでも動き出す筈だ。

人も居なくなつて警察も引き上げたであろうこの時間、紫陽花坂で必ず次の動きが始まる。

ベッドから降りた秀一は大慌てで服を着替えて家を飛び出した。こんな時間に電車は動いていない。自転車に跨った秀一は力一杯ペダルを踏み込む。

橋本の言葉はただの欠片ピースではなかった。
パズルは完成した。

※

十月九日（火）午前二時三十二分。

わたしは死のうと思っていました。

でもその前に生きる目的が一つだけ出来たんです。だから最後にもう少しだけ、がんばろうと思います。一世一代の大がんばりです。

草木も眠る丑三つ時。人はそんな事を言いますが、わたしは眠くありません。ここ数日全くとって良いぐらい眠っていません。

膨らみかけの半月が銀色の冷たい光を放ち、わたしの肌を仄かに照らしています。

夜はとても寒くて風邪をひいてしまいそうです。吹きつける風も強く、木々がざわざわと葉を揺らせていてまるでわたしに「帰れ」と警告しているようです。

帰りません。

ここに居れば、いつか必ずアイツが来る。

それを心の支えにずっとここで待っているんです、真っ暗な中でずっと一人で待っているんです。

十月になってから本当に色々な事がありました。辛い事、悲しい事、痛い事、こわい事、死にたくなる事。良い事なんて一つもありませんでした。

わたしの物語はもうすぐ終わります。

その前に、わたしは人を殺そうと思います、また。

それをもってわたしの物語はお終いです。

※

十月九日（火）午前三時六分。

百階段の下に自転車を置き、秀一は月明かりに浮かび上がる冷たい石段をこつこつと上ってゆく。

……ここで何人もの人が死んだ。

早川さやかを始めとして新谷詩緒里、真中いずみ。そしてレポートの記述が真実を語っているのなら、さやかの死後すぐに「お嬢様」という名前すら残っていない人物もこの場所で死んでいる。

この階段は、狂^{おか}しい。

「何しに来たんだよ」

不意に頭上から声がした。見上げるとそこには健也がいた。彼は百階段の上に立って秀一を見下ろしている。

「健也こそ、こんな時間に何やってるんだ？」

秀一は階段を上りながら問う。

見張りだ、と答えて彼は階段の上から一段目に腰を下ろした。健也の服はまだ泥で汚れたままだ。昼間から一度も家に帰っていないのだろうか。

「見張りって、何を見張ってるんだよ」

「変な奴が現れないかだ。ほら、何だその……死体とか見つかったり変質者が出たりで最近この辺り物騒だろ？ だから俺がパトロールしてるってワケだ」

明らかに健也は動揺している。

「嘘吐け……」

秀一はそう言って彼の肩をぽんと敲^{たた}いた。すると健也はがくりと項^{うなだ}垂れる。

「そんなモノを見張ってるんじゃないんだろ。変質者なんかじゃなく、本当は『今ここに誰も近付かないように』見張りをしていたんだ、違うか？」

秀一が言葉尻を上げて問いかけると、健也は諦めたように少し笑った。

「バレたか？」

「ああ、バレバレだ。お前が嘘下手な事なんか俺も良く解ってるよ」俯いたまま健也は肩を揺らして小声で笑っている、いや、もしかしたら泣いているのかもしれない。

「助けてくれよ、秀一……」

「もちろんそのつもりだ。お前は良い友達だしな」

ありがとな、と返した健也はしばらく間を開けてから再び口を開いた。

「お前にはアイツを、止められるか（、、、、）？」

「分からない。出来るだけ無理に介入せず自然な流れに任せるつもりでいる。でも少なくとも総てを終わらせる（、、、、）事は出来ると思う」

健也は顔を上げた。

「そっか、じゃあ頼むわ」

わかった、明日また学校でな。秀一はそう答えて百階段を上りきった。

その足元には瓶に挿した黄色い花が供えられている。そのが弁が柔らかな夜風にそよと揺れた。

公園は異界を思わせる暗闇に包まれている。

黒い世界の中に滑り台やブランコがぼんやり浮かび上がっていた。さっきまで警察や野次馬でごった返していた場所とは思えない程の冷たい静寂に包まれている。生命の気配など全く感じさせない無の世界。

しかし健也が直ぐそこに居たという事は……。

ぽっかりと口を開けた闇の中に秀一は踏み込んだ。もう冬が近付いているのにもかかわらずじつとりと湿気ている。

そして、何か嫌な臭いがする、鼻を衝くようなきつい臭いが。

フェンスの向こうには町の明かりが宝石のように散らばっている。

こんな時間だというのにまだ電気が点いている建物が多い事に驚いた。現代社会にはもう昼も夜もないのかもしれない。

その前にぽつりと佇む桜の木。

その太い幹に凭れる一つの影があった。

「やっぱりお前がここに居たんだな……優美」

影はゆっくりと動き秀一の方を向く。目が慣れるにつれ、それは

徐々に久保田優美の姿を形作ってゆく。

「こんばんは、北野君。ここから北野君が百階段を上って来るの見てたんだよ。来ちゃったんだね、やっぱり北野君は勘が鋭過ぎるよ」

「ここまで辿り着くのはかなり遠かったけどな……」

「でも、やっぱり北野君は凄いや。やっぱり私は、北野君が一番苦手だな」

優美は細く長い指で髪を耳に掛ける。

「間島君と何を話してたの？」

「別に大したことじゃないよ、ただの世間話さ。俺は健也に『アイツを止めてくれ』って言われたんだ。そこまで俺にする権利があるかは分からないだけだな」

「そうだったんだ。お喋りだね、間島君は」

優美の足元には灯油のタンクが転がっている。この公園に充滿する妙な臭いの原因はそれだったようだ。

「優美が……新谷詩緒里だったんだな」

すると彼女は薄く微笑んだ。

「そうだね。先週その百階段から落ちた女の子、真中いずみさんだっけ？ 彼女にとって私は新谷詩緒里だったのかもね。何で分かったの？」

「順を追って考えていけば、どうしても優美に辿り着く事になったんだ。あまり俺の口から言いたくない事も沢山ある。だから、もし俺がこの結論に辿り着いた事が正解なんだったら、もう終わりにしてくれないか」

ふう、と優美は諦めたような溜息を吐く。

「折角だから北野君が考えた事教えて欲しいな。私はどんな事を言われても平気だよ、寧ろ言ってくれない方が気持ち悪い。お願い。言って」

秀一は顔を顰めながら、分かったよ良いんだな、と答えて話し始める。

「今日の夕方、この公園で発見された赤ん坊の死体。それが埋まっ

ている事を優美は最初から知っていたんだ」

「どうしてそう思ったの？」

「だって優美は今日、ここに駆けつけた時『赤ん坊の死体が見つかったんだって？』って言ったよな、知らない筈なのに」

「それは間島君が私の携帯に留守電を残してたから」

「健也は『花壇で死体が見つかった』としか言っていないんだ、赤ん坊なんて一言も言っていない。そもそも花壇としか言っていないからどこの花壇かも分からないだろ。健也のメッセージだけだと優美がこの公園に辿り着く事すら不可能な筈なんだよ」

なるほどね、と優美は呟く。

「ミスったなあ。で、続きは？」

「赤ん坊が埋まっている事を発見まで誰も知らなかった筈なのに優美は知っていた、つまり……赤ん坊を埋めたのは、優美。お前だと考えたんだよ」

秀一は自分の声が震えている事に気が付いた。自分の発する言葉の一つ一つがクラスメイトを追い詰めている。気分の良いものではなかった。

「正直考えたくもなかったんだけどもしかしてあの赤ん坊の母親は、優美なんじゃないか……」

緊迫した空白が開く。続けて、と彼女は秀一に促す。

「優美の過去に何があったかは知らないし、これ以上考えたくもない。その後お前は隠された秘密を守る為に、この場所を侵してはならない聖域にした。そこで優美は聖域を守る怪物として『紫陽花坂のさやか』を利用したんだ。恐らくそれが四年前」

「四年前？」

「その頃、さやかの都市伝説に新たなルールが付加されたんだ。それが『さやかに出会った者は五日以内に死ぬ』ってやつさ。そのルールを広めたのは優美なんだろ」

「何で私なの？」

「広田って男を知らないかな？ 優美は覚えていないかもしれない

けれど中学の頃お前と同じ塾に通っていたという人間がいてね、野球部の橋本にさっき聞いたんだけど、彼が言ってたそうなんだ。五日間のルール付きでさやかの噂を口にしていた奴がいる。その名前は……」

久保田優美だと。秀一ははつきりと口にした。

「その頃の優美がどうやって『紫陽花坂のさやか』を知ったのかは知らない。きっと何らかの形で新谷詩緒里のレポートの内容を知る機会があったんだろう。赤ん坊の死体を隠してあるこの公園に誰も近付かせない為に更なる魔法が必要だった。それが五日以内の死というリアルな期限による恐怖だ。そうすれば皆この紫陽花坂を恐れて近寄らなくなる、そう考えたんだな」

優美は黙ったまま秀一を見詰めている。

「実際に紫陽花坂を毎日目にする者以外はさやかの都市伝説なんて直ぐに忘れてしまう。でも優美が一番警戒していたのは紫陽花坂を毎日通る旭ヶ丘高の生徒だった。けれどもその新たな噂は上手い具合に旭ヶ丘高の生徒に浸透してゆき、誰もがさやかという死神を怖れるようになった。それでも心配だった優美は自分自身がその公園を常に監視できるように旭ヶ丘高に入学した。でも……」

「でも？」

「旭ヶ丘高の生徒にも『紫陽花坂のさやか』を知らない者がいた。それが転校生の真中いずみだ。十月一日、彼女は一人で不用意にもこの公園へ来てしまったんだ。それを発見した優美は慌てて彼女を呼び止め、この都市伝説を語った。その際、名前を聞かれた優美は咄嗟に本名ではなく、もう存在しない生徒『新谷詩緒里』を名乗った」

そこまで言い切ると秀一は様子を窺うように優美を見ていた。彼女は顔色一つ変えずに柔らかに微笑んでいる。

「その後、真中いずみは百階段から落ちた。俺と健也が真中いずみの病室に行った時、彼女は『あなたの後ろに新谷詩緒里がいる』と言ったんだ。俺が振り返ったらそこには優美がいたんだ。うわ言か

と思ったけれど、彼女は本当の事を言っていたんだな」

なるほどね、と呟いた優美は困ったように顔を顰める。

「正解だよ、確かに私は新谷詩緒里を名乗った。凄いね北野君は。でも、八十点だよ……」

「八十点？」

「うん、百点満点じゃない」

月明かりに照らされた優美は大きく伸びをした。

「残りの二十点を教えてあげる……」

※

北野君は、私が新谷詩緒里のレポートを読んだ事があるって考えたんだよね。

実はそれが減点対象なんだよ。私はそのレポート読んだ事なかったんだよ、間島君から受け取って今日初めて手元に來たの。

ほら、これでしょ。

実はまだ中身は見えてないんだよね、本当につき受け取ったところだからさ。じゃあ何で私が真中いずみにさやかの話を詳しく話せたか気になってるんでしょ？

新谷さんに直接聞いたの。

四年前、この公園で一人の旭ヶ丘高校の生徒に出会ったの、その人は新谷詩緒里と名乗った。

その時私は黒いポリ袋を持っていたんだけど、あの人は特に何も気にはしていなかったみたい。彼女はそれよりもこの場所に伝わる「紫陽花坂のさやか」の事に夢中だったみたい。当時中学一年だった私に色々尋ねてきた、どうやら新谷さんは新聞部の記事を書く為にその話を調べている途中らしかった。

私はそんな都市伝説の事なんて全然知らなかったんだけどね。

すると新谷さんは得意気にさやかの都市伝説を私に教えてくれた。さやかの事、親友のりかこの事、意地悪なお嬢様の事、そしてさや

かがこの紫陽花坂で死んだ事。話すだけ話したら新谷さんはこの公園から去って行ったの。後にも先にも、その時しか私は新谷さんに会った事が無い。

でも、本当に良かった。

この公園はほとんど人が来ない、おまけに怖ろしい曰くも付いて
いるから誰も近寄ろうとしないだろう……聖域なんだ。だからモノ
を隠すには最適だと思った。

私は荒れ果てた花壇に穴を掘ってそのポリ袋を埋めたんだよ。知っての通り中身は赤ん坊の死体ね。

ここからは北野君の言った通り。

さやかに出会ったら五日以内に死ぬというルールを広める為に、色んな学区から集まっている塾でこの噂を流して、それでも不安だったから自分自身も旭ヶ丘高に入学したの。案の定、五日間のルールは学校中に広まっていて紫陽花坂を興味本位でうろつく者はいなかったよ。でもね、あの日この公園にはあの子がいた。何も知らない真中いずみがいた。

半ば脅すように「紫陽花坂のさやか」を教えただんだ、新谷さんが私に語ってくれた時のようにね。そうしたらあの子、本当に怖がってたんだよ。でも予想外の事が起こっちゃったんだね。

あの子、本当に百階段から落ちちゃったんだ。

この公園から彼女が転げ落ちるのを見ていたんだけどね、本当に死んじやったと思った。私、慌てて救急車呼んだんだよ。

私はあの子に名前を聞かれた時、咄嗟に「新谷詩緒里」と嘘の名前を名乗ってしまった、やっぱり本名を名乗るのに抵抗があったんだよ。これがいけなかったんだね。その所為で余計に話が大きくなってしまった。

だって知らなかったんだ、新谷さんが死んでいたなんて。

ああ、後あの赤ん坊の死体だよ。

それも北野君の想像通りあの赤ん坊を産んだの私なんだよ、中学

一年の時にね。

でも最近まで忘れていたんだ。本当の事を言うと、自分でも良く解らないままこの公園に人が近寄らないように見張ってたんだよ。人間の頭って結構都合が良いように出来てるから、自分にとって悪い事のコア心って自動的に封印しちゃうんだってね。

この前、繁華街で飛び降り自殺があったでしょ？

死んだの、私のお父さんなんだ。

遺品の整理をしていたらお父さんのパソコンから大変な物を見つけってしまった。明歩が強姦^{レイプ}されている写真、私のお父さんが明歩を犯していたんだよ。それを見た所為で私の記憶の封印は解けてしまったんだね。

小さい頃、私もお父さんに犯されていたの。

何度も何度もね……。

——お洋服脱いでね、優美ちゃん。

そう命令されると子供の私は従うしかなかった。恐かったから。口答えると殴られたし。指もぶるぶる震えながら自分で服のボタンを外してたんだよ。

ワイドショーで騒がれた旭ヶ丘総合病院、小児科の久保田医師。噂通りの人でしょ。いや、噂以上なのかな。

私の体が大人に近付くとお父さんの興味は無くなってきたみたいなんだけれど、何度も犯される内に私のお腹は大きくなってきたの、それが中一の時。

誰にも相談できなかった。だからずっと隠していた。大きめの服を着て、お腹を隠して生活していた。

でもある日、ついにその子は生まれてしまった。家のトイレだった。朦朧とする中で私は必死に意識を繋ぎ止めながらその赤ん坊をポリ袋に詰めた。背徳的でしょ、でもその時の私にはそうする事しか出来なかったんだよ。

どこかに誰にも見つからない所に隠してしまおうと町を彷徨^{さまよ}っている内に、この紫陽花坂の公園に引き寄せられてきたって事なの。

そしてお父さんの暴行と赤ん坊についての総ての詳細な記憶は封印されたという訳よ、本当に便利よね人間の脳って。その人の人格が崩壊してしまわないように自動でリミッターが作動するんだから。

そのリミッターが外されて記憶の戻った私は更なる手を打とうと、新谷さんの書いたレポートがあると知ってそれを読んでみようとした。でも間島君が先に読んでしまって、彼はこの公園に何かがあると思った。

彼は本当に余計な事をしてくれたんだよ。

私の手伝いになると思ってた勝手に公園を調べ始めたんだね、そしてよりによって花壇を掘り返し、例のポリ袋を発見してしまった。

赤ん坊は戸籍にもない存在。この国の警察を舐めてる訳じゃないんだけれども、今更あの死体から私まで辿り着く事は難しいと思う、けれどももしかして私まで辿り着くかもしれない。だから今は凄く不安なの、恐いの。

それに見つかってしまった以上、私の中でこの四年間にわたる苦しみを終わらせなければいけない。総てを消してしまいたいんだね。思い出してしまった以上、子供殺しの罪から逃げようというつもりはないよ。逃げようとしても逃げ切れるものでも忘れ切れるものでもないしね。

それでも私には区切りが必要な。

……この公園を消してしまおうと思う。

私が今から何をしようとしているかは分かるでしょ。この公園を灰にする。たった一人で秘密を守ってきた戦いを終わらせる為には、こうする事が一番良いと思うの。

何の解決にもならないけれどちよつとはスッキリするかな。

苦しかった過去にサヨナラするんだ。

※

話し終えた優美はポケットからライターを取り出した。

「何も言わないの？　いつものお節介な北野君なら『馬鹿な事はやめろ！』とか言うと思ったんだけどな」

優美は足元のタンクを足で蹴る。中に少しだけ残っていた灯油が地面に零れた。もうこの公園の隅々にまで灯油を撒き終えているらしく、頭が痛くなるような臭いが辺りに充満している。

「それが優美の選択なんだろう？」

「うん。止めないんだね。この事、警察に言う？」

「さあな。でも、多分言わないと思う」

すると優美は穏やかな笑みを浮かべて、ありがとうね……。と小さな声で言った。それはまるで幼い少女のようで、普段の大人びた彼女の印象とは全く違う。優美の中で中学一年の頃から凍っていた時間がゆっくりと解け始めたのだろう。

今まで見た優美の中で一番可愛かった。

青白い月が少女を飾っている。

秀一は一人公園を後にして百階段へと戻ると、まだそこには健也が腰を下ろしていた。

「何だ健也、お前まだいたのか」

顔を上げて力の無い愛想笑いを浮かべる健也の隣に秀一も腰を下ろした。その秀一の隣には今日も黄色い花が供えられている。

「どうだった？　久保田の奴……」と健也。

「ごめん、やっぱり俺には優美を止められなかった。言っていた通り、終わらせる事は出来たけれどな。いや、終わらせたのも実際は優美自身なのかも。結局俺は肝心な所で何も出来なかったんだな」

そっか、と健也は久しく笑った。

「アイツなりに随分思い詰めていた事があったんだよ。それを隠して優美はいつも明るく振舞っていたんだ。強い女だよ」

「俺は……久保田に何をしてやれる？」

「健也、お前本当に優美の事が好きだったんだな」

返事はない。それを秀一は肯定ととった。

「とりあえず今は何もせずに待っててやれよ。それから優美が本当に辛くなった時にお前が傍に居てやればいい。ここ最近、優美はお前の事を都合良いように利用してただけって感じかもしれないけれど、本当は嬉しかったんだと思うぞ」

そうなのかな。健也はぼそりと漏らして足を組んだ。そしてちらりと秀一の傍らに目を向ける。

「やっぱその花、さやかに供えられてるものなのかな」

健也は相変わらず気味悪そうに黄色い花を見る。

「さあな、俺達が入学した時から毎日供えられてるんだろ。誰が花を持って来てるのかすら分からないけど、ここで死んだ人達みんなの為に供えられてるんじゃないか？ だからさやかは勿論の事、新谷詩緒里にも真中いずみにも向けられている。そう考えると何か優しい感じがするだろ」

「なるほど。それもそうだな」

秀一達は揃って夜空を見上げた。こんな真夜中に学校に来た事など無かったので、紫陽花坂から見る星空がこんなに綺麗だということも知らなかった。町を見下ろしてもぱらぱらと明かりが輝いている。上にも下にも星が輝いているようで不思議だった。

すると背後から女の声。

「こんばんは」

はっとなって振り返る秀一達。そこには綾奈が立っていた。

「隣、座って良い？」

そう断ってから彼女は秀一の隣に座って、その黄色い花を指で撫でた。

彼女は本当に夜が良く似合う。黒くて長い髪とその儚げな声は薄闇に引き立てられて更に妖艶な雰囲気醸し出していた。あまりにも似つかわし過ぎて綾奈と夜の境界線がぼやけて見える。

「日下部まで来たのかよ。秀一にしてもそうだけど、一体何で今晚

に限ってみんな集まって来るんだよ」

「あらら、まるで私が来たら迷惑みたいに言ってくれるのね間島君は。『今晚に限って』って言いたいのは私の方だよ、だって私は毎晩ここに来てるんだよ」

「毎晩だって？」

秀一は驚いて彼女の顔を覗き込むと、綾奈はくすくすと笑っている。

「何でそんな事してるんだ？」

「さやかの真実が気になってるの」

当然だと言わんばかりの表情で綾奈は答えた。

「実は、私の親戚にこの百階段で死んだ人がいるんだよ。十五年前に」

「え、それってまさか……」

「さやかじゃないよ。二人も新谷詩緒里のレポートを読んだんだったら分かるでしょ、さやか以外にもう一人ここで亡くなったって」

さやか以外に？

……そうか。

「『お嬢様』だな？」

正解、と無感動に答えた綾奈。

「私も二歳だったからその当時の事は知らないんだけどね、中学生の時に伯父さんが亡くなった時に知ったの。実は私の伯父さんね、貿易会社の社長だったんだ。その遺産の分配の時に親戚縁者全員が集まったの。その時、親戚の誰かが言ってたんだよ。『伯父さんの一人娘が高校生の時に不審な死に方をしていた』ってね。それがこの紫陽花坂で起こった事だというのは聞けば直ぐに教えてくれた」

「それで興味が沸いたってワケ？」

「うーん、実はしばらく忘れてたんだよね。私が旭ヶ丘高を受験したのも偶々（たまたま）だよ。そしたらみんな『紫陽花坂のさやか』の噂をしていて、その中に私の親戚らしい登場人物がいたから驚いた」

それで気になって調べてたんだ。と綾奈は結んだ。

ぽかんと口を開けていた健也はぽりぽりと頭を掻きながら言う。

「そうだったのかよ。俺はてっきり日下部がさやかなの生まれ変わりが何かかと思ってたぐらいだぞ」

「あはは、良く言われる」

綾奈が声を出して笑う場面を見たのは初めてかもしれない。

十月九日（火）午前三時三十八分。彼らは月明かりに照らされた紫陽花坂を後にしようと百階段を下って行った。

その時、背後から仄明るい光が灯り公園から炎の気配がした。しかし三人は誰も振り返ろうとはしなかった。

久保田優美の姿を見たのはその日が最後だった。

※

十月九日（火）午前三時三十五分。

……もう終わりにしよう。

優美は新谷詩緒里のレポートに火を点けて、それを持って滑り台、ブランコ、植木、そして朽ち果てた花壇に火をくべて回った。

みるみる内に公園は炎に包まれてゆく。

……ああ、これで消える。全部消える。

昼間のように明るくなった公園を恍惚とした表情で見渡している優美は踊るように炎の中を闊歩していた。

そして最後に桜の木に火を点けようとした時、彼女の表情は凍りついた。

「な、何で……」

今まで暗くて気が付かなかった。

「何で……。いつからそこに居たのよ！」

ヒステリック
臆躁的で悲痛な優美の叫びが炎の海に轟く。

その桜の木の上、葉と葉の間にその姿は見え隠れしていた。その二つの瞳は大きく見開いてじっと優美を凝視^{みつめ}ている。

「下りてきなさいよ……」

しかしその姿はぴくりとも動こうともせず、ただ優美に視線を固定させている。恐怖に背中を押された優美は灯油のたっぷり滲み込んだ桜の木に火の点いたレポートを投げつけた。桜は勢い良く燃え上がる。

「さっさと下りてきなさいよ！ 明歩！」

すると炎上する木からすると小森明歩が下りてきた。その動きに人間味は無く、まるで蛇のようで気味が悪い。

地面に降り立った明歩は炎を背にして鉈物のように無機質な瞳を優美に向ける。

「アンタ、まさかずっとそこに居たの？」

優美の声は震えている。

すると明歩の口唇は静かに動き出した。

「そうだよ、ここに居ればいつか新谷詩緒里に会えると思っていたから。優美と北野君の話、ずっと聴いてたんだよ。だからわたし全部知ってるんだよ」

明歩はつかつかと優美に近付いてゆく。

「優美が、新谷詩緒里だったんだね……」

「そうよ、だったら何なのよ！」

「じゃあわたしの友達……わたしのいずみちゃんは優美の所為でムチャクチャになっちゃった。優美がいずみちゃんを壊しちゃったんだよ」

気押された優美は一步退いた。

「あれは事故よ、わざと突き落としたりなんかしてない」

「嘘吐き！ 本当は優美が突き落としたんでしょ。それに心も壊れた、死ぬまで新谷詩緒里に怯えてた！」

「そんな事言われても……私が殺したんじゃないもん」
すると明歩は冷たく笑う。

「知ってるよ、殺したのはわたしだもん」

明歩は抑揚のない声で言った。

その言葉と表情に優美は戦慄した。自分が知っている内気で弱虫で泣き虫な明歩はもういない。目の前に居るのは、化け物だ。

「優美ももう知ってるでしょ？ わたしが優美のお父さんに酷い事されたの。あんな事知られたらいずみちゃんに嫌われちゃうじゃない。だから知られる前に殺しちゃったんだよ、いずみちゃんとは死ぬまで友達だったんだよ」

……この化け物は何を言ってるんだろう。

「新谷詩緒里が居なければいずみちゃんは怪我もしなかった。彼女が怪我をしなかったらあの日わたしは紫陽花坂になんか行かなかった。紫陽花坂になんか行かなければ優美のお父さんに酷い事もされなかった。酷い事をされなかったらわたしがいずみちゃんを殺す必要なんてなかったんだよ。全部優美の所為だ！」

まともではない、無茶苦茶だ。

……気持ち悪い。

「知らないよそんな事！」

優美が怒鳴ってもお構いなしに明歩は詰め寄ってくる。そして明歩は果物ナイフを取り出して優美に向かって一歩踏み込んだ。

「しね……」

ぽつりと呟いて明歩は鈍く光る刃を優美の腹に突き立てた。優美は力無くその場に崩れ落ちる。

……何これ、凄く痛い。

激痛に加えて、周りを取り囲む炎の熱の所為で余計に頭が朦朧とする。腹に手を当てるとナイフが突き刺さったままになっている、傷口からはどくどくと血が溢れ出してきている。

……私、死んじゃうかも。

残された力を振り絞って明歩を見上げる。すると彼女は冷たく優美を見下ろしながら、

「ごめんなさい」

と言ってにいと笑った。

悪魔だ。

そして明歩は、炎の向こうへと消えていった。

長谷川美那子

六月六日。

一昨日の夜から降り続いた長雨は今朝上がって、昼過ぎには透き通った晴れ間すら見えていた。

午後五時二十八分。

夏が近付き、日も長くなってきた。グラウンドに出来た水溜りはしんと波打つ事もなく、鏡のように赤い空を映し出している。

旭ヶ丘高校は今日もいつもと変わらぬ一日だった。

長谷川美那子はせがわ みなこはノートパソコンを睨みながら日本史の板書案を作成していた。その目の下には隈くまが出来ている。マグカップのブラックコーヒーを喉に流し込んで無理矢理頭を叩き起こす。

「長谷川先生……」

はい、と応えて顔を上げる美那子。声を掛けて来たのは同僚の体育教師だった。彼は心配そうに美那子の表情を窺っている。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。大丈夫ですよ。心配してくれてありがとうございます」
その言葉とは裏腹に美那子は疲れ切った顔をしている。体育教師は困った顔をして彼女の隣の椅子に腰を下ろした。

「絶対に疲れてますよね」

「大丈夫ですって、気にしないで下さい。この板書案作ったら帰りますんで」

美那子は努めて明るく言った。

「本当に、無理しないで下さいよ……長谷川先生のクラス、ただでも色んな事があって大変だったんですから」

「ええ、小森の事ですね……」

小森明歩こもり あきはは自殺した。

去年の十月のある時期を境に明歩は学校に来なくなってしまい、心配した美那子が何度も自宅に電話を掛けたものの一度も繋がらな

かった。不登校になりこのまま退学してしまうのではないかと最悪の事態を想定していたが、事態は最悪と思っていたものよりも更に悪かった。彼女は自宅で首を吊って死んでいた。原因は一切分からず遺書も残されていない。

美那子の受け持っていた二年一組は他にも同じような不登校の生徒がいた。

くぼた ゆうみ
久保田優美。

成績優秀で素行も良い彼女が急に学校へ来なくなったのも去年の十月。ちょうどその頃彼女の父親がビルから転落して死亡している。恐らく原因はその事だと考えてそっとしておいたのだが、彼女もまた半年以上学校へは来っていない。出席日数の関係で彼女は進級する事が出来ず、今も二年生の扱いとなっている。

何らかの事故で大怪我を負って現在入院中という話を生徒から聞いた事もあるが真偽は定かではない。

優美が今どこで何をしているのかは誰にも分からない。彼女の学力なら国立大にストレートで合格するのも容易い事だったのに、勿体無い。

指導案をまとめ終わり、ノートパソコンを閉じた美那子は帰路に着こうと職員室を後にした。

校舎の外に出ると湿った空気に体を包まれる。アスファルトに溜まった雨水を踏む、ひたひたという足音。空気中に残る雨の名残が髪に、服にまとわりつく。

正門を出ると湿気は更に増す。それは道の両端に植わった紫陽花の所為だろうか。

雨上がりの六月は嫌いではない。辺りに充満した湿気が草花のしっとりとした甘い香りを運んで来る。美那子はその香りが好きだった。それは昔から変わっていない。

十五年前から、変わっていない。

その嗜好も、この紫陽花坂の姿も。

美那子もかつて旭ヶ丘高校の生徒だった。当時からの坂は紫陽花坂と呼ばれていて、その名の通り紫陽花が隙間なく植わっていた。美那子が卒業した後に旭ヶ丘高校は大掛かりな工事を行いプールが出来たし、体育館も新しく建て直された。母校に赴任してきた時、その変わりように驚き、どこか寂しさすら覚えた。

それでも紫陽花坂だけは時間が止まっているように何も変わらないう。毎日この坂を通る時、高校時代を思い出してまるで十五年前にタイムスリップして来たかのように思う。

今は紫陽花坂が最も美しい季節。

左右に敷き詰められた紫陽花が一斉に花を咲かせ、坂は妖しげな紫色の世界に姿を変える。現実離れたこの光景、ぼんやりと歩いているとあの世に迷い込んでしまいうような気さえする。

「ここは……」

美那子はふと視線を道の脇に向けて呟いた。

入口を金網で封鎖された公園。荒れ放題で至る所で雑草が繁茂している。遊具も黒く煤^{すす}けていて、葉の焼け落ちた桜の木がぽつんと佇んでいた。

八か月前、この公園は炎に包まれた。

出火原因は不明のままだが火元になるような物もなく、溶^とけた灯油のタンクが残されていた事から放火だとされていたが犯人はまだ捕まっていない。

他にも不審な物が残されていたそうだ。

血で曇った果物ナイフ。

あまりに物騒な遺留品だ。一体この封鎖された公園で一体何が起こったのだろうか。喧嘩か、はたまた殺人か。不穏な事しか思いつかない。

やがて百階段が見えてきた。

ここも美那子が高校生だった頃と変わっていない。急で長い駅までの近道。毎日上り下りするだけでも良い運動になる。

その百階段の所に誰かが立っている。

それは旭ヶ丘高の制服を着た後姿。斜陽が逆光となって女子生徒という事以外はつきりと分らない。しかしその背格好に何となく見覚えがある。

美那子はその背中に声を掛ける。

「久保田……か？」

呼び掛けられた彼女はゆっくりと振り返る。美那子が思った通り、それは久保田優美だった。儚げな笑顔を見せる彼女は軽く会釈した。「ちょっとアンタ……今までいったい何してたの？ みんな心配してたんだよ」

美那子はそう言って彼女の元へと駆けつけた。優美は申し訳なさそうな顔を見せてから視線を避けるように俯く。

「連絡もなしに学校を休み続けてごめんなさい。実は大怪我しちゃって入院していたんです。美那子先生にも……迷惑かけましたよね」
「どうやら噂は本当だったらしい。しかし彼女の手足や顔にはどこにも傷跡らしいものは見当たらない。交通事故などではないのだろうか。」

「いや、私の事は良いんだよ。それより久保田が無事で何よりだ。ホントに良かった」

「本当はもっと早くに動けるようになっていたんですけど、どうしても学校へ行く事に躊躇してしまってたんですよね。一度長く休むとなかなか行き難くなるんです。今日もここまでは来たんですけど、どうしてもこれ以上は……」

そこまで言って言葉に詰まった優美はふと足元に目を遣る。

「綺麗ですよ、この黄色い花。いつも瓶に挿してあるんだけど誰が毎日換えてるんだろう」

「ああ、コレ？ この花はキバナコスモスっていうの。多年草だから近所の原っぱで一年中咲いてるんだ。私が毎朝挿し換えてるんだよ」

すると驚いたような顔をする優美。

「美那子先生が挿してたんですか？」

「うん、そうだよ。この階段では昔から色々あったからね」

色々あった、その言葉を口にした途端に優美の表情が曇った。そして彼女の口唇は静かに動いた。

「ねえ美那子先生。明歩が自殺した事、知ってる？」

美那子の顔が一瞬引き攣る。

「うん、知ってるよ。久保田はあの子と仲良かったもんね。辛かっただろうね、もしかして学校に来たくなかったのってその事も原因になってるのかな」

「まあそれもあるんだけどね。それより、明歩が死んでいた時の状況って聞いた事ありますか？」

「いや。詳しくは知らないなあ」

「あのね、明歩はね。クローゼットのハンガー掛けにロープを括りつけて首を吊っていたんだって。最初に見つけたのは明歩のお母さん。クローゼットを開けたら自分の娘が首を吊っているなんて想像も付かなかっただろうね」

「アンタ……何話してるのよ」

「聞いて、先生。その明歩の足元に赤黒い肉の塊が落ちてたんだって。それ、胎児だったの。明歩のお腹の中に居たんだよ。頸が締まったショックで出てきちゃったんだろうね」

美那子の顔が青褪める。

「嘘……じゃあ小森は妊娠してたって事なの」

「そう。しかも、それ私のお父さんとの子なんだ。実は明歩ね、うちのお父さんに強姦^{レイプ}されてたんだ。私の家に写真もあったから本当だよ」

「そんな……非道い^{ひどい}」

嘘みたいだけど本当なんです、と優美は言った。

「それも原因は私にあるのかも。私が取ったある行動が無ければ明歩はお父さんに出会わなかった」

「ある行動って？」

「ここから落ちた真中いずみさん。彼女に『紫陽花坂のさやか』を語って怖がらせた事です」

心臓がばくと跳ねた。

美那子の胸の中で黒い雲が渦巻き始める。

「私には……どうしても紫陽花坂に人を近付けたくない理由があった。その為に『紫陽花坂のさやか』を利用していたんです」

「さやか……」

「うん。美那子先生も知ってますよね、『紫陽花坂のさやか』」

……利用。

……さやかを、利用。

優美は続ける。

「ああいう都市伝説って自然に形が変わっていくじゃないですか。だから私に都合が良いように形を変えて噂を広めたんです。案外簡単に広まったんでびっくりしましたよ」

「最近またその噂が生徒の話題に上ってると思ったら、アンタが……」

「みんなに怖がられて。まあ、『さやか』って化け物にはお似合いですね」

そう言って冗談ぽく笑う優美。

……化け物、か。

百階段の前に立つ優美は目を細めて夕陽に煌く町を見下ろしている。美那子はすうと彼女の背後に立った。

「久保田。『紫陽花坂のさやか』について一つ面白い事を教えてあげる。多分これは誰も知らない事だよ」

何ですか？ と優美は美那子に背を向けたまま問い掛ける。

「広まってる話じゃ、りかこが桜の木の下に埋めたのはネズミの死体なんだけど本当は猫の死体なんだよ」

「あ、それ聞いた事ある。新谷詩緒里のレポートに書いてありました」

「ああ読んだんだねあのレポート。じゃあそこにも載っていない事

も教えてあげる、同級生に日下部っているでしょ、日下部綾奈。実はあの子、さやかを突き落とした『お嬢様』の親戚なんだよね」

詳しい優美も流石に知らなかったようで、驚いたようにくると振り返って百階段に背を向けた。

「そうだったんですか！」

「知らなかったでしょ、じゃあもう一つ凄い事教えてあげる」
なにに、と優美は興味深そうな顔で美那子を見ている。

「さっき久保田が言ったように都市伝説っていうのは時間が経つ内に自然と形が変わってしまうものでね、『紫陽花坂のさやか』ってのもある登場人物の情報が大きく変わってるんだよね」

紫陽花坂に生温く甘い風が吹き、足元のキバナコスモスがふわりと花弁を揺らす。

美那子は口を開く。

「りかこ……。りかこじゃなくて本当は……みなこ」

……長谷川美那子、よ。

その瞬間優美の表情が凍る。

……許せないね。

十五年前、さやかを死に追いやった日下部のお譲さんを同じ目に遭わせてやった。

四年前、さやかを化け物扱いして持て囃した新谷詩緒里もここから突き落とした。

……二人も三人も、同じようなものか。

凍りついたような優美の耳に口唇を近付けてぽそりと呟く。

「私の一番大切な友達を、化け物にしないで」

そして美那子は優美の華奢な体を力一杯突き飛ばした。彼女の体は一瞬間に浮く、そして優美は何が何だか分からないというような表情で美那子を見詰めていた。

そのまま彼女は吸い込まれるように百階段を転げ落ちていった。
こんな夕暮れの頃、紫陽花の葬列の奥で血だまりを作る優美はあ

の日の親友の最期を連想させる。

紫陽花坂のさやかを。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904v/>

さやかは紫陽花の咲く坂で

2011年8月9日03時26分発行